

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究((1)－①－ア)		
【事業概要】 他機関との連携を図り、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築を推進する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務） 田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、津村宏臣（同志社大学准教授・客員研究員）、中村佳史（HUMI コンサルティング株式会社・客員研究員）、吉崎真弓（客員研究員）、丸川雄三（国立民族学博物館准教授・客員研究員）、飯島満（無形文化遺産部長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、山内和也（文化遺産国際協力センター地域環境研究室長）、加藤雅人（国際情報研究室長）、平出秀文（研究支援推進部管理室長）			
【主な成果】 一昨年度一般公開を開始した「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』」の明治期全ての分の公開を開始した。『日本美術画報』をはじめとする貴重書の公開準備を始めた。また、「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に各種図書情報を移行し、各部署が所蔵する図書情報の一元化と一体運用のための準備を進めた。アーカイブズを主題とする各種研究会を開催し、アーカイブズのあり方について検討した。			
【年度実績概要】 ・研究会の開催：皿井舞「文化財アーカイブズ構築の取り組み」（東京文化財研究所総合研究会、27年1月13日、東京文化財研究所セミナー室） ・東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』（ http://mizue.bookarchive.jp/index.html ）：国立情報学研究所と共同開発したデータベースをもとに、前年度までに創刊号から50号までの一般公開を行い、さらに本年度は90号まで（明治期全て）の公開を開始した。			
			『みづゑ』の世界トップページ
・その他：前年度に引き続き、写真図版を中心とする画集や図録類のデジタルアーカイブの構築に向け、『日本美術画報』を素材として、いかなる検索方法等の検討を進め、公開準備を進めた。また、東京文化財研究所所蔵売り立て目録のデジタル化とその公開に向けての協議を重ねた。 ・東京文化財研究所刊行物アーカイブの構築については、前年度に完成した「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めた。また、誌面のデジタル化とデータ処理についても作業を継続中である。 ・以上に関連して、下記の報告2件を刊行した。 （1）津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望—」（『美術研究』414号、27年2月） （2）「アートアーカイブの諸相」（『美術研究』415号、27年3月） 橘川英規「はじめに」 加治屋健司（京都市立芸術大学）「美術アーカイブのなかの美術史」 上崎千（慶応義塾大学アート・センター）「アーカイブと前衛—表現の非永続性 ephemerality と資料体」 橘川英規「中村宏氏作成ノートに残された記録と資料—観光芸術研究所、東京芸術柱展を中心に」 加治屋・上崎・橘川「ディスカッション」			
【実績値】 研究情報のウェブサイト上での公開件数2件（備考欄①②）、研究報告数 2件（備考欄③④）			
【備考】 ① 東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』（創刊号～90号） ② 『日本美術画報』初編～5編 ③ 津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規「研究ノート ウェブ版『みづゑ』の研究—美術史料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望—」（『美術研究』414号、27年2月） ④ 「アートアーカイブの諸相」（『美術研究』415号、27年3月）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4111

自己点検評価調査

研No.1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：情報化社会において専門的研究機関から発信される情報の意義が見直されている今般、本研究は緊急性が高い。 独創性：通常の図書館や資料館にはない、よりきめ細やかな情報提供ないし総合的な情報発信を目指して当研究所ならではのオリジナリティのある発信方法を模索し、昨年度、国立情報学研究所と共同で策定した方針に基づきその一部を実現している。 発展性：文字情報や画像情報等、多様な資料の在り方に着目しており、常に応用性を重視して研究を進め、『美術研究』等で報告することができた。 効率性：限られた予算額の中で費用対効果を厳しく吟味しながら検討を進めている。 継続性：過去と現在と未来をつなぐアーカイブを構想しており、一時的なものに終わらないよう十分に留意している。 正確性：単なるPDF配信に終わらない付加価値のある情報発信を実現している。						

2. 定量的評価

観点	研究情報のウェブサイト上での公開件数	研究報告数				
判定	B	B				
判定理由 研究情報のウェブサイト上での公開件数： 本年度目標としたデジタルアーカイブをウェブサイト上で公開することができた。 研究報告数：当初の計画どおり、アーカイブにかかる研究会について成果公開をすることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度計画に沿って順調に成果をあげることができた。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築にあたり、「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立情報学研究所との連携を図り、多種多様な文化財の研究情報について、効果的かつ有機的に蓄積して発信していくための手法を総合的に研究・開発し、計画4年目としては所期の成果を得られた。「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」に、図書情報と目録情報の移行を進め、各種データベースの一体化のための作業を進めることができたが、中期計画最終年度である次年度には、統合の完成をめざしたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究 (1)ー①ーイ)		
【事業概要】日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 津田徹英
【スタッフ】田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男(客員研究員)、三上豊(和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二(学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子(東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)			
【主な成果】			
(1)・東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業。 ・美術史研究のためのコンテンツづくりとして、平安時代在銘彫刻作品の銘文データの入力と編年目録(年表)の作成を行った。			
(2)(1)の東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業の成果の一端を企画情報部研究会(26年8月6日)で口頭発表を行った。			
(3)・(2)の成果(企画情報部研究会での口頭発表)の内容を『美術研究』414号、同415号に掲載した。 ・東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作の『記事珠』ウェブサイト上での公開に向けてのパイロット版を作成した。 ・第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」(26年10月31日)で講演を行った。			
【年度実績概要】			
(1)・黒田清輝宛書簡7,570通の手紙に記された内容が把握できるように、本年度は2,300通の判読作業を行い、その過程でトピックスとなる事項を記して、内容検索ができる目録作業を進めた。 ・すでに研究所のデータベースとして公開されている10世紀～15世紀にいたる絵画作例の銘文を集めた『年紀資料集成データベース』に対応する彫刻作例の銘文データベースを構築すべく、平安時代の在銘彫刻作品の銘文をデータ入力し、あわせて編年目録の作成を進めた。			
(2)○(1)の黒田清輝宛書簡のうち、一群をなす書簡について、企画情報部研究会(26年8月6日)で、外部研究者を交えて口頭発表を行った。 ・吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」 ・児島 薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」			
(3)○(2)の成果を踏まえ、26年度刊行の『美術研究』に「研究資料」として掲載した。 ・『美術研究』414号掲載：吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」 ・『美術研究』415号掲載：児島 薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(一)」 ○このプロジェクトの成果の一端についての公表を第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」(26年10月31日)において行った。 ・津田徹英「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」			
			
(1) 黒田清輝宛書簡の判読と内容の入力作業			
【実績値】			
論文等掲載数4件(①～④) 発表件数3件(⑤～⑦)			
【備考】			
論文			
①江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡介(一)—」『美術研究』414号、27年2月			
②江村知子「研究資料 続稀蹟雑纂—ポートランド美術館所蔵作品簡介(二)—」『美術研究』415号、27年3月			
③吉田千鶴子「研究資料 黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」『美術研究』414号、27年2月			
④児島薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について(1)」『美術研究』415号、27年3月			
発表			
⑤吉田千鶴子「黒田清輝宛外国人留学生書簡 影印・翻刻・解題」企画情報部研究会(26年8月6日)			
⑥児島 薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について」企画情報部研究会(26年8月6日)			
⑦津田徹英「一流相承系図(絵系図)の構想と機能」第48回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」(26年10月31日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4112

自己点検評価調査

研No.2

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：存在が知られるようになった黒田清輝宛書簡について、内容の把握に努めるとともに、外部研究者を交えてその研究交流の促進のために研究会を開催し、その内容を『美術研究』において公表することで、成果が認められた。 独創性：このプロジェクトの成果の一端をオープンレクチャーにて公表するとともに、その際「モノ／イメージとの対話」というテーマを掲げることで、研究所独自の切り口で講演を行うことができた。 発展性：全貌について知られていなかったアメリカ・ポートランド美術館所蔵の日本絵画作品のうち重要作品について、調査時の知見を踏まえ、その知見を『美術研究』に掲載し、取り上げた作品の全てカラー口絵に収めた。そのことで今後、その存在が周知され、研究資料として資することができた。また、10世紀～15世紀にいたる絵画作例の銘文を集めた『年紀資料集成データベース』を彫刻の分野にまで展開すべく、日本彫刻作例の銘文データベースの構築を目指し、本年度は平安時代の在銘彫刻作品の銘文をデータ入力し、あわせて編年目録の作成を進めることができた。 継続性：前年度に引き続き、黒田清輝宛書簡の内容把握を進めるとともに、このうち、「外国人留学生書簡」の一群を『美術研究』に研究資料として提示することができた。 正確性：黒田清照宛外国人書簡について、影印（モノクロ）を付して翻刻し、あわせて、書簡のそれぞれに解題を付した。いずれの資料も影印を付すことで翻刻の正確性を期すことができた。						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
評定	B	B				
掲載論文数・発表件数：目標を達成したので、Bと判定した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にB評価、定量的にもB評価とした。それゆえ総合的評価（平均値）もB評価とした。 正確性と継続性を見据えつつ黒田清輝宛書簡を、影印と翻刻を対比的に配して、一点ずつに解題を付して行う資料紹介の手法は、史料紹介のあり方として規範・定型をなし得るものであり、この手法を踏襲しつつ、引き続き翻刻・解題の充実に努めたい。あわせて、文化財研究の「今」を見据え、研究の発展性を念頭に置きつつ、ウェブサイト、研究会、講演などさまざまな手法を用いて、成果の周知と公表を行っていききたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に対する実施状況は、所期の目的を達成している。次年度は、中期計画の趣旨に沿って5ヵ年計画の5年目として、調査・研究を踏まえた美術史研究のためのコンテンツの形成、研究交流促進と成果公表のための研究会等の開催を行っていききたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究((1)－①－ウ)		
【事業概要】 日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純
【スタッフ】 田中 淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、城野誠治(専門職員)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、河合大介(アソシエイトフェロー)、三上 豊(和光大学教授・客員研究員)、丸川雄三(国立民族学博物館准教授・客員研究員)			
【主な成果】 近現代美術資料の収集として、日本彫刻の近代化に大きく貢献した新海竹太郎に関する手稿等の資料を遺族より受贈、これまでの黒田清輝アーカイブに加え、近代の作家を核とするアーカイブ拡充へ向けての展望が開けた。また現代美術を専門とするスタッフ(橘川・河合)の参加により、中村宏や赤瀬川原平といった作家と交流のあった今泉省彦の旧蔵資料を調査するなど、これまで手薄だった戦後美術の調査研究にも大きな進展が見られた。			
【年度実績概要】 (1) 黒田清輝作品及び関連資料の調査研究 ・ 黒田清輝《東久世伯肖像》(参議院蔵)、《春・秋》(個人蔵)の調査を行った。また菱田春草《菊慈童》(飯田市美術博物館蔵)、岸田劉生《古屋君の肖像(草持てる男の肖像)》(東京国立近代美術館蔵)の光学調査を行った。 (2) 現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業 ・ 笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈の整理・調査を進めた。また美学校の中心的人物だった今泉省彦所蔵の資料調査を行った。 ・ 当所所蔵近現代美術資料データの公開促進についての調査研究として新海竹太郎の手記や制作に関する写真・書類等、資料一括を受贈、前年度に寄贈を受けたガラス乾板に加え、新海竹太郎アーカイブの拡充を図った。			
 新海竹太郎《鐘ノ音》(1924 年作) 制作のための写真 ・ 矢代幸雄・ベレンソン往復書簡の翻刻・翻訳及び関連調査としてベレンソンの研究所を引き継いだイタリアのヴィラ・イタッティでの調査を行った(一部科研)。 ・ 現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業として今泉省彦資料の調査をもとに、企画情報部研究会で橘川・河合による口頭発表を行った。 (3) 東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として東京工業大学准教授の戦暁梅氏、ソウルで研究活動を進める稲葉真以氏を招き、近代中国の蒐集家廉泉、及び韓国美術のジャンル形成についての企画情報部研究会を開催した。 (4) 東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査研究として韓国国立中央博物館でのシンポジウム「東洋を蒐集する」に山梨が参加、「李王家コレクションの位置づけをめぐる」の題で発表を行った。			
【実績値】 論文等掲載数 3 件 (【備考】①～③) 発表件数 6 件 (【備考】④～⑨)			
【備考】 論文 ①塩谷純「明治期やまと絵断章」(『美術フォーラム 21』29 26 年 5 月) ②塩谷純「春草と“金銀体”」(『菱田春草』展図録 東京国立近代美術館 26 年 9 月) ③塩谷純「開国から 1920 年代 プロローグとしての日本近代美術史」(東京美術倶楽部編『日本の 20 世紀芸術』 平凡社 26 年 11 月) 発表 ④山梨絵美子「黒田清輝『昔語り』再考」(企画情報部研究会 26 年 9 月 30 日) ⑤山梨絵美子「李王家コレクションの位置づけをめぐる」(韓国国立中央博物館シンポジウム「東洋を蒐集する」 26 年 11 月 14 日) ⑥田中淳「岸田劉生と古屋芳雄—劉生の「駒沢村新町」療養期を中心に」(企画情報部研究会 26 年 9 月 30 日) ⑦塩谷純「仙台・昭忠碑、被災から復興へ向けて」(東京文化財研究所第 48 回オープンレクチャー 26 年 11 月 1 日) ⑧河合大介「反芸術・脱主体化・匿名性—1960 年前後の赤瀬川原平周辺から」(企画情報部研究会 27 年 3 月 24 日) ⑨橘川英規「観光芸術多摩川展パノラマ図を観る」(企画情報部研究会 27 年 3 月 24 日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4113

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.3

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性・独創性： 近年、日本の戦後美術への関心は国内外で高まりを見せ、作家やグループの活動を検証する展覧会も開催される状況下で、今泉省彦資料の調査を行い、赤瀬川原平のような脚光を浴びた作家の背後に迫ることができた意義は大きい。 発展性・効率性： 新海竹太郎資料を受贈したことで、従来の黒田清輝アーカイブに加え、近代の作家を核とするアーカイブ拡充への展望が開けた。また同資料のデータ化に着手し、ウェブ上でのデータベース公開に向けた研究利用の効率化を図った。 継続性・正確性： 前年度より研究協議を行ってきた稲葉真以氏を発表者とする韓国近代美術についての研究会を開催。また笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈の整理も継続して行い、データの精度向上に努めている						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
評価	B	B				
判定理由 論文等掲載数・発表件数 論文等掲載数、発表件数ともに目標を達成した。						

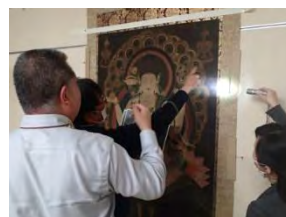
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的、定量的にB評価とした。したがって総合的評価（平均値）もB評価とした。 本年度は現代美術研究の進展が著しく、その一方で従来から行っている黒田清輝の作品調査も積極的に進め、次年度に東京国立博物館・当研究所の共催による黒田清輝展への足がかりとした。また作家遺族からの資料寄贈を受けて、今後は文化財アーカイブズ研究室・情報システム研究室と連携し、新海竹太郎アーカイブの構築に努めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新海竹太郎資料の収集・整理及び今泉省彦資料の調査研究、また韓国の近代美術研究者との交流やイタリア、ヴィラ・イタッティでの調査等により、当該年度計画を達成していると判定した。次年度は最終年度となるため、これまで積み上げてきた個別の調査研究を総括できるよう努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究(①-①-エ)
【事業概要】様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳(副所長(部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務))、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男(客員研究員)	
【主な成果】 (1)・鶴見大学文学部文化財学科と共同で朝鮮螺鈿漆器の光学調査を実施した。 ・デジタル情報公開を目的とする故秋山光和氏調査資料の整理作業を引き続き実施した。 ・研究所が所蔵するガラス乾板のデジタル化作業を引き続き実施した。 ・龍谷ミュージアムにおいて、光照寺所蔵一流相承系図(絵系図)ほかの調査を行った。 ・東京国立博物館において、国宝孔雀明王像の調査を実施した。 ・愛知県陶磁美術館にて朝鮮螺鈿漆器の調査を実施した。 ・その他、鶴見大学・目白漆芸研究所との研究協議及び意見交換、また新たなデータベース作成に関する所内研究協議を実施した。 ・東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について高精細画像をもとに東京国立博物館との研究会を行った。 (2)・浦添市美術館で開催された「第5回琉球の漆文化と科学」において、琉球螺鈿漆器技術・トルコ螺鈿・パレスチナ螺鈿についてポスター発表を行い、これまでの調査成果について報告した。 ・企画情報部12月研究会において、南蛮漆器についての編年案を発表した。 ・企画情報部12月研究会において、東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について発表した。 (3)・デジタル化したガラス乾板については文字データなどの整理作業を行い順次ウェブサイト公開した。 ・彩色DBについては長年の作成・校訂作業を終了し、ウェブサイト公開した。	
【年度実績概要】 (1)・ガラス乾板デジタル化作業では本年度内に約18,000枚のガラス乾板をデジタル化し、そのうちの約3,553枚について文字データ入力校正や整形加工を行った(26年12月末現在)。 ・東京国立博物館所蔵国宝孔雀明王像調査の結果、これまで明らかでなかった製作技法についての詳細を検討する手がかりを得た。(27年1月15日) ・愛知県陶磁美術館にまもって寄託されている個人蔵朝鮮螺鈿漆器について詳細な実見調査を行い、唐草文様の構成原理や製作技術などの検討・意見交換を行った。 (2)・これまで各地で実施した調査内容を詳細に検討した結果、南蛮漆器書見台は初期から末期までの5期に分類でき、各種特徴によってその変遷を追えることが明らかになった。(26年12月9日) ・前年度東京国立博物館で実施した国宝普賢菩薩像調査について更なる検討を行い、截金を中心とするその製作技術の実態について明らかにし、また平安時代当時こうした絵画表現が行なわれた意味について考究した。(26年7月23日・12月9日) (3)・デジタル化できたガラス乾板のうち、種々の入力校正や画像加工が終了し、サーバーにアップしてウェブサイト公開を行った画像は2,456件となった。(26年12月末現在)	
【実績値】 発表件数 3件(①～③) 論文掲載数 2件(④～⑤) 調査件数 4件	
【備考】 ① 小林公治「琉球王国時代の螺鈿漆器製作技術を探る」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ② 小林公治「トルコの螺鈿—本格調査に向けた予備的検討—」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ③ 小林公治「パレスチナの螺鈿—その特徴と歴史に関する予察—」(「第5回琉球の漆文化と科学」ポスター発表 26年11月15日) ④ 小林公治「2013年開催の南蛮漆器に関する展覧会から」(『美術研究』413号 26年10月24日) ⑤ 小林達朗「美しい術—国宝千手観音の場合—」(「かたち」再考 26年12月17日)	



国宝 孔雀明王像の調査

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4114

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.4

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本プロジェクトは、単視眼的になりがちな美術品の研究を多面的に進めようとするものであり、またその手法には最先端の方法論も積極的に取り込んでいる。得られた成果にはこれまで知られていない知見も多く、また随時報告を行うことで社会と成果内容を共有することに努めている。 独創性：本研究プロジェクトでは、これまでほとんど研究が進められてこなかった工芸品について研究を進めたり、また日本の代表的仏画について国内外でも適用事例がほとんど無い高解像度画像を駆使した分析を実施したりするなど、十分な独創性を持っていると評価できる。 発展性：e 国宝の精細画像をはるかに超える高精細画像による分析等、本プロジェクトで試みている研究事例の多くとその成果は、今後各地で研究を進める際のモデル・パイロット事例になり得るものであり、そこには多様な展開が期待できる。 効率性：例えばガラス乾板デジタル化作業では一般的なスキャニングではなくデジタル撮影によってデジタル化を行うなど、適宜工夫を試み効率性に配慮している。 継続性：本プロジェクトの調査や研究はいずれも一過性のものではなく、普遍性の高い研究目的の下で継続性や質を維持しつつ実施しているものである。 正確性：本プロジェクトの基本的な研究姿勢は実証性であり、その裏付けとなるデータの確保や取得には人文学的研究手法を中心に論証可能で客観性を持つ方法論を元に行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文掲載数	調査件数			
評価	B	B	B			
判定理由 発表件数：ポスター発表など、多様な形で成果の公表を行うことができた。 論文掲載数：プロジェクト内の主たる研究事例について論文での成果公開を行うことができた。 調査件数：大学との共同研究を実施するなど、新たな試みも加えて様々な調査を行えた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については適宜、独創的な調査研究を実施でき、また定量的評価についてもいずれの項目でもまとまった件数の実績を上げることができた。こうした双方の評価内容から総合的評価をBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画4年度目にあたる本年度は、当初より計画し継続的に実施してきた調査対象について、引き続きまとまった調査の実施と成果の公表を行った。また、年度途中より新たに開始した調査等についても成果の公表等を含めて実施できた。こうしたこれまでの取り組みから評価をBとした。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究((1)－②))		
【事業概要】 近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・体系的に整理・調書作成・写真撮影等の調査を行い、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的・性格・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は研究者等の研究に供する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】 小原嘉記(中京大学国際教養学部准教授、客員研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、高田祐一(文化財情報係アソシエイトフェロー)、中村 玲(企画展示室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、鎌倉 綾(写真室技能補佐員)、飯田ゆりあ(写真室技術補佐員)			
【主な成果】 仁和寺所蔵の書跡資料の調査成果として、『仁和寺史料 目録編〔稿〕二』を公刊した。ここには、仁和寺御経蔵聖教の第31函～第50函の目録を収録した。仁和寺は、中世・近世には法親王が門跡として入寺する、最高の格式を持った真言宗寺院であり、その聖教は、御流聖教と呼ばれて尊ばれてきた。その内容がはじめて世に出るものであり、学問的価値の高いものである。また、三仏寺が所蔵する勝手権現像についての調査成果を公表した。勝手権現とは、修験道では蔵王権現・子守権現とともに三所権現と称された重要な存在だが、明治の神仏分離により、実態がよく分かっていない点が多い。今回の調査により、中世に2軀の勝手権現像が、甲冑像・着衣像という、異なる姿で製作されている例が明らかになった。			
【年度実績概要】 ・興福寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、二条家記録第6函～第10函の調書を作成した。また第109函等の写真を撮影した。 ・仁和寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、御経蔵聖教第53函～第65函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第31函～第50函について、資料目録を作成・刊行した。 ・薬師寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第5函～第8函の目録校正、第25函の写真撮影を実施した。 ・三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第4函・經典函等の調書を作成し、仏神像・銅鏡・木札等の調査・写真撮影を実施した。また、関連資料が愛媛県の横峰寺に存在したので、その調査・写真撮影を実施した。 ・唐招提寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、宝蔵・新宝蔵に所在する資料の確認調査・整理作業を行い、宝蔵第2函を写真撮影した。 ・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第78函～80函の調査データ入力、第56函・第35函の撮影等を行った。 ・奈良の旧家が所蔵する平群郡今国府村庄屋関係資料の調査・生駒市有里町自治会等が所蔵する絵図の写真撮影を実施した。 ・氷室神社の大宮家所蔵文書について、昨年度に奈良市と共編で刊行した報告書に基づいて、公開データベースを増補・更新した。			
			
三仏寺調査風景			
【実績値】 刊行物・論文等数2件(①～②) (参考値)調査資料点数 興福寺：調書作成資料点数186点、写真撮影資料点数80点 仁和寺：調書原本校正資料点数263点、写真撮影資料点数263点 薬師寺：調書原本校正資料点数111点、写真撮影資料点数172点 三仏寺：調書作成資料点数420点、写真撮影資料点数95点 唐招提寺：写真撮影資料点数93点 東大寺：調査データ入力点数290点、写真撮影資料点数13点 奈良の旧家等：調書作成資料点数4点、写真撮影資料点数10点 大宮家文書データベース 増補点数1260点			
【備考】 ① 『仁和寺史料 目録編〔稿〕二』2015.3 ② 吉川聡・児島大輔「三徳山三佛寺所蔵木造勝手権現像について」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4121

自己点検評価調査

1. 定性的評価

研No.5

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、適時性が高い調査である。 独創性：三仏寺の勝手権現像においては、文献調査・美術史的調査・ファイバースコープによる胎内銘調査をおこない、それらの調査を総合的にふまえた所見を打ち出しており、独創性がある。 発展性：これらの資料には、日本史を研究する上で重要な内容を持つものが多く含まれており、本年度は特に、仁和寺の御経蔵聖教の一部の目録を公表した。これは、仏教史・日本史研究の上で今後大いに活用できるものであり、発展性がある。また、三仏寺所蔵の2軀の神像を、中世の勝手権現像と比定できた。これも、今後の修験道研究の発展に役立つものである。 効率性：資料の状況・緊急性等に合わせて、調査の取り方・撮影方法などを変えており、効率性を充分考慮している。 継続性：膨大な資料を、長年にわたって着実に中断なく、全容を把握する調査を実行している。このような調査は大学等の機関ではなしえない事業であり、継続性に極めて優れている。 正確性：調査資料の重要性に鑑みて、詳細・正確な調査を実施している。						

2. 定量的評価

観点	刊行物・論文等数					
評価	B					
判定理由 刊行物・論文等数：目標の数を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺の調査を実施した。また奈良の旧家が所蔵する資料調査なども行った。そして、仁和寺・三仏寺所蔵資料を公表できた。特に仁和寺の御経蔵聖教は、昭和30年代以来の当研究所の調査研究の成果であり、内容的にも、初めて世に知られる貴重なものである。また三仏寺所蔵資料も、文献調査・美術史的調査・ファイバースコープによる胎内銘調査など、総合的な調査を形にできた。刊行物・論文等も、定量的評価の数を満たしている。以上の成果を総合的に判定してBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。特に、長年積み重ねた成果に基づいて、仁和寺御経蔵聖教の一部を公表できたことは大きな成果である。ただし、新たな成果を生み出すための前提としては、長年の地道な調査が不可欠である。今後も地道な調査を継続していくことが必要だろう。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究 (1)－③)
【事業概要】 我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証(調査研究)を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	建造物研究室長 林 良彦
【スタッフ】 箱崎和久(遺構研究室長)、西山和宏(都城発掘調査部主任研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、鈴木智大(遺構研究室研究員)、松下迪生(遺構研究室アソシエイトフェロー)、村山聡子(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中島咲紀(遺構研究室アソシエイトフェロー)、海野 聡(建造物研究室研究員)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)、西田紀子(企画展示室研究員)	
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料「ガラス乾板」について画像のデジタルデータ化により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を「法隆寺金堂古材調査」を継続的に実施した。このほか、受託事業により、秋田県横手市増田町の歴史的建造物の調査を行った。	
【年度実績概要】 ・所内で保管している文化財建造物等の保存修理時の撮影ガラス乾板を整理して、約700枚の画像をデジタル化した(デジタル化は外注)。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 ・古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を2009年～13年度に引き続き実施した。本年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査を行い、西院金堂の現地調査をほぼ終了した。なお、調査にあたっては、年代学研究室の協力を得た。 ・海外関連事業として、ベトナムカイバイ市の保存に向けた集落調査報告書(英語版)を出版した。 (予定していた日中韓建築文化遺産保存国際学術会議(北京)への出席は中国側の都合で取りやめとなった。) ・秋田県横手市増田町の伝統的建造物群保存地区に残る町家2件の詳細調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成等を行った。	
	
法隆寺古材調査風景(西院金堂焼損部材)	
【実績値】 刊行図書数1冊(①) 学会等発表件数3件(②)、論文等数6件(③) 保管建造物関係資料整理:写真乾板デジタル化700枚 古代建築研究現地資料収集:法隆寺古材調査38回 保管建造物資料の外部者利用数:乾板写真1件16枚、建造物保存図3件57枚、摺拓本件2冊	
【備考】 刊行図書 ①奈良文化財研究所『ベトナム カイバイ市集落調査報告書(英語版)』2015.3 論文等 ②林良彦「平出集落の価値-伝統的建造物群保存対策調査から-」, 塩尻市平出伝統的建造物群保存対策調査現地説明会, 2014.6 ほかに2件 ③大林潤「法隆寺所蔵古材調査4-昭和の大修理と古材の整理-」, 『奈良文化財研究所紀要2014』, 2014.6 ほかに5件	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4131

自己点検評価調査

研No.6

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：法隆寺古材調査は、法隆寺が行っている収蔵庫の再整備にともなうもので、貴重な資料の全貌を明らかにする上で緊急性が高い。 独創性：古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、法隆寺古材調査では「技術・技法」等の視点を加え、独創性のある研究内容といえる。 発展性：法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査行い、成果を資料化することは、古代建築研究の展開に大きく貢献するものである。 効率性：限られた人員に対し十分な成果を出している。 継続性：文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。 正確性：受託業務として行った増田町建造物調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にすることで、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、大きく貢献している。						

2. 定量的評価

観点	刊行図書数	学会等発表件数	論文等数	保管建造物関係資料整理	古代建築研究現地資料収集	
判定	B	B	B	B	B	
判定理由 論文等数：目標値の6件に達した。 学会等発表件数：目標の3件に達した。 刊行図書数：ベトナムカイバイ市の集落調査報告書を刊行できた。 保管建造物関係資料整理：建造物修理にともなう写真乾板700枚を修復デジタル化した。 古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査のうち、金堂分の現地調査について完了した。 刊行図書数以下は特に目標値を上げていないが十分に成果が認められるので、Bと判定した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施できた。 - 受託事業で、増田町の歴史的建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できる。 - 古代建築の研究「法隆寺古材調査」は継続して行っている基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は基礎的な作業であるが、これを継続させたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究である。法隆寺古材調査は膨大な作業量があり、次年度直ちに報告書を刊行することは困難と考えるが、現場での作業を続けるとともに研究成果をまとめて公表して行く方向で本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究(1)－④－1)
【事業概要】 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。	
【担当部課】	無形文化遺産部
【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、星野厚子(東京藝術大学助手・客員研究員)、早川典子(保存修復科学センター主任研究員)	
【主な成果】 (1) 古典芸能(能楽)の作曲法等について調査を行い、その成果を公表した。 (2) 染織技術を支える原材料や道具等について調査を行い、その成果を公表した。 (3) 無形文化遺産部が所蔵する音声資料の整理を行い、その成果を公表した。 (4) 上演機会が著しく減少している伝承芸能について実演記録を作成した。	
【年度実績概要】 (1) 現行の能・狂言で伝承されている「海道下り」と『放下僧』の小歌について、特異な音楽構造を取ることを解明し、第9回無形文化遺産部公開学術講座で公表した。 能の構成要素である「上歌」の音楽構造が、研究の結果、世阿弥自筆能本成立時代には、かなりの程度整っていたことが判明した。また、世阿弥自作『四季祝言』『敷島』の復元した旋律について調査を行い、併せて能楽学会編『能と狂言』第12号で公表し、これまでの成果と共に単著にまとめた。 (2) 染織技術のうち、熊谷染(埼玉県)の事例を中心に、原材料や道具の入手・供給の状況を調査し、道具のメンテナンスの状況が各工房の作品・商品、問屋との関わりと密接であることが明らかとなった。調査時に作成した映像資料は文化学園服飾博物館「時代と生きる」展(26年12月～27年2月)で公開し、展覧会の会期にあわせて研究会を開催した。 織技術の解明に向けて染織品調査と染織技法書の抽出整理を行い、「地入れ」が染色技法の解明や産地などの特定では重要と考えられることが明らかとなった。その成果は『無形文化遺産研究報告』第9号に掲載した。 (3) 特殊再生装置を要する音声資料の内、フィルモン音帯について継続調査を実施し、所蔵資料についての報告を『無形文化遺産研究報告』第9号に掲載した。 (4) 連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録16席を作成した。なお、神田松鯉師は1演目について収録が完了し(23年9月から本年9月まで全17席)、新たな演目の記録作成を実施する運びとなった。また、前年度に引き続き、ほとんど上演されなくなっている落語の正本芝居噺(道具入り)について、林家正雀師による実演記録2席を作成した。	
【実績値】 学会等発表 7件(備考①～⑦) 論文等発表 6件(備考⑧～⑬) (参考値) 実演記録作成 講談16席・落語2席	
【備考】 ①高桑いづみ「謡のフシ付けを考える」観世流若手研修会講座 26年6月24日 ②高桑いづみ「放下の歌と能・狂言」第9回無形文化遺産部公開学術講座 26年10月18日 ③高桑いづみ「ヨワ吟・ツヨ吟 現在に至る変遷」観世流若手研修会講座 26年12月8日 ④高桑いづみ「山崎家旧蔵伝書の概要」『よみがえる音色—幸流名家山崎家旧蔵伝書と鼓胴』法政大学能楽研究所 27年2月27日 ⑤菊池理予「染織技術の伝承における道具の役割—熊谷染を事例として—」平成26年度第2回総合研究会 26年11月4日 ⑥菊池理予「日本伝統染織技術の継承と発展」27年1月26日 文化学園大学特別講義 ⑦菊池理予 無形文化遺産(伝統技術)の伝承に関する研究会「染織技術をささえる人と道具」趣旨説明とパネルディスカッションコーディネーター 文化学園大学 27年2月3日 ⑧高桑いづみ「返シを謡うということ—[上ゲ歌]形成の一過程とその応用—」『能と狂言』12 26年8月 ⑨高桑いづみ「『四季祝言』『敷島』の謡復元」『能と狂言』12 14.8 ⑩高桑いづみ「上ゲ歌の「放下僧」と《海道下り》放下の歌」『花もよ』第15号 26年9月1日 ⑪高桑いづみ『能と狂言 謡の変遷』 27年2月 ⑫飯島満「フィルモン音帯一覧」『無形文化遺産研究報告』第9号 27年3月 ⑬菊池理予「染織技法書に見られる豆汁の役割—寛文6年刊『紺屋茶染口伝書』を中心として—」無形文化遺産報告第9号 27年3月	



【林家正雀師による正本芝居噺『鯉沢』の一場面】

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4141

自己点検評価調査

研No.7

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性	適時性		
評価	B	B	B	B		
判定理由 独創性：能楽の音楽的側面からの調査研究は、当研究所独自のものであるが、その音楽構造の一端や中世以来の伝承の実態を解明した今年度の実績は、わが国の代表的な古典芸能である能楽のこれからの伝承のありかたを考えてゆく上でも、非常に意義深い成果をあげている。また、講談の長編続き物の記録作成についても、継続的に実施している機関は当研究所のみであり、その独創性は高く評価できる。 発展性：江戸時代に刊行された染織技法書の整理は、今なお明らかにされていない技法解明等に向けての基礎資料となるばかりか、今後の染織品の保存修復技術をより高めて行く上でも必要不可欠な情報になるものと期待できる。また、本事業で作成した動画記録（工芸技術・古典芸能）は、次代への技芸の伝承へ向けて、有益な資料になるものと評価できる。 継続性：本事業での調査研究は、いずれも以前から実施してきているが、例えばフィルモン音帯（特殊な再生装置を要する音声資料）について、現存未確認であった資料の報告を地方の郷土資料館から受けるなど、さらなるデータの蓄積等がみられた。講談の長編続き物の記録作成は、平成14年度から実施してきており、これまでに計5演目の収録を完了した。無形文化遺産分野において、継続的な調査研究から生み出される成果は大きい。 適時性：無形文化遺産には、その衰滅が危ぶまれるものが少なくないが、本年度から実質的な調査を始めた熊谷染に関しても、その工房の中には、すでに廃業を予定しているところが多い。作業工程の動画記録作成を含め、可及的早急な調査の必要性が極めて高い。また、正本芝居囃は現在では上演自体が稀なものとなっており、実演記録の作成は緊急性が高い事業であるといえる。						

2. 定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評価	B	B				
判定理由 学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記の定性的評価、定量的評価に拠り、判定をBとした。無形文化財の記録作成も着実に実施を重ねており、無形文化遺産に係る様々な調査・資料収集・記録作成とあわせ、プロジェクトの一層の充実に努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究、資料収集、成果の発表ともに計画通り達成していることから、判定をBとした。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－2)
【事業概要】 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。	
【担当部課】	無形文化遺産部
【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】 久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、今石みぎわ（研究員）、齊藤裕嗣（客員研究員）	
【主な成果】 民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行った。特に東北の被災地域における無形民俗文化財の現状調査は昨年度に引き続き重点的に行った。 調査の成果は、無形文化遺産の民俗学的解明に貢献し、また震災関連では把握されていない情報の集積に役立った。 また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。特に本年度は被災地における無形文化遺産の継承を考えるために、移転・移住と無形文化遺産についてテーマとして取り上げ、関係者間の協議やネットワーク形成を図った。その成果は報告書にまとめ、関係者及び関係機関等に配布した。 さらに、無形文化遺産情報ネットワーク協議会も開催し、本年度は文化財の防災に関する点からも情報収集と関係者間の協議・ネットワーク形成を図った。	
【年度実績概要】 ・無形民俗文化財に関する調査・資料収集 民俗芸能の調査として「杉沢比山番楽」「岳神楽」「幸田神楽」等について、民俗技術の調査として「木積の藤箕製作技術」「能登の揚げ浜製塩の技術」「長良川鵜飼い」について伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状を把握するとともに現地関係者とのネットワークを構築した。このうち長良川鵜飼いについては市民向け講座で保存・活用についての講演を行った。また継続テーマである「削りかけ」状祭具に関わる技術と風俗慣習の研究として、石川県輪島市において調査を行った。 ・被災地域の無形文化遺産に関する調査とアーカイブの構築 民俗芸能、風俗慣習の調査として東日本大震災被災地である福島県南相馬市の山田神社祭礼、浪江町の荻宿鹿舞・田植踊り、宮城県女川町の祭礼及び獅子舞、岩手県遠野市周辺の鹿踊りに関して、資料収集・記録保存を行った。 ・研究集会の開催 第9回無形民俗文化財研究協議会を26年12月5日「地域アイデンティティと民俗芸能―移住・移転と無形文化遺産―」をテーマに東京文化財研究所において開催し、128名の参加を得た。4件の事例報告（舟山直治・入澤紀・青原さとし・丸尾依子）をもとにコメンテーター2名（星野紘・高倉浩樹）を含めた総合討議を行った。成果は『第9回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめる。27年3月には第3回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を東京文化財研究所において開催。東北被災地域における無形文化遺産の復興支援に関わる様々な分野の関係者と共に今後の支援の在り方について協議した。 ・無形文化遺産関係ネットワークの構築 被災地でのネットワーク構築及び関係者ネットワーク構築に向けて福島県・山形県で、県内の無形文化遺産関係者に聞き取り調査などを実施。なお、岩手県大船渡市では市民向け講座で講演を行った。また、伝統文化活性化国民協会からデジタルコンテンツ（無形文化遺産の所在記録等情報データベース・神楽マップ・東京都民俗芸能マップ）の移譲を受けたことに加え、無形文化遺産情報ネットワークにおけるデジタルアーカイブの公開準備を進めるなど、デジタルコンテンツのさらなる拡充と整備を行った。	
【実績値】 学会等発表 3件（備考①～③） 論文等発表 1件（備考④）	
【備考】 ①今石みぎわ「伝統技術を伝えていくということ―『長良川の鵜飼漁の技術』の保存・活用」岐阜市 27年1月25日 ②今石みぎわ「暮らしの記憶を記録する ごいし民俗誌その後」岩手県大船渡市碁石地区 27年2月15日 ③今石みぎわ「菅笠作りは福岡の宝」ふくおか文化総合センター 27年3月29日 ④今石みぎわ『花とイナウー世界の中のアイヌ文化』（共著）北海道大学アイヌ民族文化センター 27年3月（予定）	



【復活した獅子が一堂に会した「女川獅子振り披露会」における女川町小乗地区の獅子舞】

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4142

自己点検評価調査

研No.8

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評価	A	B	B	B		
判定理由 適時性：継承の危機にある無形民俗文化財の調査研究、記録作成は極めて必要性、緊急性が高い。特に東日本大震災以降、無形文化遺産が果たす役割の重要性について改めて光が当てられており、調査・研究の社会的ニーズもより一層高くなっている。中でも無形文化遺産情報ネットワークでは被災した無形民俗文化財の被災状況の把握と復興の点から必要性、緊急性が高く、社会的にもその成果は認められている。また17年度から指定制度が始まった民俗技術については、近年地方自治体においてもその保存活用に関する議論が高まりを見せているにも関わらず、その調査研究は他分野に比べても十分でないことから、調査研究や記録は急務であり適時性が高い。さらに本年は、公益財団法人伝統文化活性化国民協会の解散に伴い当協会管理運用のデジタルコンテンツが移譲される方針となったことから、急遽環境整備を行い、移設作業を完了させた。これによりさらなるアーカイブの拡充が図られたと共に、貴重なコンテンツの保全・活用が図られたことは適時性に照らしても高く評価できる。 独創性：国内唯一の無形民俗文化財の研究部として全国の関係者を集めて専門的観点から協議会を開催し、関係者のネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化の観点から見て、その独創性を十分評価できる。また被災地域における無形民俗文化財に関する調査・研究及び提言を率先して行ったことは、その独創性において大きな成果が認められる。 発展性：無形民俗文化財の積極的活用についての議論・提言を行うことで、記録保存に留まらない無形の文化財保護の在り方を模索したことは発展性の面からみて評価できる。さらに無形文化遺産情報ネットワークを通じ、無形文化遺産の文化財防災についての議論を深化させたことは発展性に富むもので十分評価できる。 継続性：全国の無形民俗文化財関係者間、また被災地域における関係者間のネットワーク構築は継続的に行うべき性質のものであり、これを継続的・積極的に行っていることは無形民俗文化財の保護体制の強化に繋がるものとして十分評価できる。また特に民俗技術に関しては全国的な調査の継続により成果が蓄積されてきており、保存活用に向けた新たな調査・研究視点の提供や提言が可能になってきていることは十分に評価できる。						

2. 定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評価	B	B				
判定理由 学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施することができた。前年度から引き続いて行っている被災地域における無形民俗文化財の調査・記録の成果は、全国の継承が困難な無形民俗文化財の保存に際しても活用できるものであり、将来を見通した取組としても極めて重要である。特に本年度は、居住地の移転・移住後の無形文化遺産の動向をテーマとした協議会を開催したが、東日本大震災被災地域が現在直面している課題を、過疎高齢化・少子化による伝承の衰退といった全国的テーマに敷衍して議論することにより、より広い課題の共有と議論の深化を図ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。次年度は最終年度となるため中期計画の趣旨に沿って、無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究をとりまとめる。また研究協議会についても、引き続き適時性や独創性を持ったテーマを選択し、開催する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集(①)－④－3)		
【事業概要】 無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島満
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、菊池理予(究員)、今石みぎわ(研究員)、二神葉子(企画情報部情報システム研究室長)			
【主な成果】 韓国国立無形遺産院との交流事業において、23年度に調印した合意書(当時の韓国側の組織名は韓国国立文化財研究所)に基づき、研究員の相互派遣を内容とする研究交流を実施した。また関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し、海外研究者への助言や調査協力を通して、無形文化遺産分野における国際的情報収集及び情報提供を行った。			
【年度実績概要】 ・韓国との交流事業では、23年度に調印した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流合意書」に基づき、韓国国立無形遺産院から、調査研究記録課の李明珍学芸研究士を26年8月11日～9月9日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流を実施した。日本側からは、8月18日～30日の間、菊池理予研究員を派遣し、韓国における無形文化財(工芸技術)の保護制度について調査研究を行った。また、27年3月2日～14日には久保田裕道無形民俗文化財研究室長を派遣し、韓国における民俗芸能・風俗慣習についての調査研究を行った。 ・無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等に参加し、情報収集及び研究発表等を実施した。 26年11月23日～29日「無形文化遺産保護条約第9回政府間委員会」フランス パリ・ユネスコ本部 26年10月16日「韓・中・日無形遺産国際シンポジウム」韓国 ソウル・重要無形文化財伝授会館			
			
李明珍学芸研究士による成果報告会(東京文化財研究所 26年9月8日)			
【実績値】 学会等発表 3件(①②③) 論文等発表 1件(④)			
【備考】 ①菊池理予「染織技術に関わる原材料と道具の現状」韓国国立無形遺産院(26年9月4日) ②久保田裕道「日本における風流芸能の伝承と保存」韓国文化財保護財団(26年10月16日) ③久保田裕道「日韓の正月儀礼を中心とした比較研究」韓国国立無形遺産院(27年3月13日) ④二神葉子「無形遺産保護の保護に関する第9回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』第9号 27年3月			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4143

自己点検評価調査

研No.9

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評価	B	B	B			
判定理由 適時性：無形文化遺産保護条約第9回政府間委員会では、「和紙 日本の手漉和紙技術」が無形文化遺産登録されるなど、国内外での関心も高く、委員会に出席することによって、適切な情報収集を行うことができた。 発展性・継続性：第2期を迎えた韓国との研究交流事業は、相手側の改組後も滞りなく継続されており、より緊密な関係を築くことができた。						

2. 定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評価	B	B				
判定理由 学会等発表・論文等発表：論文等掲載数、発表件数ともに十分である。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国との交流に関しては、相手側の改組後も、研究員の相互派遣交流が実施できた。国際会議等での情報収集も、効率的に実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立無形遺産院との研究交流は順調であり、国際会議等における情報収集も、当初の計画通りに実施している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備）（(1)－⑤－ア）		
【事業概要】 遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料収集・調査・整理等を行い、文化財の包括的保存管理を検討する一環として、遺跡等のマネジメントに関する研究集会を開催するとともに、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴（文化遺産部主任研究員）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）、平澤 毅（景観研究室長）			
【主な成果】 「史跡等の整備・活用の長期的な展開」を主題として、遺跡整備及び関連する分野の取組に関する情報収集を行うとともに、遺跡整備及び関連する分野の代表的な事例に関する発表及び総合討議からなる研究集会を開催した。また、過年度の成果について、『計画の意義と方法』[平成 25 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 3 回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等を行った。			
【年度実績概要】 ・ 国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。 ・ 27年1月16日（金）に、「史跡等の整備・活用の長期的な展開 ―経年によるソフト・ハードの変化と再生―」を主題とし、平成26年度研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した。 遺跡整備の事例（登呂遺跡・一乗谷朝倉氏遺跡・西都原古墳群）に関する発表、次いで関連する分野（都市公園・博物館・動植物園）の再生事例に関する発表の後、これらを踏まえて総合討議において発表者及び参加者とテーマに基づいて議論を行った。 ・ 研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を編集・刊行する準備として、討議内容及び今後の調査研究の課題等についての整理を進めた。 ・ 昨年度の研究集会「計画の意義と方法」の成果について検討を加え、『奈良文化財研究所紀要 2014』に報告するとともに、報告書を執筆・編集・刊行した。 ・ 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主管課等に対して、25年度刊行の研究集会報告書を配布するなど、過年度の成果の公表に努めた。			
【実績値】 研究集会開催数 1 回(①：参加者数 地方公共団体職員・民間事業者・大学所属研究者等 85 名) 刊行図書数 1 件(②) 論文等数 1 件(③)		 平成 26 年度研究集会（27 年 1 月 16 日）	
【備考】 研究集会 ①『遺跡整備に関する研究集会「史跡等の整備・活用の長期的な展開」講演・報告資料集』 2015. 1 刊行図書 ②『計画の意義と方法』平成 25 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 3 回）報告書 2015. 1			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4151

自己点検評価調査

研No.10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：史跡等の整備・活用の長期的な展開について検討した研究集会は、今日的な課題を扱ったものであり、時宜を得たものと言える。 独創性：史跡等の整備・活用の長期的な展開について、多様な分野からの発表をもとに検討した研究集会は、これまでに無く独創的なものと言える。 発展性：今年度の研究集会は、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、25年度「計画の意義と方法」をテーマとした研究集会に続けて、遺跡整備に関する課題について発展的に検討を重ねている。 効率性：研究集会の開催、報告書の刊行等をスケジュール通りに進めることができ、事業を効率的に実施できた。 継続性：遺跡の保存・活用に関する基礎的・応用的な検討を基礎としながら、研究集会の開催等を通じ、遺跡整備について継続的に検討を進めている。 正確性：研究集会での配付資料及び昨年度の研究集会報告書の作成にあたり、必要な調査・検討を行い、正確な情報が提供できた。						

2. 定量的評価

観点	研究集会開催回数	刊行図書数	論文等数			
評価	B	B	B			
判定理由 研究集会開催回数：計画通り、研究集会を1回開催した。 刊行図書数：計画通り、1冊刊行できた。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施した。特に、研究集会については、史跡等の整備・活用の長期的な展開を主題とし、近年の全国的な課題を検討した取組として極めて重要である。また、前年度研究集会の報告書を刊行し、遺跡の整備に関する論文等を発表しており、調査・研究の成果を公表している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	遺跡等の整備に関する情報の収集・整理・公開の検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会については、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」、25年度「計画の意義と方法」に引き続き、「史跡等の整備・活用の長期的な展開」を主題として検討した。これらによって、急速に変化していく社会構造・国民生活等と遺跡を含む記念物保護との関係を考慮しつつ、遺跡整備に関する特に重要な諸課題について検討を行い、文化財の保存と活用を図るための調査・研究を推進できている。また、今年度の成果は、次年度に予定している整備・活用の長期的な展開に関する研究の基礎となるものである。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)((1)ー⑤ーイ)
【事業概要】庭園史に関する文献調査及び国内外での現地調査の他、「庭園の歴史に関する研究会」の開催など、日本庭園に関する基礎的資料の検討を行い、併せて森・村岡・牛川資料の整理・研究を進める。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、小野健吉(副所長)、エドワーズ・W、(中国科学院心理学研究所編集局事務担当・客員研究員)、マレス・E・ベルナル(総合地球環境学研究所事務補佐員・客員研究員)	
【主な成果】 「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」を開催し、報告書をまとめた。この研究会では、「戦国時代の城館の庭園」をテーマに、建築史学・美術史学・考古学等の研究者と共に、学際的な議論を行った。戦国時代の城館に関する遺構は、発掘調査によって近年も検出事例が相次ぐ一方、その空間構成に関する研究は十分に進展していないのが現状で、本研究会での学際的な議論は、中世庭園史研究の進展に寄与しただけでなく、検出遺構の解釈等の埋蔵文化財の調査研究に資する成果となった。また、奈良市における庭園の悉皆的調査では、寺院の庭園を中心に現地調査を行い、奈良市内に現存する寺院庭園の全体像を把握することができた。	
【年度実績概要】 ・「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」の実施 10 月 25 日に、「戦国時代の城館の庭園」をテーマとして、大学などの外部研究者(庭園史学、建築史学、美術史学、文献史学)、地方自治体の埋蔵文化財発掘調査担当者等 21 名を招聘し、開催した。庭園史、建築史、文献史の立場から各研究発表 3 本、近年の庭園遺構が検出された遺跡である、大内氏館跡、小田原城御用米曲輪、岐阜城跡織田信長居館跡の事例報告 3 本があった。その後の討議では、地勢に根差した庭園独特の特性を踏まえた遺構解釈の必要性や、価値の相対化が進む中世の文化的展開を、特に建築史・庭園史研究において、遺構から丁寧に読み解いていく作業が必要であること等の課題が明らかにされた。 ・「平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会」報告書の刊行 上記の研究会の報告書の執筆・編集・刊行を行った。ここには、研究会の参加者 7 名の論考及び、質疑応答・討議内容を掲載した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2015』等で公表する予定である。 ・連携研究：奈良市における庭園の悉皆的調査 奈良市と連携研究協定を結び、奈良市における庭園の悉皆的調査に取り組み、寺院及び民家の庭園について、現地調査を行い、35 件の概要調査を終了した。 ・発掘庭園データベース更新に向けた事例収集を実施した。 ・森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、国内外の庭園・遺跡を撮影したスライドを分類し、注記整理を進めた。	
【実績値】 研究会開催数：1 回（奈良文化財研究所、大学等研究者 21 名参加、配布資料①～②） 刊行図書数：1 件（③） 論文等数：8 件（講演・発表等 3 件、論文 5 件④～⑤）。	
【備考】 研究会配布資料 ① 「平成 26 年度庭園の歴史に関する研究会 戦国時代の城館の庭園 発表資料集」26 年 10 月 ② 「平成 26 年度庭園の歴史に関する研究会参考資料集 中世城館の庭園遺構集成」26 年 10 月 刊行図書 ③ 『戦国時代の城館の庭園』平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会報告書 27 年 3 月 論文等 ④ 中島義晴「室町時代の将軍の庭園」『奈良文化財研究所紀要 2014』26 年 6 月 ⑤ 高橋知奈津「平安貴族の遊覧と文芸一道長と桂、宇治」『庭園学講座 21 日本庭園と文芸』26 年 8 月 ほか 6 件	



平成 26 年度 庭園の歴史に関する研究会の様子

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4152

自己点検評価調査

研No.11

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：「庭園の歴史に関する研究会」では、近年、発掘調査によって新たな検出が相次ぎ、研究の進展が期待される戦国時代の城館の庭園について取り扱い、報告書にとりまとめることができた。 独創性：「庭園の歴史に関する研究会」では、庭園史学のみならず、建築史学、美術史学、文献史学、考古学の多分野の研究者とともに取り組んでいる点で、学際性の高い研究を実施することができた。 発展性：今期中期計画で取り組んでいる、中世の庭園の歴史に関する研究では、従来研究の進んでいない時代の庭園を取り扱っており、今後の研究課題が研究者間で共有されたことは、中世庭園史の研究の進展に資する。特に、本年度取り組んだテーマは、埋蔵文化財発掘調査に基づく考古学的研究の発展も期待できる。 効率性：研究会の開催時期を踏まえ、庭園の調現地査等の日程を計画的に調整し、年度内での報告書の刊行を含めて、スケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。 継続性：今期中期計画で取り組んでいる中世の庭園の歴史に関する研究について、継続的にテーマを設定して進めることができた。他、資料収集やデータの改訂に向けた作業等、前年度から行ってきた事業を着実に進めることができた。 正確性：発掘庭園に関する正確な情報提供のため、新たな事例収集・更新内容の検討を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	研究会 開催回数	報告書等 刊行件数	論文等数			
評価	B	B	B			
判定理由 研究会開催回数：計画通り、研究会を1回開催し、研究を深めることができた。 報告書等刊行件数：計画通り、報告書を1冊刊行した。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施した。また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、発掘調査での新検出が相次ぎ研究の進展の期待される戦国時代の城館の庭園について、庭園史学、建築史学、美術史学、考古学などの外部研究者とともに、多面的に遺構解釈等について考え、報告書にまとめたことは意義があった。また、庭園史及び歴史的庭園等の調査に関する研究成果の情報発信も着実に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	庭園史に関する文献調査、庭園の現地調査、研究会の実施、日本庭園に関する基礎的資料のデータベース化の他、資料の整理についても、着実に進め、最終年度における取りまとめに向けて準備することができた。

業務実績書

研No.12

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(国際研究交流)((1)－⑤－ウ)		
【事業概要】 不動産文化財に関連した研究成果について、米国・コロンビア大学との研究交流の下に、コロンビア大学にて講演を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴(文化遺産部主任研究員)、高橋知奈津(遺跡整備研究室研究員)、清野孝之(考古第三研究室長)、星野安治(年代学研究室研究員)			
【主な成果】 米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に係る講演2件を実施した。			
【年度実績概要】 ・26年9月17日に、米国・コロンビア大学において、コロンビア大学中世日本研究所及びコロンビア大学建築・計画・保存大学院と講演会を共催し、“Ideal management of historic parks: From past to present to future” (清野孝之) 及び“A Review of the Application of Dendrochronology to Japanese Cultural Heritage” (星野安治) の2つの講演を行い、それぞれ、日本において史跡の保存管理主体が文化財保護部局と公園部局に分かれている現状と課題について、また、日本の文化遺産研究において成果を挙げている年輪年代学の概要について発表した。			
			
コロンビア大学 Buell Hall での講演			
【実績値】 講演会開催数：1回(米国・コロンビア大学；約30名参加)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4153

自己点検評価調書

研No.12

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：講演内容には史跡の管理活用の事例及び年輪年代学研究におけるCTの利用など最新の情報や成果を取り入れた。 独創性：不動産文化財について23年度から毎回多様なテーマで講演を行っている。 発展性：日本における調査研究の成果について、外国においても共通するテーマでの講演を行っている。 効率性：講演のための渡米に合わせて米国における史跡の保護に関する情報収集を行った。 継続性：23年度からの研究交流を着実に進めた。 正確性：研究発表では、自ら行っている研究の成果を主題としており正確な情報に基づくものである。						

2. 定量的評価

観点	講演会開催数					
評定	B					
判定理由 講演会開催数：計画通り、米国・コロンビア大学において、講演会を1回開催できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施し、不動産文化財等に関する研究成果として、史跡の管理活用及び年輪年代学研究についての情報発信を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	米国・コロンビア大学との研究交流のもとに不動産文化財等に関連する研究成果の発表を行うことができた。併せて、次年度の研究交流事業の方向性等を確認できた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京右京一条二坊一坪・二条二坊四坪・一条南大路の発掘調査((1)－⑥－ア)		
【事業概要】 古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 渡辺晃宏、尾野善裕、今井晃樹、馬場 基、神野 恵、石田由起子、小田裕樹、番 光、鈴木智大、川畑 純、大澤正吾、清野陽一、松下迪生、金 宇大、浦 蓉子(以上、都城発掘調査部)、小池伸彦、高妻洋成、金田明大、山崎 健、脇谷草一郎、田村朋美、星野安治、村田泰輔(以上、埋蔵文化財センター)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)			
【主な成果】 ・平城京右京一条二坊四坪及び二条二坊一坪にあたる地域の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げた。 良好に遺存する平城京の条坊遺構(一条南大路南北両側溝)を検出した。 大規模な土木工事による平城京造営過程等を明らかにすることができた。 宅地内の遺構や、宅地を区画する築地痕跡などを確認した。 ・調査研究成果の公表を行った。 ウェブサイトにて「奈文研本庁舎発掘だより」を 1～2 週間に 1 度公開した。調査の進捗に応じて記者発表も行った。			
【年度実績概要】 発掘調査面積は 3,591 m ² 。調査期間は 26 年 4 月 14 日～27 年 2 月 18 日。 ・基本層序 地山は、緑灰色粘土と黒褐色粘土の互層。平城京造営以前までは北西から南東方向に河川(秋篠川旧流路)が通り、河川堆積・沼状堆積が認められる。平城京造営時の河川埋立て土と整地土、奈良時代中頃以降の整地土が部分的に残る。その上に中世以降の耕土・床土の上に旧庁舎の造成土が厚く堆積する。 ・主な検出遺構 一条南大路関連遺構：平城京造営期に、秋篠川旧流路を敷葉工法を用いて埋め立て、その上に一条南大路及び南北両側溝を作る。南北両側溝の路面側は、しがらみ土留遺構を伴う。一条南大路路面上に南北両側溝をつなぐ南北溝、平城京右京二条二坊一坪の北面築地の添柱とみられる柱穴列も検出した。 坪内の遺構：右京二条二坊一坪の北東隅で大土坑、右京一条二坊四坪で井戸 9 基と小規模な掘立柱建物などを検出した。また、坪内の整地についても確認した。 地震痕跡：調査区内各所で液状化現象の痕跡等を確認し、災害考古学に資する重要な情報を蓄積した。 ・主な出土遺物 木簡、木器、弥生時代から奈良時代を中心とする土器、瓦磚類(緑釉瓦含む)。 ・調査所見 古墳時代以前の自然流路が交錯し、平城京造営直前には秋篠川旧流路が北西から南東に流れていたことを確認した。平城京造営時の大規模な埋め立てや、条坊道路・側溝の敷設過程が良くわかる。また、平城京右京二条二坊一坪は北側を築地堀で区画していたこと、右京一条二坊四坪の一部は整備が奈良時代の中頃に下る可能性が高いものの、墨書土器等の出土遺物等から考えて、官衙的な施設が置かれていた可能性が高いこともわかった。			
			一条南大路を西から見る
【実績値】 論文数：1 件(①) 報道発表等件数：2 件 (参考値) 出土遺物：瓦片 267 箱、土器片 241 箱、木製品 1100 箱、木簡 45 点(うち削屑 12 点) 記録作成数：実測図 260 枚(A2 判)、遺構写真 246 枚(4×5)、デジタル写真約 6300 枚			
【備考】 ①小田裕樹・鈴木智大・神野恵他「平城京右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路の発掘調査 平城第 530 次」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定			



一条南大路を西から見る

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-1

自己点検評価調査

研No.13

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：大規模土木工事という機会を捉え、広範囲に及ぶ発掘調査を実施し、大規模な都城遺構を調査して多くの成果を得ることができた。 独創性：考古学のみならず、建築史・文献史からの分析や、木材分析・災害痕跡分析なども含む多様な自然科学的分析を行い、さらに、最新の測量技術を導入するなど、奈良文化財研究所ならではの学際的で多様な検討や調査を行い、多くの成果を上げることができた。 発展性：平城京の条坊に関する詳細な情報を得ることができ、さらに平城京造営時の大規模な土木工事の様相が初めて明らかになった。今後の平城京研究、ひいては古代国家研究に基点となる調査成果を得ることができた。また多分野横断的な調査の経験を多く積むことができ、今後の他分野横断的調査研究方法の発展・展開に寄与すると考えられる。 効率性：庁舎解体の遅れに伴う発掘調査計画の遅延・変更や、予想を超える遺存状況・規模の検出など、想定外の状況の発生に対し、重機の有効活用や調査員・作業員の集中投入、3D測量など最新技術の活用によって、最大限の効率化を図った。 継続性：平城京内の詳細で正確な条坊データの蓄積に寄与することができた。今後の調査計画においても重要な指標となると考える。 正確性：調査員の数を増強して多様に展開する現場の様相に対応した他、所内各部門の知見を結集し、部内検討会を開催することで、正確な調査を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	記者発表数				
評価	B	A				
判定理由 論文数：目標値の1件を達成した 記者発表数：目標値の1件を上回る2件を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 平城京条坊遺構の詳細な情報や、平城京造営時の大規模な土木工事の実態などこれまで知られていなかった新知見・新発見を多く得た。これらの情報は、今後の平城宮・京研究に大きな影響を与えると考えられる。 - 数次にわたる地震痕跡等を確認し、災害考古学的情報を多く得た。 - 発掘調査の情報を、ウェブサイトを通じて速報し、記者発表も適時に行った。調査成果を積極的に公開した。 調査終了は当初計画より遅延したが、調査着手当初は解体工事と併行せざるを得なかったことや、遺跡の規模が想定を遙かに超えるものであったこと等を考慮し、以上の定性的・定量的評価を踏まえて、Bと判定する 次年度以降、今回の調査成果を調査・研究に活用するとともに、今回試みた様々な調査手法についても、今後積極的に活用していく必要がある。また、ウェブサイトを通じての速報は、検出遺構を早く伝えるという速報性と、検出遺構の意義づけ等を丁寧に行うという正確性の両立の困難さを改めて感じる場面も多々あった。その解決に向けて次年度以降も努力して行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 古代都城の解明の解明に、極めて重要で多大な成果を得た。 「奈文研本庁舎発掘だより」のウェブサイト公開など、積極的に多様な情報公開を行った。 以上より、Bと判定する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代官衙・集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行((1)－⑥－ア)
【事業概要】 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。古代都城の解明のため、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 玉田芳英(都城発掘調査部副部長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、青木 敬(都城発掘調査部主任研究員)、森川 実(都城発掘調査部主任研究員)、小田裕樹(考古第二研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、海野 聡(建造物研究室研究員)、小池伸彦(遺跡・調査技術研究室長)	
【主な成果】 (1) 第18回古代官衙・集落研究集会「宮都・官衙の土器(官衙・集落と土器1)」を開催。 古代宮都・官衙出土土器の様相の地域間比較や、考古学・文献史学等の分野横断的な検討を行った。 古代宮都・官衙出土土器と在地集落出土土器の様相の明瞭な差異が確認され、その意義について議論を深めた。 各地域における研究手法の違いなどを明らかにし、今後の調査・研究における課題を共有した。 (2) 『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(報告編・資料編)(①)の刊行 昨年度開催した第17回研究集会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。	
【年度実績概要】 (1) 研究集会の開催(26年12月12～13日・於：平城宮跡資料館講堂)の開催 研究報告は、高橋照彦「都と地方の土器」、森川実「平城宮とその周辺の土器様相」、佐藤敏幸「東北の城柵官衙と土器」、依田亮一「東国の官衙と土器」、中島恒次郎「土器から考える遺跡性格」、岡田裕之「出雲における国府と集落の土器様相」、三舟隆之「文献から見た官衙と土器」の計7本。 報告後、会場からの質問や意見を交えつつ、報告者を中心に討論を行った。 研究集会開催に際しては、報告資料集(②)を編集・刊行し、参加者等に配布した。	
	
研究集会の様子	
(2) 『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(①)の刊行 昨年度開催した第17回古代官衙・集落研究集会の成果報告書として、『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』(報告編・資料編)(①)を刊行した。 報告編は総頁数256頁で論文7本と討論内容を所収し、資料編は総頁数456頁で276遺跡348例の長舎遺構の遺構図と集成表を掲載した。	
【実績値】 公刊図書数：2件(①～②) 論文数：14本(①～②)	
(参考値) 研究集会参加者 148名 アンケート回答 131名(回収率88.5%) アンケート内容 大変有意義であった80名、有意義であった48名、普通4名、あまり有意義でなかった1名、有意義でなかった0名 研究報告書での収集資料数：276遺跡348例	
【備考】 ①『第17回古代官衙・集落研究会報告書 長舎と官衙の建物配置』26年12月 ②『第18回古代官衙・集落研究集会 宮都・官衙と土器(官衙・集落と土器1)研究報告資料』26年12月	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-2

自己点検評価調査

研No.14

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：古代官衙・集落遺跡の調査・研究推進上、重要で適切な課題設定のもと、第18回研究集会を開催した。昨年度開催した第17回研究集会の成果を、遅滞なく研究報告書として刊行し、広く公開した。 独創性：土器は、従来は編年に基づく年代判定に特化する傾向が強かったが、遺跡の性格を明らかにする上で重要な指標となり得ることを示した。 発展性：土器は、遺跡の性格にかかわらず普遍的に出土する遺物であるため、同じ視点で様々な遺跡の様相を比較することができる。今回の議論を基点として、今後対象を広げるなど、大きな発展性を持つものと考えられる。 効率性：地方官衙関係遺跡データベース構築作業との連携により、効率を高めた。 継続性：当研究所の事業として、18回目の研究集会を開催した。継続的開催によって、多くの研究成果が蓄積され、また研究所内外から積極的な情報提供や研究集会への参加等を得ている。 正確性：研究集会において、各発表者の報告と会場参加者も含めた議論等を通じ、研究成果等を確認・共有した。また、研究報告書では、長舎の類例について悉皆的な集成を行い、今後の研究に資する正確なデータを広く提供した。						

2. 定量的評価

観点	公刊図書数	論文数				
評価	B	B				
判定理由 刊図書数：目標件数2件を達成した。 論文数：目標件数研究集会報告資料7件・研究報告書7件をそれぞれ達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 適切なテーマ設定の下に研究集会を開催し、地方自治体職員も含め、多くの参加者を得た。報告・討論とも充実しており有意義であった。こうした状況は、参加者アンケートの結果からも確認できる。 - 充実した内容の研究報告書を、目標の期日に刊行し、公開した。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 次年度以降も、今年度と同様の成果が上がるよう、適切なテーマ設定を行い、研究集会の開催と質の高い報告書刊行を継続的に行うことを目指したい。 なお、研究集会は、地方自治体の埋蔵文化財担当職員等も含め、全国的で高度な研究・調査情報交換・共有の場としての役割も果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 研究集会での報告や討論を通じて、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。 - 全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じ、本研究所の研究の質的向上に資した。 - 研究報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となった。 以上より、中期計画の所期の目標を達成しておりBと判定した。 本研究集会及び報告書は、古代国家形成・古代都城研究に役立ち、また全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員をはじめとした参加者からその継続を望む声も大きい。今後も継続して事業を推進する必要がある。継続的な事業実施のためにも、報告書編集作業の一層の効率化、適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催を進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行(①-⑥-ア)
【事業概要】 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。古代都城の解明のため、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、森先一貴、石田由紀子、川畑 純、清野陽一(以上、考古第三研究室研究員)、中川二美、南部裕樹(以上、都城発掘調査部アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 (1) 第15回古代瓦研究会シンポジウム「8世紀の瓦づくりⅣ ー平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系ー」を開催 平城宮式軒瓦の主体となる6282-6721型式について、平城宮・京での出土状況、各地における当該型式採用の経緯、時期、製作技法など多岐にわたる検討・議論を行った。 奈良時代後半に主流となる平城宮式の瓦が、平城宮・京でどのように使用され、それらが各地へどのように展開していくのかを検討した。 (2) シンポジウムの開催にあたり、発表要旨集を作成した。	
【年度実績概要】 (1) 研究会シンポジウム(27年2月14～15日・於：平城宮跡資料館)の開催 口頭研究報告は2日間で6本を実施し、さらに2本の紙上報告があった。 口頭報告終了後、口頭報告者8名および紙上発表者2名を加えて、当該型式を中心とした瓦の文様、技法の共通性、瓦の年代観、各地における当該型式の歴史的意義などについて討論を実施した。 (2) 報告書の刊行 シンポジウムの発表要旨集(①)を制作し、配布した。	
【実績値】 報告書等数：1件(①) 論文等数：8件(②～⑨) (参考値) 研究会参加者133名 アンケート回答68名(回収率51%) シンポジウムの内容：瓦の出土品を見ながら報告を開けたのがよい。 今後取り上げてほしいテーマ：国府、国分寺の瓦、全国に敷衍する瓦の技法について。	
  各報告 討論会	
【備考】 ①『8世紀の瓦づくりⅣ ー平城宮式軒瓦の展開2 6282-6721系ー』第15回シンポジウム発表要旨集、2015.2 ②川畑純「平城宮の6282-6721型式軒瓦」、③宮崎正裕「平城京の6282-6721型式軒瓦」、④大坪州一郎「南山城地域の6282-6721型式軒瓦」、⑤古閑正浩「河内地域の6282-6721系軒瓦」、⑥池田征弘・中川猛「播磨の6721系軒瓦 ーいわゆる本町式軒瓦についてー」、⑦佐川正敏・藤木海「東北地方の6282-6721系軒瓦」、⑧新田剛「伊勢出土の6719A」、⑨早川和賀子「壱岐・豊前出土の6284型式軒瓦」	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-3

自己点検評価調査

研No.15

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：シンポジウムの課題設定が、古代瓦研究を推進するうえで、重要で適切であった。 独創性：平城宮出土軒瓦中で最も出土点数が多く、かつ全国的にも分布する型式の軒瓦(6282-6721系)を課題とし、全国的な視野で同一型式を論じることにより、中央と地方における瓦生産の共通点と相違点を明瞭にすることができた。 発展性：今回対象とした型式以外にも、奈良時代後半期で特徴的で、かつ全国的に広く分布する軒瓦は複数型式存在する。それらを今後の課題とすることにより、より多角的な視点で中央と地方とでの瓦生産のあり方について明らかにできる。 効率性：シンポジウムの準備や報告書などの作成は、都城発掘調査部を中心に効率的に進めることができた。 継続性：当研究所の事業として、予定通りシンポジウムを開催した。これまでのシンポジウムの蓄積を生かすことができた一方、新たな視点・課題が明らかになり、次年度以降も継続的なシンポジウム開催が必要である。 正確性：シンポジウム予稿集は、全国的な視野で特定型式の古代瓦の報告がなされており、研究に資する正確なデータを広くひろめるとともに、各地の研究者が当該型式を研究する上で必要不可欠となる水準を保持している。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数	論文等数				
評価	B	B				
判定理由 報告書等数：目標件数1件を達成した。 論文等数：目標件数8件を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・シンポジウムには多くの参加者があり、活発な議論が行われ、古代瓦研究に新たな視点を提供するなど、多くの成果を得た。 ・シンポジウムに際し、予稿集を予定通り刊行・配布し、研究成果・データの公表を行った。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。 なお、各地方自治体からは高い評価をえるとともに、研究会の継続、シンポジウムの開催し、研究成果の公刊が望まれている。次年度以降はシンポジウムの開催と同時に、研究報告書を刊行する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・シンポジウムの報告や討論を通じて、古代都城・古代国家研究に資する成果を得た。 ・予稿集の刊行により、研究成果を広く公表した。 以上より、中期計画の所期の目標を達成しており、Bと判定した。 なお、本研究集会については、全国の自治体職員等より継続を望む声が多く、古代都城を考える上でも重要な意義をもつものであり、今後も継続して事業を推進する必要があると考える。そのためにも、報告書編集作業ならびに研究集会準備の効率化を一層推し進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査（大極殿院）（(1)－⑥－ア）
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、中枢部については平成11年度以降、実態解明のための計画調査を実施している。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、廣瀬 覚、森川 実(都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)	
【主な成果】 ・藤原宮大極殿院の発掘調査（飛鳥・藤原第182次）を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の中枢部において、藤原宮の時代を中心とする前後の時期にわたる遺構変遷を明らかにすることができた。 ・発掘調査で得た新知見より、今後の調査計画を明確にすることができた。	
【年度実績概要】 ・調査地： 藤原宮大極殿院（飛鳥・藤原第182次） ・目的： 藤原宮大極殿院の様相解明。大極殿前面広場の空間利用の解明。 ・調査期間： 26年4月1日～27年2月25日 ・調査面積： 1450 m ² ・調査成果： 藤原宮大極殿の南面において藤原宮造営期の南北大溝（運河）1条、南北溝3条、東西溝1条、藤原宮期の礫敷広場を確認し、藤原宮造営期の斜行溝1条を新たに発見した。これらのほかに奈良時代の建物2棟、土器埋納遺構1基、平安時代の建物1棟、平安時代土器埋納遺構1基などを確認した。さらに、藤原宮造営以前の古墳周溝を検出し、藤原宮中枢部における古墳時代から平安時代までの遺構変遷を明らかにした。 ・今年度の発掘調査で発見した斜行溝は、藤原宮中枢部の造営過程を明らかにするうえで重要な遺構であり、次年度以降の継続調査につながった。	
 調査区全景（南から）	
【実績値】 発表件数：4件（論文等2件①・④、報道発表1件②、現地説明会1件③） （参考値） 出土遺物：軒瓦・面戸瓦等381点（15箱）、丸平瓦コンテナ243箱、土器・埴輪コンテナ63箱、木製品・木質遺物コンテナ7箱、金属製品24点、石器・石製品29点、獣骨・馬歯8点、種実コンテナ1箱 記録作成数：遺構実測図54枚、写真〈4×5〉178枚、デジタル写真553枚 現地説明会来場者数：800人	
【備考】 ①森川 実「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第182次）」『奈文研ニュース』No.55 2015.12 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第182次調査）記者発表資料」26.11.06 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第182次調査）現地説明会資料」26.11.08 ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第182次調査）」『奈良文化財研究所紀要2015』2015.6 予定	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-4

自己点検評価調査

研No.16

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：古代都城における大極殿院の成立過程を解明するために必要な場所を選定して実施したものである。当研究所で行っている平城宮大極殿院の復元研究にも貴重な情報をもたらすと考えられる。 独創性：藤原宮中枢部において、古墳時代から平安時代までの遺構変遷を明らかにし、宮造営に関わる新たな遺構の事例を加えた。 発展性：藤原宮中枢部の空間利用、造営過程の実態解明に関する成果を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。 効率性：従前の調査成果などから事前に十分な準備を行うとともに、最新の調査手法を取り入れ効果的、効率的な調査を実施した。 継続性：藤原宮の様相解明のための長期的な継続調査の一環として、今年度より大極殿院の継続的な発掘調査に着手し、今後の継続調査に資する基礎的データを得た。 正確性：出土遺物・遺構を、その地域性や年代観の特徴・特性を踏まえ、正確かつ的確に記録を作成するとともに、その公表を行った。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評価	B					
判定理由 発表件数：当初予定の4件を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の計画通りに実施されており、適切な調査成果をあげることにより目標を順調に達成した。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査（東方官衙北地区）（(1)－⑥－ア）
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、官衙地区については研究所発足当初から、発掘調査を計画的に実施している。	
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 西山和宏（都城発掘調査部主任研究員）、森先一貴（考古第三研究室研究員）、諫早直人（考古第一研究室研究員）、金宇大（考古第二研究室アソシエイトフェロー）、栗山雅夫（写真室技術職員）、飯田ゆりあ（写真室アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 ・藤原宮東方官衙北地区の発掘調査（飛鳥藤原第183次）を実施した。 ・調査の結果、藤原宮の官衙地区で初の事例となる礎石建物や、床束をもつ大型掘立柱建物など、格式高い建物を検出し、官衙地区の建物配置に重要な新知見を得た。また、条坊道路や建物・塀など、藤原宮造営直前から造営期の遺構も多数確認し、この時期の複雑な遺構変遷を明らかにした。古墳時代を含む、さらに古い時期の遺構の存在も把握した。 ・藤原宮の構造や成立過程の解明に寄与する多数の成果があがった。	
【年度実績概要】 調査地：藤原宮東方官衙北地区の南西部。24年度の第175次調査区の南西側。 目的：第175次調査で一部を検出していた礎石建物の全容解明と周辺施設の確認。 調査期間：26年10月1日～12月25日 調査面積：973㎡ 調査成果：藤原宮期の遺構 ①藤原宮官衙地区で初事例となる桁行4間×梁行3間の東西棟総柱礎石建物を検出。大型の倉庫か楼閣とみられ、官衙地区の構造解明に重要な手がかりとなる。礎石抜取穴より飛鳥時代の佐波理琬が出土。 ②調査区西端にて、桁行5間以上×梁行2間の、床束をもつ大型の掘立柱建物を全面的に検出。内裏東官衙地区の官衙C区画塀より古いことから、藤原宮期前半に存在したものである可能性が高い。 7世紀後葉～藤原宮造営期の遺構 ③藤原宮造営に先立って施行された先行東一坊大路両側溝とそれに伴う塀を検出。また先行東一坊大路に重複して、その直前に設けられた道路両側溝も検出した。藤原宮の成立過程を知る重要な知見である。 ④藤原宮造営期では掘立柱建物と塀を検出。 今回の調査成果をもとに藤原宮官衙地区の構造解明と変遷観に新しい知見を追加し、その成果を反映した内容を現地見学会等にて公表した。	
【実績値】 発表件数：5件（論文等3件①・④・⑤、報道発表1件②、現地見学会1件③） (参考値) 出土遺物：軒瓦6点、丸平瓦コンテナ7箱、土器コンテナ20箱、金属製品（佐波理琬）1点、石器・石製品5点、木製品11点、木炭8点、馬歯1点 記録作成数：遺構実測図43枚、写真〈4×5〉78枚、デジタル写真305枚 現地見学会来場者数：622人	
【備考】 ①森先一貴「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次）」『奈文研ニュース』No.56 27年3月 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）記者発表資料」26年12月11日 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）現地見学会資料」26年12月14日 ④森先一貴ほか3名「藤原宮東方官衙北地区の調査（飛鳥藤原第183次調査）」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定 ⑤諫早直人ほか1名「藤原宮・京出土の銅琬」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定	



第183次調査区全景（南東から）

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-5

自己点検評価調査

研No.17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	A	B	B
判定理由 適時性：発掘調査は、現在必要な課題を解明するために調査地を選定して実施したものである。今回の調査地は、一昨年に一部分を検出していた建物周囲の全容解明を目指したもので、調査の適時性は高い。 独創性：日本初の本格的都城である藤原宮の官衙地区の特殊性を解明しようとする独創的な試みであり、調査結果はその予想を上回る成果を得た。 発展性：藤原宮官衙地区の構造解明と、藤原宮の成立過程の実態解明に関する想定以上の新知見を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。 効率性：必要最低限の時間的・人的・設備的投資によって、当初計画していた範囲について調査できた。隣接地における調査成果をもとに綿密な調査計画を組むことで、予定よりも短期間で遂行することができた。 継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための長期継続的な計画調査であり、長年の調査実績を基礎とした質の高い調査を実施した。 正確性：発掘調査の結果は最新の測量機器や写真機材を用いて現地で高い精度で全て記録した。また出土遺物についても発掘調査と並行して分析を進め、結果を発掘調査に反映しつつ遺跡の理解を正確に行った。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評価	A					
判定理由 発表件数：論文等、報道発表、現地説明会で、当初の目標4件を上回る5件の発表を実施した。予想以上の調査成果を得たことから、それぞれの発表の内容についても今後の藤原宮の構造を考える上で貢献が大きいものとなった。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、調査の実施、記録、公開、発表等を適切かつ効率的に行い、発掘調査成果も当初の予想を上回る重要性をもつものといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の計画通りに実施されたものである。しかし、調査の結果得られた研究成果は、藤原宮の官衙地区で検出例のない礎石建物の全貌を明らかにするとともに、藤原宮造営期及びそれ以前の土地利用の状況を明らかにするなど、官衙地区の構造解明、藤原宮造営期の実態解明について予想を上回る内容であった。発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うという当該事業、および26年度で4年目となり、27年度で最終年度を迎える中期計画の中において、貴重な成果と位置づけられる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥地域発掘調査（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。その実態解明に向け調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 山本崇(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、前川歩(遺構研究室研究員)、清野陽一(考古第三研究室研究員)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、井上直夫(写真室再雇用職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 掘立柱建物5棟、掘立柱塀1基、土坑3基、溝状土坑1基などを検出した。檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという従前の調査成果を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかになった。			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は昨年度の調査区の南方にあたる、丘陵の南東裾部分について調査を実施した。 ・調査地：25年度調査（第180次調査）区の南方に位置する。 ・調査期間：27年2月2日～3月27日 ・調査面積：377 m ² ・調査成果：古代と推定される掘立柱建物2棟、掘立柱塀1基を検出した。中世と推定される掘立柱建物3基を検出した。その他、土坑3基、溝状土坑1基を検出した。古代と推定される建物は檜隈寺伽藍の造営方位の振れにおおむね一致する。檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという25年度の第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかとなった。 ・出土遺物：瓦、土器、金属製品等			
			
調査区中段部遺構検出状況(北西から)			
【実績値】 (参考値) 出土遺物 軒瓦5点、丸平瓦12箱、土器4箱、鉄器2点 記録作成数 遺構実測図33枚、写真(4×5)24枚、デジタル写真122枚、デジタルメモ写真349枚			
【備考】 ①前川歩「檜隈寺周辺の調査-飛鳥藤原第184次」『奈良文化財研究所紀要2015』2015.6 予定 ②前川歩「檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第184次）」『奈文研ニュース』No.56 2015.3			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-6

自己点検評価調査

研No.18

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判断理由 適時性：檜隈寺跡の伽藍南方の状況を明らかにし、飛鳥地域における調査研究データを蓄積するとともに、檜隈寺跡の適切な保存・活用を行うための歴史公園整備事業に適切に対応した。 独創性：我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な檜隈寺跡において、史跡指定地である中心伽藍の南方への遺構の広がり、土地利用の様子を明らかにした。 発展性：今回の調査により、遺構がさらに南方へ広がることを確認し、今後の調査研究に向けて新たな見通しを得た。 効率性：これまでの調査成果を踏まえ、事前に十分な準備を行い、効率的に調査成果を得ることができた。 継続性：檜隈寺跡における調査研究の継続により、遺跡全容の解明に資するデータを加えた。 正確性：出土遺物・遺構の地域性や年代観の特徴を踏まえ、正確かつ的確に記録するとともに、檜隈寺跡の今回の調査の位置づけをおこなった。						

2. 定量的評価

観点	論文数					
評価	B					
判断理由 論文等数：目標通り、紀要等で調査成果を2件公表することができた。						

3. 総合的評価

評価	判断の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	25年度の調査（第180次調査）において古代から中世と推定される建物、塀が発見されており、今回の調査ではそれらの建物、塀の広がりを確認し、古代から中世にかけての檜隈寺の実態を知る手がかりを得ることを目的とした。調査の結果、第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに伽藍南方へ展開することが明らかとなり、今後の研究に有益な資料を得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判断の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、26年度当初の予定通り実施し、檜隈寺伽藍南方の実態を知る手がかりを得ることができ、檜隈寺およびその周辺の全体像解明に向けての目的を順調に達成した。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、飛鳥地域における調査研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等((1)ー⑥ーイ)		
【事業概要】 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、整理が終了したものより順次公表を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 渡邊晃宏、尾野善裕、箱崎和久、神野 恵、馬場 基、今井晃樹、青木 敬、芝康次郎、庄田慎矢、小田裕樹、石田由紀子、川畑 純、山本祥隆、番 光、海野 聡、松下迪生(以上、都城発掘調査部)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)、高妻洋成、脇谷草一郎、田村朋美、金田明大(以上、埋蔵文化財センター)			
【主な成果】 (1)本年度の発掘調査出土遺物・検出遺構について、整理・分析及び研究、図面作成・写真撮影等の基礎作業を行った。 (2)昨年度以前の出土遺物・検出遺構に関する継続的な整理・分析研究・調査を行った。 研究を進展させ報告書作成に備えるとともに、出土文化財の保全に万全を期した。また、出土遺物の科学的分析・保存処理を行った。 (3)出版物等により、調査成果の公表を行った。			
【年度実績概要】 (1)26年度の発掘調査による検出遺構・出土遺物の整理と研究 ・木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡等の整理・分析及び研究、検出遺構の図面トレース及び遺構の分析・解釈、撮影写真の整理を実施した。 ・受託事業として行った平城京内の発掘調査についても、出土遺物や検出遺構の整理・分析研究といった基礎作業の大半は本事業で行っている。 (2)過年度発掘調査出土遺物の整理と科学的保存処理 ・過去の調査出土遺物の洗浄・整理・分析研究等の作業を継続的に実施した。 ・過去の調査出土木製品及び木簡、金属製品の保存処理を継続して実施し、適宜遺物の材質等の分析を行った。 ・旧大乘院庭園及び平城宮東区朝堂院の学報作成に向けて、遺物・遺構の整理・分析・研究・執筆作業を行った。 (3)調査・研究成果の公表 ・平城第530次調査で2回の記者発表を実施した。また、今年度の発掘調査の概報を作成した。 ・7世紀の須恵器を焼成した窯跡の遺構、遺物をあらためて整理、研究し正式報告書『奈良山発掘調査報告Ⅱ一歌姫西須恵器窯の調査一』奈良文化財研究所2014(①)年を刊行した。 ・特別展『地下の正倉院展』(26年10月18日～11月30日・於：平城宮跡資料館)を開催し、図録(②)を刊行するとともに、1回の記者発表を実施した。			
		出土遺物(種子)の調査風景	
【実績値】 報告書等数：3件(①～③)			
【備考】 ①奈良文化財研究所学報第93冊『奈良山発掘調査報告Ⅱ一歌姫西須恵器窯の調査一』26年10月 ②『地下の正倉院展 木簡を科学する』26年10月 ③『奈良文化財研究紀要2015』27年6月予定			



出土遺物(種子)の調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4162-1

自己点検評価調査

研No.19

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本年度調査での検出遺構・出土遺物の資料的価値を明らかにし、随時発掘調査現場にフィードバックした。また、発掘調査現場の記者発表等の機会を利用して迅速に情報公開を行い、文化財に関する普及啓発を促進した。 独創性：自然科学分野との連携により、多様な分析を試みるとともに、文化財保全に万全を期した。 発展性：新たに検出した遺構や遺物の分析・研究を通して、都城研究をさらに推進するとともに、今後の調査、研究に資する新知見を得、明らかにすべき課題を明確にすることができた。 効率性：データベース化の促進等を積極的に行い、整理・管理作業を中心にその効率化を促進した。 継続性：従来の平城宮・京跡及び寺院跡の発掘調査で得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究成果を踏まえて、本年度の研究に活用し、かつ新たな課題・視点の発見につなげた。 正確性：出土資料を的確に資料化し、これまでの成果に新たな知見を得て、歴史的事実を正確に把握した。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数					
評価	B					
判定理由 報告書等数：目標値3件を達成した						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 継続的な学術調査を、正確に、かつ多様な手法を用いて実施することができた。 - 図書の刊行・記者発表などを通じて、調査成果を積極的に公開することができた。 - 本年度の平城宮・京跡及び寺院跡で出土した膨大な考古資料・文字資料を継続的に整理・分析し、その概要を刊行するとともに、従来の調査資料を再度検討し、展覧会や正式な報告書の形でその成果を公表することができた。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に資する、検出遺構・出土遺物に関する総合的・多角的な調査・研究を実施した。 - 整理が終了した調査成果を、迅速に公表した。調査成果の正確な公表に向けた基礎的作業を積み重ねた。 以上より、Bと判定する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等((1)－⑥－イ)		
【事業概要】 本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、森川 実、廣瀬 覚、降幡順子、山本 崇(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、大澤正吾、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、大林 潤、前川歩(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、森先一貴、清野陽一(考古第三研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、飯田ゆりあ(写真室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 ・本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。 ・前年度までの発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類、木簡などの再調査・再整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の再整理・再検討作業を実施し、成果の一部を公表した。			
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦埴類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2015』等で論文として公表する予定。 ・前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。 この他、坂田寺出土建築部材の整理及び写真撮影、高所寺池出土建築部材の保存処理、藤原宮西方地区出土木簡の整理、藤原宮・京出土銅鉤の整理、藤原宮出土瓦の胎土分析、飛鳥寺出土の文字瓦の調査を実施し、その成果の一部を『奈良文化財研究所紀要 2015』等で論文として公表する。また、藤原宮出土瓦の胎土分析の成果の一部を文化財科学会で公表した。			
【実績値】 発表件数 4 件(論文 3 件②③④、研究発表 1 件①)			
【備考】 ①降幡順子ほか 2 名「藤原宮・京跡出土瓦の胎土分析」日本文化財科学会第 31 回大会 26 年 7 月 6 日 ②森先一貴ほか 1 名「藤原宮・京出土瓦の胎土分析(2)」『奈良文化財研究所研紀要 2015』27 年 6 月予定 ③諫早直人ほか 1 名「藤原宮・京出土の銅鉤」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定 ④清野孝之ほか 2 名「飛鳥寺出土文字瓦の再調査」『奈良文化財研究所紀要 2015』27 年 6 月予定			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4162-2

自己点検評価調査

研No.20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：新出土資料を迅速に公開し活用に供した。過去の出土した資料も今日的な観点から再整理、再分析した。 独創性：我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった飛鳥・藤原地域において、古代国家の具体像を復元すべく再調査、再検討を行った。 発展性：蓄積された歴史資料を今後の調査研究に活かすため、資料化を行った。 効率性：新出及び蓄積された歴史資料の調査・再検討を計画的に遅滞なく行い、公表するために必要な整理・分析等を効率的に行った。 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究と保存処理を継続的に実施した。 正確性：新出資料や蓄積された資料について、その地域的特性や年代観等の特性を十分に踏まえ、正確な資料的性格と価値を把握し、公表した。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評価	B					
判定理由 発表件数：過去の調査研究の資料を整理研究し、4件の論文等を公表することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、調査成果の公開も適切に行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、計画的に実施することができた。また、成果の公開も予定通りに行った。中期計画の4年目に当たる26年度の作業の実績及び研究成果の公表により、最終年度となる27年度に向け適切な研究の蓄積を加えることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究（(1)－⑥－ウ）		
【事業概要】 飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、金属工芸関連遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の調査として、山田寺跡出土部材の研究を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】 西田紀子(学芸室研究員)、丹羽崇史(学芸室研究員)、杉山 洋(企画調整部長)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）			
【主な成果】 (1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を継続した。 (2)飛鳥寺塔心礎出土品を含む飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理を継続した。 (3)川原寺裏山出土塑像の再整理を実施した。 (4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の非破壊分析を実施した。 (5)過去に実施した和鏡に関する蛍光X線分析のデータを整理した。 (6)山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。			
【年度実績概要】 (1)壁画のうち特にキトラ古墳天文図、高松塚古墳星宿図に関する調査研究を重点的に行い、関連資料を収集した。どのような系統の天文図か、日本独自・朝鮮半島・中国北方系・中国南方系のいずれの可能性も視野に入れて検討を行った。またキトラ古墳天文図を分析した天文学の研究者と意見交換をし、天文学の手法で星の観測年代を推定できる可能性があることなどの所見を得た。系統、製作年代、観測緯度などいずれの要素も確定には至っていないので、次年度も継続する予定である。 (2)飛鳥寺塔心礎埋納品のうち常設展示している金属製品を中心にリストと実測図を作成した。またガラス玉の蛍光X線分析、甲冑のX線CT画像撮影も一部実施した。これらの作業は次年度も継続する予定である。 (3)当館に収蔵されている川原寺裏山出土塑像の点数を確認し、台帳用の写真撮影を行った。詳細データを収集する作業が残っており、次年度も継続する予定である。 (4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像について蛍光X線分析とX線CT画像撮影を行い、成分及び内部構造について知見を得た。成果は論考にまとめる予定。 (5)過去に本研究で実施した和鏡に関する蛍光X線分析のデータを整理し、研究図録を作成した。 (6)重要文化財山田寺跡出土品のうち建築部材について計測調査を継続し、データを収集した。これらは中長期的な変化を知るための基礎データとなるものである。			
			
飛鳥寺塔心礎埋納品の一部			
【実績値】 研究図録数 1 件（①） 山田寺部材計測データ 1 年分（2 時間ごと 1 回、年間 4,380 回計測）			
【備考】 研究図録 ①飛鳥資料館研究図録第 18 冊『鏡に関する研究雑感』2015.2（予定）			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4163

自己点検評価調査

研No.21

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理(2)は脆弱な遺物の劣化が懸念される状況のなかで喫緊の課題である。また、(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の調査は一時預かりの貴重な機会を逃さずに実施したものである。 独創性：(1)のキトラ古墳・高松塚古墳の天文図・星宿図について、天文学分野の知見も踏まえて天文暦法の観点から調査した研究はほとんどない。また、(4)金銅観音菩薩立像の分析と(5)和鏡の調査はこれまで行われていない調査の貴重なデータである。 発展性：飛鳥寺跡の出土品は全点の図面・写真が作成されれば画期的な基礎資料となることが期待できる。山田寺跡出土の建築部材の計測は、保存処理して再組み立てを実施した有機質遺物の経年変化を知る上で重要な知見を得られると見込まれる。 効率性：実物資料を収蔵している飛鳥資料館が中心となって、他部門の研究員の協力を得ることで、多様な調査研究を滞りなく遂行することができた。 継続性：(1)については、これまでの絵画史や天文学に関する知見を収集し、これまで当館で作成してきた両古墳壁画に関する図録の論考などを参考にしつつ、東アジア的規模での調査研究をすすめた。(5)については、過去に調査研究を行った研究員がすでに他部局へ異動しているが、その協力を得て過去のデータを取りまとめる作業を行った。 正確性：蛍光X線分析、X線CT画像撮影では当研究所の保存科学分野の研究員にも協力を得て、正確な機械操作と、キャリブレーションされた機器で測定するなどによって正確性を確保した。						

2. 定量的評価

観点	研究図録数	山田寺部材計測データ				
評価	B	B				
判定理由 研究図録数：目標値（年1冊以上）を達成できた。 山田寺部材計測データ：目標値（1年分）を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	歴史的に重要な飛鳥の地にあり、発掘調査で見つかった貴重な実物資料を多数収蔵しているという、飛鳥資料館の特性を最大限に生かして活動している。飛鳥時代の山田寺跡出土建築部材の研究もまた、当館ならではのものである。 様々な課題について、複数年にわたり地道な調査研究作業を継続していることは評価に値する。次年度以降はさらに正確性と継続性に留意しつつ、当館の特性を生かした調査研究を続け、その成果を研究図録や展示といった形で還元していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各種のデータを着実に収集している。研究図録の刊行も順調である。保存科学的分析などともリンクした研究を行っており、その成果は展示にも活かせるものといえる。 次年度以降も当研究所の体制を生かした総合的な研究を行っていくことが期待できる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力((1)－⑥－エ)
【事業概要】 (1) 中国社会科学院との共同発掘調査成果の整理と次期共同研究への準備を行う。 (2) 遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡・遺物の調査と調査研究報告書を公刊する。 (3) 鞏義市黄冶唐三彩窯跡等出土品の共同研究を実施し、成果を公刊する。 (4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野健吉
【スタッフ】 (1) 玉田芳英・今井晃樹(以上、都城発掘調査部)、栗山雅夫(企画調整部) (2) 小野健吉・清野孝之・川畑 純・森先一貴・廣瀬 覚・諫早直人(以上、都城発掘調査部)、小池伸彦(埋蔵文化財センター)、栗山雅夫(企画調整部)、他4名(呉炎亮・李霞・肖俊涛・高振海) (3) 玉田芳英・尾野善裕・森川 実・降幡順子他6名、難波洋三(埋蔵文化財センター)、丹羽崇史(企画調整部)他5名(賈連敏・楊振威・梁兆奎・曹艳朋・朱树政) (4) 玉田芳英・清野孝之・青木 敬・諫早直人・廣瀬 覚(以上、都城発掘調査部)、他24名(金東烈他)	
【主な成果】 (1) 中国社会科学院との共同調査・研究及び成果発表を行った。 (2) 金嶺寺遺跡出土瓦の調査研究、大板宮子遺跡出土金属器の調査研究を行った。 (3) 唐三彩関連資料を調査等を行った。 (4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。	
【年度実績概要】 (1) 中国社会科学院との共同調査・研究及び成果発表を行った。 ・8月に1名が鄴城国際シンポジウムで平城京の学術報告(①④)。 ・12月に2名派遣し、北魏洛陽城及び鄴城出土遺物(北魏洛陽城出土瓦磚の比較資料として)の調査を実施。 (2) 金嶺寺遺跡出土瓦の調査研究、大板宮子遺跡出土金属器の調査研究(②)。 ・金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法を明らかにした。大板宮子遺跡出土鉄矛の年代と性格を明らかにした。 ・12月に遼寧省文物考古研究所の研究員4名を招聘。 (3) 唐三彩関連資料の調査等を行った。 ・8月に4名を派遣し、河南省鄭州市・浙江省揚州市にて唐三彩関連資料を調査。調書作成・写真撮影を実施。 ・11月に5名を河南省から招聘。 (4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施。 ・共同研究にかかる研究者派遣8名・受入れ1名。発掘調査交流にかかる研究者派遣1名・受入れ1名。 ・『奈文研ニュース』No.55にて発掘調査交流の内容を公表(③)	
 新羅王京遺跡の発掘調査風景	
【実績値】 口頭発表等数：1件(④) 論文等数：3件(①～③)	
(参考値) (1) 実測図：10枚、デジタル写真：80枚。 (2) デジタル写真：539枚。 (3) 調書：32枚、デジタル写真：32枚。	
【備考】 ① 今井晃樹「平城京の造営規格」(『東亜古代都城及び業城考古歴史国際学術検討会』26年8月) ② 小池伸彦「中国遼寧省文物考古研究所との共同研究」(『奈良文化財研究所概要2014』26年9月)。 ③ 廣瀬 覚「日韓発掘交流に参加して」(『奈文研ニュース No.55』26年12月)。 ④ 今井晃樹「平城京の造営規格」(『鄴城国際シンポジウム』26年8月)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4164

自己点検評価調査

研No.22

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際シンポジウムにおける発表や、刊行物における成果公表等、適切かつ速やかな公表を行った。 独創性：各事業において、奈文研が蓄積してきた精緻な視点で各種遺物の調査研究を行うノウハウを、中国・韓国出土遺物の調査にも応用することで、一定の成果を挙げている。 発展性：いずれの事業でも製作技術や年代観等を中心とした遺物の調査研究が進んだ。加えて海外研究者との意見交換も一層進んだことにより、正式な成果報告を公刊するための各種知見の蓄積も順調に進んでいる。 効率性：限られた時間を有効に活用して、効果的な資料調査と意見交換が全ての事業で推進された。 継続性：全ての事業で、今後の正式な成果報告刊行へ向けて、実測図や写真データ等を中心に資料の充実が図られた。 正確性：対象資料を比較検討するためにより対象地域を広げて資料を収集し、データ化することで、一層網羅的に収集した資料を比較検討できる基礎固めが進んだ。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表等数	論文等数				
評価	B	B				
判定理由 口頭発表等数：目標値1件を達成した。 論文等数：目標値3件を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・中国・韓国双方の研究機関との連携の継続により、計画通りの資料収集を行い、多大な成果を挙げた。 ・国際シンポジウムにでの発表や適宜調査成果の公表により、研究成果を速やかに公表した。 ・人的交流の促進により、多くの研究成果を共有し、また今後の共同研究の基礎を拡充した。 以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められるため、Bと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	(1)～(4)のいずれの研究も計画通り実施・進捗し、成果を挙げて、中期計画の所期の目標を達成している。以上から、Bと判定した。 なお、中国・韓国双方の研究機関と共同研究が継続的に行われることが、研究成果の共有・研究水準の向上に資するものとなっており、さらに今後の研究の発展にも繋がると考えられる。次年度以降も継続的に本事業を進めていく計画である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究（(1)－⑦）		
【事業概要】 文化的景観及びその保護に関する基礎的・応用的な調査研究を推進し、諸外国との比較のもとに、我が国の文化的景観保護に関する情報の収集・検討等を行う。また、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行うとともに、これまでの成果を踏まえつつ、文化的景観の学術及び保護に資する検討会を主催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に取り組む。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	景観研究室長 平澤 毅
【スタッフ】 恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)、広田純一(岩手大学教授・客員研究員) 小浦久子(大阪大学准教授・客員研究員)			
【主な成果】 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、“「文化的景観学」検討会”を開催して、文化的景観に関する体系化に関する検討を進めたほか、文化的景観の現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。また、昨年度の研究集会報告書及び『World Heritage Papers 26』日本語版を刊行した。			
【年度実績概要】			
(1)基礎的・体系的研究			
「文化的景観学」検討会を、26年4月20日、5月31日、6月30日、8月8日、11月18日、27年1月21日、2月28日に開催し、文化的景観学の体系化に向けて検討を進めた。このうち、26年5月31日には、検討会メンバー12名に合わせ、行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者など32名と公開ワークショップを開催した。 - 昨年度、遺跡整備研究室と合同で開催した研究集会の成果報告書（備考①）を刊行した。 - 文化的景観の国際情勢等に関する検討を踏まえ、UNESCOとの契約に基づき、World Heritage Papers 26『World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management』の日本語版『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』（備考②）を刊行した。 27年度刊行を計画している文化的景観資料集成第2集・第3集の執筆・編集等を進めた。			
「文化的景観学」検討会公開ワークショップ（26年5月31日）			
(2)文化的景観保護に関する現地調査・研究			
- 諸外国との比較研究のため、バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム（インドネシア、cultural landscapeとして、2012年に世界文化遺産登録）等に関する現地調査を8月25～30日に行い。東南アジアの農業景観に関する知見を得た。（※奈文研紀要2015で報告予定） - 宇治市、四万十市、阿蘇市等をフィールドに、それぞれの地方公共団体担当部局への協力を通じて、文化的景観の価値評価及び整備計画に関する検討を行った。 - 重要文化的景観等に関する最新の情報を収集・整理し、関連情報とのリンクを付してウェブサイト上に公開した。 - 全国の文化的景観に関する協議等により、文化的景観の価値評価及び保護のあり方について検討を進めた。			
【実績値】			
刊行図書数：2冊①② 論文等数：15件（講演・発表等8件③、論文等7件④）			
【備考】			
刊行図書			
①奈良文化財研究所『計画の意義と方法 ～計画は何のために策定し、どのように実施するのか～ 平成25年度遺跡整備・景観合同研究集会報告書』26.12			
②奈良文化財研究所『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』（World Heritage Papers 26の日本語版）2015.3			
論文等			
③平澤毅「文化財庭園の保護と景観」文化財庭園の保護継承シンポジウム、26.6 ほか7件			
④恵谷浩子「生産と製造が結びついた農業景観の保護手法一日仏の比較」奈良文化財研究所紀要、26.6 ほか6件			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4171

自己点検評価調査

研No.23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化的景観の概念及び調査・計画等を体系化することを目指した「文化的景観学」の取組は、文化的景観の保護に関わる多くの行政担当者、NPO、コンサルタント、研究者の関心を集め、公開ワークショップによって、昨年度の検討会の成果について更に深化することができ、時宜を得た検討に関する大きな期待が寄せられた。 独創性：文化的景観の保護における複雑な課題に対して、これまで学術分野としての「文化的景観学」に関する体系的検討は行われておらず、また、そうしたことを主題としたワークショップの開催は初めてのものであった。 発展性：検討会での検討の他、国内外の事例に関する調査研究を踏まえつつ、文化的景観の概念適用と実践体系に関する検討を深化していくことは、地域社会の持続可能性にも大きく貢献できるものであり、『世界遺産の文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』の日本語版制作は、特に日本国内の文化的景観保護の取組にも大きな参考となる。 効率性：数多くの分野との協働が欠かせない文化的景観に関する検討において、24年度から構成した検討会に様々な専門と立場のメンバーを招聘して多角的な情報を共有し、また、公開ワークショップを開催することで、文化的景観に関する検討を効率的に行うことができた。 継続性：過年度において5回にわたって開催してきた文化的景観研究集会の成果を踏まえつつ、24年度からは行政・研究の専門家9名を招聘して実施している「文化的景観学」検討会の取組は、文化的景観の保護に関する体系化に関する検討を深め、その成果の客観性を高める上で極めて重要な経過を辿っている。 正確性：文化庁及び各地方公共団体との連携・協力の下に、国内の文化的景観に関わる情報の把握・収集及び現地調査において、詳細かつ正確な把握・検討・公開等を行ったとともに、海外の文化的景観についても現地調査、最新議論及び各国の専門家からの直接情報に基づき詳細かつ正確な把握を行った。						

2. 定量的評価

観点	刊行図書数	論文等数				
評価	B	B				
判定理由 刊行図書数：計画通り2冊の報告書等を刊行した。 論文等数：広く文化的景観の諸課題の検討に応じ、大小の講演会等のほか、多様な刊行物への論文等の公表により、目標件数を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	1：文化的景観に関する研究集会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、2：宇治市、四万十川流域阿蘇地域などを対象とした現地での調査研究、3：文化的景観に関する重要な海外事例の調査及び海外文献の翻訳、4：報告書の刊行や学会・学術雑誌等での研究成果発表等、年度当初の計画を的確に遂行することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化的景観に関する検討会の開催や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行することができた。特に、検討会では文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化に関する検討を深め、また、現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができた。特に文化的景観においては、多様な分野及び立場との緊密な協働を実現していくことが重要との観点から、文化財以外の行政分野も含め、恒常的な情報共有と検討の場を継続的に経営していく必要がある。 その基礎的取組のひとつとして、第3期中期計画の最終年度である27年度には、「文化的景観学」検討会を中心に、個別の課題に対する検討も重ね、文化的景観に関する学術上及び保護行政上の検討を反映した一定の知見を取りまとめ公表することが極めて重要である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開 ((1)－⑧－ア)
【事業概要】 官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査で抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行い、一般公開する。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
【スタッフ】 山中敏史（元文化遺産部長、客員研究員）、小澤 毅（三重大学人文学部教授、客員研究員）、森本 晋（企画調整部国際遺跡研究室長）、馬場 基、青木 敬（以上、都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、大澤正吾（以上、都城発掘調査部研究員）、海野 聡（文化遺産部研究員）	
【主な成果】 官衙関係遺跡・集落・宮都等の建物データについて全国的に網羅して作成した資料集成をもとに、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行した。また、官衙・寺院関係遺跡及び井戸遺構に関するデータベースを作成し、官衙・寺院データベースの北陸地方から関東地方の一部までについて新たに公開した。	
【年度実績概要】 24年度に全国的に収集・整理した長舎遺構の資料を追加・補足・修正し、『長舎と官衙の建物配置』資料編・報告編（奈良文化財研究所研究報告第14冊、①）として編集・刊行した。 - 今年度開催した第18回古代官衙・集落研究会「宮都・官衙と土器」（官衙・集落と土器1）の研究報告資料を作成した（②）。 - 神奈川県・新潟県・富山県・石川県・福井県について報告書のめくり作業を行い、国府・官衙・城柵やその他の官衙関係遺跡等の資料を追加収集・整理した。また、25年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業を行った。 - 新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 - 前年度に資料を収集しデータ化した全国の長舎遺構の中から、特に桁行9間・梁行2間あるいは3間の建物についてデータを抽出して属性分析を進め、その性格等を検討した。 - 神奈川県・新潟県・富山県・石川県・福井県の古代井戸遺構に関する資料を収集・整理し、それらをデータベース化した。	
【実績値】 データベース入力・補訂件数：計8,510件 官衙関係遺跡データベース：遺跡数375件、文献データ1,785件、建物データ486件、画像データ763件 古代寺院遺跡データベース：遺跡数131件、文献データ1,184件、建物データ336件、画像データ812件 古代井戸データベース：遺跡数349件、文献データ492件、井戸データ1,792件 公開データ数：計84,346件 官衙関係遺跡：遺跡数1,727件、文献データ17,216件、建物データ20,235件、画像データ20,669件 古代寺院遺跡：遺跡数1,430件、文献データ15,645件、建物データ3,312件、画像データ4,112件 報告書件数：1件（①） （参考値） 研究会当日資料集：1件（②）	
【備考】 ①小田裕樹ほか編『長舎と官衙の建物配置』資料編・報告編、奈良文化財研究所研究報告第14冊、26.12. ②小田裕樹ほか編『宮都・官衙と土器』第18回古代官衙・集落研究会当日資料、26.12.	



古代井戸データベース入力画面

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4181

自己点検評価調査

研No.24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：従来から需要の多い古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡データベースを充実させ活用に使するとともに、近年需要の増加している井戸関連遺跡に対応したデータベースを設置し、データ入力している。 独創性：全国を網羅していることに加え、様々な遺跡や遺構の性格分析・研究などに役立つ多彩な項目を設置したデータベースである。 発展性：井戸関連遺跡へも収集範囲を広げてデータベースを拡充している。 効率性：官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・井戸関連遺跡に関する膨大なデータから、様々な項目から必要に応じて素早くデータを抽出することができ、遺跡等の各種分析・研究に対する利便性は極めて高い。 継続性：毎年増加し続ける遺跡データを継続的に収集・入力し公開している。 正確性：新出資料の追加に加え、既存のデータに関しても変更を生じた事項について改訂を行った。						

2. 定量的評価

観点	データ入力・補訂件数	公開データ数	報告書件数			
評価	A	A	B			
判定理由 データ入力・補訂件数：目標の2,500件を大きく上回った。 公開データ数：目標の60,000件を上回った。 報告書件数：計画通り1件を刊行した。						

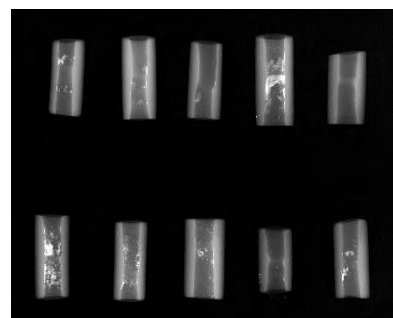
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	データベース入力件数、公開件数とも目標値を上回ったほか、井戸関連遺跡データベースの入力も開始した。また、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行し、さらに研究集会資料集『宮都・官衙と土器』を作成した。以上の理由から、総合的にみてBと判定した。 全国で官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸について調査研究にあたる人々にとって、遺跡や遺構データの抽出・分析等においてさらなる利便性・効率性の向上に寄与すると期待できる。データ量が増すほどに寄与する度合いも増加すると考えられるので、引き続き、古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸に関する新資料等を収集・整理し、これらデータベースの一層の充実を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	官衙関連遺跡・古代寺院については、新資料の収集・整理、既存データの補訂などで着実にデータの蓄積を進め、それらを順次、地域ごとに公開しており、本年度は神奈川県までのデータベース化を達成した。以上のことから、事業を計画通り順調に進めていると判定した。また、年度ごとに異なるテーマに従い、資料集作成や報告書刊行を行っているが、これらについても次年度以降、継続していく所存である。今中期計画期間の最終年度である次年度は、古代官衙・寺院関連では、本年度に入力の済んだ神奈川県までのデータベースを公開するとともに、データ収集・入力の主軸を関東地方に移したい。古代井戸データベースでは500件程度の新データ入力を目標とし、データの蓄積を進める。また、本年度実施した研究集会の研究報告書を次年度に刊行する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査（(1)－⑧－イ）		
【事業概要】 標記プロジェクトに関して、(1) 考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、(2) 高エネルギーX線CT法及びX線CR法の応用研究、(3) 漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化とデータベース作成、(4) 鉄製遺物の埋蔵環境調査、(5) 文化財の収蔵・展示環境についての研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、杉岡奈穂子(埋蔵文化財センターアソシエイトフェロー)、佐藤昌憲(京都工芸繊維大学特任教授・客員研究員)、肥塚隆保(元副所長・客員研究員)			
【主な成果】 (1) 標準試料のラマンスペクトルを集積するとともに、顔料、ガラス、石製品、紙資料のラマンスペクトルを取得した。 (2) 遺跡から出土した大量の玉類のX線CR撮影を実施することにより、材質と内部構造を明らかにした。 (3) 三内丸山遺跡出土の漆製品について、漆使用の有無をFT-IR法により明らかにした。また、赤色塗膜には酸化鉄を主成分とする赤色顔料ヘマタイト(Fe ₂ O ₃)の使用が明らかになった。 (4) 古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室で金属製遺物の暴露試験を開始し、埋蔵環境が金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。 (5) 「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」をテーマとした研究集会を開催した。			
【年度実績概要】 (1) 遺跡から出土した炭化紙資料のレーザーラマン分光分析の有効性を検討するため、炭化程度の異なる紙資料（標準資料）のレーザーラマン分光分析を実施し、炭化程度に応じた紙資料のラマンスペクトルを集積した。また、佐賀県鳥栖市永田1区6号墳出土の特殊な黄色不透明ガラス資料に含まれる黄色不透明粒子について、レーザーラマン分光分析とX線回折分析を併用することで、人工黄色顔料の錫酸鉛が用いられていることを明らかにした。 (2) 奈良県明日香村飛鳥寺塔心礎埋納物として大量に出土したガラス小玉について、X線CR撮影を実施することでガラス材質を明らかにした。また、島根県出雲市西谷3号墓出土碧玉製管玉の拡大CR撮影を実施し、穿孔方法（石針による両面穿孔）について明らかにした。 (3) 三内丸山遺跡出土の漆製品について、漆使用の有無をFT-IR（ATR法）で測定したところ、漆に特徴的なピークが検出された。また、赤色塗膜の色料については、蛍光X線分析の結果、鉄（Fe）が強く検出され、水銀（Hg）は全く検出されなかった。赤色の色料は、酸化鉄を主成分とする赤色顔料ヘマタイト(Fe ₂ O ₃)の使用が推定される。 (4) 模擬石槨を作って周辺の環境測定を行うとともに、石槨内に金属板を設置して、腐食過程をモニタリングした。その結果、石槨内で発生する結露水が腐食の進行を律していることが確認された。 (5) 「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」と題した研究集会を開催し(27年1月23日)、石造文化財の保存の現状と課題について全国の文化財担当者との問題意識を共有し、総合討議を通じて様々な角度から意見交換を行った。			
【実績値】 発表件数：9件（①～③） 論文等数：16件（④～⑤） 研究集会開催件数：1件（⑥）			
【備考】 発表 ①田村朋美・大賀克彦・赤田昌倫・北條芳隆「エジプト・カラニス遺跡出土ガラスの考古科学的研究」日本文化財科学会第30回大会、26.7.6 ②柳田明進・脇谷草一郎・安井洋之・小椋大輔・高妻洋成・鈴木修一「模擬古墳から検討した埋蔵環境下における遺物保存に関する研究（その2）埋葬主体内部の環境が金属製遺物の腐食速度に及ぼす影響」日本文化財科学会第31回大会、26.7.7 ③Tomomi TAMURA, Katsuhiko OGA「Distribution of lead-barium glasses in ancient Japan」Sixth Worldwide Conference of the SEAA in Ulaanbaatar, Mongolia、26.6.9 ほか6件 論文等 ④田村朋美・星野安治「宮城県追戸横穴墓出土トンボ玉の自然科学的研究」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6. ⑤田村朋美・大賀克彦「佐賀県内出土ガラス製玉類の考古科学的研究」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書第39集』2015.3. ほか14件 研究集会 ⑥研究集会「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」（発表件数：7件、参加人数：75名、開催日：2015.1.23）			



碧玉製管玉のCR画像

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4182

自己点検評価調査

研No.25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：出土遺物の材質構造調査に非破壊的な手法が求められているなか、種々の調査機器を応用することで、より多様な遺物の材質構造調査が可能となり、古代の材料や技術に関する新しい知見を得ることができる。また、平城宮跡など、遺物が埋蔵した状態で整備が行われる事例の増加に伴い、埋蔵環境中での遺物の劣化機構の解明が求められている。 独創性：埋蔵環境中における鉄製品の腐食に関する基礎データを収集するため、海底遺跡をフィールドとして現地に暴露試験用の資料を設置するとともに、鉄製遺物の埋蔵環境を室内で再現した腐食実験を行った。また、古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室で金属製遺物の暴露試験を開始した。このような手法を用いた埋蔵環境が金属製遺物の腐食に与える影響についての研究は他に類を見ない。 発展性：出土遺物の材質構造に関するデータを集積することで、近隣諸国だけでなく地中海周辺地域で出土した類例との比較研究も可能となり、ユーラシア大陸の東西を結ぶ古代の交易関係を明らかにすることができた。 効率性：遺跡から大量に出土する玉類などの遺物に対して、同時に多量の材質調査が可能な方法（AR法及びCR法）を適用することで、迅速な調査を実施した。 正確性：蛍光X線分析法とレーザーラマン分光分析法に加え、可視分光分析法や非破壊微小点X線回折分析など、複数の分析法を併用することで、精度の高い材質調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会開催件数			
判定	A	A	B			
判定理由 発表件数：目標件数2件を大きく上回る9件を達成した。 論文等数：目標件数2件を大きく上回る16件を達成した。 研究集会開催件数：目標件数1件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業を当初計画どおり順調に遂行しただけでなく、目標を大きく上回る発表・論文等数を達成することができた。次年度は、出土炭化紙資料などの有機遺物やガラス製遺物の乳濁剤の同定にラマン分光分析の応用範囲を広げていきたい。埋蔵環境調査に関しては、鷹島海底遺跡に設置した暴露試験のデータ回収を継続するとともに、模擬石室に本年度設置した暴露試験についてもデータ回収を始める予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の事業を当初の計画どおり実施でき、更には発表・論文等数で目標を大きく上回ったことから、Bと判定した。今中期計画期間の最終年度である次年度は、出土炭化紙資料などラマン分光分析のさらなる応用範囲の拡大を予定している。埋蔵環境については、模擬石室及び鷹島海底遺跡における環境調査と暴露試験のデータ収集を進め、それぞれの埋蔵環境が遺物の劣化に及ぼす影響について検討を行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集（(1)－⑧－ウ）		
【事業概要】土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材及び空気における熱・水分・溶質移動を推定し、それらが形成する環境を予測する解析技術に関する研究、及び土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)			
【主な成果】 - 土遺構の露出展示保存を実施している平城宮跡遺構展示館を研究対象として、外界気象条件や覆屋内温熱環境、析出物の種類や分布、水質に関する実測調査を行うとともに、土中と覆屋内空気における熱、水分及び酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析を行った。 - 現在、石室保護施設を建設中のガランドヤ古墳では、石室内の環境の変化について調査を行うとともに、換気や熱源の運用方法について検討した。さらに、同じ日田市に所在する穴観音古墳と法恩寺山3号墳の2基の装飾古墳においても、墳丘直上の外界気象条件と石室内温熱環境に関する実測調査を行い、ガランドヤ古墳と併せて封土の状態や墳丘表面の被覆状況が石室内温熱環境に及ぼす影響について検討した。 - 塩の析出による劣化が喫緊の課題となっている大分市元町石仏では、塩析出による劣化の抑制を試みた。あわせて、季節毎に析出している塩の種類と分布、地下水の水質と覆屋内の温熱環境に関する調査を実施し、塩析出の要因について検討した。			
【年度実績概要】 - 平城宮跡遺構展示館では、冬期を中心に磚や石材からの塩析出や、土中からしみ出した水で含水酸化鉄の沈殿が生じ遺構の劣化を引き起こしている。そこで、覆屋内の温熱環境と塩の分布を行い、塩の析出が促進される温熱環境について検討した。また、遺構直近の地下水について水質分析を行い、塩の起源や鉄が遺構面において沈殿し得る環境であるのか検討した。あわせて数値解析から、遺構土壌における塩析出と含水酸化鉄の沈殿を抑制するための環境条件、現状の覆屋の問題点について検討した。 - ガランドヤ古墳は、恒久的な保存施設の建設によって、石室内部の結露性状が大きく変化した。特に建設工事期間中は周辺の環境が急激に変化することから、石室内部の温熱環境を常にモニタリングし、結露の抑制につとめた。また、保存施設完成後の長期的な保存環境の制御方法について検討するため、保存施設の換気を稼働した場合などに石室内温熱環境がどのように変化するのか実測調査を行った。 - 元町石仏では冬期を中心に、塩析出による石仏表面の剥離が生じている。そこで、季節毎の覆屋内温熱環境、析出塩の種類と分布、周辺地下水の溶存成分に関する実測調査を行い、覆屋の仕様と運用方法の問題点について検討した。また、塩類風化に対する有効性を一昨年度に確認している、和紙によるフェイシングを石仏に対して行い、塩類風化の程度について検討した。			
(上) 元町石仏表面の塩、(下) フェイシング			
【実績値】 発表件数：9件（①～③） 論文等数：10件（④・⑤） (参考値) 調査実施回数：23回 平城宮跡遺構展示館（12回）、ガランドヤ古墳（6回）、元町石仏（5回）			
【備考】 発表 ①Soichiro Wakiya, Takeshi Ishizaki, Yohsei Kohdzuma, Shigeo Aoki「Study on Preservation Methods of Imperial Citadel of Thang Long Based on Heat and Moisture Movement in the Remains」2014 ICOMOS-ISCS、26.5.21 ②桑原範好、鈴木修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会近畿支部、26.6.22 ③脇谷草一郎、小椋大輔、高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究—結露の抑制方法に関する検討—」日本文化財科学会第31回大会、26.7.6 ほか6件 論文 ④高妻洋成、脇谷草一郎「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究 2-結露抑制の手法に関する検討-」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6.27 ⑤脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』26.6.22 ほか8件			



(上) 元町石仏表面の塩、(下) フェイシング

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4183

自己点検評価調査

研No.26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：遺跡の公開・活用が推進される現在において、適切な環境下で遺跡の安定性の維持を図りつつ、観覧に供する技術の開発は不可欠のものである。 独創性：本研究では、整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを予め回避するために適切な環境の制御を行うことで、遺構保存を実現することを目的としており、土や石材の強化処置を主とする既往の手法とはコンセプトを異にするものである。 発展性：遺構を取り巻く環境は様々であるが、乾湿の繰り返しや塩類析出などの遺構で生じる劣化は熱、水分、溶質移動によって引き起こされる普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は広く汎用性を有しており、様々な遺構への応用が可能と考える。 効率性：フィールド調査で使用する機材や調査手法は、取り巻く環境を異にする様々な遺構で使用可能なものであることから、設備的投資の効率は高いと考える。 継続性：各調査フィールドにおいて調査の最終的な目標（長期的な目標）、及び各年の短期的な目標を明確に設定し、カウンターパートとなる地方公共団体と目標を共有することとともに、可能な限り受託調査研究として調査旅費などの予算を確保することで継続性を確保している。 正確性：恒常的な高湿度環境など、継続的な環境調査は過酷な条件下で行われることが多いが、それらに対する耐性を備えた測定器具類を選定しており、得られたデータは十分な正確性を有すると考える。また、研究は常に実測調査と数値解析の両輪から成り立っており、数値解析のみの結果で保存方法を検討するのではなく、解析結果と実測調査結果を常に比較することで、解析モデルの妥当性について十分な検討を行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
評価	A	A				
判定理由 発表件数：目標値である2件を大きく上回った。 論文等数：目標値である2件を大きく上回った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各調査フィールドでの調査研究事業を当初の計画通り順調に遂行することができ、その成果発表は目標を大きく上回った。本年度は土中の熱、水分移動に加え、溶存酸素や溶質移動についても解析上の検討対象とした。次年度はこれらの解析解の精度を高めるとともに、溶存酸素濃度は土中に埋蔵されている金属製遺物や木製遺物の腐食に大きく影響を及ぼす因子であることから、埋蔵環境の推定や現地保存法の検討に発展させていく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業を当初の計画通り順調に遂行することができ、成果発表も目標を大きく上回ったことから、Bと判定した。今中期計画期間の最終年度である次年度は土遺構や磨崖仏における実測調査から、析出する塩の種類と周囲の温熱環境についてデータのさらなる蓄積を行う。また、平城宮跡遺構展示館では地下水からの鉄沈殿による遺構の汚損が問題となっていることから、水質の実測調査を継続し、データの蓄積を行う。あわせてこれらの数値解析を実施し、解析モデルの拡充と精度の向上を目指す。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究(2)-①)		
【事業概要】 本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法及びその応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳（副所長（部長・文化財アーカイブズ研究室長兼務））、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、城野誠治（専門職員）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 ・ 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」第7・14巻の光学調査を実施した。 ・ 奈良国立博物館と研究協議会を開催した。 ・ 泉屋博古館分館において黒田清輝作「菊花と西洋婦人」の全図・近赤外線撮影を実施した。 ・ 飯田市美術博物館において菱田春草作「菊慈童」の全図撮影を実施した。 ・ 熊本県立美術館において、永青文庫寄託菱田春草作「落葉」「黒き猫」の全図撮影を実施した。 ・ 永青文庫において洋人奏楽図屏風の撮影を実施した。 ・ 東京国立近代美術館所蔵菱田春草作「早春」の全図撮影を実施した。 ・ 東京国立近代美術館所蔵岸田劉生作「古屋君の肖像」「壺の上に林檎が載っている」全図・近赤外線撮影を実施した。 ・ ボーランド、プロツワフ国立博物館所蔵、秋野蒔絵硯箱の全図・部分撮影を実施した。 ・ 徳川記念財団所蔵蒔絵長持の全図・部分撮影を実施した。 ・ 平等院の依頼を受け、扉絵の修理に伴う撮影を実施した。 ・ この他、修復を行っている日本銀行貴賓室染織品、修復作業状況、国内各地の伝統保存修復技術の記録撮影を行った。 ・ 奈良博との共同研究成果について、報告書内に論考として公表した。 ・ 下記報告書の発刊の他、データは画像処理を行った上で、記憶媒体に記録して保存している。			
【年度実績概要】 ・ 本年度は長期的に継続して実施している宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現記絵」の第7巻及び14巻について、本プロジェクトによるデジタル画像形成とその成果画像の検討も加えた保存修復科学センタープロジェクトによる蛍光 X 線分析とを一連の作業として実施することができた。 ・ 著名な近代絵画作品、種々分野からなる保存修復作品、また保存修復技術の記録や啓発を目的とした画像形成など幅広い調査を実施することができた。 ・ 肉眼では判読不能な大徳寺伝来五百羅漢図の銘文について、マイクロカラー撮影・近赤外線撮影・蛍光撮影により作品へのダメージを与えずに可視化する方法について報告することができた。 ・ 前年度までの調査成果を含め、備考欄に記載のとおり様々な内容（学術書・報告書・展覧会図録等）の刊行物に反映することができた。			
【実績値】 光学調査撮影件数 15件 論文掲載数 1件（備考①） 報告書刊行数 5件（備考②～⑥）			
【備考】 ① 城野誠治「『大徳寺伝来五百羅漢図』銘文の可視画像化について」『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所編 26年5月20日 ② 『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所編、26年5月20日 ③ 『大洋州島嶼国調査報告書』東京文化財研究所、26年8月1日 ④ 『日本国宝展』「普賢菩薩像」・「虚空蔵菩薩像」pp70-74、東京国立博物館、26年10月15日 ⑤ 『洋人奏楽図屏風光学調査報告書』東京文化財研究所、27年2月23日 ⑥ 『泰西王侯騎馬図屏風光学調査報告書』東京文化財研究所、27年3月25日			



平等院での調査風景



平等院での調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4211

自己点検評価調査

研No.27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：所内外の幅広い要望に応じた調査を実施し、また調査後迅速な調査成果の公表に努めてきた。 独創性：本プロジェクトで実施しているデジタル画像形成方法は、長年行ってきた類稀な文化財の調査によって得られた様々な実地経験と画像形成に対する種々の研究から生み出された独自の方法に基づいている。 発展性：過去の調査では対象物が絵画にかなり限定されていたが、現在は時代、地域を問わず様々な文化財を対象として実施し、新たな知見の獲得へと発展してきている。 効率性：担当職員の協力による対応を進め、調査ができるだけ効率的に進められるようにしている。 継続性：単年度的なものばかりではなくかなりの期間にわたって継続的に実施している調査もあり、また本プロジェクト成果が文化財調査の基礎的な存在として認知されるようになってきている。 正確性：成果をできるだけ早急に公表し、それらが共有できるように進めている。						

2. 定量的評価

観点	光学調査撮影件数	論文掲載数	報告書刊行数			
評価	B	B	B			
判定理由 光学調査撮影件数：プロジェクトの当初計画である共同研究を始め、所内外の様々な依頼にも対応して調査を実施した。 論文掲載数： デジタル画像形成にかかる論文を発表し、新たな成果を公開することができた。 報告書刊行数：これまでの調査成果を含め、多数の報告書の刊行により迅速な調査成果が公表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については要望に応じた調査を適宜実施し報告書にて公表することができ、また調査対象も従来実施してきた分野から広く発展させるきっかけを得ることができた。また定量的評価でもまとめた件数の実績を上げることができた。こうした内容から総合的評価をBとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は長期的なプロジェクトに加え、有形文化財・無形文化財など様々な対象について積極的な調査を実施することができた。また公刊図書による成果の公表も十分に行えたことから所期の目標を達成していると評価する。今中期計画期間の最終年度である次年度も引き続きより調査の実施や成果の公表に努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の測量・探査等に関する研究 (2)－②
【事業概要】文化財保護に資する研究を主眼として、発掘調査の際の測量・計測による記録方法の高度化、非破壊的手段である探査による地下遺構の把握、その他遺跡を対象とした各種の研究法の開発と試験、活用方法の検討を行う。	
【担当部課】	埋蔵文化財センター
【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
【スタッフ】金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、西村 康((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長・客員研究員)、西口和彦(元兵庫県立考古博物館調査専門委員・客員研究員)	
【主な成果】 (1) 三次元レーザースキャナーによる文化財計測の精緻化と迅速化を更に進め、応用研究を進めた。 (2) SfM (複数画像から撮影位置と方向を復原する技術) /MVS (前述の複数画像を利用した三次元形状計測データ生成技術) の実用化と精度検証を達成し、実践に移した。 (3) UAV (無人飛行艇) をプラットフォームとした各種遺跡調査システムを試行した。 (4) アレイ式地中レーダー・多チャンネル式電磁探査機・磁気探査機の試験を行い、必要な機器の開発を進めた。 (5) 発掘調査記録の迅速化及び精緻化を目的とした簡便な手法の検討を重ねた。 (6) 窯業生産資料の広域編年と流通に関連する研究を推進した。 (7) 各地方公共団体等の依頼により、計測及び探査を実施した。	
【年度実績概要】 (1) 薬師寺東塔・島内地下式横穴墓などの遺構や平城宮木簡・各地出土窯業資料などの遺物を計測した。取得したデータを三次元プリンター及び CNC (コンピューター数値制御自動旋盤) で出力し、活用可能で廉価なレプリカの作成試験を行い、従来方法と比較した。 (2) SfM 及び MVS 技術を用いて、一般に普及しているデジタルカメラとコンピュータを用いた極めて安価かつ迅速な三次元計測手法を実用化した。加えて、計測データの多様な活用方法について検討した。 (3) 小型 UAV による安価な空中写真計測システムを実用化した。SfM/MVS 技術を用いて高精度遺構計測が可能となった。マルチスペクトルカメラによる植生撮影試験を行い、NDVI (植物の光合成活性を調べるための植生指標) 等の指標による新たな写真判読手法の研究を開始した。 (4) 平城宮跡等でアレイ式地中レーダー機器を試験した。遺跡に柔軟に対応可能な走査方法の検討と器具の製作を行った。3 深度及び導電率と磁化率を同時計測可能な多チャンネル式磁気探査機を導入し、宮殿や窯跡、古墳において試験した。従来の比抵抗探査等とほぼ同等の成果が 1/30 程度の時間で得られた。多プローブの磁気探査機器の同時測定試験では隣接プローブ間のキャリブレーションやドリフトといった課題が浮かび上がった。 (5) 発掘調査記録は、現状では作成に多くの時間が費やされている。『発掘調査のてびき』に示されるような標準化と効率化が時間短縮に有効と考えるが、これらを支援する技術は未だ存在しない。このような技術を検討し、本年度は簡易な方法による遺構断面の土色や遺物の色彩計測を試みた。 (6) 考古学の方法論としての型式論や流通論に資するための基礎研究として、窯業生産資料、特に古代土器生産・流通の研究方法を検討した。識別子による分類や製作技術の検討、情報収集と試行を行った。 (7) 遺構計測では、平城京、東大寺、薬師寺、興福寺、水木古墳、弁天塚古墳 (以上、奈良市)、金沢城 (石川県)、島内地下式横穴墓 (宮崎県) 等で現地作業と解析を実施し、前年度までのデータ解析を進めた。遺物は 100 点以上の計測試験を行った。探査は平城宮・東大寺西塔及び戒壇院・薬師寺東塔 (以上、奈良市)、大萱古窯跡群 (岐阜県)、金沢城 (石川県)、甲立古墳 (広島県)、実相寺古墳群 (大分県) 等で現地作業と解析を進め、東北被災地を含む前年度までのデータ解析と報告作成をした。	
【実績値】 三次元計測件数：140 件 (遺構 20 ヶ所、遺物 120 点) 文化財探査件数：10 件 発表件数：7 件 (①～③) 論文等件数：8 件 (④～⑤) (参考値) 色彩計測試験：20 回以上	
【備考】 発表 ①金田明大「Structure from Motion による遺構計測の試行」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06 ②金田明大「Sfm による近接写真計測の遺跡への応用」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06 ③金田明大「Sfm 各手法による三次元計測の比較」日本文化財科学会第 31 回大会、26.07.05～06 論文等 ④金田明大「Structure from Motion による遺構計測の試行」『日本文化財科学会第 31 回大会研究発表要旨集』26.07 ⑤金田明大「Sfm による近接写真計測の遺跡への応用」『日本文化財科学会第 31 回大会研究発表要旨集』26.07	



薬師寺東塔基壇での探査

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4221

自己点検評価調査

研No.28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：計測・探査は文化財研究及び保護において最も基礎的な分野であり、その必要性も高いため、各方面からの需要が極めて高い。 独創性：機器等を改良して文化財に特化した手法を確立しており、新しい手法として普及を図る段階にまで押し上げた。 発展性：既存の調査・研究の蓄積との連携に配慮しながら、地方公共団体等で簡便に導入可能な方法を開発しており、今後これらの手法が基礎的な記録手段として広範に普及していくと考えられる。 効率性：遺跡・遺物の詳細な記録を従来の数十分の一の時間と労力で行い、なおかつ低コストで実現できる方法をほぼ達成しつつある。 継続性：独法化以前からの研究資産・研究水準を引き継ぎつつ、不断の技術改良と現在の文化財研究及び保護に要求される水準に沿った研究を進め、成果を上げている。						

2. 定量的評価

観点	三次元 探査件数	文化財 計測件数	発表件数	論文等件数		
評価	A	A	A	A		
判定理由 三次元探査件数：突発的な発見などに伴う遺跡保存に関する緊急対応等で、目標の5件を大きく上回った。 文化財計測件数：依頼件数が急増するなかで緊急対応した案件も多く、目標の5件を大きく上回った。 発表件数：目標件数2件を大きく上回った。 論文等数：目標件数2件を大きく上回った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成していることからBとする。ComputerVisionをはじめとする諸技術は、民生用デジタルカメラなど一般に普及している機材を用い低コストで簡便に詳細な三次元データを生成することを可能としており、文化財の記録手法を画期的に変化させることが可能となる。こうして得られたデータを元に木簡のレプリカなどを低価格で製作することが可能になり、博物館での展示やデジタルドキュメンテーション（アーカイブ）を推進することにも繋げられる。 探査技術は、より高精度で迅速な手法の確立に目途をつけることができた。計測、探査とも今後の発展が期待される分野であり、現在普及の壁となっている課題を解決しながら各方面への技術移転を進めたい。 他に、遺跡調査記録の迅速化と標準化を目的として色彩計測などの研究を進めており、次年度以降注力していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	他分野で試みられている新技術を導入し独自の改良を加えることにより、計測、探査を始めとする発掘及び調査技術について、導入ならびに利用コストの低い方法を開発し、地方公共団体等に普及させる可能性を示したことで、本年度の目標を達成していると評価できる。 一方、連携研究等により人材育成や技術の移転を進めており、それにより他機関における研究の活性化と人材の育成に貢献している。高まりつつある技術に対する注目と期待に応えることができたと言える。文化財の記録は文化財研究の基礎であり、一研究室や少人数での遂行には限界がある。文化財保護行政に資する研究を推進するという観点から、これまでに達成し得られた技術を地方公共団体等へより積極的に移転し普及させる必要がある。今中期計画期間の最終年度である次年度はこの点に注力し、技術を多くの外部研究機関・行政機関と幅広く共有していくとともに、本年度までに認識された課題を解決して目標を達成し、本研究を完結したいと考えている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	年輪年代学研究 (2)－③		
【事業概要】 出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資する。とりわけ、奈良文化財研究所で開発、実用化したマイクロフォーカスX線CTを用いた調査手法は貴重な文化財の非破壊調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】 大河内隆之(埋蔵文化財センター主任研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、伊東隆夫(南京林業大学特別招聘教授・客員研究員)、光谷拓実(元総合地球環境研究所客員教授・客員研究員)、藤井裕之(奈良県教育委員会日々雇用職員・客員研究員)、児島大輔(大阪市立美術館学芸員・客員研究員)			
【主な成果】 考古学・建築史・美術史といった多分野にわたる22件の木造文化財を対象とした年輪年代調査及び樹種同定調査を行った。また、デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、同装置による調査対象拡大に向けた非破壊検査を行った。そして、これらの調査・研究成果の一部を論文等、学会等において発表した。			
【年度実績概要】			
10件の出土木製遺物、6件の木造建造物、4件の木造美術工芸品、2件の自然木について、年輪年代調査と樹種同定調査を実施した。 - このうち法隆寺金堂古材調査では、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができる150点以上の部材を悉皆的に調査した。当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、法隆寺金堂の建立年代及び建立後の修理の経過を推定する資料を得ることを目的とした。 - 標準年輪曲線の年代的・地域的拡充を行うため、全国各地の基礎データの蓄積を継続したが、本年度は特に中国地方のデータを充実させることができた。 - デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、既存の装置では不得手であった保存処理済出土木製遺物への応用を行うとともに、遺跡の堆積物等の非破壊での三次元構造把握などに一定の成果を得た。 - マイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊での樹種識別を目指し、現生木での基礎的な検討を行った。 - 以上の調査・研究成果の一部を、論文等、及び学会等において発表した。			
【実績値】 調査件数：22件 論文等：3件 (①～③) 発表等：3件 (④～⑥)			
【備考】 論文等 ①大河内隆之、星野安治、高妻洋成、芝康次郎「平城京二条大路出土墨画板のマイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代調査」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6 ②庄田慎矢、星野安治、降幡順子「 ¹⁴ C ウィグルマッチングによる甘樫丘東麓遺跡の年代学的検討」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6 ③芝康次郎、諫早直人、星野安治「薬師寺食堂と西大寺旧境内における放射性炭素年代測定」『奈良文化財研究所紀要2014』26.6 発表等 ④田村朋美、星野安治「宮城県追戸横穴墓出土斑点紋トンボ玉の自然科学的研究」日本文化財科学会第31回大会、26.7.5 ⑤山崎健、丸山真史、菊地大樹、田村朋美、赤田昌倫、星野安治、大河内隆之、鈴木三男、小林和貴「富山県小竹貝塚から出土した鯛の歯を象嵌した漆製品片」日本文化財科学会第31回大会、26.7.5 ⑥星野安治「木の年輪で作った年代を測るものさし - 年輪年代学の成果 -」奈良文化財研究所特別講演会「遺跡の年代を測るものさしと奈文研」、26.10.25			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4231

自己点検評価調査

研No.29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：木製遺物の出土、あるいは建造物や木彫像の解体修理等、各地方文化財担当部署の要請に迅速に対応することができた。 独創性：デバイスを更新したマイクロフォーカスX線CT装置を用いた遺跡堆積物の三次元構造把握などは、地球科学など他分野でもあまり行われていない独創性の高いものである。 発展性：標準年輪曲線の地域的な拡充を行うことにより、暦年代測定と同時に年輪年代学的な手法を用いた木材の産地推定を可能にすべく、データを蓄積している。 効率性：デジタル画像による調査手法の活用により、従来に比較して、より多くの点数が効率よく調査できるようになった。 継続性：標準年輪曲線の拡充を行うため、全国各地の年輪データを収集しているが、本年度は特に中国地方におけるデータを充実させることができた。 正確性：年輪年代測定で得られる1年単位の年代は、他の多くの自然科学的年代測定の中でも際立って精度が高く、正確性の高いものである。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	論文等数	発表等数			
評価	B	A	A			
判定理由 調査件数：考古・建築・美術など、三つ以上の幅広い分野にわたる文化財を調査した。 論文等数：目標の2件を上回った。 発表等数：目標の2件を上回った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	標準年輪曲線の地域的拡充、マイクロフォーカスX線CT装置の多角的応用、目標を上回る論文等数など、良好な成果があがりつつあるため、Bと判定した。次年度はこれらの成果を引き継ぎつつ、さらに論文等、及び発表等で公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査・研究事業を順調に遂行できており、所期の目標を達成できていると判断して、Bと判定した。中期計画の当初に想定されていた状況に加え、標準年輪曲線の地域的拡充、マイクロフォーカスX線CT装置の多角的応用など、より発展的な研究成果が得られてきているため、今中期計画期間の最終年度である次年度は、これらを生かした応用をこれまで以上に進め、成果を発表する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究 (2)－④)		
【事業概要】 動植物遺存体による環境考古学的研究を継続的に実施する。また、各種計測機器、マイクロスコープを活用して出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】 山崎 健(環境考古学研究室研究員)、松井 章(元埋蔵文化財センター長・客員研究員)、丸山真史(京都市埋蔵文化財研究所・客員研究員)、菊地大樹(元埋蔵文化財センター任期付研究員・客員研究員)、上中央子(前東北大学植物園教育研究支援者・客員研究員)			
【主な成果】 震災復興事業に伴う整理作業や報告書作成に対する支援を行うとともに、幅広い地域や時代の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を学会で発表した。また、一般向けの講演のほか、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。ほかに、研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製した。			
【年度実績概要】 ・ 神谷地遺跡(秋田県)、南鴻沼遺跡(埼玉県)、丸山B遺跡(東京都)、木曾田遺跡(三重県)などの遺跡から出土した動物遺存体を分析して、発掘調査報告書を執筆した。 ・ 東日本大震災の復興事業に伴う調査を支援し、磯草貝塚(宮城県)では出土した動物遺存体の整理作業を行った。 ・ 平城京跡右京一条二坊四坪や藤原宮跡大極殿院で、古環境復原の調査を行った。 ・ 現生標本の収集と公開では、東北地方の貝殻標本などを収集し、標本見学に対応した。 ・ 研究成果の発信として、日本考古学協会、日本学術会議、日本文化財科学会、日本動物考古学会、日本哺乳類学会などの学会やシンポジウムで研究発表を行った。 ・ 研究成果の社会還元や普及事業として、平城宮跡資料館、福井県美浜町、奈良市中学生職場体験などで、一般向けの展示や講演を行った。			
			
		平城京跡右京一条二坊四坪での土壌サンプリング	
【実績値】 論文等数：10 件 (①・②) 発表件数：9 件 (③・④)			
【備考】 論文 ①山崎健「藤原宮造営の運河から出土した小児骨」『奈良文化財研究所 2014』、26. 6 ②山崎健「近現代の貝釦」『季刊考古学』128、26. 8 ほか 8 件 発表 ③山崎健「小竹貝塚の動物遺存体」日本考古学協会第 80 回総会、26. 5 ④山崎健「自然史標本と文化財」日本学術会議シンポジウム、26. 9 ほか 7 件			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4241

自己点検評価調査

研No.30

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：地方公共団体からの要請を受け、発掘調査や整理事業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。とくに、緊急性の高い震災復興事業に伴う整理事業や報告書作成の支援作業に従事したことからAとした。 独創性：非接触三次元レーザースキャナーによる現生骨格標本のデジタルアーカイブ化を実施した。 発展性：幅広い時代や地域の動植物遺存体の調査研究を進めて、動植物利用の歴史を明らかにした。 効率性：一定の精度を確保しながら試料を効率的に採取する方法等を工夫することで、緊急性を要する復興支援に対応しながら、全国からの調査研究の要請にもよく対応した。 継続性：研究の基礎となる現生標本を、継続的に収集・作製・管理した。 正確性：地方公共団体からの多数の要請にもかかわらず、いずれの調査においても精度を確保して対応した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評価	A	A				
判定理由 論文等数：当初の目標2件を大きく上回る論文等を、査読誌を含む刊行物上で発表した。 発表件数：当初の目標2件を大きく上回る発表を、学会や研究会において行った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	緊急性を要する復興支援に従事しながら他の地方公共団体からの要請にも応えつつ、幅広い地域や時代の動物遺存体の調査研究を進めるとともに、研究の基礎となる標本の収集を継続的に進める一方で、発表等数が当初の目標を大きく上回ったため、Bと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度も多くの学会や研究会などで講演や研究発表を行い、得られた成果を広く紹介してきた。また、地方公共団体等からの調査要請に応えつつ一般向けの展示も実施するなど、公開・普及にも対応してきた。今中期計画期間の最終年度である次年度も、復興事業に伴う調査は続くため継続的に支援するとともに、地方公共団体等の実施する、発掘調査や出土動植物遺存体の整理において活用できるマニュアルを配布する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究((3)－①)		
【事業概要】 博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】 佐藤嘉則（研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、小野寺裕子（研究補佐員）、岡田健（センター長）、藤井義久（京都大学教授・客員研究員）、小峰幸夫（文化財虫菌害研究所・客員研究員）、間瀬創（三重県立博物館学芸員・客員研究員）			
【主な成果】 (1) 環境制御が難しい古墳環境において浮遊菌、付着菌、浮遊粒子数の調査を継続的に実施し、除菌清掃のための管理基準を策定した。 (2) 空調がない寺社などの現場で、文化財保存環境の浮遊菌、付着菌、文化財害虫棲息状況を調査し、対策に向けた基礎資料とした。 (3) 歴史的木造建造物の生物劣化要因として、木材成分を分解する木材害虫あるいはその腸管微生物に由来する酵素について調査した。 (4) 処理中にはカビの発生を抑制し殺虫処理が行える低酸素濃度処理について、常識的な温度条件で殺虫処理ができる最短期間を検討した。 (5) カナダ保存研究所から研究者を招聘し、研究交流を実施した。			
【年度実績概要】 (1) 古墳環境においてこれまで集積してきた観察室の浮遊菌、付着菌の計測値をもとに、除菌清掃を実施する必要がある浮遊菌数の基準値の試案を設定することができた。 (2) カビの発生原因や状況が分析できた現場においては、現地の状況に適合した新たな湿度管理方法について具体的な方策を検討した。 (3) 歴史的木造建造物の生物劣化要因として、昆虫、もしくはそれらに共生する微生物由来の酵素活性について詳細な検討を行い、その研究成果を学会及び研究紀要などに発表した。 (4) 処理中のカビの発生を抑制しつつ殺虫処理が行える低酸素濃度処理については、温度が低くなると処理に要する期間が長くなることがわかっていたが、常識的な温度条件（25℃、27.5℃など）で完全に殺虫処理ができる最短期間を実験によって検討した。またその結果を研究紀要に発表した。 (5) 海外から研究者を招聘し、温湿度が変動する環境におけるカビ発生条件について議論を行った。			
【実績値】 論文数 3 件 (①、②、③) 研究発表件数 1 件 (④)			
【備考】 論文 ① 佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか：虎塚古墳公開保存施設の管理方法変更による微生物汚染状況の推移、「保存科学」54、27 年 3 月 ② 小野寺裕子、小峰幸夫、木川りか：低酸素濃度殺虫法—25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討—、「保存科学」54、27 年 3 月 ③ 木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也：歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について、「保存科学」54、27 年 3 月 発表 ④ 木川りか、雪真弘、佐藤嘉則、遠藤力也、小峰幸夫、原田正彦、大熊盛也：歴史的木造建造物を加害するオオナガシバンムシ幼虫のセルラーゼ活性について、文化財保存修復学会第 36 回大会 26 年 6 月 7 日、8 日			



古墳環境における浮遊菌、付着菌の調査

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4311

自己点検評価調査

研No.31

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	A	B	B	B
判定理由 適時性：歴史的建造物や古墳環境などの環境管理が難しい場所における生物被害の抑制策は喫緊の課題であるが、本年に調査結果を対策に結び付ける基準について具体的成果が得られた。また調査結果の公開についても速やかに実行できた。 独創性：歴史的木造建造物における生物劣化のメカニズムについて、文化財を加害するオオナガシバンムシの幼虫を用いた実験により、昆虫あるいはその腸管微生物が産生する酵素が木材のセルロース成分の分解に大きな役割を担っている可能性があることを示した。このことは、非常にオリジナリティの高い新規性のある研究成果といえる。 発展性：具体的な古墳環境において、環境の微生物モニタリング結果（浮遊菌数）の値から具体的な対策を実施する必要がある指標値を現場で設定できたことは、モニタリングと対策を結びつける点で、今後多くの現場で応用できる可能性がある。また多くの美術館、博物館等ですでに実施されている低酸素濃度殺虫法について、まだ決定的なデータが欠けていた中温度（25℃、27.5℃）における殺虫に必要な最短期間を実験で検討できた。これは、今後多くの文化財施設に有用な情報を提供すると期待される。 効率性：少ないスタッフの人数のなかで、各人の得意分野を反映させて業務を効率的に分担し、できうる限り仕事の効率が上がるように努めた結果、少人数でも十分な成果をあげることができた。 継続性：調査をすることになった現場では、できる限り継続的、定期的、基礎的なモニタリングデータを取り、全体の傾向を把握したうえで個々の問題点の原因を究明するように努めた。その結果、個々の現場の調査結果であっても、まとまった現象として状況が解明されることによって、他の現場にも応用ができる知見が得られることとなった。 正確性：実験で得られる値については、機器は正確に校正したものを用いている。また複数回の測定を実施するなど、データの正確性については非常に気をつけてデータを出すように努めている。その結果、非常に信頼性の高いデータを取得できていると考えている。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数				
評価	B	B				
判定理由 論文数：検討した結果について、目標数の論文を出すことができた。 研究発表件数：重要なテーマについて、検討結果を速やかに公表することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	設定していた課題について、重要な内容について十分な成果をあげることができた。また、主要なテーマについて速やかに検討結果を発表することができた。次年度は、これまでに積み上げてきた個々の検討結果を総合させる作業をしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画していた課題について、十分な成果が認められた。最終年度へ向けてこれまで得られたデータを総合的にとりまとめていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究(3)－②)		
【事業概要】 異常な高温・低温など最近の異常気象は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与え、様々な問題を生じている。環境データや材料の水分特性など基本的なデータを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。また、展示ケース等から放散する汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。総合的に文化財の保存環境の向上に資する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、呂俊民（客員研究員）、北原博幸（トータルシステム研究所代表・客員研究員）、間渕創（三重県総合博物館学芸員・客員研究員）、古田嶋智子（東京藝術大学助手・客員研究員）、石井恭子（研究補佐員）			
【主な成果】 (1) 1970年代に建てられた美術館の展示ケース内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析を行った。 (2) テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果とシミュレーションとの整合性の検討を行った。 (3) 研究成果を速やかに学会等で発表し、研究会を開催し公開した。 (4) これらの結果を、国指定文化財公開のための環境調査や館内環境改善のための助言に活用した。			
【年度実績概要】 (1) 1970年代に建てられた美術館の展示ケース内の温湿度分布と壁面温度の実測と解析 ・冬季に外壁に近い部分で湿度が高くなり、カビの発生が懸念される施設の収蔵庫において、その原因の究明及び対策の検討を行うために、収蔵庫内の温湿度に加えて、6月から壁面の温度の測定を行った。 ・屋外からの影響により、壁面の温度が低くなっていたことが実測から確認することができた。このような壁面の温度の低下が湿度の上昇を招いていたので、外壁の断熱性を上げることが対処法のひとつであると考えられる。 ・全国に類似した問題を抱えている博物館等における対策を検討する際に反映することができた。 (2) テスト用実大展示ケースを用いたガス濃度実測結果 ・ガス発生源がケース内にある場合には任意の時間のケース内濃度が予測可能であることがわかった。 ・計測のためにガラス面等に多数の測定孔を持つテスト用実大展示ケース（行燈型）を実験室内に設置し、床面にガス放散が継続している合板を据えてケース内の酢酸濃度を定期的に実測した。この結果、時間の経過に伴い酢酸濃度の上昇幅は小さくなることがわかった。またケース容積が小さいほど試料サンプリングの影響が大きくなり、補正が必要になることがわかった。 ・これら補正を加えて材料試験の結果との整合性を比較し、材料試験のシミュレーション精度を高めることができた。 (3) 研究成果の公開 ・文化財保存修復学会、室内環境学会、Indoor Air Quality, International Institution for Conservation of Artistic and Historic Works 香港大会等、国内外の関連学会の年次大会において研究成果を発表した。また得られた成果を、当研究所紀要『保存科学』に速やかに公開した。 ・「文化財の保存環境の制御と予測」の研究会を開催し、文化財の展示施設・収蔵施設における空調設備を用いた温湿度制御の事例、展示ケース内における温湿度や空気質を調査した事例、コンピュータシミュレーションを用いた温湿度環境の予測及び実測値との比較等、文化財の保存環境について検討した(27年2月9日、発表者：6名、外部からの参加者数：29名)。			



ケース内濃度の連続測定

本研究で得られた成果を速やかに国指定文化財公開のための環境調査や環境改善のための助言に生かした。			
【実績値】 学会発表 3件 (①、②、③) ほか1件、論文発表 2件 (④、⑤)、研究会 1回 (⑥)			
【備考】 ① Tomoko Kotajima, Toshitami Ro and Chie Sano “Estimation of acetic acid and ammonia gases concentration in museum display cases using emission rate of construction materials” 11th International Conference - Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments, 26年4月13-16日、プラハ (チェコ) ② 間渕創、犬塚将英：気流解析と実測によるLED照明を用いた展示ケース内の温湿度分布の調査、文化財保存修復学会、26年6月8日、東京 ③ 古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵：気密性を有する展示ケースのガス濃度推移、室内環境学会、26年12月5日、6日、東京 ④ Masahide Inuzuka “Modelling temperature and humidity in storage spaces used for cultural property in Japan” Studies in Conservation vol.59 supplement 1, pp52-54 (2014)、International Institution for Conservation of Historic and Artistic Works, 26年9月 ⑤ 古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵：試験用実大展示ケースを用いたケース内ガス濃度の解析、『保存科学』、27年3月 ⑥ 研究会 「温湿度環境の予測と制御」、27年2月9日、東京文化財研究所 (参加者数 29名)			



【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4321

自己点検評価調査

研No.32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：1970年代に建てられた美術館等の改築・改修にあたり、どのような問題が保存上起こるのか、いかに確実に解決するか当所の研究成果として求められることが多い。また、文化財を保管する展示ケース内の環境は気密性が高いほど外から検知しにくく、安全に長期に保存できる環境が予測できる方法の確立が求められている。得られた成果は速やかに公開されている。当研究成果は必要性、公共性、緊急性が高く、国際的にも成果が期待されている。 独創性：改修前に問題点を明らかにして最小費用で最大効果を得る手法を選択しようとする当研究の視点は、着想が新しく公共団体から研究の進展が期待されている。また展示ケース内の空気環境について実験的に連続してデータを得た例はなく、非常に新規性の高い研究を実施できた。 発展性：得られた成果は、改築・改修、設備更新等、文化財を守る建物や設備に幅広く応用可能で、成果が速やかに公開されていることから国内全体の保存の状況を改善する研究成果である。 効率性：研究協力について公示して応募してきた展示ケース製作会社と共同し、原材料の入手時期や加工時期、資材の段階の保管状況が既知の原材料で作った実験用展示ケースを用いて研究を実施した点で、時間的投資、人的投資、設備的投資いずれも効率が良く研究を実施できた。 継続性：研究協力に関する協定は本研究期間をカバーして締結しており、継続性を担保した研究スケジュールを確保できた。展示ケース製作会社と共同で研究を進めることで、多量の原材料情報を集中的に得られ、質・量ともに優れている。 正確性：校正された機器、センサー等を用いて測定を行った。展示ケース内の濃度推移についてはサンプリングによる影響も補正しており、計測値の正確性は高い。						

2. 定量的評価

観点	学会発表	論文発表	研究会			
評価	B	B	B			
判定理由 学会発表：前年度までの研究成果及び本年度の研究成果を、適した学会でいずれのテーマも1本以上速やかに発表しており、十分な成果公開がなされている。 論文発表：本年度の研究成果を速やかに公開しており、研究が効率的に実施されている。 研究会：年度当初より十分に講演者と内容を検討協議して実施した。専門家と質の高い研究交流が達成できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館・美術館や文化財を保管する展示ケース等の保存上の問題点を、根拠となる測定データを実測から得るとともに、コンピュータシミュレーションも活用しつつ、改修した場合の保存環境の改善方法の提案や展示ケース内の濃度予測を行った。文化財の保存現場からの要求の高い内容を、正確に、かつ効率良く実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の第4年度として、温熱シミュレーション、展示ケース内汚染ガス濃度推移シミュレーションとともに、予測精度を上げることができ、美術館・博物館の環境改善に役立てることができた。研究成果をすみやかに、国内外の学会や雑誌で公開し、当所の技術力を国内外にアピールすることに努めた。充実した基礎研究をまとめることができた。 中期計画最終年度である次年度は、施設改修への温熱シミュレーションの応用や展示ケース内汚染ガス対策など応用研究を実施するとともに、これまでの成果をまとめ、「空気清浄化マニュアル」（仮）を含むプロジェクト報告書を刊行し、研究会にて成果普及を図る予定である。

業務実績書

研No.33

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究((3)－③－ア)		
【事業概要】 小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長 早川泰弘
【スタッフ】 岡田健（センター長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、三浦定俊（文化財虫菌害研究所・客員研究員）、城野誠治（企画情報部専門職員）			
【主な成果】 (1) 持ち運びが可能な小型機器によるその場分析の適用範囲拡大についての研究を進めた。 (2) 同時に、研究室内での精密機器による分析の高度化についての研究を推進した。特に、本年度は鎌倉～江戸期絵画の彩色材料調査を積極的に進めるとともに、工芸品・金属製品等の材料・構造調査を行った。 (3) 科学的調査データの蓄積と解析を目的に、これまでに実施した絵画や金属製品等に関するデータ解析を進め、論文投稿・学会発表を行うとともに、初期洋風画に関する調査報告書2冊を刊行した。			
【年度実績概要】 5年計画の第4年度として、以下に示す成果を得た。また、これまでの調査研究成果に関する報告書を刊行した。 (1) 小型可搬型機器によるその場分析 ・ハンディ型蛍光X線分析装置により、国宝平等院鳳凰堂板扉絵（平等院）、春日権現験記絵巻（宮内庁三の丸尚蔵館）、伊能図（徳島大学）等の彩色材料調査を実施し、データの蓄積・解析を行った。 ・小型可搬型の可視反射スペクトル分析装置により、江戸期の絵画や日本絵画に使われている有機染料の分析・解析を進めた。 ・可搬型のX線透過撮影装置とイメージングプレートを用い、仏像や金工品等の内部構造について現地での撮影を行った。 (2) 分析の高度化 ・蛍光X線分析による分析精度の向上を目的に、定量法に関する条件検討を行うとともに、実資料への適用を行い、金銅仏等の金属製品に関する高精度データ解析を行った。 ・有機質材料の高精度分析を目的に、材料の蛍光特性変化に着目した非破壊分析の可能性を検討した。いくつかの有機質材料について、その蛍光寿命や蛍光波長が材料の状態や特性に依存する結果を見出すことができた。 ・前年度導入した高エネルギーX線透過撮影用機器の調整と試験を行った。これらの機器を用いて、仏像、漆工芸品、絵画等の構造調査を行った。 (3) 調査研究成果に関する報告書 ・これまでに実施した絵画や金属製品等の調査結果に対し、論文2件、学会発表2件の公表を行った。また、これまでに光学調査を実施した重要文化財泰西王侯騎馬図屏風（サントリー美術館、神戸市立博物館所蔵）、及び重要文化財洋人奏楽図屏風（永青文庫所蔵）に関する光学調査報告書を刊行した。			
【実績値】 論文等 2件（①、②） 学会発表等 2件（③、④） 報告書等 2件（⑤、⑥）			
【備考】 論文等 ① 早川泰弘：平等院鳳凰堂の金属部材の材料調査、鳳翔学叢 11、27年3月 ② 吉田直人：膠の主成分ゼラチンの蛍光特性変化について ―濃度依存性と硫酸アルミニウムカリウムの影響―、保存科学 54、27年3月 発表 ③ 早川泰弘 城野誠治、神居文彰：平等院の国宝鳳凰・梵鐘・装飾金物の材料調査、日本文化財科学会第31回大会、26年7月5日、6日 ④ 佐々木良子、吉田直人、佐々木健：蛍光寿命測定 of 文化財材料への応用に関する基礎研究1、日本文化財科学会第31回大会、26年7月5日、6日 報告書 ⑤ 「泰西王侯騎馬図屏風 光学調査報告書」、27年3月 ⑥ 「洋人奏楽図屏風 光学調査報告書」、27年3月			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4331

自己点検評価調査

研No.33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財資料の科学調査の適用範囲拡大と高度化を目的としたタイムリーな研究である。 独創性：調査機器に関する基礎研究から実資料調査に至る応用研究まで、広範囲な研究を行っている。 発展性：美術史学・金属学等との連携が行えるなど発展性は大きい。 効率性：運営費交付金以外に他機関からの調査派遣依頼などに基づき研究を推進している。 継続性：種々の作品を系統的に調査することで、単一作品の調査だけでは見出せない情報を顕在化できる。 正確性：複数の調査手法を取り入れることで科学的客観性を担保している。						

2. 定量的評価

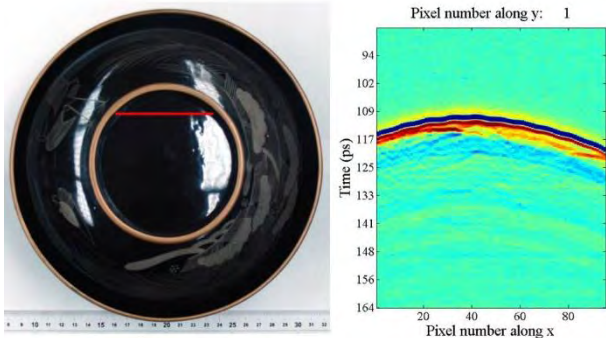
観点	論文等	学会発表等	報告書等			
評定	B	B	B			
判定理由 論文等：研究成果が2件掲載され（保存科学誌、平等院紀要）、目標値を達成した。 学会発表等：研究発表を2件行い（日本文化財科学会）、目標値を達成した。 報告書等：計画通り、研究調査報告書（非売品）を2冊刊行した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の量・質ともに所期の目標を達成した。基礎的研究から応用的研究に至るまでの幅広い研究を少数の人員で的確に進めている。作品を所蔵する博物館・美術館・社寺等からの信頼を増大すべく、共同調査の実施や、調査結果の解析・公開を積極的に行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の第4年度として、科学調査データの一層の蓄積を進めるとともに、研究成果（論文投稿・学会発表及び調査報告書の刊行）の公開を積極的に推進した。小型可搬型機器によるその場分析と、研究室内での精密機器による高精度分析の両者を高いレベルで実践している機関は他になく、東文研の技術力・信頼性をアピールすることに努めた。調査データや画像等の蓄積も着実に進んでおり、これまでに膨大な調査結果が収蔵されている。中期計画最終年度となる次年度は、この膨大なデータの保管・維持・活用方法についてシステム化・予算化を進めるとともに、中期計画5か年間の成果報告書を刊行し、成果公開に努める。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等 ((3)-③-イ)		
【事業概要】 ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要なデータを集積するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎(保存修復科学研究室研究員)、田村朋美(保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)			
【主な成果】 サブミリ波イメージング(テラヘルツ分光イメージング)により、漆器の塗装構造に関する非破壊調査を行った。新規に導入予定のメーカープロトタイプのテラヘルツイメージング装置の測定試験を実施し、文化財への適用性を検討した。			
【年度実績概要】 ・ サブミリ波イメージングによる調査に関しては、Picometrix 社製 T-Ray4000 を用いて、漆器の塗装構造の調査を行った。塗装工程のわかっている塗装手板に対するテラヘルツイメージング実験により、層構造として精度よく塗装手順を可視化することができることが明らかとなった。また、宋代の漆器等についてもその塗装構造を非破壊で可視化することができた。 ・ キトラ古墳壁画に対して実施したテラヘルツイメージングによる調査成果の一端について、東京国立博物館で行われた特別展「キトラ古墳壁画」の図録で紹介するとともに、同展記念講演会(1)「キトラ古墳壁画保護の歩み」において講演を行った。 ・ 文化財に関するテラヘルツ時間領域分光イメージング (THz-TDI) の調査事例について、Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation (THz-ARTE)の International Workshop (Rome)において報告を行った。			
漆器のテラヘルツイメージング 右図は、左写真の赤線部分に対して、テラヘルツ時間領域分光イメージング (THz-TDI) により得られた断面像である。木地部の乱れ、塗装構造などを可視化することができた。			
【実績値】 発表件数：2 件 (①～②) 論文件数：3 件 (③～⑤)			
【備考】 発表 ①高妻洋成「キトラ古墳壁画の材料調査」、特別展「キトラ古墳壁画」記念講演会(1)「キトラ古墳壁画保護の歩み」26.4.26 ②C. L. Koch-Dandolo, K. Fukunaga, Y. Kohzuma, K. Matsuda, K. Kiriya, T. Filtenborg, J. Skou-Hansen, A. Cosentino, P. Uhd Jepsen, "Contribution of Reflection Terahertz Time Domain-Imaging (THz-TDI) to Imaging Analysis of Artworks", Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation, International Workshop, Rome, 2014.12.2-3 論文 ③福永香・高妻洋成「壁画の下に漆喰が見たい!」『特別展「キトラ古墳壁画」図録』26.4 ④福永香・高妻洋成・建石徹「科学の目で観る古代壁画」『O PLUS E』、26.7 ⑤C. L. Koch-Dandolo, K. Fukunaga, Y. Kohzuma, K. Matsuda, K. Kiriya, T. Filtenborg, J. Skou-Hansen, A. Cosentino, P. Uhd Jepsen "Contribution of Reflection Terahertz Time Domain-Imaging (THz-TDI) to Imaging Analysis of Artworks", Terahertz Advanced Research Techniques for non-invasive analysis in art conservation, International Workshop, Rome, 2014.12			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4332

自己点検評価調査

研No.34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：漆器等の多層の塗装構造を有する文化財に対する非破壊調査法として開発されている。 独創性：漆器の複雑な塗装構造の調査に適用した。 発展性：新規導入予定のテラヘルツイメージング装置を用いることで、より安全で精度の高い計測とデータ解析が可能となる。 効率性：漆の標準的な塗装工程を再現した手板資料を標準試料としてデータを蓄積したことで、漆器の層構造の解析が効率よくできた。 継続性：テラヘルツイメージング技術を文化財の表層付近の断面構造の可視化技術として広く応用できる可能性を示した。 正確性：漆器の複雑な塗装構造を可視化することができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文件数				
評価	B	A				
判定理由 発表件数：目標値である2件を達成した。 論文件数：目標値である2件を上回った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	漆器の複雑な塗装構造をサブミリ波イメージング技術により可視化することができるようになり、同技術のさらなる応用範囲の拡大を図ることができた。 テラヘルツ分光スペクトルの収集は金属さびの標準スペクトルの収集を行ったが、前年度に引き続き、次年度は染料についてさらに標準スペクトルを収集する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	概ね、前年度策定した計画を予定通りに実施できたことから、順調と判定した。一部、予定を変更して染料に代わりに、金属さびのテラヘルツ分光スペクトルの標準スペクトルを収集したが、有効となる染料資料の収集も併行して進めた。今中期計画期間の最終年度である次年度は、染料の標準スペクトルをさらに収集する予定である。 また、新規導入予定のメーカープロトタイプของテラヘルツ分光イメージング装置を文化財に適用できるよう、試験測定と応用実験を次年度に進める予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）			
【主な成果】 (1) 石造文化財では、出島の旧石倉（長崎市）において砂岩の劣化機構の解明と周辺環境の影響に関する調査、幸橋（平戸市）において既に修復された物件の保存状態に関する追跡調査などを実施した。 (2) 木造建造物では加賀市内神社（中嶋神社、稲荷神社）において材質の違いによる覆屋内環境と本体の保存状態の違いについて調査を継続した。 (3) 25 年度までに得られた成果について論文及び学会発表を行った。			
【年度実績概要】 (1) 石造文化財の調査研究 ・砂岩の劣化機構解明と周辺環境影響に関する調査（出島旧石倉）（調査日：26 年 5 月 12 日、6 月 16 日、17 日） 天草砂岩でみられる表層剥離について、旧石倉及び旧出島神学校基礎床面で調査を行い、剥離片表面が剥離後の本体表面と比べて硬質であること、雨がかかりやすく乾燥しやすい部分で劣化が顕著であることが把握できた。 ・既修理事物の保存状態に関する追跡調査（幸橋）（調査日：26 年 5 月 13 日） 幸橋は昭和 58 年度の保存修理工事において石材の基質強化にシリコン樹脂が使用されている。シリコン樹脂は水分が多い環境で劣化が著しいが、主に目視による保存状態調査の結果、30 年経過した現在でも特に大きな問題が生じていないことが確認できた。 (2) 木造建造物の調査研究 ・材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査（中嶋神社、稲荷神社）（調査期間：24 年 10 月～現在） ガラス張りの透明な覆屋（稲荷神社）と従来からある木板の雪囲い（中嶋神社）で、覆屋内の温湿度・照度・紫外線強度の調査を継続した。回収に成功した一部の機器から透明覆屋内の紫外線強度が高かったことが確認できた。 (3) 前年度までに得られた成果の公表等 花見瀧墓地赤碕塔（琴浦町）のハニカム状風化について調査により得られた成果をまとめ、保存科学に報文として投稿し掲載された。			
			
図 1 出島旧石倉の表面劣化状態			
【実績値】 論文等：3 件（①～③） 発表件数：4 件（④～⑦）			
【備考】 論文等 ① 朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一：鳥取県・花見瀧墓地赤碕塔に見られるハニカム状風化、保存科学 54、pp. 1-14、27 年 3 月 ② 朽津信明：日本における横穴墓の保存 『日韓共同研究成果報告会報告書 2014』 pp. 2-7 韓国国立文化財研究所・東京文化財研究所、26 年 5 月 ③ 森井順之：屋外文化財の保存と公開のための覆屋について、第 44 回熱シンポジウム『役に立つ湿気研究』、日本建築学会、pp. 91-96、26 年 10 月 発表 ④ 朽津信明、伊藤広宣、山路しのぶ、神田高士：臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策(2)、文化財保存修復学会第 36 回大会、明治大学、26 年 6 月 7 日 ⑤ 小泉圭吾、森井順之、神田高士、伊藤広宣：冬場の臼杵石仏における覆屋の有効性評価のためのリアルタイム環境観測システム、日本文化財科学会第 31 回大会、奈良教育大学、26 年 7 月 5 日、6 日 ⑥ 朽津信明、森井順之、佐藤円香、西山賢一：長崎市出島で見られる砂岩石材の風化現象について、日本応用地質学会平成 26 年度研究発表会、九州大学、26 年 10 月 29 日、30 日 ⑦ 森井順之：臼杵磨崖仏における保存環境調査と次期保存修理計画、保存科学研究集会 2014「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」、奈良文化財研究所、27 年 1 月 23 日			



図1 出島旧石倉の表面劣化状態

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4341

自己点検評価調査

研No.35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：既に樹脂等で強化された石造文化財は、次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高く、劣化要因及び保存環境に関する調査研究は常に求められる。 独創性：砂岩の剥離現象に対して周辺環境、特に水分移動に着目して劣化機構を解明しようとしているところに独創性が認められる。 発展性：材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査は、近年オリジナルを保存することが多い建造物の内外に描かれた壁画について、より良い保存環境条件の提案に役立つなどの応用性が期待できる。 継続性：屋外文化財の劣化状態と周辺環境の相関については、問題点の把握がより正確に行えるよう1年以上の調査期間を確保している。 正確性：覆屋内の環境については温度・湿度・照度・紫外線強度データロガーを用いた計測、剥離片の状態についてはエコーチップ、モース硬度、色差など規格化された手法により正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
評価	B	B				
判定理由 論文数：前年度までの研究成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。 発表件数：各種学会発表において屋外文化財の風化現象の解明やその対策について研究結果を発表し、当初の目標を十分に達成できたと言える。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高い屋外文化財について、劣化要因及び保存環境に関する調査研究成果を出すことができた。特に出島旧石倉の表面劣化機構の解明については高い独創性を有するとともに、材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査については、近年オリジナルを保存することが多い建造物壁画についてより良い保存環境条件の提案に役立つなど、応用性が期待できる研究を進めることができた。また、学会発表や論文等により、今まで得られた成果の公表も十分に行えた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5年計画の4年目として、まとめにつながる多くの研究成果を得ることができた。石造文化財については、出島旧石倉の劣化機構の解明を行うことができ、類似した劣化現象が見られる他の文化財に研究を発展させていくことができた。材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査では、今後の保存対策に役立てるために十分なデータを得ることができた。中期計画最終年度となる次年度も、より正確性を高めるために計測を継続していく予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）			
【主な成果】 (1) 東日本大震災被災文化財の保全に関する研究として、石巻文化センター被災文化財仮設収蔵庫として使用している旧石巻市立湊第二小学校の環境調査を継続した。 (2) 文化財の地震対策に関する研究として、石灯籠の地震対策に関する評価を実寸大のものを使って行った。 (3) 25年度に実施した石灯籠縮小模型の振動台実験結果について、国際会議で発表し、成果の公表に努めた。			
【年度実績概要】 (1) 東日本大震災被災文化財の保全に関する研究 ・旧石巻市立湊第二小学校環境調査（調査日：26年9月16日、17日、27年3月12日） 東日本大震災で津波被害を受けた石巻文化センター収蔵品の一時保管施設である旧石巻市立湊第二小学校で、温湿度データ回収、文化財害虫調査、空気質調査などを前年に続き石巻市・東北歴史博物館と共同で実施した。石巻文化センターの再建が31年度以降と言われているなか、これらの調査を現地担当者と一緒に行うことで、資料保存に関する技術移転も進めることができた。 (2) 文化財の地震対策に関する研究 ・実物大石灯籠の振動台実験（実験日：26年10月30日、31日） 昨年度実施した縮小模型による実験ではスケール効果により不明な点が多かったため、つくば市にある独立行政法人防災科学技術研究所の一次元大型振動台を用いて実物大石灯籠の振動実験を実施した。石灯籠は、空積に加えモルタル接合・芯棒・免震ゲルと3種類の地震対策を施したサンプルを用意し、新潟県中越地震の波形を使って揺らしたところ、本来の50%の振幅（震度6弱相当）で全て倒壊した。画像解析や加速度計データにより倒壊プロセスが確認でき、今後の地震対策について有用なデータを得た。 ・地震災害の現場調査（12月1日） 11月22日に長野県北部で発生した震度6の地震により倒壊被害があった長野市善光寺境内の石灯籠・石碑の被害状況を調査し、被害発生の機構と安全対策についての検討を行った。 ・25年度研究成果の公表 前年度三重大学で実施した石灯籠縮小模型の振動台実験結果をまとめ、「石造文化財および地盤遺産の保存に関する国際シンポジウム（26年5月20日～23日、韓国・公州大学）」に参加して研究発表を行い、論文が掲載された。			
			
		実物大石灯籠の振動台実験	
【実績値】 論文等数 1件（①）、発表件数 1件（②）			
【備考】 論文等 ① Masayuki Morii, Nobuaki Kuchitsu, Madoka Sato, Yumiko Okamoto and Toshikazu Hanazato : Fundamental research about vibration of stone lantern (ishi-toro) by earthquake Proceedings of the international conference on conservation of stone and earthen architectural heritage, pp.98-108, ICOMOS ISCSStone, Kongju National University、26年5月 発表 ② 森井順之、及川規、芳賀文絵：石巻市仮収蔵施設の保存環境、平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会、東北歴史博物館、26年11月20日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4342

自己点検評価調査

研No.36

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年11月末の長野県神城断層地震における善光寺石灯籠の倒壊等、石灯籠の地震対策が急務と捉えられているなか、実物大石灯籠を対象とした振動台実験を行い、その挙動について多くの情報を得ることができた。 独創性：石灯籠の地震対策については研究例が無く、本研究成果が今後の地震対策に与える影響は大きい。 発展性：実物大石灯籠の振動台実験において組積のみの試験体から得られたデータは、五輪塔や層塔等多くの石造文化財に応用可能である。 効率性：石巻文化センター被災文化財一時保管場所における環境調査では、現地担当者との情報共有を行うことで、保存管理のために必要な作業について現地での対応を可能とした。 継続性：石巻文化センター再建が31年度以降と言われているなか、被災文化財の保存状態の変化を正確に把握するため、石巻市合意のもとで持続可能な観測体制の維持に努めている。 正確性：実物大石灯籠の振動台実験では高精度の速度計、ハイスピードカメラを用いて、地震時挙動の正確な把握を行った。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評価	B	B				
判定理由 論文等数：前年度実施した石灯籠縮小模型の振動台実験の成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。 発表件数：被災文化財一時保管場所の環境について、被災地である宮城県各市担当者に向けて正確な情報発信を行うことができ、当初の目標を十分に達成したと言える。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東日本大震災にて被災した文化財の保存修復に関する調査研究では、被災地での作業が長期化するなか、一時保管場所における保存管理の在り方について石巻文化センター被災文化財を対象に十分な調査及び情報発信を行うことができた。石灯籠の地震対策に関する調査では、前年度縮小模型ではスケール効果により把握できなかったそれぞれの地震対策について、実物大の石灯籠による実験でシビアに評価することができ、今後の地震対策を考えるうえで十分なデータを得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究では、中期計画策定時に想定していなかった東日本大震災の発生を承け、災害発生時の対応とその結果への検証を経て、具体的な事例をもって将来にわたる防災対策の構築を行うことになった。その中で、被災地復興が長期化するなかで、被災文化財一時保管施設の保存環境について有効な情報提供を行うことができた。また、石灯籠等石造文化財の地震時挙動については、実物大石灯籠を使った実験を行うことでより詳細な情報を得るなど、最終年のまとめに向けて多くの情報を得ることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究((3)－⑤)		
【事業概要】 我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆、顔料などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これら文化財に使用される伝統技術及び材料や保存修理で使用する合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 朽津信明（修復材料研究室長）、早川典子（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、本多貴之（明治大学講師・客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）			
【主な成果】 本年度は中期計画の4年目に当たり、劣化が著しい考古資料等の漆文化財や、伝統的な文化財建造物の塗装材料である漆塗装や乾性油塗料等の過去の塗装彩色修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。また、第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催するとともに、第2冊目となるこれまでの研究会内容を纏めたブックレット形式の報告書を作成した。			
【年度実績概要】 ・文化財建造物に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた手板曝露試験を進めるとともに、Py-GC/MS 分析装置を用いた塗装材料の性質（漆塗料・膠材料・乾性油塗料の同定及びブレンド状況等）の調査を行った。このような調査実績を日光東照宮陽明門や厳島神社反橋及び荒胡子神社等の塗装彩色修理の実践的な施工作業に役立てた。 ・研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。 ・桃山文化期の当世具足には漆塗料では獲得できないような肌色や緑色塗料が表面塗装されている場合がある。本年度鍋島家所蔵具足の塗料分析(Py-GC/MS 分析、X線回折分析、分光分析等)を行ったところ、石黄＋植物藍を混和した乾性油系塗料であることがわかり、この甲冑の保存修理や復元に役立てた。 ・「日光東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理」という内容で、26年12月18日(木)に東京文化財研究所の地下セミナー室で第8回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催し、計132名の参加を得た。			
		報告: 1, 日光東照宮陽明門における塗装彩色修理の概要: 浅尾 和年（日光社寺文化財保存会）、2, 唐油蒔絵のX線透撮影による画像調査: 犬塚将英、3, 唐油蒔絵の塗料を構成する成分調査: 本多貴之、4, 唐油蒔絵の顔料・塗膜構造調査: 北野信彦、5, 唐油蒔絵の修理: 中右恵理子（油彩画修理技術者）、6, 唐油蒔絵の調査と修理に関するまとめと今後の課題: 佐藤則武（日光社寺文化財保存会）、7, 参加者全員「総合討論」 ・第6、7、8回の文化財における伝統技術及び材料に関する研究会の報告内容を、今後行われるであろう文化財建造物の塗装彩色修理の施工に役立てる目的で、コンパクトに纏めたブックレット形式の報告書を作成して刊行した。	
(東照宮陽明門西壁面唐油蒔絵の調査と修理指導後の現況)			
【実績値】 研究会開催数 1回、報告書数 2冊 (①～②)、論文数 2件 (③～④)、研究発表件数 2件 (⑤～⑥)			
【備考】 報告書 ①『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書 2014 年度』東京文化財研究所、27 年 3 月 ②『文化財建造物における塗装彩色材料の調査・修理・活用』東京文化財研究所、27 年 3 月 論文 ③北野信彦、本多貴之、佐藤則武、浅尾和年：日光東照宮唐門および透塀の塗装彩色材料に関する調査、『保存科学』54、27 年 3 月 ④北野信彦：出土装飾部材の漆塗装に関する調査、『東京都千代田区有楽町一丁目遺跡』、武蔵文化財研究所、27 年 3 月 研究発表 ⑤北野信彦、犬塚将英、吉田直人、桐原瑛奈、本多貴之、浅尾和年、佐藤則武：日光東照宮陽明門側面大羽目絵画の彩色に関する調査、第 36 回文化財保存修復学会、明治大学、26 年 6 月 8 日 ⑥北野信彦、本多貴之、佐藤則武、浅尾和年：日光桃山文化期欄間彩色の保存と資料活用に関する基礎的調査、第 31 回、日本文化財科学会、奈良教育大学、26 年 7 月 5 日、6 日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4351

自己点検評価調査

研No.37

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
備考 適時性：本年度は、日光東照宮陽明門、厳島神社反橋等の文化財建造物で実施されている塗装修理や出土漆器等の保存処理施工方法の策定に、本プロジェクトで実施する旧塗装材料・技法の調査や曝露実験などの調査結果を反映させた。また、文化財建造物保存技術協会においても文化財建造物の塗装彩色に関する調査と施工に関する内容が取り上げられ、その基調講演を行った。 独創性：過去の塗装材料や彩色材料の調査方法として、Py-GC/MS 分析法をさらに応用して日光東照宮陽明門の西壁壁画の彩色修理に油彩画修理の方法を応用することができた。また、桃山文化期の当世具足(鍋島家所蔵資料)の塗装材料に乾性油塗料が使用されていることが確認され、当該分野の研究に寄与することができた。 発展性：本プロジェクトでは特に風雨に晒されて劣化が著しい文化財建造物の塗装彩色の修理や、脆弱な漆塗料や有機質材料を伴う複合材料からなる考古資料を研究対象としている。これらの材質・技法に関する分析調査やその結果を考慮した手板試料の劣化促進実験を伴う基礎調査結果の蓄積は、今後国内のみならず海外においても同様の劣化が著しい文化財の保存修復方法の策定処に応用できるものと考えられる。 効率性：これまで開発した分析手法は、基本的には現有施設と人員を使用することで比較的多くの分析試料を短期間に結果が出せること、さらにはこの結果を実際の保存修復作業の現場にも生かせることが実証された。 継続性：実際の文化財建造物における塗装彩色修理や考古資料の保存処置は、タイトな期間内に比較的安価で効率よく実施することが基本である。本プロジェクトの成果は幾つかの保存修復の現場の作業に効率よく反映させており、今後はこのようなアプローチ法を広く定着させる人材育成プログラム策定を行う予定である。 正確性：本プロジェクト研究については、多方面の分野の研究者や技術者が係わっており、絶えず意見交換を行って正確性を高める努力をしている。特に調査結果を実際の国指定文化財である文化財建造物の塗装彩色修理などの施工に反映させる場合には、各種専門委員会に諮問した上で施工に適応されるシステムが構築されているので、客観的な正確性は保つことが可能である。						

2. 定量的評価

観点	研究会開催数	報告書数	論文数	研究発表件数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 研究会開催数：当初計画の目標値を達成することができた。 報告書数：当初計画の目標値を達成することができた。 論文数：当初計画の目標値を達成することができた。 研究発表数：当初計画の目標値を達成することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財建造物に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。さらにこの成果の一部を研究会やブックレット方式の報告書などを通じて公表し、参加者数も満足度も目標値を満たしたのでBと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトで実行している手法や調査結果の有用性が修理現場に応用されるなど、当初の計画通り有効性が明らかになってきた。それに伴い重要な知見の蓄積とこれらの一部を報告書と研究会報告の形で公開及び纏めることができた。そのため、計画の実施状況は順調である。中期計画最終年度である次年度は、基礎的知見の蓄積と資料調査結果のデータベース目録化を推進し、最終的なまとめを行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財修復材料の適用に関する調査研究(3)－⑤)		
【事業概要】文化財修復においては、使用する材料及び手法の適切な適用が修復後の作品の状態を大きく左右する。本プロジェクトでは、文化財の種類を問わず修復に用いられる材料について、修復現場での具体的な使用を念頭に材料の分析及び評価を行い、個々の材料について分野にとらわれず横断的な研究を行うことで、最適な使用方法や使用条件の確立を目指す。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、岡田健（センター長）、本多貴之（明治大学講師・客員研究員）、宇高健太郎（客員研究員）、酒井清文（客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、山下好彦（任期付研究員）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）			
【主な成果】 (1) 絵画修復材料に関する化学分析、クリーニング方法の検討実験を行った。 (2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価を開始した。 (3) 工芸品の調査として、染織品及び漆芸品についての調査・分析をし、評価方法について検討した。			
【年度実績概要】 (1) 絵画修復材料に関する科学分析及びクリーニング方法の検討実験 ・ 絵画の修復材料に使用される膠について、その最適な適用条件を検討した。調製条件の異なる膠は、ゼリー強度や表面張力などの物性において差異があり、適切な膠を選択することで、絵画や建造物彩色の剥落止めを安全に行うことが可能になる。本年度は、擬似劣化試料を作製し、そこへの各種膠の適用を検討した。 ・ 日本画の修復に用いられる古糊の使用時に限定的に行われる「増裏打ち」という作業の熟練度と古糊使用との関連について、接着強度と技術者の熟練を中心に解析した。 ・ 日本画で見られる緑青焼けについて、裏打ち紙の分析を行うことで劣化の状態を確認し、報告を行った。 ・ 文化財修復に用いられるフノリについて調製条件による物性の差異を科学的に評価し、IIC 香港大会において発表を行った（26 年 9 月）。 (2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価 ・ 厳島神社において、大鳥居修理材料について現地曝露試験を行い、耐久性に関する評価を目視観察及び測色により行ってきたが、その結果、良好な経過を示した試料について 26 年 10 月に実際の試験施工を行った。 ・ 臼杵磨崖仏で現地に設置している石材の修理材料について、経過観察及び評価を行った。（27 年 1 月） (3) 工芸品の評価方法についての検討 ・ 染織文化財について、国内の生糸の調査及び韓国での摺箔技法とそこに使用されている材料について現地調査を行った（26 年 8 月、27 年 1 月）。また、染織品に使用されている材料について分光分析を使用して評価方法を検討した。 ・ 漆芸文化財について、塗膜の物理強度の測定方法を検討した。塗膜の強度は従来塗膜全体を剥離して測定する方法のみ使用されていたが、漆は紫外線により表面のみ劣化していく。そのため、表面のみの強度測定方法について MSE 試験の適用を検討した。次年度以降、実用的な使用方法へと発展させる予定である。27 年 3 月に沖縄で使用されている漆芸品の材料調査を行ったほか、国内の採漆現場（26 年 7 月）や精漆工場（26 年 12 月）の現地調査を行った。			
【実績値】 論文件数 1 件（①）、発表件数 3 件（②～④）			
【備考】 論文等 ① 岡泰央、早川典子、高井由佳、後藤彰彦：増裏打ち作業における古糊と打刷毛の接着効果について：保存科学 54 号、pp.15-26、27 年 3 月 ② Noriko Hayakawa, Keiko Kida, Takuya Ohmura, Noriko Yamamoto, Kyoko Kusunoki and Wataru Kawanobe : Characterization of Funori as a conservation material: Influence of seaweed species and extraction temperature, IIC-HongKong, Hongkong city hall, 26 年 9 月 24 日 ③ 早川典子：典籍類に使用された「豆糊」に関する赤外分光分析、文化財保存修復学会第 36 回大会、明治大学、26 年 6 月 8 日 大河原典子、綿引はるな、早川典子：日本画の修復および制作に用いる膠の基礎的特性に関する報告、文化財保存修復学会第 36 回大会、明治大学、26 年 6 月 8 日			



厳島神社における修理試験施工



厳島神社における修理試験施工

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4352

自己点検評価調査

研No.38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：現在実際に修復されている作品に即し、即時性・緊急性の高いテーマ設定をしており、必要性・公共性が高い研究を行った。また、国際学会においても成果を報告し、かつ国内材料と海外の材料の比較についても現地調査をし、国際性の高い成果を得ている。 独創性：修復材料に関する科学分析を現地調査と常に緊密に関連づけながら遂行しており、従来にはない視点で研究を進めることができています。 発展性：文化財の修理材料を横断的に扱うことで、俯瞰的・網羅的に研究を遂行できており、材料同士の相関のみならず文化財修復全体を視野に入れて発展させていくことが可能になる。 効率性：所内の横断的なメンバーにより研究を分担し、他機関からの調査派遣依頼等に基づき研究を推進しており、効率よく推進することを可能とした。 継続性：文化財修復材料に関する基礎的研究と現場への適用研究との両者を連携づけ、十分な成果を得られている。 正確性：複数の分析手法、多岐にわたる修復材料を網羅し、科学的客観性を確保している。特に、従来は数値化しにくいと言われていた修理技術者の「技術」についても熟練者と非熟練者による作製試料を評価することで、数値化することに成功した。						

2. 定量的評価

観点	論文件数	発表件数				
評価	B	B				
判定理由 論文件数：雑誌『保存科学』に、修理技術者の技術と材料に関する報告を掲載し、目標の件数をクリアした。 発表件数：膠、豆糊、和紙、充填材等について文化財修復学会で報告し、さらに IIC 香港においてフノリに関する発表を行うことにより、目標の件数をクリアした。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財修復に使用されている材料について、広範囲に網羅した研究を行い、それぞれについて科学的な分析評価を行うことで現場での問題点を具体的に解明し、かつ改善方法について提示することができた。実際の修復現場で、これらの成果が具体的に活用され始めており、基礎研究を遂行しながら、具体性、発展性の高い研究を行うことができており、今後は、さらに修復現場における適用性の高い研究へと発展することが可能である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、文化財修復現場での適用を念頭に材料の精査を遂行できている。また、本年度は材料のみならず修復現場で材料に関連した技術や、材料の劣化現象の解明等まで含めて成果を得ており、前年度よりも研究を深めることができています。 中期計画最終年度である次年度は、本年度の成果をもとに、さらに発展させた研究を行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究(③-⑥)		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物等従来の文化財とは、規模、材質、製造方法等に大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両等の保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 朽津信明（修復技術研究室長）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、小林芳妃（研究補佐員）、小堀信幸（船の科学館・客員研究員）、横山晋太郎（客員研究員）、長島宏行（日本航空協会・客員研究員）、堤一郎（中央大学非常勤講師・客員研究員）			
【主な成果】 (1) 洋紙：明治時代になってから急速に普及した洋紙及び没食子インクで記された文章の保存と修復に関して、各種書類の保存と修復に関して、調査研究を行った。 (2) 屋外展示物：屋外展示されている大型構造物、鉄道車両や航空機等の文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外曝露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。 (3) 建造物・構造物：佐渡金銀山遺跡、長崎県端島（軍艦島）、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉等、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行い、地盤工学会にて発表を行った。 (4) 報告書：前年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 (1)洋紙の保存と修復： ・明治維新以降急速に普及した洋紙の保存に関して、建築物や列車（御料車など）の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復に関して、国内の専門家と共に調査研究を行った。さらに、国内の専門家に加えて海外の博物館や研究所において同様に保存や修復を担当している専門家を招き、保存と修復手法について発表、討論した研究会を26年11月21日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。 ・メキシコ及びカナダの国立公文書館において、洋紙の保存と修復に関する現状の調査を実施するとともに関係者と情報交換を実施した。 (2)屋外展示物： ・ドイツの産業遺産を往訪し、産業遺産の保存理念や、周囲との関係を考慮した保存手法や修復手法の現地調査を実施した。 ・屋外展示されている鉄道車両や航空機などの、金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し、日本国内の6ヵ所において曝露実験を実施し、塗装の劣化と屋外環境との相関について調査を実施した。 (3)建造物・構造物：新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市菰山反射炉、山口県萩市の反射炉や長崎県長崎市端島（軍艦島）、更には足尾銅山跡の各施設等、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する現地調査を実施し、現状を把握するとともに、具体的な修復手法に関する討論を実施した。特に菰山反射炉における石造物に対する含有水分量の違いによる劣化状況の違いに関して1年間現地で計測した結果を元に地盤工学会にて発表を行った。 (4)報告書：前年度実施した研究会『近代テキスタイルの保存と修復』をまとめ報告書を製作し配布した。 (5)その他：航空機関連の設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法の研究を実施した。			
【実績値】 論文等 2件 (①～②)、発表件数 4件 (③～⑥)、報告書刊行数 1件 (⑦)			
【備考】 論文等 ①森井順之、朽津信明、中山俊介：史跡・菰山反射炉の保存環境について、土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム、地盤工学会、pp. 167-168、26年10月 ②中山俊介：近代テキスタイルの保存と修復、近代テキスタイルの保存と修復、pp. 4-17、27年3月 発表 ③中山俊介：洋紙の保存と修復、洋紙の保存と修復に関する研究会、東京文化財研究所、26年11月21日 ④中山俊介：保存科学による文化遺産の修復-建造物を中心に-、台湾総督府鉄道部の保存修復活動における講演会、国立台湾博物館、26年12月20日 ⑤中山俊介：(基調講演)近代文化遺産の保存と動態保存に関して、第33回シンポジウム「日本の技術史を見る眼」、中部産業遺産研究会、27年2月22日 ⑥森井順之、朽津信明、中山俊介：史跡・菰山反射炉の保存環境について、土木史跡の地盤工学的分析・評価に関するシンポジウム、地盤工学会、26年10月10日 報告書 ⑦『近代テキスタイルの保存と修復』、東京文化財研究所、27年3月			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4361

自己点検評価調査

研No.39

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：明治、大正、昭和初期に作成された公文書など、重要文化財指定された物も数多いが、紙が酸性化するなど経年劣化が多く見られる。加えて没食子インクを使って記述された書類のインク焼けも問題となっている現状を踏まえ、保存及び修復手法の研究の必要性が認められる。 独創性：今まであまり問題視されて来なかった洋紙及びそれに使われている没食子インクが原因となって劣化が引き起こされる現象に関して着目し、その保存と修復手法に関する調査研究を実施する事が出来た。 発展性：洋紙の保存と修復は今後ますます対象範囲が拡大する。それに備えた研究が実施出来た。更には、金属製文化財の保存に関する対処法の研究は今後も益々必要とされるテーマでありそれに寄与する事が期待される。 効率性：テーマを絞る事で高い専門性を持った研究者や技術者との交流も生まれ今後の情報収集にも大いに寄与する体制が構築できた。 継続性：屋外保存された金属製文化財の維持に最も必要である塗装の耐久性及び防錆効果に関する研究のために行っている曝露実験は長期にわたる金属製文化財保存の維持に貢献する。 正確性：これまでに実施した現地調査の結果、現場にて劣化状態を観察し、これまでに得た知見・知識をもとにそれに適した修復手法の選択を行った。						

2. 定量的評価

観点	論文等	発表件数	報告書刊行数			
評定	B	B	B			
判定理由 論文等：葦山で実施した石造物に関する現地調査と本年度通して行ったテキスタイルに関する調査研究の成果をまとめて2件の論文等を発表し、当所計画の目標を達成した。 発表件数：本年度調査した洋紙に関する調査結果、また、建造物の保存と修復に関する保存科学の概要について、更には近代文化遺産の保存理念等に関する調査研究の成果を4件発表し当所計画の目標を達成した。 報告書刊行数：テキスタイルに関する調査研究成果をまとめた報告書を1冊刊行し当所計画の目標を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することができた。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点等も新たに把握することができた。重要文化財指定も受けている行政文書に代表される洋紙と、記すのに使われている没食子インクが原因となる洋紙の劣化に関して着目し調査研究を実施した後、研究会を開催し多くの貴重な知見を得る事が出来、また新たな研究者との連携も可能となった。また、史跡指定地内に立てられた産業遺産の保存と修復に関する理念を形成するための調査を通して関連する専門家とのネットワークが出来、更に続く研究を進める事ができる様になった。更に今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事ができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	明治以降記録素材として活用された洋紙の保存と修復手法に関する調査研究及び研究会を通じて今中期計画の4年目として当所の計画とおり調査研究を順調に遂行する事ができた。それに加えて屋外保存されている金属製文化財の保存手法の調査研究、史跡指定地内の建造物及び構造物の保存理念、並びに修復理念に関する調査研究を実施し検討を深める事ができた。中期計画最終年度である次年度も近代文化遺産に使用されている新しい材料に関する調査研究を行う。近代文化遺産に使用されている材料は多種多様であり、その全てに関して対応しかねているのが現状であり、毎年度着実に調査研究を進める必要がある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)		
【事業概要】 我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、吉田直人（主任研究員）、大塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、酒井清文（客員研究員）、宇高健太郎（客員研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、加藤雅人（国際情報研究室長）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）、前川佳文（絵画保存修復士・客員研究員）			
【主な成果】 高松塚古墳・キトラ古墳壁画共にクリーニングに効果が期待される酵素群の利用に関する研究を継続実施し、キトラ古墳壁画では墓室壁画からの取り外しによって分かれている漆喰の再構成のための修復材料の検討を行った。修理施設の生物・温湿度環境の安定化のための調査を実施した。劣化原因調査で採取された両壁画由来の微生物株について整理と公的機関への寄託についての準備を行った。高松塚古墳壁画の色料について、奈良文化財研究所と共同で調査を行った。			
【年度実績概要】 ○高松塚古墳壁画 生物・環境調査：修理施設の修理作業室等において、昆虫トラップ設置による害虫等生息調査、浮遊菌・付着菌調査を定期的に実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施している。修理施設内各所の温湿度の測定も継続実施し、適切な温湿度条件を安定して維持するための空調機の制御方法についても検討を行った。 高松塚古墳の微生物分離株は、劣化要因の調査や漆喰壁からのカビの除去試験などで利用されたのち、アンプルとして保存されており、貴重な研究資源となっている。これらの微生物株を保存していくため、公的機関への寄託を念頭に、菌株のデータ集、基本台帳やシークエンスデータファイルの作成を実施した。 修復研究：壁画のクリーニング方法として、酵素の使用法に関して、現場での作業性の向上を検討し、適用した。また、再結晶化した表面のカルサイト部分について、国宝修理装演師連盟と共同し、新たに損傷地図の作成を行った。 材料技法調査：色料の分析調査を継続的に実施している。新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。これまでに取得した分析データの整理を行った。 ○キトラ古墳壁画 生物・環境調査：24年9月に石室内から採取した試料、及び25年2月に実施された盗掘口のステンレス台取り外しに伴う盗掘口・閉塞石からの微生物採取試料について、菌叢を調査した結果をとりまとめた。また、キトラ古墳石室が発掘された16年から石室の埋戻しが行われた25年までの期間にわたる微生物の調査結果を踏まえ、微生物相の推移についてとりまとめを行った。キトラ古墳に由来する微生物株についても、高松塚古墳由来の微生物株と並行して、公的菌株保存機関への寄託を念頭に、基本台帳とDNAシークエンスデータファイルの作成を実施した。 修復研究：漆喰の再構成を行うために、修復材料の検討を行った。また、表面のクリーニングのために酵素の使用を検討し、汚れの状態によって異なるクリーニング手法を適用することを確認した。 材料技法調査：新たに蛍光分光法を適用するための基礎的検討を行った。これまでに取得した分析データの整理を行った。 ○その他 ・本年度2回実施された文化庁による国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して研究員を派遣し協力した。26年8月23日～31日（4人）、27年1月17日～25日（5人）。 ・東京国立博物館で開催された特別展「キトラ古墳壁画」で、輸送、梱包、環境調整、画像展示等について協力した。 ・文化庁委託事業「古墳壁画の保存・展示の在り方に関する調査」を受託し、修理終了後の当分の間適切な保存管理・公開を行うための施設のあり方を検討するための基礎データ収集作業を実施した。 ・福岡県うきは市珍敷塚古墳で保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が実施するモニタリングへ指導助言を行った。同県日岡古墳で冬季に発生する保存施設内壁の結露への対策を講じるため、施設の壁面温度の計測を行った。 ・古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、26年5月8日、11月10日、27年2月4日の3回にわたり、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を開催した。 ・27年1月7日に文化庁が開催した第16回古墳壁画の保存活用に関する検討会に事務局として出席し、報告を行った。			
【実績値】援助・助言実施件数 2件、研究報告2件（①②）			
【備考】 ①佐藤嘉則・木川りか・喜友名朝彦・立里臨・杉山純多：パイロシークエンス法によるキトラ古墳石室内の微生物群集構造解析、「保存科学」54、27年3月 ②木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・佐野千絵・杉山純多：キトラ古墳の微生物調査報告（2012年～2013年）および2004年から2013年までの微生物調査結果概要、「保存科学」54、27年3月			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4411

自己点検評価調査

研No.40

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：25年度に埋め戻しが行われたキトラ古墳について、石室が発掘された16年からの微生物相の推移についてとりまとめを行うなど、作業の進展に伴う状況の把握、記録化を適切に行っている。 独創性：両古墳の石室等から採取された微生物株は、古墳環境において生物劣化に関わる微生物類の性状を解析する上で貴重な研究資源となった。また今後、古墳環境における生物劣化を調査していくうえでも比較株として重要な役割を担うことが期待される。これらの微生物株を将来に残し、広く今後の研究活動に活用していただくためにも公的機関への寄託の準備を進めた。 発展性：各地の装飾古墳の保存・活用に関して、積極的に助言・提言を行うことができた。 効率性：修理施設の環境管理の課題を解決するために、環境計測データをもとに空調機の運用上の課題について迅速に調査を実施し、どの部分に問題があるのかを明確にすることができた。 正確性：客観性のある研究成果をもとに適切な材料選択を行い、修復作業に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数	研究報告				
評価	B	B				
判定理由 援助・助言実施件数：修理施設の環境維持管理に関して、常に文化庁・奈良文化財研究所現地担当との連携を取り、的確な判断により作業の進行を助けている。修復作業に関しても随時現地へ赴き、詳しく状況を理解し、予定通り適切な助言を行った（2件、のべ56回）。 研究報告：調査研究について2件の報告を上げることができ、十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各種調査によって収集したデータを整理保存するとともに、将来に向けても活用できるよう準備を進めるなど、高松塚・キトラ古墳壁画の文化財としての価値を伝えていくための作業を周到に続けている。 材料調査と修復作業との連携、修理施設の環境改善に関する文化庁・奈良文化財研究所との連携、将来における高松塚古墳壁画の保存活用に向けての奈良文化財研究所の考古学調査との連携も適切に図られている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	19年度に石室ごと解体され、10年を目途に修理作業が続けられている高松塚古墳壁画については、修理後の「将来的には、カビ等の影響を受けない環境を確保した上で現地に戻す」という保存方針のもと、本年度も修理の完成に向けた調査と修復材料の検討が着実に進められており、安全性と正確性に考慮しつつ、重要な成果をあげている。修理施設の環境管理の課題に対しても迅速に対応している。中期計画最終年度である次年度も引き続き奈良文化財研究所との連携のもと事業を推進する。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力(4)－①)
【事業概要】我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力をを行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】廣瀬 覚、降幡順子、青木 敬(以上、都城発掘調査部主任研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、高妻洋成(保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、辻本与志一(株式会社文化財保存・客員研究員)、杉岡奈穂子(保存修復科学研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)、肥塚隆保(奈良文化財研究所副所長・客員研究員)、岡田健、早川泰弘、朽津信明、犬塚将英、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所調査部)、相原嘉之(明日香村教育委員会文化財課)	
【主な成果】 文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、仮設保護覆屋解体作業の立会調査や解体後の記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討にすにあたり、技術的な支援・協力を行った。	
【年度実績概要】 (1)高松塚古墳 ・石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、石室解体作業の3次元アニメーション(長編)、及びそのモデル作成を行った。また、目地漆喰の保管兼展示用の台座(南壁石一西壁石1間)を作成した。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析による材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。 ・26年8月・27年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際し、解説員として研究員(延べ21人)を派遣した。 (2)キトラ古墳 ・キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業において、立会調査を実施した。 ・仮設保護覆屋解体後、墳丘整備前の記録として、墳丘南側部分の3次元レーザー測量を実施した。 ・東京国立博物館「特別展 キトラ古墳壁画」開催にあわせ、(株)凸版印刷が作製したキトラ古墳の高画質映像の内容につき、資料提供と助言を行った。 ・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に建設予定の体験学習館の展示内容につき、資料提供と助言を行った。 ・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に設置予定の解説パネルの内容につき、資料提供と助言を行った。 ・キトラ古墳天文図につき、国立天文台の研究者と共同研究を実施した。観測年代等につき、新たな分析結果を得た。 ・報告書未掲載の出土遺物である骨片31箱分について、クリーニング、強化処置、接合などの保存処理を実施した。 ・墓道部版築の剥ぎ取り資料の活用を図るとともに、版築層の粒度分布に関する調査を実施した。 ・出土遺物の定期的な点検作業、環境モニタリングを実施した。	
キトラ古墳覆屋解体後3D測量データ	
【実績値】 論文数9件(①～⑨)	
【備考】 ①若杉智宏・水野敏典・長谷川透「キトラ古墳の発掘調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月) ②井上直夫「キトラ古墳壁画のフォトマップ撮影」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月) ③福永香・高妻洋成「壁画の下に漆喰を見たい!」(特別展図録「キトラ古墳壁画」コラム 26年4月) ④高妻洋成「キトラ古墳壁画の材料調査」(特別展図録「キトラ古墳壁画」各論 26年4月) ⑤降幡順子「キトラ古墳出土ガラス小玉(第135次)」(『奈文研紀要2014』pp.122-123、26年6月) ⑥赤田昌倫他「高松塚古墳壁画の材料調査-西壁女子群像の赤衣像青色裳に使用された色料について-」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』pp.72-73、26年7月) ⑦降幡順子他「高松塚古墳壁画の赤色・黄色色料に関する調査」(『日本文化財科学会第31回大会要旨集』pp.204-205、26年7月) ⑧Tomohiko Kiyunaa, Kwang-Deuk Ana, Rika Kigawab, Chie Sanob, Sadatoshi Miurab, Junta Sugiyamac「"Black particles", the major colonizers on the ceiling stone of the stone chamber interior of the Kitora Tumulus, Japan, are the bulbiferous basidiomycete fungus <i>Burgoa anomala</i> 」(『Mycoscience』2014 26年10月) ⑨木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・杉山純多「キトラ古墳の微生物群調査報告(2012～2013年)および2004年から2013年までの微生物調査結果概要」(『保存科学』54、27年3月)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4412

自己点検評価調査

研No.41

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：キトラ古墳の整備にむけ、仮設保護覆屋の解体工事の進展に合わせ、随時、立会調査と記録作業を適切に行った。 独創性：当研究所の独自性を活かし、保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・整備・活用に助言を行った。また、キトラ古墳に関する調査研究の蓄積を活かし、東京国立博物館における展示公開（特別展「キトラ古墳壁画」26年4月22日～5月18日）にも主体的に関わった。 発展性：壁画・装飾古墳や緊急性を有する文化財の保存・活用に対する新たな方向性を示すことができた。 効率性：立会調査での指示等により、キトラ古墳の仮設保護覆屋解体作業を迅速に実施することができた。 継続性：整理作業・分析調査を継続的に遂行し、今後の保存・活用にむけた成果を得た。 正確性：発掘調査の成果を再現動画の作成や古墳整備に正確に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数					
評価	B					
判定理由 論文数：高松塚・キトラ古墳の保存・活用に資する学術的成果を論文等にまとめ、目標の本数を達成することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画材料の分析調査が進み、また、キトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業が完了したことにより、今後の保存・活用・整備等の事業が円滑に進むものと期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の4年目にあたる26年度も、高松塚・キトラ両古墳の保存・活用に関する業務を遂行し、重要かつ緊急性を有する文化財の今後の保存・活用に対して大きく貢献することができた。最終年度となる27年度に向け、継続的に着実な成果を蓄積することができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－②)		
【事業概要】 本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を明らかにすべく、遺跡周辺の調査を行うものである。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。この遺跡の実体解明及び保存整備に資するため、2008 年度より発掘調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、降幡順子(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 本年度は檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所において調査を実施した。 A区では一部、古代の遺構面を検出した。B区では、8世紀後半から平安時代頃の瓦窯を1基検出した。			
【年度実績概要】 国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所(以下、国交省)が実施する、国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)整備工事にともなう嚴重立会等調査である。調査地は、檜隈寺跡の北の丘陵地から、史跡檜隈寺跡の東側に沿って南に延び、塔跡の東側に至る範囲の工事立会(A区)、檜隈寺跡の北の丘陵地の西斜面の工事立会(B区)の2カ所である。 A区では、現代の造成盛土や耕作土などの中で収まるところがほとんどであったが、一部、遺構面を検出した部分については、国交省の理解と協力の下、設計変更を行い遺構面は現状保存された。 B区では、東西方向を主軸とし、西側に開口する瓦窯を1基検出した。窯の構造は有畦式平窯で、窯体の残存長は約2.3m、最大幅は約1.8mである。出土遺物のほとんどは、7世紀後半から8世紀初頭の軒瓦を含む瓦類である。しかし、出土遺物の中に平安時代になる土器がわずかに出土していることや、瓦窯の構造からみて、8世紀後半から平安時代頃のものとして推定される。なお、本瓦窯は、国交省の協力の下、現地保存された。 調査期間は26年5月15日から6月17日まで、調査面積は269㎡である。 調査地：檜隈寺跡北側の丘陵地と東側の平坦部(A区)と檜隈寺跡北西の斜面地(B区) 調査期間：26年5月15日～6月17日 調査面積：269㎡ 調査成果：A区 古代と推定される遺構面、瓦溜まり1基 B区 瓦窯1基 8世紀後半から平安時代の有畦式瓦窯1基 出土遺物：瓦、土器など。			
			
			B区 瓦窯検出状況 (西から見る。窯体内は南半のみ掘り下げ。 周囲の溝は調査用排水溝)
【実績値】 発表件数：3件(論文等2件①・③、報道発表1件②) (参考値) 出土遺物：土器1箱、鉄釘1点、瓦・焼土塊24箱(軒丸瓦4点、軒平瓦4点) 記録作成数 遺構実測図10枚、写真(4×5)180枚、デジタル写真136枚、デジタルメモ写真558枚			
【備考】 ①森先一貴「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次)」『奈文研ニュース』No.54 26年9月 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次調査)記者発表資料」26年7月29日 ③森先一貴ほか2名「檜隈寺瓦窯の調査(飛鳥藤原第181-4次調査)」『奈良文化財研究所紀要2015』27年6月予定			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4421

自己点検評価調査

研No.42

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国営公園整備事業の事前調査として迅速に対応した。 独創性：檜隈寺周辺において、初めてとなる瓦窯を検出した。 発展性：檜隈寺の奈良・平安時代における歴史、檜隈寺周辺の遺構状況の解明について重要な資料を得た。 効率性：緊急性の高い開発事業の事前調査として迅速に対応するため、最小限の人数と期間で必要な調査成果を得られるよう、適切かつ効率的に調査を実施した。 継続性：20年度から檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査を計画通り実施した。 正確性：今後の調査研究に資するよう、遺構・遺物の地域的・年代的特性を踏まえ、正確かつ的確な記録を作成した。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					
判定理由 発表件数：当初予定の3件を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査では、檜隈寺に関連すると見られる瓦窯を初めて発見し、奈良・平安時代における檜隈寺の歴史、檜隈寺周辺の実態解明について重要な資料を得た。文献資料に乏しい檜隈寺に新たな知見を追加する貴重な発見である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、国営公園整備事業に関わる事業にともない、檜隈寺の全体像復元、歴史の解明に向け、貴重な資料を得ることができた。中期計画の4年目に当たる26年度の調査成果により、最終年度となる27年度に向け、研究の蓄積を加えることができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、併せて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 荒木臣紀（保存修復課調査分析室長）、井出浩正（調査研究課考古室研究員）、池田宏（上席研究員）、伊藤嘉章（学芸企画部長）、伊藤信二（広報室長）、恵美千鶴子（客員研究員）、遠藤楽子（企画課出版企画室研究員）、沖松健次郎（保存修復課保存修復室主任研究員）小野真由美（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、小野塚拓造（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、小山弓弦葉（調査研究課工芸室主任研究員）、勝木言一郎（企画課出版企画室長）、金井裕子（企画課特別展室研究員）、河野正訓（調査研究課考古室アソシエイトフェロー）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、鬼頭智美（企画課国際交流室長）、木下史青（企画課デザイン室長）、救仁郷秀明（列品管理課登録室長）、小泉恵英（企画課長）、後藤健（特任研究員）、小林牧（博物館教育課長）、酒井元樹（保存修復課保存修復室主任研究員）、澤田むつ代（客員研究員）、品川欣也（調査研究課考古室研究員）、島谷弘幸（副館長）、白井克也（調査研究課考古室長）、鈴木希帆（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、鈴木みどり（学芸企画部博物館教育課ボランティア室長）、関紀子（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、瀬谷愛（列品管理課平常展調整室研究員）、高木結美（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、高橋裕次（博物館情報課長）、竹内奈美子（調査研究課工芸室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、田島太良（列品管理課登録室アソシエイト・フェロー）、谷豊信（学芸研究部長）、塚本磨充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）、富田淳（列品管理課長）、西木政統（調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー）、平河智恵（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、松嶋雅人（企画課特別展室長）、丸山士郎（列品管理課平常展調整室長）、三笠景子（保存修復課保存修復室研究員）、三田覚之（調査研究課工芸室研究員）、六人部克典（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、村田良二（学芸企画部博物館情報課情報管理室長）、山下善也（調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）、横山梓（学芸企画部企画課特別展室研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後・収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を学会・研究会・学術雑誌・書籍等に発表・公開した。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会等で研究成果を発表した。 ・学術雑誌等に各種の論考を掲載するとともに、著作を刊行した。			
【実績値】 ・学会・研究会等発表件数：95 件 ・論文等掲載数：120 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：学界動向に留意するとともに、社会的な関心や特集展示、特別展と関連付けて研究を行っている。 独創性：当館のコレクションは国内外に類例のないもので、常に新規の知見を見出している。 発展性：蓄積されてきたコレクションに対する知見をもとに、新たな視点を持った研究を行っている。 効率性：所蔵品の管理や展示・外部への貸出等、他業務に多く時間を割かれながらも、成果を蓄積している。 継続性：各研究員の長期にわたる学術的関心をもとに研究を行っている。 正確性：実証に基づいた確実な研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会 等発表件数	論文等掲載数				
判定	B	B				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数： 研究機関の規模（研究員の人数）と業務の繁多を考慮した上で、過去に比べて遜色のない成果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費等の獲得も増加し、それらの調査研究を基礎とした研究成果を順次公開できている。 また、また外部機関との共同研究の実施を行うとともに、各ジャンルにわたり、学術情報の公開を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画に基づき、順調に進捗している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別調査法隆寺献納宝物(第36次)「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」(第1年度) (5)-①		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、36年にわたって献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)、池田宏(学芸研究部上席研究員)、三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸室研究員)、東野治之(奈良大学教授、東京国立博物館客員研究員)、新川登亀男(早稲田大学文学研究院教授)			
【主な成果】 重要文化財「聖徳太子伝私記(古今目録抄)」を調査し、『法隆寺献納宝物特別調査概報36』「古今目録抄 上巻表」を刊行した。			
【年度実績概要】 館内職員および外部研究者により、下記の日程で原本調査を行った。 26年 8月25日、26日 古今目録抄 上巻 調査(本文及び訓点等の確認)。 12月3日 原本撮影作業 27年 1月7日、8日 原本撮影作業 1月15日 原本校正作業 原本調査完了後、報告書の編集に着手し、本資料の一部の高精細画像と釈文を収録した『法隆寺献納宝物特別調査概報36 古今目録抄 上巻表』を刊行した。			
			
重要文化財「古今目録抄」			
【実績値】 調査件数: 1点 調査日数: 3日間			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：当該作品は学術的な研究が進み、より詳細な本文情報が求められているため。 独創性：原本を直接参照することにより、他にない情報を提供できる。 発展性：調査成果の公刊により、古代史や文学研究に寄与するところが大きい。 効率性：必要最小限の経費と日程で実施しているため。 継続性：次年度以降に残余の部分について調査と報告書の刊行を行う。 正確性：本分野の代表的研究者の参加を得ており、提供する情報の質は高い。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数				
判定	B	B				
判定理由 調査件数：予定どおりの件数を調査した。 調査日数：予定どおりの日数の調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の件数と内容の文化財の調査を実施し、その成果を公刊した。残りの部分については4年計画で、同様の調査と報告書作成を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	未調査の文化財を含め、計画的に調査の実施と報告書の刊行を行っている。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」第12回		
【事業概要】 館書跡収蔵品・寄託品の中で、平安時代から江戸時代にわたる歌書、物語、願文、経典などの書跡類を調査する。この分野ではすでに平安時代の作品を中心とした図版目録『日本書跡篇 和様 I』『日本書跡篇 古写経』を刊行しているが、その後の新規収集品及び寄託品を対象とする。特に古筆切となっている断簡類の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに、法量計測など基礎データを収集し今後の研究に便宜を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）、高橋裕次（博物館情報課長）、藍原有理子（東京国立博物館調査研究課アソシエイトフェロー）、恵美千鶴子（東京国立博物館客員研究員）、赤尾栄慶（京都国立博物館上席研究員）、羽田聡（京都国立博物館保存修理指導室主任研究員）、野尻忠（奈良国立博物館学芸部企画室長）丸山猶計（九州国立博物館文化財課主任研究員）、一瀬智（福岡県立アジア文化交流センター展示課研究員）、吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産部歴史研究室長）、田中知佐子（大倉集古館副主任学芸員）			
【主な成果】 本年度は当館寄託受入となる「大日本古写経」に収められた写経断簡類について、作品の名称、制作年代、形状、界線等について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『大正大蔵経』の本文との照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について法量を計測した。なお、本年度はスケジュールの都合により調査会場が狭隘であったため、高精細画像の撮影は実施しなかった。			
【年度実績概要】 本年度寄託受入作品のうち書跡分野「大日本古写経」所収の写経断簡類について次の項目について調査を実施した。 1, 名称・通称の検討、2, 制作年代、4, 形状性質の確認、5, 本紙の法量計測、6, 出典の推定、8, 使用料紙の分析、9, 界線の分析、10, 記載文字の判読、11, 書誌情報の確認 調査対象：「大日本古写経」「古写経貼交屏風」等 調査日：27年2月16日(木)～18日(金)。			
【実績値】 調査件数：「大日本古写経」「古写経貼交屏風」等4件 調査日数：3日間 調書作成：207枚 (参考値) 調査人数：参加者 23人日(のべ)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館蔵品の収集、寄託品の受入が行われる適切な段階で実施しているため。 独創性：館蔵品・寄託品を対象とした詳細な調査で、他では実施できないため。 発展性：調査成果は今後の展示への反映や目録の刊行等につながるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：館蔵品・寄託品の調査を毎年蓄積しているため。 正確性：各参加者の専門性を活かして、正確な調査内容となっているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数	調書作成			
判定	B	B	B			
判定理由 調査件数：所期の件数を調査した。 調査日数：所期の日数の調査を行った。 調書作成：今後の研究に十分な調書の作成を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後の研究に必要な件数と内容の文化財の調査を実施している。本年度は新規に寄託を受け入れる大規模な資料について調査を行い、所期の点数を調査できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査は、所蔵・寄託文化財の持つ情報を詳細に把握し、公開するためのものである。毎年度適切な材料を選択し、実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 特別調査「工芸」第6回(5)－①)
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の育児休暇や他業務を鑑み、今年度は金工・漆工の調査会を行うこととする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 竹内奈美子
【スタッフ】 伊藤信二(学芸企画部広報室長)、酒井元樹(保存修復課保存修復室研究員)、永島明子(京都国立博物館学芸部列品管理室主任研究員)、末兼俊彦(京都国立博物館学芸部企画室研究員)、清水健(奈良国立博物館学芸部企画室主任研究員)、田澤梓(奈良国立博物館学芸部アソシエイトフェロー)、川畑憲子(九州国立博物館学芸部企画課文化交流展室研究員)、望月規史(九州国立博物館学芸部文化財課研究員)	
【主な成果】 東京国立博物館の金工・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。今後の列品の公開に知見を反映し、展示内容を向上できる。金工調査では、今年度は和鏡を取り上げ、4館の研究員やアソシエイトフェローが揃って調査が実施され、特に古代に多く作例がみられる八稜鏡について活発な論議が加えられた。漆工調査では昨年に引き続き、香道具の中でも不定形な様相を示す香簞笥をとりあげ、記述、計測、デジタルカメラ撮影、デジタル顕微鏡撮影の調査を行った。香道具の形式、加飾技法や材料の多様性を示す調査結果が得られた。	
【年度実績概要】 ・金工調査 実施期間 27年3月27日(金) 今年度は金工列品のうち和鏡20面を取り上げ、重要文化財・瑞花双鳳八稜鏡(E-19934)に代表され、特に古代に多く作例がみられる、八稜鏡について活発な論議が加えられた。調査は、まず議論によって文様の形式分類に基づき大まかな年代観を導きだし、さらに個々の鏡について技法などの観点から編年を試みた。その結果、古代の鏡においては寸法に関して規格の存在が想定され、文様に関しては平安時代後期から鎌倉時代にかけて大きな変化が起こり、予想以上に多様な形式が併存していたことが分かった。同時に今後の課題として、出土品などの基準作例や、国内外の作品を視野に入れた研究が必要であることが確認された。 ・漆工調査 実施期間 27年2月19日(木)・20日(金) 漆工列品のうち継続的に香道具をテーマとし、今年度は昨年度に続き、細々とした道具類や多種多様な香木片を引出しの中に収めるための簞笥形式の列品4件をとりあげて記述、計測、デジタルカメラ撮影、デジタル顕微鏡撮影の調査を行った。中でも秋草虫蒔絵提簞笥(H-82)は引き出しの内に小箱を並べ、さらにその内に仕切りを設けて円形合子を並べ収める特異な形式が注目され、香道具の形式の多様性が確認された。また菊水蒔絵香簞笥(H-90)は2段の引き出しの蒔絵装飾に微妙な相異が判明し、多くの内容品からなる香道具は一部に欠損や後補のある可能性が高いことを再認識した。またミニチュアのように小型の香簞笥には、模造珊瑚の使用が認められ、香道具における加飾技法や装飾材料の多様性を示した例と位置付けられた。	
  金工調査風景 漆工調査風景	
【実績値】 調査回数 2回 調査日数 3日 調査員 9名 調査対象作品 24件	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っているため。 独創性：工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化財機構ならではの事業である。 効率性、正確性：本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた精度の高い知見を共有し、議論を深めることができた。 継続性、発展性：本年度の調査事業は6回目の実施となり、継続して行うことができた。これにより、今後の研究推進や展示公開に向け寄与するところは大きいと考えるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：計画通り、金工・漆工それぞれの調査会を実施した。 調査日数：計画通り、それぞれ1～2日にわたる調査を実施した。 調査員：金工・漆工分野とも、各機関専門家がそれぞれ全員揃って調査を行った。 調査対象作品：各分野の調査において極めて効率良く、相当数の作品を調査できた。漆工調査の対象作品は1件に多数の内容品を含むため比較的に作品件数は少ないが、実際には多岐にわたる多数の作品の調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与するという所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査「彫刻」第4回 ((5) -①)		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻を調査し、調査研究報告、論文等の研究活動に結び付け、あるいは寄託の増加、特別展等の企画につなげて展示の質の向上を図る。 今年度は、文化庁所蔵の彫刻を調査し機構所属の博物館において活用の道を探る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】 浅湊毅(学芸企画部博物館教育課教育講座室長)、西木政統(調査研究課絵画彫刻室アソシエイトフェロー)、浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、岩田茂樹(奈良国立博物館学芸部上席研究員)、楠井隆志(九州国立博物館展示課長)、宮田大樹(九州国立博物館展示課研究補佐員)、津田徹英(東京文化財研究所企画情報部文化財形成研究室長)、皿井舞(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、奥健夫(文化庁文化財部美術学芸課主任調査官)、川瀬由照(文化庁文化財部美術学芸課調査官)、井上大樹(文化庁文化財部美術学芸課調査官)			
【主な成果】 (1) 文化庁所蔵の彫刻作品の調査を実施した。 (2) 作品の形状、構造、保存状態などの調査結果を踏まえ、機構内4博物館への貸与作品を決定した。なお、27年度以降の各館の展示等へ活用する予定である。			
【年度実績概要】 (1) 27年3月20日に東京国立博物館内の文化庁分室において「木造不動明王立像」、「銅造薬師如来坐像」、「木造伎楽面」、「木造雲中供養菩薩像」など10件の作品を調査した。 (2) ・文化庁所蔵の彫刻作品10件の、形状、構造、保存状態について調査を実施し、文化庁の担当者より伝来等の説明を受けた。それらを総合し機構内4博物館への貸与作品を決定した。 ・調査対象作品はこれまで展示の機会がほとんど無かったが、今後は各館での展示で活用する予定である。			
			
調査風景			
【実績値】 調査研究会開催数 1回 研究会参加者数 12名 調査作品数 10件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：今回調査した文化庁所蔵作品はこれまで展示の機会がほとんど無かったが、今後は広く公開することができる。 独創性：当機構の彫刻担当職員が集まって調査研究する機会はいまだにない。 発展性：展示等の解説に今回の成果を活かすことができる。 効率性：当機構の彫刻担当職員の大多数が参加し効率よく調査し、受入れ館を決めることができた。 継続性：今回調査した作品は一般にも公開するので、各館を中心に多くの研究者が研究を進めることができる。 正確性：当機構の彫刻担当職員の大多数が集まることによって調査研究の正確性を高めることに努めた。						

2. 定量的評価

観点	調査研究会 開催数	研究会 参加者数	調査作品数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査研究会開催数：予定通り当機構の彫刻担当職員が集まる調査研究会を1回開催した。 研究会参加者数：予定通り当機構の彫刻担当職員、文化庁彫刻担当者が参加した。 調査作品数：文化庁所蔵作品の貸与可能作品を予定通り全て調査することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当機構の彫刻担当職員が集まったことによって効率よく、正確な調査研究を実施することができた。また、これまで活用されてこなかった作品を展示等に供することができるようになった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度も当機構の彫刻担当職員が集まって調査研究を実施する機会を設ける予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 油彩画の材料・技法に関する共同調査 (5)－①)		
【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で 20 年度から開始し、24 年度に継続の手続きを行い、続行しているものである。東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 50 件を調査対象としている。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考ええる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、大久保早希子(東京芸術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、荒木臣紀(保存修復課調査分析室長)、沖松健次郎(保存修復課主任研究員)			
【主な成果】 20 年 11 月から開始した。本調査は、3 年間の調査期間の締結を更新し、さらなる調査を進めている(更新 2 年目)。本年度調査が終了作品は、4 点である。			
【年度実績概要】 26 年度に調査が終了した作品(これまでに調査した作品の追加調査も含む)は、①A-11305 興津富士、②A-11308 森、③A-11250 西村茂樹像、④A-12427 東禅寺事件図、以上 4 点。			
			
油彩画の調査風景			
【実績値】 調査回数 : 2 回 調査作品数 : 4 点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	B	C	B	
判定理由 適時性：展示への活用に資する時宜を得た調査であるため。 独創性：当館保有の油彩画に関して初めての総合調査であるため。 発展性：明治期に油彩画に関して他館との比較研究が可能になるため。 効率性：当初計画を十分に実施することができなかったため。 正確性：調査内容は目的とするメニューを行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数				
判定	B	B				
判定理由 調査回数、調査作品数：ほぼ当初予定通りに実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一連の調査によって徐々に東京藝術大学の同時期の作品群及び他館が収蔵する作品との比較研究が可能になってきている。特にX線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータ間の比較によって、作品の特性のみならず、関係性などについても新たな検討ができるデータが整いつつある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は、博物館側担当者のスケジュールリングに困難があったこと、藝大側の研究室改装などがあり、調査回数及び点数が限定されたが、今年度積み残し分は、更新最終年度の来年度に組み入れて、当初の計画通りのノルマを実施し、『MUSEUM』での発表を行っていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究((5)－①)		
【事業概要】 水漬状態の漆塗籠棺残片(J-39374)のミクロ及びマクロ的な構造を理化学的に調査分析し、合わせて過去の処置事例を検討しながら、水漬状態の資料に対する乾燥方法を確定し、具体的に乾燥処理を行うことを目的とした事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 古谷毅（列品管理課主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）市元 壘（九州国立博物館企画課研究員）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究系客員教授）、今津節生（九州国立博物館学芸研究部博物館科学課長）、高妻洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）、北野信彦（東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員）、望月幹夫（当館客員研究員）、松井敏也（筑波大学准教授・当館客員研究員）			
【主な成果】 ・修理仕様の策定を行い、修理前の事前調査を開始した。			
【年度実績概要】 ・水浸保管中の漆残片の保存状態、形状などについて定期的な点検調査を実施した。 ・奈良文化財研究所にて 26 年 10 月から 28 年 9 月末にかけて本格修理を行うことが決定した。館外での本格的な修理を前に、詳細な状態チェック及び処置前保存状態記録写真撮影を行った。また、奈良文化財研究所に搬入の際には、今後の調査についての打ち合わせを行った。 ・10 月 22 日奈良文化財研究所において、古谷毅（東博）、土屋裕子（東博）、高妻洋成（奈文研）が今後の分析調査の方法、修理工程の内容について検討を行った。			
			
搬出前の状態調査及び記録撮影			
【実績値】 調査回数 6 回 水浸保管中の漆残片の保存状態の調査を継続的に実施した。 調査研究会 1 回 古谷毅、高妻洋成、土屋裕子が参加して、修理についての検討を行った。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性	継続性	効率性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：緊急性が高く、事業完了後は公開を目指した事業を実施した。 正確性：理化学的調査で得られたデータに基づく修理計画立案を目的とする事業を実施した。 継続性：26年10月から28年9月末にかけて本格修理を行うことが決定している。 効率性：出土木材など類似の考古遺物の調査及び保存処置に経験が豊富な奈良文研にて修理を行うことによって効率的な修理に繋がる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査研究会回数				
判定	B	B				
判定理由 調査回数：年度内に十分な内容を伴う調査を予定通り実施した。 調査研究会回数：予定通り1回の研究会を開催し、本格的修理に向けた検討を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本格修理に必要な成果を得て、26年10月より奈良文化財研究所にて本格修理を実施している。27年9月までは詳細な事前調査を行って現状を記録する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	漆塗籠棺残片の制作技法と修理方法の検討は順調に進み、修理にむけて事前状態記録撮影、奈良文研への輸送、修理方針検討会を行なった。来年度9月期までに詳細な構造調査を経て、10月からは樹脂含浸作業へ移行する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8) 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 ((5) -①)
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の仏教絵画を対象として、東京文化財研究所のもつ高精度のデジタル画像調査による共同調査を行い、仏教絵画の価値認識を深め、劣化しない長期保存可能な最高レベルの記録を作成し、作品の保護に寄与することを目指す。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 沖松健次郎（保存修復課保存修復室主任研究員）、小林達朗（東京文化財研究所主任研究員）、城野誠治（東京文化財研究所専門職員）、小林公治（東京文化財研究所広領域研究室長）、江村知子（東京文化財研究所主任研究員）、皿井舞（東京文化財研究所主任研究員）	
【主な成果】 24 年度に高精細デジタル画像撮影を行った国宝「普賢菩薩像 A-1」について東博・東文研両機関研究員による検討会を開催し、撮影画像をもとに「普賢菩薩像」に用いられた技法を詳細に観察、検討した結果、従来絵具で表されていると思われる文様の一部が凹線によるものであることや、着衣の白く光る照量が従来の認識とは逆の構造によって作られていることなど、これまで認識されてこなかった細部の技巧についての知見を深めることができ、今後の平安仏画の美的表現の研究・公開に資するに足る重要な資料を得た。また、来年度も継続的に調査と検討を行うために国宝「孔雀明王像 A-11529」の高精細デジタル画像撮影を行った。	
【年度実績概要】 ・ 国宝「普賢菩薩像」について 25 年度に高精細デジタル画像撮影を行った TIFF 高精細画像 26 点、閲覧用ファイル（Zoomify 形式）26 組を受け入れ、調査成果の共有化を図った。 同画像をもとに東博・東文研両機関研究員による検討会を 26 年 7 月 23 日に東京文化財研究所において開催した。検討会の成果は、小林達朗（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）が、26 年 12 月 9 日に東博研究員の参加のもと、東京文化財研究所企画情報部研究会で「東京国立博物館蔵 国宝・普賢菩薩像の表現―附論 仏画における「莊嚴」」と題して発表した。 ・ 国宝「孔雀明王像」について 27 年 1 月 15 日に高精細デジタル画像撮影を行った。	
 東京文化財研究所における検討会 (国宝「普賢菩薩像」)  国宝「孔雀明王像」調査・撮影風景	
【実績値】 検討会回数 1 回（「普賢菩薩像」26 年 7 月 23 日 於東京文化財研究所） 作品調査回数 1 回（「孔雀明王像」27 年 1 月 15 日 於東京国立博物館） 研究発表回数 2 回 作成データ量 TIFF 高精細画像 26 点、JPEG 画像等による Zoomify 形式 26 組（「普賢菩薩像」）	
【備考】 本年度は、このプロジェクトによって得られた「普賢菩薩像」の画像資料に基づいて東京文化財研究所スタッフ（小林達朗）による研究成果の発表が行われたほか、24 年度に調査を行なった国宝「千手観音像 A-10506」の画像資料、およびその両機関の研究者による検討に基づいて、東京文化財研究所スタッフ（小林達朗）により「美術の術―国宝千手観音像の場合」（『「かたち」再考』東京文化財研究所編 26 年 12 月 17 日）として研究成果が一般に公表され、充実したものとなった。	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本美術史研究において重要な国宝の平安仏画を対象とした研究を、現在最高レベルの高精細調査技術を用いて共同研究を行った。これまでの研究成果が公開されたことで、研究者の高い注目を集め、今年度もそれに連続して調査報告がなされたため。 独創性：同機構内で貴重な文化財を管理するスタッフと最高レベルの高精細画像調査技術を持つスタッフが相互に補完しつつ重要な表現を持っているものを対象に選んで研究を行っているため。 発展性：細部の調査、認識による研究は、仏教絵画以外にも発展的に応用できる研究方法であるため。 効率性：異なる機関のスタッフによる共同研究のため、検討会に参加出来ないスタッフもいたが、スタッフの協力体制が確立しており、美術史的観点からポイントを絞って調査準備をおこなったことで効率のよい調査ができたため。 継続性：来年度も継続的に調査をする準備段階が確立しており、当初計画以上の技術的進歩がみられ、すでに調査済作品と継続しての比較検討がおこなわれているため。 正確性：最高レベルの高精細画像調査技術による調査がなされ多くの美術史上の知見が得られたため。						

2. 定量的評価

観点	検討会回数	作品調査回数	研究発表回数	作成データ量		
判定	B	B	A	B		
判定理由 検討会回数：東京国立博物館、東京文化財研究所のプロジェクトスタッフ以外にも、呼びかけを行い、非常に多くの参加者による充実した意見検討が行われ、従来認識されてこなかった細部の技巧についての知見が得られ予定の成果を残すことが出来た。 作品調査回数：本年度検討対象とした国宝「普賢菩薩像」については、高精細画像調査が昨年度に行われており、本年度には、国宝「孔雀明王像」について、高精細画像調査が行われ、来年度の検討・研究の準備を果たすことができた。 研究発表回数：「普賢菩薩像」の研究成果につき、外部の専門家を含む東博・東文研両機関の研究者が参加する場での研究発表を行うことができ、今後のさらなる研究の可能性について認識を共有できた。また24年度調査の「千手観音像」について、その成果の一部を上記東文研編の刊行書で公開した。これにより、当初の研究者を対象とした報告だけでなく、一般にも広く成果を公表することができた。 作成データ量：TIFF 高精細画像 26 点を記録し、JPEG 画像等による Zoomify 形式による 26 組の閲覧用画像を共有することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高精細デジタル画像撮影の成果を美術史研究に反映させることで、より客観的研究体制を確立しており、画像情報調査のデータも継続的に蓄積が進んでいる。関係する研究者だけでなく広い対象への公開が行われるなど、研究成果の共有も進んでいる。次年度も継続的に調査を行う準備ができしており、更なる研究の進化が期待できる状況にある。

4. 中期計画の実施状況の確認

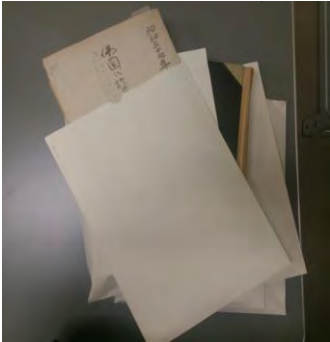
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、共同研究をはじめて4年度目にあたる。個別作品の研究としても重要なプロジェクトであるが、対象とする調査作品を変えることで、研究が毎年蓄積され、総合的な判断へ向けての準備がなされている。これにより日本の仏教絵画に対する広範な視点による研究を導き出すことが可能になると考える。次年度も継続的に調査を行う体制が確立しており、正確性の高い研究により大きな研究成果を発信していくことが期待されている。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究((5)-①)		
【事業概要】 平成 34 年度の東京国立博物館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。25 年度は館内から収集した文書類に加え、過去に収集し整理を必要とする文書類の内容目録を作成した上、保存措置を講じる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 鷲塚麻季（調査研究課主任研究員）、高橋裕次（学芸企画部博物館情報課長）、保坂裕興（客員研究員・学習院大学教授）			
【主な成果】 ・館内各所から収集した、館史関係の文書記録・刊行物類を整理して目録を作成し、今後の館史編纂の利用に供することができるようにした。 ・資料の適切な保存を図るための措置を順次講じた。			
【年度実績概要】 ・アルバイト 1 名を採用し、定期的に資料整理作業を行った。 ・24 年度以前に収集整理した資料について、文書タイトル等の項目の目録への入力を継続した。 ・資料の良好な状態での保存を図るため、さびたクリップの除去、資料のクリーニング、中性紙封筒への入れ替えなどを実施した。 ・資料の所在に関する館内からの問い合わせ等に対応した。			
			
保存のため中性紙の封筒に収納した館史資料			
【実績値】 調査日数：83 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：創立 150 周年へ向けて、いち早く着手している。 独創性：当館は日本最古・最大級の博物館で、他にはない資料を対象としているため。 発展性：調査成果は今後の館史編纂に十分に反映されるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：調査内容を標準化し、今後の継続的な調査に備えているため。 正確性：アーカイブズ学の専門家の指導を仰ぎ、方法・内容の正当性と正確さを確保しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査日数					
判定	B					
判定理由 調査日数：執行可能な予算及び業務量の範囲で、最大の日数の調査を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	24 年度の本研究開始時に引き継いだ資料について、主に保存のための措置を講じ、今後の利用に供する準備を行った。27 年度以降の編纂事業に反映する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画 I-4-(1)-②「我が国の歴史、文化の究明及び理解の促進等を図るため、歴史資料・書跡資料等に関する調査・研究を実施する」を反映した事業として適切に実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】 21年度東京国立博物館に一括寄贈された約1万件に及ぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行い、データベース作成・公開への準備を進める。また、各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 池田宏(上席研究員)、小野真由美（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、塚本鷹充（調査研究課東洋室研究員）、金井裕子（学芸企画部企画課特別展室研究員）、山下善也（調査研究課絵画彫刻室主任研究員）、瀬谷愛（列品管理課平常展調整室研究員）			
【主な成果】 伝来資料について、1,566点（4,027カット）の撮影を終了するとともに、並行して下絵と関連する原品作品の確認など知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会と下絵作品の名称を決定するための画題研究会を開いた。本年度は、東京周辺と四国地方、海外所在の板谷派ならびに本家筋に当たる住吉派作品の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・伝来資料のデジタル撮影、データ整理 作品保存とデータベース公開のため、伝来資料のデジタル撮影、データ整理を、週2回のペースで行った。 ・調査の実施 東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家作品の調査を継続的に行った。また26年度は土佐山内家宝物資料館（26年8月26日）、徳島城博物館（8月27日）、国立ギメ東洋美術館（10月29日）、ライデン民族学博物館（10月31日）、大英博物館（11月3・4日）、松戸市戸定歴史館（27年3月23日）で実測や撮影等の調査を実施した。 ・研究会の実施 26年7月29～31日と、27年1月28・29日の2回、東京国立博物館内で、館外の研究者を交えて資料の内容を検討する調査研究会を行った。 画題研究会を11回行った。			
			
ライデン民族学博物館での調査		研究会（27年1月）	
【実績値】 研究会回数 13回(調査研究会 2回、26年7月29～31日、27年1月28・29日、画題研究会11回) 外部調査回数 6回(国内調査回数 3回、海外調査回数 3回) 画像データ作成点数 1,566点 4,027カット			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名 東京国立博物館
自己点検評価調査

処理番号 4511-10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	B	
判定理由 適時性：近年の御用絵師研究の進展に寄与する研究であり、他機関の展示で本研究の成果が確認され、新たな板谷派作品の情報が寄せられるなど研究成果が他機関にも波及し、研究成果に対して高い関心を集めているため。 独創性：総数1万点を超える御用絵師資料の総括的研究は、これまでにないため。 発展性：住吉家（本年調査を実施）・狩野家など板谷家以外の御用絵師の活動と連動した研究により、様々な研究が可能となるため。 効率性：これまで御用絵師研究に関わってきた研究者の協力を得て効率の良い調査がなされているため。 正確性：下絵・粉本等の総量が多いが、画題検討会を行い、精度を高めているため。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	外部調査回数	画像データ作成点数			
判定	A	B	B			
判定理由 研究会回数：館内での画題検討会11回のほか、館外の研究者を交えた研究会を2回開催するなど予定をこえる研究会の開催ができた。 外部調査回数：海外を含め当初計画にもとづいた調査ができた。 画像データ作成点数：卷子装作品など糊離れしやすい作品が多く、修理の必要があったが、それにもかかわらず予定数の撮影を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	撮影数等、本年度の当初目標を達成することができた。研究面では、海外作品調査を含み多くの作品の所在を確認し、目標以上の成果が得られた。保存状態の悪い作品の応急修理体制も確立し、次年度以降の撮影作業の準備態勢が確立された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の撮影点数は、例年より少なかったが、これまでの撮影件数が当初予定より先行しているため、中期計画の予想以上の成果を達成し進捗している。また、本年度の途中で明らかになった撮影のために修理を必要とする作品に対しても、応急修理体制と人員増加体制を確立することができ、最終年度のデータ集約作業の目処がたっている。次年度は、研究成果の報告と、これまで蓄積した作品情報にもとづいた特集陳列を開催して、一般来館者にもわかりやすいかたちでの成果公開ができるよう準備が進んでいる。本年度後半からは、画題研究会を予定を上回る回数で開催することができるようになり、データ整理の正確性を高める体制も確立している。 引き続きこれらのデータをもとに各資料に関する情報を精査し、利便性の高いデータベースの作成を追及していきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-11

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】 本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎
【スタッフ】 伊藤信二(学芸企画部広報室長)、土屋貴裕(列品管理課平常展調整室研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展調整室研究員)、小林達朗(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長)、朝賀浩(文化庁美術学芸課主任文化財調査官)、石川知彦(龍谷ミュージアム教授)、村松加奈子(龍谷ミュージアム研究員)、阿部泰郎(名古屋大学教授)			
【主な成果】 ① 太子絵伝、あるいは関連する中世絵画について、博物館所蔵の作品、寄託品、及び特別展に出品された作品等の調査を実施することができた。 ② 作品基礎データ、細部拡大写真などのデータ集積を行うことができた。 ③ 作品解説の充実、解説パネルの作成等、より効果的な展示に反映することができた。			
【年度実績概要】 ① 特別展「栄西と建仁寺」に出品の作品について調査を行った(2014年4月) 東博内で川合玉堂氏旧蔵の太子絵伝3幅について調査を行った(2014年10月上旬) 能登半島の結集寺院である岩倉寺や天王寺で奥能登地域の未調査の中近世仏画の調査を行った。(2014年10月24日・25日) 「日本国宝展」に出品の作品についてハンディデジタルマイクロスコープで絹目の拡大写真を撮影した。 (2014年12月10日) ② 能登地域での寺院における調査では、一定空間に点在しながら行事をとおしてつながりのある寺院間での主題や図像の共通性などの傾向の一端が確認できた。 収蔵品の3幅本太子絵伝の調査では、本図のみ見られる図様の詳細について確認できた。 絹目の拡大写真と集めることで、時代や制作環境の判断材料となる基礎情報の蓄積をすることができた。 ③ 収蔵の3幅本の詳細な調査観察によって、分かりやすい場面解説パネルや作品解説の作成をすることができた。			
【実績値】 調査・研究の回数 4回 調査・研究の成果を反映させた刊行物等 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	C	B	B
判定理由 適時性：従来体系的な検討の試みられなかった聖徳太子絵伝の研究を進める必要性は高いため。 独創性：絵画史のみならず、工芸、有職の知見から研究を進めるため。 発展性：聖徳太子絵伝のみならず、他の大画面説話画、中世仏画の今後の研究にも寄与するため。 効率性：太子絵伝作品の年度期間内でのデータ収集数が所期の目標に対して少なかった。 継続性：本研究は5ヵ年計画で進めており、次年度以降も継続的に研究を進めるための整備を行えた。 正確性：中世太子伝の比較検討のための対照表により、各事跡はより正確に把握することができるため。						

2. 定量的評価

観点	調査・研究の回数	調査・研究の成果を反映させた刊行物等				
判定	C	C				
判定理由 作品調査：関連作品についてはは予定より多くの調査を実施することができたが、太子絵伝そのものに関する調査は1回であった。 成果を反映させた刊行物等：聖徳太子絵伝（川合玉堂氏旧蔵3幅本）に関しては、件数としては1件だが、博物館の作品情報として詳しく整備されてこなかった場面解説を整備でき、今後の基礎情報とすることができた。						

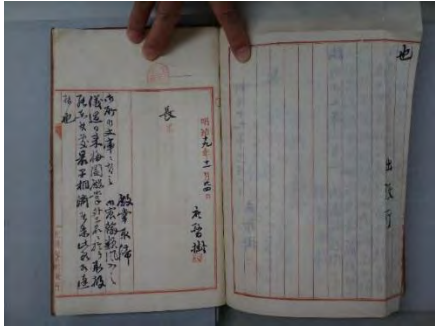
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年目である本年度は、現存作例の中でも独立した図様系統を示す作例の一つである川合玉堂氏旧蔵の3幅本について詳しく調査観察し、解説に反映できたこと、また、関連作品調査で絹目写真の集積や、地方寺院での仏画の制作・流通状況を知る上での基礎情報の収集を行うことができたことは意義が大きいと考える。しかし、課題として所蔵先との日程調整の関係で、肝心の太子絵伝作例の調査件数が目標より少なかったことが挙げられ、その対応として次年度以降では、太子絵伝そのものの調査の件数を更に充実させることに重点を置き、所蔵者との綿密な連絡、日程調整を重点的に行う。文献的な整備は、昨年度に引き続きデータ化を進めることができたので、次年度も引き続きデータ化作業を着実にやっていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
C	関連作品の調査件数や内容については、所期の目標よりも上回る成果を得られていると考えるが、本来すべき聖徳太子絵伝の調査が遅れ気味であるため。 課題は聖徳太子絵伝の調査回数、件数を増やすことであり、その対応として作品の位置づけから調査実施優先度を振り分け、それに基づいて残りの期間で消化できる効率的な調査先の組み合わせと日程案を策定し、速やかな連絡調整を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)－①)		
【事業概要】 本研究は模写資料を調査することによって、書の受容や鑑賞の歴史を明らかにしようとするものである。東京国立博物館の蔵する模写資料の調査を実施し、写真撮影をして、ホームページ上で画像を公開する。また関連作品の調査、関連資料のデータ収集を行なうことから、個別研究も進めていく。東京国立博物館においては、模写資料に関する展示を企画し、模写を通じた鑑賞を提示するとともに、多様な鑑賞のあり方を示す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室客員研究員 恵美千鶴子
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)			
【主な成果】 (1) 東京国立博物館所蔵の模写資料の調査・撮影を進めるとともに、個人蔵の模写資料の調査・撮影を行った。また、宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所、九州国立博物館、東山御文庫(御物)の関連史料を調査した。 (2) 明治時代の東京国立博物館の模写活動や、明治～大正時代の田中親美による模写活動の一端を明らかにすることができた。また、平安～鎌倉時代の古写本の中にも本研究に関連性の高い資料を見つけることができた。 (3) 特集「国宝再現 田中親美と模写の世界」(平成館企画展示室、10/15-12/7)に、東京国立博物館の模写活動を模本によって示すとともに、田中親美の未公開資料の展示とパネル解説、配布物(リーフレット)によってその模写活動を紹介した。また、成果を論文等で発表した。			
【年度実績概要】 (1) ・東京国立博物館にて(7月14日・22日～23日):複製本「瑞穂帖」と「久能寺経」の撮影を行ない、細部の観察と伝来のわかる附属資料を確認した。 ・個人所蔵者宅(5月28日、7月8日・14日):田中親美作成模本の調査と撮影、所蔵者より模本作成に関する聞き取り調査を行った。 ・個人所蔵先(27年1月21日):作品に附属する史料の調査と撮影を行った。 ・京都大学総合博物館(27年2月19日):模写資料の調査と撮影を行った。 ・宮内庁書陵部宮内公文書館(7月2日、8月18日、10月2日・30日ほか)、東京大学史料編纂所(4月2日、5月13日ほか)、九州国立博物館(4月14日)、東山御文庫(11月2日):近世から近代にかけて作品がどのように伝来したのかを明らかにするための関連史料の調査と撮影を行なった。 (2) ・「久能寺経」の調査と撮影で、その伝来と修理に関する附属資料を確認できた。 ・田中親美作成模本のうち未公開作品の確認と、その作成状況に関する新知見を得た。 ・近世～近代の皇室における作品伝来の一端を知ることができる資料を確認できた。 (3) ・「久能寺経」の調査により明らかになった伝来は、特別展「日本国宝展」図録の作品解説に反映できた。 ・田中親美作成模本の未公開作品を、特集「国宝再現 田中親美と模写の世界」で公開できた。また田中親美の模写作成に関する新知見を、同特集の配布物にて報告した。			
			
宮内庁書陵部宮内公文書館にて関連史料の撮影			
【実績値】 ・調査件数 156 件 ・画像登録点数 17 点 ・関連データ入力点数 5,503 点 ・撮影点数 409 点 ・関連データ収集点数 4,544 点 ・研究論文発表件数 5 件(①)			
【備考】 ①恵美千鶴子「博物館制作『厳島神社蔵経模本』－明治の人々が見た『平家納経』」(東京国立博物館研究誌『MUSEUM』第651号、26年8月)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-12

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	A	B	A
判定理由 適時性：これまで未公開だった模写資料を撮影し、その画像をインターネットで公開することは必要性・公開性が高いといえる。 独創性：先行研究の少ない模写資料を研究対象として位置づけるものであり、新規性があり独創的であるといえる。 発展性：模写資料自体の研究も進めていくが、その画像を公開することから、歴史学や美術史、文学史などへの発展的研究を可能とするものである。 効率性：既存の施設やシステムを使用し、通常の業務の中でも調査研究を行なってきたため、効率的に進めることができた。 継続性：これまで蓄積されたデータを活用しながら、新たなデータ収集を恒常的に行なうことができた。 正確性：調査や撮影、データ収集を行なうだけでなく、得られたデータを分析して論文や展示として発表することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	撮影点数	画像登録点数	関連データ 収集点数	関連データ 入力点数	研究論文 発表件数
評価	B	B	C	B	B	S
判定理由 調査件数：東京国立博物館、宮内庁書陵部、個人の所蔵品を中心に十分に調査を行うことができた。 撮影点数：東京国立博物館所蔵分は目標件数に達しなかったが、予定にはなかった他の所蔵者の分を撮影することができた。 画像登録点数：個人の所蔵者の画像について、公開のための登録を行うことができなかったため、登録点数が少なかった。 関連データ収集点数：歴史的社会的関連資料のデータ収集、他の所蔵者からのデータ収集を目標通り実施できた。 関連データ入力点数：関連史料のデータ入力を十分に行うことができた。 研究論文発表件数：1年に1件を目標値としていたため、目標を大幅に上回る論文発表ができた。また、成果を広く公開することのできる展示と配布物作成を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	通常の業務の中でも継続的・効率的に調査研究を進めることができて、調査件数や撮影点数は目標を達成することができた。インターネット公開のための画像登録件数は減少したが、データ収集やデータ入力により、本研究課題における研究や分析を進めることができ、論文発表を十二分に行なうことができた。また、本研究成果をテーマとする特集展示を行ない、配布物を作成することで、より広く成果を公開することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は、画像の登録件数の減少を除いて、ほぼ計画通りに実行することができた。次年度は、さらに効率的に進め、画像の登録件数が増加するように工夫して行ないたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 本研究は、幕末期における西欧の博物館との接触から、維新後における博物館の創設を経て、帝室博物館の成立に至る明治期を中心とした博物館史を、世界史的な視野で再構成するための基礎的な資料調査と研究を、特に所蔵品の流通に着目して行おうとするものである。 対象地域としてドイツ、イギリス、オーストラリアを選び、三カ年にわたって当時の文書や交換・寄贈された文化財を調査する。 あわせて、館史資料の撮影を進め、館史資料の公開・共有を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室長 白井克也
【スタッフ】 伊藤嘉章(学芸企画部長)、 田良島哲(調査研究課長)、 鬼頭智美(学芸企画部企画課国際交流室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、遠藤楽子(学芸企画部企画課出版企画室研究員)			
【主な成果】 (1) 本研究に関連した館史資料である『列品録』の項目一覧表を作成し、関係資料の積読を進めた。 これにより、東博とオーストラリアとの列品交換などの初期の交流の経緯について解明するとともに、いくつかの知見を得た。 (2) 館史資料のうち、『重要雑録』の高精細デジタル撮影を行い、『動物録』の撮影にも着手した。 (3) 本研究に関連した列品を調査した。 (4) 内外の関係機関に対し、聞き取り調査を行った。 これにより、明治初年における諸外の日本美術の収蔵状況や、東博に外国からもたらされた物品の国立科学博物館での収蔵状況を知った。 (5) 現地調査として、国内調査（国立科学博物館筑波研究施設）、海外調査（オーストラリア）を行った。 (6) メンバーと研究協力者による勉強会を開催した。			
【年度実績概要】 (1) 列品録調査 昨年度調査した高精細デジタル画像の項目一覧表を作成し、画像によりオーストラリア関係資料の積読を進め、実物の『列品録』調査を実施して内容を確認した。 これにより、東博とオーストラリアとの列品交換などの初期の交流の経緯について解明するとともに、『列品録』の編纂過程で生じた錯簡を発見し、『列品録』編纂過程の復元の手がかりを得た。また、『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録1』(1999)において「メルボルン万国博覧会」(1880年)として提示されている写真が、「メルボルン植民地間博覧会」(1875年)のものであることを解明した。 (2) 『重要雑録』の高精細デジタル撮影を行い、さらに国立科学博物館筑波研究施設での国内調査成果にもとづき、『動物録』の撮影にも着手した。 (3) 列品調査 10月17日(金)にオーストラリアからもたらされた列品の見学会を開催、作品の遺存状況や特性を確認した。 (4) 聞き取り調査 5月22日(木)にスコットランド国立博物館のロジャー・バックランド氏より、同博物館の日本関係作品の由来についてインタビューした。 9月4日(木)にヴィクトリア国立美術館のウェイン・クロザー氏より、オーストラリアへの日本美術の流入例についてインタビューした。 10月10日(金)に国立科学博物館と館史研究に関する面談を実施し、今後の研究協力について打ち合わせるとともに、葬法が保有する資料の内容を確認し合った。 11月21日(金) ウィーン民族学博物館のベッティーナ・ツォーン氏より、ウィーン万博やシーボルトに関連した所蔵品について研究状況の意見交換をした。 (5) 現地調査 国内調査として1月16日(金)に国立科学博物館筑波研究施設を訪問し、オーストラリアからもたらされ科博に移管された旧天産列品とその台帳を調査し、その収蔵状況を確認した。 海外調査として1月26日(月)～2月1日(日)にオーストラリア博物館、西オーストラリア美術館、メルボルン博物館、ヴィクトリア国立美術館、王立植物園を訪問調査し、東博との交流にかかわる文書調査と作品調査を実施し、交換の経緯と、該当作品の現在の収蔵状況を明らかにした。 (6) メンバーと研究協力者による勉強会を開催し、館史資料を積読し、調査成果を今後の方針を確認した。			
【実績値】 現地調査回数 2回、デジタル撮影枚数 8,000 コマ (参考値) 研究会回数 8回、聞き取り調査回数 4回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本の国際化を近代にさかのぼって跡付ける内容であり、時宜にかなっている。 独創性：博物館資料の国際的な交流を時代背景とのかかわりから再認識しようとするものであり、新たな研究方法といえる。また、明治初期における日本とオーストラリアの関係に関する研究は従来あまり行われておらず、未解明の領域である。 発展性：館史資料の精密なカラー画像の公開を目指しており、今後の研究に貢献するところが大きい。さらに、国立科学博物館やオーストラリアの諸機関とも協力関係を構築できた。 効率性：東京国立博物館における館史資料の整理の成果のほか、他機関における研究成果を利用している。 継続性：研究代表者・研究分担者のこれまでの研究成果を踏まえ、発展させたものである。 正確性：館史資料の撮影を高い精度で進めた。						

2. 定量的評価

観点	現地調査回数	デジタル撮影枚数				
評価	B	B				
判定理由 現地調査回数：現地調査を十分に行うことができた。 デジタル撮影枚数：目標を上回るペースで撮影を行うことができた。						

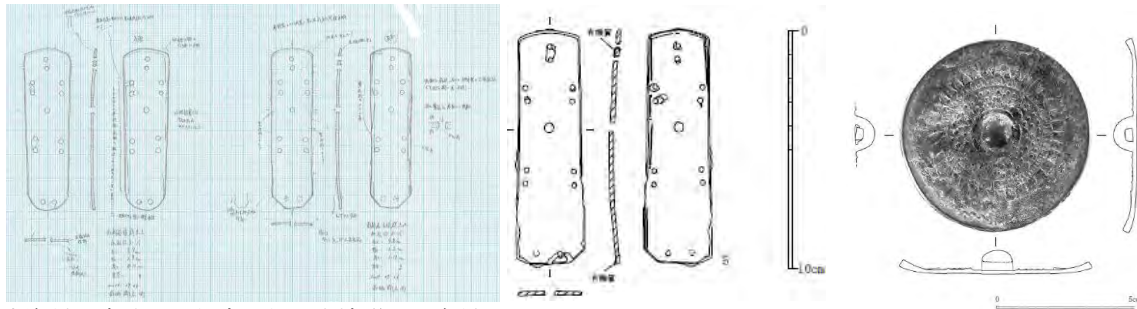
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度予定していた現地調査、館史資料のデジタル撮影、館史資料の釈読などを滞りなく終えることができたうえ、国内外の関連分野の研究者との意見交換などにより、今後の研究の展望をひらくことができた。 特に、館史資料の釈読を進めたことにより、『列品録』の編纂過程の手がかりを得たり、東博の出版物のデータの誤りを解明するなど、今後の館史研究の推進に役立つ多くの観点をえた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は予定していた調査・撮影を滞りなく終えるとともに、これまでほとんど取り上げられてこなかった、日本とオーストラリアの博物館交流史の研究に、文書資料と作品の双方を活用して着手することができた。また、明治初期の列品の主体であった天産資料について、現在の所蔵者である国立科学博物館との協力関係を構築し、一部現地調査を行うことができたので、今後の調査を円滑に進めることができるようになった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 宮崎県西都原古墳群出土資料基礎調査（共同調査）（(5)-①）		
【事業概要】 西都原古墳群発掘調査 100 周年を記念して開催される特別展「西都原の 100 年 考古博の 10 年 そして、次の時代へ」への作品貸与を機に、両者が所有する出土遺物を詳細に比較検討することにより、学史的にも極めて重要である西都原古墳群の研究を大きく進展させることが期待できる。そのため、当館列品の遺物について、特別展での展示期間を含めて通常よりも長期の貸出を行い、同館において両館職員による共同作業を含めた調査を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 東 憲章(宮崎県立西都原考古博物館 副主幹：研究代表者)・藤木 聡・吉永和美(以上、宮崎県立西都原考古博物館)・西嶋剛広(宮崎県宮崎市文化財課 主任技師)			
【主な成果】 ① 宮崎県立西都原考古博物館へ列品の長期貸与を行い、西都原古墳群発掘調査 100 周年記念特別展に協力した。 ② 宮崎県立西都原考古博物館で、双方の担当で列品に関する共同研究会を開催した。 ③ 年度末に、共同研究の研究成果報告書を作成した。			
【年度実績概要】 1) 西都原古墳群発掘調査 100 周年を記念特別展「西都原の 100 年考古博の 10 年 そして、次の時代へ」[会期：26 年 4 月 19 日(土) ～ 26 年 9 月 21 日(日)] へ長期貸与し、特別協力を行った。 2) 宮崎県立西都原考古博物館における共同研究会(26 年 8 月 30・31 日)を開催し、東京国立博物館所蔵資料の実測図作成および宮崎県出土遺物との比較検討を行った。 3) 年度末に刊行された『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第 11 号に、共同調査報告書を掲載した。			
 ○調査資料：宮崎県西都市西都原古墳群出土資料 [左：小札(実測図)、中：小札(報告書掲載図)、右：朱文鏡(報告書掲載図)]（東京国立博物館蔵）			
【実績値】 ○共同調査日数 ： 2 日間 ・調査件数 ： 8 件 ・主な調査資料 ： 宮崎県西都市 西都原古墳群出土資料（東京国立博物館・宮崎県立西都原考古博物館 所蔵） ○論文等公開件数 ： 1 件（備考①）			
【備考】 ①古谷 毅・東 憲章・藤木 聡・吉永和美・西嶋剛広「西都原古墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査について―珠文鏡・銅釧・挂甲小札の報告―」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第 11 号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.1 - 14、27 年 3 月 31 日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-14

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
判定理由 適時性：西都原古墳群発掘調査 100 周年記念事業の一環で、今年度の実施は緊急性と需要・必要性に富み、1912 年から 1917 年に宮崎県・当館で共同事業として実施された同古墳群調査の共同研究として、公共性・公開性を備えている。 独創性：上記と同じく西都原古墳群発掘調査 100 周年記念事業の一環として発想・着想され、新規事業として新規性に優れ、他期間では実施不能なオリジナリティや卓越性を備えている。 発展性：わが国最初の公式な古墳調査として実施された西都原古墳群発掘調査の共同研究は、当館列品および日本考古学研究の多様性や応用性・汎用性に裨益し、他機関への影響性も大きいと期待される。 効率性：時現、在双方に所蔵されている 1912～1917 年宮崎県・当館調査の同古墳群出土資料を直接比較・検討することにより、著しく時間的・設備的および人的投資に寄与することができた。 継続性：期間、1997 年から 1999 年に西都原古墳群出土(重要文化財)埴輪子持家・船の修理に当って、宮崎県の協力を得て進められ、2006 年には当館収蔵埴輪資料を宮崎県立西都原考古博物館において調査しており、質・内容・量とも当該対象研究の基礎性に優れ、期間もこれまでの匈奴研究の経緯と時宜を得ていると思われる。 正確性：本事業は共同研究として双方の参加者による相互確認によって、また対象資料の資料化(データ化)を目標として数値・データの把握を目標としているため、双方の機関所蔵資料の調査においては網羅性にも優れている。						

2. 定量的評価

観点	共同調査日数	調査件数	論文等公開件数			
判定	B	B	B			
判定理由 - 共同調査日数：おおむね必要な日数は実施できた。 - 調査件数：単年度事業として、おおむね適切である。 - 論文等公開件数：年度内に公表し、単年度事業としておおむね適切である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、単年度事業としておおむね順調であった。また、研究予算運用の効率性・適時性は適切で、今後さらに研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図る必要がある。単年度事業ではあるが、これらの成果として研究成果報告書を刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の整備ができた。また、展示・解説(論文・講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、研究成果報告書に反映させることができ、十分な蓄積を行うことができたと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。また、今後は研究会等の充実により、さらに高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立が課題である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15) 「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金)((5)－①)
【事業概要】 日本古代国家形成期である古墳時代の葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・研究する。とくに東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼とその背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。 また、これまでの科学研究費補助金C(2000～2002年度)・同B(2005～2007年度)の調査・研究成果と併せ、総合研究報告書の作成準備を進める。	
【担当部課】	学芸研究部列品管理課
【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】犬木 努(大阪大谷大学 文学部教授)	
【主な成果】 科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007年度)による調査・研究成果に基づき、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果の検討と研究会を実施し、本年度は次のような活動および成果があった。 ① 東京都・大阪府・福岡県・石川県で共同研究会を開催した。 ② 大阪府・石川県で埴輪の調査を実施した。 ③ 年度末に、研究成果報告書を作成した。	
【年度実績概要】 ①東京国立博物館(26年5月27日)、高槻市立今城塚古代歴史館・茨木市立文化財資料館(同6月7・8日)、九州大学・福岡市博物館(同7月20・21日)、および小松市埋蔵文化財センター(同10月11～13日)に研究会を実施した。古代窯業生産体制に関する先行研究の分析・検討に関して、表記テーマに関する発表と討論を行うとともに、問題点の把握と整理に努めた。また、調査資料の把握と資料化のための基礎資料を得た。 ②大阪府高槻市立今城塚古代歴史館・茨木市立文化財資料館で所蔵埴輪の調査を行った。また、小松市埋蔵文化財センターで、小松市矢田野エジリ古墳出土埴輪の調査を実施し、写真撮影・調書作成を通じて、資料の把握と資料化のための基礎資料を得た。 ③年度末に23～26(2010～2014)年度科学研究費基盤研究C(2)[研究課題番号:23520943]成果報告書を刊行した。	
 ○共同研究会：資料調査と共催者(小松市埋蔵文化財センター所長 榎田誠氏)による講演風景 〔於：小松市埋蔵文化財センター〕	
【実績値】 ○調査日数 : 3日間 ・調査件数 : 約40件 ・主な調査資料 : 大阪府高槻市今城塚古墳出土埴輪(高槻市立今城塚古代歴史館蔵)、同 茨木市内出土埴輪(茨木市立文化財資料館蔵)、矢田野エジリ古墳出土埴輪(小松市埋蔵文化財センター)など ○研究会日数 : 5日間 ○論文等公開件数 : 3件(備考①～③) ○成果刊行物等 : 『家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究』 23～26(2010～2014)年度科学研究費 基盤研究C(2)[研究課題番号:23520943] 成果報告書、東京国立博物館、27年3月31日	
【備考】 ①古谷 毅「中小古墳と大型古墳―再整理からみた七観古墳の歴史的位罫―」『巨大古墳あらわる - 履中天皇陵古墳を考える -』(第四回百舌鳥古墳群講演会記録集)堺市文化財講演会録第7集、堺市文化観光局文化部文化財課、pp.27-73、27年2月27日 ②犬木 努「轟俊二郎が採集した埴輪片―『埴輪研究第1冊』の原風景―」『博古研究』第47号、博古研究会、pp.9-26、2014年4月 ③犬木 努「西都原古墳群の埴輪―「平成調査」から「大正調査」へ―」『西都原古墳群総括報告書』宮崎県立西都原考古博物館、pp.93-114、2015年3月31日	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-15

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
判定理由 適時性：配分を受けた既存の科学研究費による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性がある。また、昨年度韓国研究会を開催し国際性と早期の公開を目指した概要報告(研究成果報告書)の作成で公開性も一定程度達成した。 独創性：古墳時代労働編制研究の視角を中心にして発想・着想しており、埴輪研究においてはオリジナリティ及び新規性には優れ、また実物資料で検証する方法はある程度卓越性を備えていると思われる。 発展性：従来の円筒埴輪中心であった埴輪研究に比べ、多様な形象埴輪を対象としており、研究の多様性・汎用性に適合すると共に、研究視角の面では考古学および古代史研究に与える応用性・影響性などに一定の成果があると思われる。 効率性：連携研究者と共に日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得ており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備の投資については、消耗品を含めてほとんど行っていない 継続性：これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。 正確性：実測図の作成はほとんど行っていない点に課題はあるが、数値・データに関してはすでに写真撮影だけでも30,000カットを超えており、達成値・網羅性については従来の調査研究事例に類似する成果は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数	成果刊行物		
判定	B	B	B	A		
判定理由 ・調査日数：展示室改修等で十分とはいえないが、おおむね必要な日数は実施できた。 ・研究会日数：日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得て、最低限の研究会を開催した。 ・論文等公開件数：公開性に鑑みても、さらに努力が求められると思われる。 ・成果刊行物：4カ年の研究成果概要報告として総頁数200頁を超え、公開性はある程度達成できたと思われる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられ、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、補足調査と調査精度の向上をさらに高める必要があり、東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理・分析は不十分であった。しかし、研究予算運用の効率性・適時性を高めることができ、研究会ではさらに研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図ることができた。これらの成果として、最終年度として研究成果報告書をまとめ刊行した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報、及び展示・解説(論文・講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、十分な蓄積を行うことができたと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。また、今年度は研究会の充実により高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることができ、最終年度として研究成果報告書に反映させることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 縄文時代における浅鉢形土器の研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 日本先史時代における社会構造の解明を研究テーマとする。特に縄文時代中期 (BC5000～4000 年) の東日本における浅鉢形土器の型式学的検討と具体的な機能の検討を通じ、当該期の集団間の物質文化の流通の把握を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室研究員 井出 浩正
【スタッフ】			
【主な成果】 (1) 遺跡出土浅鉢のデータベース化：文献調査 ・以下の対象地域に関する文献（発掘調査報告書等）の精査と文献複写作業 （対象地域：埼玉県、新潟県、福島県、群馬県の一部） (2) 浅鉢形土器の資料調査（写真撮影・観察・計測等） ・東北地方の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 ・群馬県内及び茨城県内出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。 ・長野県東信地方出土の縄文時代中期の浅鉢形土器の資料調査を実施した。			
【年度実績概要】 (1)・早稲田大学図書館において当該地域に関する文献調査（図書検索と文献複写）を実施（26 年 7 月～9 月の土曜日に 4 回） ・群馬県渋川市（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（発掘情報館）において群馬県内の文献調査（図書検索と文献複写）を実施（27 年 3 月 1 日） (2)・岩手県盛岡市遺跡の学び館にて岩県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察など）を行った（26 年 9 月 4 日） ・群馬県前橋市毛野考古学研究所において、群馬県内及び茨城県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（26 年 11 月 4 日） ・長野県北佐久郡御代田町浅間縄文ミュージアムにおいて町内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（27 年 2 月 13～14 日） ・群馬県渋川市（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（発掘情報館）において群馬県内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察）を行った（27 年 3 月 1 日） ・長野県南佐久郡北相木村考古博物館において町内出土の浅鉢形土器の調査（写真撮影・観察・計測など）を行った（27 年 3 月 6～8 日）			
資料調査風景（観察）			
【実績値】 文献調査：5 回 調査・研究回数：5 回 成果の発表：1 回(①)			
【備考】 成果の発表 ①井出浩正「縄文時代のうつわを考える」（2014 年 11 月 8 日東京国立博物館月例講演会）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-16

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：これまでに資料の蓄積と解析手法があり、新たな研究視点を導入する段階にあるため。 独創性：研究対象としてこれまで注目されていない資料群のデータベース化が進んだ結果、饗宴や葬送儀礼の観点から当該資料群へのアプローチが可能となったため。 発展性：定量的、総括的なデータベースによって浅鉢形土器を含む縄文土器の使用方法について知見が得られ、新たに我が国の饗宴史及び葬送儀礼の観点からの研究展開が見込めるため。 効率性：当該研究の進捗過程において必要性の高くなった地域に対する集約的な資料調査を新たに加えて実施したため。 継続性：データベース化と資料調査が当初の計画通りに実施したため。 正確性：データベース化の際には悉皆的な文献検索を行い、また資料調査の際には必ず確認用の撮影記録と肉眼観察を行っているため。						

2. 定量的評価

観点	文献調査	調査・研究回数	成果の発表			
評価	B	A	B			
判定理由 文献調査：当初の計画通りに達成した。 調査・研究回数：当初の計画通りに達成したほか、研究の過程で調査の必要性が高まった地域へ新たに追加の調査を2度実施した。 成果の発表：当該研究の成果の公開を目的とする発表を実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当該研究の対象地域での資料調査については、前年度から継続した分と併せ目標を達成した。また、現地での資料調査については、研究の進捗によって群馬県西部及び長野県東部の調査が必要となったが、そうした地域を含め、当初予定を達成することができた。 それらの諸成果を踏まえ、研究成果の公開を目的とする発表を実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年は最終年度となり、これまで2カ年にわたる研究課題について、当初の計画どおりに進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 博物館における文化財の情報資源化に関する研究(科学研究費補助金) ((5)-(①))		
【事業概要】 本研究は、博物館が収集した文化財と関連する資料(図書・文書など)の分析と整理、データ化を行い、文化財との相互の関連付けを行うことで、これらを一元的に管理し、必要なときに引き出して活用できる博物館アーカイブズを構築する。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をととして研究する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 伊藤嘉章(部長)、浅見龍介(併任 学芸研究部)、丸山士郎(学芸研究部列品管理課平常展調整室長)、 恵美千鶴子(学芸研究部 客員研究員)、村田良二(博物館情報課情報管理室長)、横山梓(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 ① 文化財に関連する目録類、図書、各種文書など基礎資料のリストを検討し、その全体像を明らかにした。さらに、分類法の検討を行った。 ② 文化財と関連資料について、それぞれのデジタル化によって、相互の関連付けが可能となった。 ③ 研究の成果を統合データベースに反映するための準備を行った。			
【年度実績概要】 ① 調査の内容 ・文化財に関連する目録類、図書、文書などのリストをまとめ、各資料の作成時期、保管の状況を考慮した上で、資料群としてのまとまりを尊重しながら、分類法を検討した。 ・展覧会図録については、文化財の具体的な活用を示す記録として、できるだけ多くの情報の抽出につとめた。 ・博物館の草創期以来、文化財を主な対象として撮影されてきた写真資料のデジタル化を推進した。 ② 研究の成果 ・列品録、重要雑録など主要な資料の目次のデータベースを作成したことで、研究の利便性が向上した。 ・博物館の機能との関わりのなかで作成された資料を、文化財の活用という観点からとらえることで、文化財と関連資料との相互の関連付けが可能となった。 ③ 成果の公開 ・研究の成果を統合データベースに反映させる準備に着手したことで、文化財の情報資源化の方法論を研究するための基礎作業を進めることができた。			
【実績値】 調査件数 16,000 件 写真撮影件数 154 件 フィルムデジタルデータ変換 131,903 点 公文書テキストデータ化 770,000 文字			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-17

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：東京国立博物館百五十年史の編纂に向けて、こうした基礎作業を推進する必要がある。 独創性：日本における博物館の発展の歴史を考える上で、文化財の情報資源化という新しい考え方を導入している。 発展性：博物館、図書館、文書館といういわゆる MLLA 連携を見据えた発展性のある課題に取り組んでいる。 効率性：まず基礎データの整理を実施し、全体像を把握するといった、効率性を考慮した手順で作業を進めている。 継続性：科学研究費補助金による4ヵ年事業の初年度として実施している。 正確性：すべての情報をデータベースに入力することで、数値や網羅性において正確を期している。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影件数	フィルムデジタル化点数	公文書テキストデータ化		
判定	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 写真撮影件数：当初の計画に基づき公開用の画像を撮影できた。 フィルムデジタルデータ変換件数：当初の計画に基づき作品のデータ変換を実施できた。 公文書テキストデータ化件数：当初の計画に基づき公文書のテキストデータ化を実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館百五十年史の編纂に向けた作業のなかで、文化財の情報資源化という新しい考え方を導入して、MLLA 連携を見据えたデータベースの構築をめざし、計画的に調査・研究を行い、所期の目標を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費補助金として実施している事業であり、4ヵ年計画の初年度として、計画に従って着実に進め、所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 古墳時代の農具研究（科学研究補助金）（(5)-①）		
【事業概要】 農具鉄製刃先にかんする基礎的な概念や分類、変遷など新たな分析視角を導入することで、古墳時代の社会経済や祭祀を読み解くための基礎研究となる書籍『古墳時代の農具研究』を刊行することが本事業の目的である。26年8月に（株）雄山閣より書籍を公刊でき、本事業の目的は達成した。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室アソシエイトフェロー 河野正訓
【スタッフ】			
【主な成果】 (1)雄山閣より単著『古墳時代の農具研究』（総数 285 頁、26 年 8 月 25 日）を刊行した。 (2)本研究成果を、アメリカや韓国、日本で開催された学会や研究会にて紹介した。			
【年度実績概要】 (1)『古墳時代の農具研究』の刊行（備考①） （株）雄山閣とで前年度中に出版に関する詳細な打ち合わせを済ませているため、26 年 8 月 25 日に本書を 500 部刊行できた。30 部を研究機関や研究者に無償で謹呈し、残り 470 部を販売することで広く社会に研究成果を提供した。 (2)研究発表等 『古墳時代の農具研究』の概要をアメリカで開催された SAA(Society For American Archaeology)にて発表した（備考②）。また、韓国釜山で開催された研究会（備考③）や、日本の中国四国前方後円墳研究会（備考④）にて、本研究成果を継承・発展する形で口頭発表を行った。			
			
『古墳時代の農具研究』			
【実績値】 (1)書籍 1 冊（備考①） (2)口頭発表 3 件（備考②～④）			
【備考】 書籍 ①河野正訓『古墳時代の農具研究』雄山閣（26 年 8 月 25 日） 口頭発表 ②Masanori KAWANO, Nature of Authority during the Kofun Period from the Standpoint of Iron Agricultural Tools, SAA(Society For American Archaeology) 79th Annual Meeting 26 年 4 月 26 日 ③河野正訓「古墳・三国時代における外来系農工具の定着過程」（「韓日交渉 考古学—三国・古墳時代—」研究会第 2 回共同研究会 26 年 10 月 31 日） ④河野正訓「古墳時代前期の農工漁具の編年」（中四国前方後円墳研究会第 17 回研究集会 26 年 11 月 30 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-18

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館内の考古展示室をリニューアルする上で参考となる書籍を刊行できたため。 独創性：農具鉄製刃先を考古学的に検討して1冊にまとめた類書はないため。 発展性：海外の研究会・学会への発表依頼が来るなど、研究が国外からも注目されているため。 効率性：成果物を書籍として出版したことで情報公開が促進されたため。 継続性：成果の大半が基礎研究であるゆえ、本成果をもとに研究を発展的に継続できている。 正確性：目標として掲げていた書籍の出版を達成した。						

2. 定量的評価

観点	書籍	口頭発表				
評価	B	A				
判定理由 書籍：当初予定のとおり、研究成果を出版することができた。 口頭発表：予定にはなかったが、アメリカや韓国などで本成果をもとに発表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の予定通り、書籍を刊行することができ、古墳時代研究に与える影響は大きかった。さらに科学研究費研究成果公開促進費（学術図書）という性格上、計画には挙げていないが、世界的学会で本成果を紹介し、研究を進展する形で韓国や日本で発表できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	単年度で行う学術図書の研究成果公開であり、当初の目標のとおり書籍を刊行することができた。次年度は、日々の業務との連携を図り、本成果をもとに館内外の古墳時代資料の報告を行い、査読誌に論文を公表するとともに、講演やギャラリートーク、研究発表をおこなうことで研究を広く社会に還元していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究(科学研究費補助金)((5)-(①))		
【事業概要】			
本研究は我が国において伝来、また出土した染織作品を通じ、広く古代東アジア世界における染織文化の実像を明らかにしようとする試みである。これまで日本染織史の分野で研究されてきた作品を国際的な文化交流の枠組みで捕らえなおし、我が国に伝来した染織作品がもつ意義の大きさを明らかにしたい。また、考古遺物に付着した繊維を詳細に検討することで、現在では形の失われた作品の遺存状態や織物などの種類や仕様等をおして現存作品と比較検討し、古代東アジアにおける染織品の使用法についても、その実態の解明を目指すものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	客員研究員 澤田むつ代
【スタッフ】 三田覚之(調査研究課工芸室員)			
【主な成果】			
(1)染織作品館内調査等：東京国立博物館・法隆寺宝物館所蔵の染織品(以下、法隆寺裂)のうち、列品(登録されている染織品)と未整理品(未登録の染織品)の調査と写真撮影を行い、資料の蓄積を行った。これらは点数が多いため、次年度以降も継続して行う予定である。これらの成果として、博物館において特集陳列「甦った飛鳥・奈良染織の美」を開催して、リーフレットを制作し、列品解説も行なった。また、文化財保存修復学会においてポスター発表を行った。さらに、法隆寺裂の献納経緯と技法・文様等について外部講演を行った。昨年調査を行った正倉院所在の法隆寺裂についての詳細を『正倉院紀要』において論文発表した。			
(2)考古作品外部調査：金鈴塚古墳出土品(千葉県・木更津市郷土博物館金のすず)、瓢塚古墳出土品(千葉県成田市・房総のむら風土記の丘資料館)、石原稲荷山古墳等出土品(群馬県・高崎市観音塚資料館)、マケン堀横穴墓出土品(鳥取県西伯郡南部町教育委員会)、上塩冶横穴墓出土品(島根県埋蔵文化財センター)、九州国立博物館開催の「古代日本と百済の交流」展、島内地下式横穴墓出土品(宮崎県・えびの市歴史資料館)、入西石塚古墳出土品(埼玉県・坂戸市立歴史民俗資料館)。上記、各出土品については調査及び写真撮影を行い資料の収集等を行った。			
【年度実績概要】			
(1)館内調査			
・上記1の法隆寺裂については、他の染織品と同一条件で比較するため、スケール入りによる写真撮影と調査を行い、データの蓄積につとめた。			
・法隆寺裂の一部について文化財保存修復学会(第36回大会、明治大学アカデミーコモン)で研究成果をポスター発表で公表し、『研究発表要旨集』の執筆も行った。			
・法隆寺裂の一部について特集陳列を実施し、リーフレット制作と列品解説を行った。			
・法隆寺裂の献納経緯と作品の種類と技法等について外部講演を行なった。			
(2)外部調査			
・金鈴塚古墳出土品の調査を3回行い(写真撮影と作品調査)基礎データの収集及び成果発表を行った。また、研究成果を論文としてまとめ、『金鈴塚古墳研究』3号に執筆した(27年3月末刊行)。さらに、その一部を東アジア考古研究会で発表した。			
・瓢塚古墳出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。			
・石原稲荷山古墳出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。			
・マケン堀横穴墓出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。			
・上塩冶横穴墓出土品調査を1回行い、調査報告書(調査概要等)を提出した。			
・「正倉院展」において法隆寺裂との関連について、基礎データを収集した。			
・正倉院所在の法隆寺裂について、正倉院裂所蔵の膨大な写真資料を調査(25年度)し、26年度の『正倉院紀要』にて研究成果を発表した。			
【実績値】			
・調査件数：8件(館内調査1、外部調査8(うち参考値1))、写真撮影点数約1,200枚、研究発表等13件(論文発表2件(①～②)、学会発表1件(③)、シンポジウム発表1件、講演4件(④～⑥)、展覧会1件(⑦)、報告書4件)			
【備考】			
①論文発表：「正倉院所在の法隆寺献納宝物染織品―錦と綾を中心に―」(『正倉院紀要』第36号、2014年3月)			
②論文発表：「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様と経錦について」(『特別展 武者塚古墳とその時代』2014年10月)			
③学会発表：「劣化で一部分状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例―東京国立博物館所蔵作品の事例―」(文化財保存修復学会、2014年6月7日、東京・明治大学アカデミーコモン)			
④講演：「法隆寺と正倉院の染織品―用途にみる形状の違い―」(中国四川省成都・成都博物院・四川大学、2014年12月3日)			
⑤講演：「武者塚古墳出土の遺体の埋葬仕様と経錦の用途について」(上高津貝塚ふるさと歴史の広場主催、土浦市亀城プラザ文化ホール、2014年11月9日)			
⑥講演：「飛鳥～奈良時代の金糸の変遷―金鈴塚古墳出土の金糸を中心に―」(金鈴塚古墳研究会、千葉県木更津市郷土博物館金のすず、2014年8月10日)			
⑦展覧会：特集陳列「甦った飛鳥・奈良染織の美」(東京国立博物館・法隆寺宝物館、2014年8月19日～9月15日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-19

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：考古の遺物に付着する繊維等については、発掘調査報告書刊行には欠かせない要素になってきており、需要が高まってきていることから、本格的に調査を行うようになったため。 独創性：これまで染織は染織史、考古は遺物中心で、その扱う分野自体が縦割りに分割されてきたため、学際的な視点から見直されることは極めて稀であった。このため、相互の研究交流があつてこそ、はじめて実像が見えてくるに違いないと考えてことから、両研究分野の橋渡しを意図している。こうした視点で横断的に分野を越えた研究は、これまでほとんど行われておらず独創性がある。 発展性：考古の分野において、しばしば遺物に付着する繊維が発見されている。これらを染織の立場で仔細に調査し、法隆寺裂等の知見を活用することで、付着繊維の技法や用途等を明らかにすることができ、これまで関心が薄かった分野における研究を進展させることができた。 効率性：考古の研究者にあっては付着繊維の種類、技法、用途等に関心が高まってきているため。 継続性：これまでの調査研究を踏まえた資料の収集と外部の考古遺物に付着する繊維について、調査依頼もあることから、調査を積極的に行う予定である。 正確性：考古の研究者間では繊維について感心はあっても踏み込んだ研究がなされていないことから、古代の染織研究者が入ることで、横断的で幅広い研究が可能になる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	研究発表等			
評価	B	B	B			
判定理由 調査件数：外部調査については、今年度の目標の件数はこなすことができた。 写真撮影点数：考古の遺物に付着した繊維については、予定以上の撮影を行うことができた。 研究発表等：論文の一つである「正倉院所在の法隆寺献納宝物染織品一錦と綾を中心に一」については、これまで誰も行っていない画期的なものであり、新聞紙上にも取り上げられた。また、学会発表では「劣化で一部粉状化したガラス挟み法隆寺裂修理方法の一例―東京国立博物館所蔵作品の事例―」について法隆寺裂の修理の事例を公開でき、一般及び研究者にも関心をもっていただけた。さらに、考古の分野でも遺物に付着した繊維については、仕様や用途について法隆寺裂を基に推測し、これまでにない研究発表を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	内部調査の法隆寺裂については、染織の列品として登録されているが、ほとんど展示されたことのない法隆寺伝来裂等の調査及び修理をすることにより、これまで公開できなかった作品を、特集陳列で一般に広く公開することができた。また、リーフレットを制作したことで、来館者によりわかりやすいものとなった。さらに、展示作品の列品解説を行って、直に作品の魅力を伝えることができた。外部調査については、次年度以降も、各所に調査場所を広げていきたいと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺裂については、これまでスケールを入れての撮影はほとんど行われていなかった。スケールを入れることで、同種の織物等の文様や織り密度等を画面上で比較検討することができるようになる。また、これまで調査や修理等が行われていない作品についても、詳細な調査を行うことで、適切な修理の仕様と保存方法について検討し、後世へ安定した状態で伝えていきたい。 考古の分野において、しばしば遺物に織物等が付着していることがある。これらは考古の研究者においては関心があっても、踏み込んだ研究がなされていないのが現状のようである。こうしたことから、織物の付着状況を通してその種類や仕様を検討することで、棺内や古墳等に遺物を埋納する際に、織物がどのようにかかわっていたかを見極めることは非常に重要であると考えている。ひいては遺体の埋葬仕様を推測することも可能になると考えている。遺物に付着する織物等については、外部からの調査依頼もあり、今後もこの分野においては発展性が見込まれるため、積極的に調査を実施し、考古の遺物に付着する織物等から古代裂における織物等の発展について橋渡しをしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 法隆寺献納宝物として東京国立博物館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂（じょうだいぎれ 古代の織物）を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態では保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像（数量・技法・文様）についても作品調査と写真撮影によってデータベース化を図り、写真つき目録の形にする予定である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室 研究員 三田覚之
【スタッフ】			
【主な成果】 (1)韓国での考古遺物調査。法隆寺献納宝物の一部と推定される唐櫃の調査。 (2)韓国における調査の結果、武寧王陵出土品な陵山里古墳群出土品、また弥勒寺西石塔出土品など、百済の遺物に著しい共通点が見られることを確認した。唐櫃調査の結果、同作が法隆寺献納宝物の一部であり、かつては現在宝物館で保管されている上代裂を納めていた可能性が高くなった。 (3)韓国での考古遺物調査の成果として、今後献納宝物との比較研究に関する論文を執筆予定。また現在本研究の一環として上代裂の修理報告書の定期的な発表を目指しており、その第一回目の論文中に調査した唐櫃の概要と上代裂との関係について執筆した（『MUSEUM』655号掲載予定）。			
【年度実績概要】 (1)韓国での調査 10月20日～30日：国立中央博物館、松林寺（石製舍利外容器の調査）、大邱博物館（松林寺五層石塔出土品の調査）、国立公州博物館（武寧王陵出土品の調査）、国立扶余文化財研究所（王興寺址出土品調査）、国立扶余博物館（陵山里古墳群の出土品調査）、国立全州博物館（王宮里五層石塔出土品の調査）、益山弥勒寺址（弥勒寺西石塔出土品の調査）。 (2)国内での調査 法隆寺献納宝物の染織品調査（通年）、東京国立博物館の唐櫃調査（12月～27年1月）。 (3)韓国での調査は主に金工作品に注目して行った。献納宝物のうちには年代や制作地が不明のものが多くのかさされている。そうした作品の造形的な特長を近年韓国で発掘された考古遺物と比較研究した。その結果、百済の美術、なかでも6世紀末から7世紀はじめの作品と多くの類似性が見出せた。これはちょうど聖徳太子が活躍していた時期にあたり、太子周辺を主導とした古代の日韓交流について、実作品を通じて跡付けることができた。 また、献納宝物の染織作品に対する調査で得た知見を、現在行われている法隆寺裂の保存修理に反映させることができた。			
		(4)韓国での調査成果については口頭発表を行った。この内容については論文にまとめ『MUSEUM』に投稿する予定である。また、上記(3)でも述べたように、現在館内においては継続して法隆寺裂の保存修理が行われている。作品の調査に基づいて、現在はバラバラの状態である作品本来の形を推定することが可能となったため、これを反映した修理を行った。なお、現在本研究の一環として上代裂の修理報告書の定期的な発表を目指しており、その第一回目の論文中に調査した唐櫃の概要と上代裂との関係について執筆した（『MUSEUM』655号掲載予定）。	
法隆寺献納宝物の染織品調査			
【実績値】 ・調査9箇所（国外1箇所、国内8箇所）・写真撮影点数約1,000枚・研究発表2件(①～②)・論文発表3件(③～⑤)			
【備考】 研究発表 ①「法隆寺献納宝物における百済系文物」、26年10月29日、於 韓国国立中央博物館 ②「日本・韓国 学術交流報告会—法隆寺献納宝物の源流を求めて—」、26年12月18日、於 東京国立博物館 論文発表 ③「玉虫厨子本尊変遷考」、『仏教美術論集3 図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承（浄土教・説話画）』、竹林舎、26年5月1日、査読無 ④「聖徳太子ゆかりの宝物—天寿国繡帳と呉竹形の塵尾—」、『季刊 明日香風』131号、公益財団法人 古都飛鳥保存財団、26年7月1日、査読無 ⑤「武者塚古墳出土の銀带状金具と宝珠形中心飾の源流」、『上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第13回特別展 武者塚古墳とその時代』、上高津貝塚ふるさと歴史の広場、26年10月15日、査読無			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-20

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：館内の調査や調査出張の時期を調整し、修理や論文執筆の予定に合わせ、適時に調査ができたため。 独創性：近年発掘された考古作品と献納宝物を様式比較する方法を新たに用いたため。 発展性：現在継続して行われている法隆寺裂の保存修理においても、調査研究の成果を還元しているため。 効率性：東京国立博物館の業務（法隆寺裂の調査研究と保存修復）とも関連したかたちで研究を進めているため。 継続性：上記業務と関連し、継続的な調査を行っているため。 正確性：目標として掲げていた今年度の調査件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされたため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	研究発表	論文執筆		
判定	C	B	B	B		
判定理由 調査件数：献納宝物の源流に関する研究として、韓国内における必要箇所をほぼ網羅的に調査することができた。 写真撮影点数：効率的に調査地を巡ることができたことにより、献納宝物の源流に関する関係作品を写真記録として残すことができた。 研究発表：日韓双方において調査に基づく研究成果を予定通り発表することができた。 論文執筆：当初予定していた以上に執筆を進めることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は主に韓国での調査を行い、成果を挙げることができた。これにより次年度に執筆を予定する研究論文の材料を得ることができた。また法隆寺裂に対する研究の成果を作品の保存修復の場でも生かすことができた。 なお上記を踏まえ、次年度には国内調査を充実なものとしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
C	韓国の考古作品については、研究成果を発表するのに必要な調査と写真撮影をおよそ完了することができた。また論文の執筆も順調に進めることができた。だが一方で本研究において目標としている国内調査（正倉院事務所をはじめとした美術館・博物館・個人）についてはあまり進展していない。この反省を踏まえ、次年度では国内での調査研究を充実したものとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 多数尊から構成される仏教尊像とは、複数の像から構成される一群の像で、例えば四天王、六観音、八部衆(二十八部衆)、十大弟子、十二神将、十六羅漢などをここでは指す。これらは、同時代の作品でも作品間での変化をつけるためか、その形姿や持物などには様々なヴァリエーションがある。しかしそれらがどのような典拠(古典作品、図像、儀軌等)に基づき、どのように組み合わせられているのかなどに関しては不明確といえる。また一群の作例の場合、工房における分担製作の実態も不明な点が多い。本研究では、上記のごとく不明な点が多くこのされている多数尊より構成される尊像群について、図像的典拠と工房における分担製作の視点から、あらためて調査研究し、分析を行おうというものである。本年度は4年計画の第3年次である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅湫 毅
【スタッフ】 浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品室長)、岩田茂樹(奈良国立博物館上席研究員)、山口隆介(奈良国立博物館情報サービス室研究員)、井上一稔(同志社大学文学部教授)、寺島典人(大津市歴史博物館学芸課研究員)、田中健一(大阪大谷大学文学部常勤講師)			
【主な成果】 (1)奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展出品作品調査 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展出品作品調査を行った。 ・広島にて鞆の浦・三原の寺院調査を行った。 ・宮城にて双林寺の調査を行った。 (2)「鎌倉の仏像」においては鎌倉国宝館所蔵および寄託の作品を熟覧でき、貴重な資料が収集できた。 ・「南山城の古寺巡礼」展においては出品作品の細部写真撮影など、貴重な資料が収集できた。 ・鞆の浦の安国寺、三原の棲真寺において所蔵作品を調査撮影し、資料の収集を行った。 ・双林寺において、所蔵作品の詳細を調査することができた。 (3)「鎌倉の仏像」展は昨年度の当科研による調査の成果に基づく。開催中に出品作品の調査も行い新たな知見を得ることができた。 ・「南山城の古寺巡礼」の図録、講演会、シンポジウムに際して科研の成果を反映した。 ・鞆の浦安国寺では納入品の詳細なデータを収集することができた。その成果は井上一稔氏によって公表される予定である。 ・双林寺調査で得られた情報は「みちのくの仏像」展の展示及び図録に反映した。			
【年度実績概要】 (1)・奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展においては会期中(4～5月)適宜、鎌倉国宝館所蔵の十二神将に関して詳細な調査を行った。 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展においては会期中(4～6月)適宜、海住山寺所蔵の四天王立像に関して詳細な調査を行った。 ・9月17日に鞆の浦安国寺で、法燈国師像及び納入品、9月18日に棲真寺では二十八部衆像の詳細な調査を行った ・10月19日に双林寺で、薬師如来及び二天立像ほかの詳細な調査を行った。 (2)・奈良国立博物館「鎌倉の仏像」展出品作の十二神将については江戸時代の後補作品も含まれており、両者の造像技法の違いなどで、新たな知見を得ることができた。 ・京都国立博物館「南山城の古寺巡礼」展出品作の四天王立像については、細部の表現を観察した結果、複数の仏師によるものであることが確認できた。 ・安国寺法燈国師像では納入文書を詳細に確認することにより、その造立年代に関する知見を得ることができた。 ・双林寺では、薬師像を詳細に観察した結果、それが天台薬師といわれるものと共通の特徴を持つことに気づいた。 (3)・「鎌倉の仏像」展で得られた成果は来年度に発行予定の本科研報告書内で公表する予定である。 ・「南山城の古寺巡礼」展で得られた成果は、仏教美術研究上野記念財団助成研究会主催のシンポジウムで浅湫、岩田が口頭で発表し、その内容は27年3月に同財団が発行する報告書において発表する予定である。 ・安国寺の成果は井上一稔氏によって『日本彫刻史基礎資料集成鎌倉編第12巻』に掲載される予定である。 ・双林寺の成果は『みちのくの仏像』展図録において観察の結果を作品解説に反映した。			
【実績値】 調査回数 6回 研究会回数 2回 (参考値) 刊行物 4件 『鎌倉の仏像』展図録／『南山城の古寺巡礼』展図録／『みちのくの仏像』展図録／『公益財団法人仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第41冊 南都と南山城をめぐる僧と造仏』			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評価	B	B	B	B		
適時性：近年仏像とその作者に関する一般的な関心が高まっているなか、これまで単に一群の像とみられていた多数から構成される仏教尊像に関して、より詳細な研究を行なうことは必要であり、それらの成果を新たな知見として展覧会などで公表することも時宜にかなっているものと考えられる。 独創性：これまで多数の尊像から構成される群像に関して、工房内における分担製作の実態や図像選択の経緯という観点からの研究はなかった。 発展性：今回の科研で得られた結果をもとに、各尊像別にさらなる研究を加えることで今後の発展が期待される。 継続性：今回の調査で得られた、群像内での分担製作の実態について細部の形式をもとに判断するという手法は、すべての群像において応用できる手法であり、継続して分担製作の実態について調査する上で有益である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
評価	C	B				
判定理由 調査回数：国内調査に関しては当初予定以上の成果を上げることができたが、海外調査に関しては先方の都合や代表者の転勤による担当業務の変更などがあり、次年度に延期せざるを得なかったため。 研究会回数：当初予定していた「南山城の古寺巡礼」における研究会に代わり、「みちのくの仏像」においても研究会を実施することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究代表者の転勤ほかの事情により、海外調査（イタリア・フランス）を来年度に延期せざるを得なかったが、国内調査やその結果をもとにした発表や展覧会に際しての原稿執筆などでは、当初の予定以上の成果を上げることができた。次年度は延期した海外調査をぜひ実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	海外調査を除いては、予定した調査は順調に遂行している。また、調査で得られた結果は、シンポジウム、講演会、展覧会の図録執筆、論文などに順調に公表している。最終年度に当たる次年度は、今年度延期になった海外調査を行うとともに、これまでの3年間の研究で集積されたデータをもとに、報告書の発行を計画している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究（科学研究費補助金） （(5)-①）		
【事業概要】 1939 年以降海外で開催された日本古美術展について一覧化を進めるとともに、文化庁所蔵資料のデータ化及び主要な展覧会の資料を収集・整理することにより、海外における日本観とその変遷を考察・研究する基礎資料を整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課国際交流室長 鬼頭智美
【スタッフ】 高橋裕次(学芸企画部博物館情報課長)、田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、白井克也(学芸研究部調査研究課考古室長)、浅見 龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、横山 梓(学芸企画部企画課特別展室研究員)、楊鋭(学芸企画部企画課国際交流室アソシエイトフェロー)、吉田憲司(国立民俗学博物館教授)			
【主な成果】			
(1)・米国、ドイツ、マレーシア、シンガポールにおいて 1939 年以降に開催された日本古美術展関係および 1940-1945 年の南方接収博物館関係の資料調査を実施するとともに、日本美術を扱った展覧会及び関連事業を視察した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室及び京都国立博物館保管の海外日本古美術展関係資料の調査を実施し、写真資料のデジタル化を行った。 ・Web サイトや各館年報、関係資料を調査するとともに、関係者への聞き取り調査を行った。			
(2)・海外訪問調査により、関係文献資料・展示風景写真等関係資料を入手、写真撮影によりデジタル化した。国内では、東京国立博物館内文化庁分室保存の 1995-2003 年開催の文化庁海外日本古美術展 12 展覧会について、会場写真(紙焼き)、各展覧会の記録冊子のデータ化を完了、閲覧可能とした。また、京都国立博物館主催の海外展について、面談調査を実施、記録写真を入手した。その他、展覧会を主催した新聞社、寺院など博物館以外の関係者との面談調査により、海外での展覧会の企画から運営の実態について知見を得た。 ・1936 年ボストンにおける「日本古美術展」から 2013 年までに海外で開催された日本古美術展の暫定リストを作成した。			
(3)・国内外訪問調査により、現地でしか得られない記事のクリッピングや関連資料を収集、海外展に当館がどう関わったかの一端を見ることができ、東京国立博物館 150 年史編纂に向けての基礎資料収集が進んだ。 ・現地の反応や当時の解説及び現状の日本美術展示についての知見を、館内展示等外国人向け解説の英語版・中国語版に生かすことができた。 ・面談調査を通じ、日本美術展示を担当する学芸員との交流を深め、今後の国際交流事業の企画に向けての足がかりとなった。			
【年度実績概要】			
(1)・ドイツ・ベルリンアジア美術館、ケルン日本文化会館、ケルン東洋美術館、ドイツ国立公文書館、ベルリン国立博物館群図書館にて文献・写真資料調査を行い、ドイツにおける 1939 年から 1950 年代を中心とした日本美術展の概況についての知見を得た(26 年 5 月 11 日-12 日及び 11 月 15 日-22 日)。 ・アメリカ・サンフランシスコ アジア美術館及びデ・ヤング美術館にて調査を行い、戦後の米国巡回古美術展及び 1970 年の考古展についての文献・写真資料収集・整理した(26 年 7 月 16 日-17 日)。 ・当館内文化庁分室にて、文化庁主催の海外日本古美術展に関する記録・写真資料及び他機関主催の海外日本古美術展の資料を閲覧・複写した。(26 年 8 月 27 日) ・京都国立博物館にて、「京都からの美のたより」展及び「18 世紀京都画壇の革新者たち」について、資料収集及び当時の担当者への聞き取り調査を行った。(26 年 9 月 26 日) ・シンガポール国立博物館・図書館等で、太平洋戦争中に日本の占領下にあった博物館等について調査、当時の関係資料・写真を収集するとともに、関係者への面談調査を実施、関係展示を視察した(27 年 1 月 31 日-2 月 4 日)。 ・米国・メトロポリタン美術館及びニューヨーク公立図書館にて、米国巡回「日本古美術展」関係資料等米国開催の日本美術展覧会関係資料を調査、現地所蔵の文献資料を入手した。(27 年 2 月 15 日-17 日)。			
(2)・ドイツにて、1939 年「日本古美術展」、1974 年「日本の美」展に関する関係資料・書簡、記事クリッピング、会場写真等の収集・複写を行った。主に文献資料を調査し、複写可能なものは写真撮影等により複写・デジタル化を行った。この調査により、現地の記事クリッピングなど現地でしかえられない貴重な資料を得ることができた。また「印象派と日本」展、「パウル・クレーと日本」展を視察、それぞれ西洋美術の文脈における日本美術の解釈、また日本美術普及のためのプログラムについての知見を得た。米国の調査で上記展覧会の基礎資料を得た。 ・2002 年チェコ・キンスキー宮殿(プラハ)開催の「京都からの美のたより」展の会場写真を当時の担当研究員より入手、そのデータ化を行った。また、2006 年サンフランシスコ・アジア美術館開催「18 世紀京都画壇の革新者たち」展の関係文書・写真資料を収集・整理した。			
【実績値】 訪問調査 7 回、館内調査 2 回、面談調査 4 回			
【備考】 東京国立博物館総合文化展解説に成果を反映。海外での日本古美術展開催リスト(1936-2014) 暫定版作成。			



ケルン東洋美術館での調査



ケルン東洋美術館での調査

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-22

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：当館 150 年史編纂に向け、関係資料を確実に入手・整理を進めることができたため。 独創性：これまで国際交流事業について海外で行われた特別展を主として考察する研究はなかったため。 発展性：調査先での研究者の関心が高く、今後の共同事業への発展が期待できるため。 効率性：調査先に適切な協力者を得て、順調に調査が進んでおり、他業務との連動により効率よく予算を消化することができた。 継続性：年度内に概ね予定通り海外調査を実施、貴重な文献・写真資料を収集し、データ化を進めることができた。 正確性：展覧会の会場館で実際に現地での一次資料を得たことで正確な情報を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	訪問調査	館内調査	面談調査			
評価	B	B	B			
判定理由 訪問調査：ドイツ及び米国にて調査を行い、主要な展覧会について数多くの貴重な文献資料を得ることができた。 館内調査：文化庁の協力を得て順調に分室内の資料を調査し写真資料のデジタル化を進めることができた。 面談調査：国立博物館の担当者、海外の会場館の担当者、共催した新聞社の担当者のそれぞれの立場からの話を聞くことができ、多角的に海外古美術展のありようを検証する資料を得ることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度に予定した資料調査が順調に進み、海外の主要館においてこの研究についての理解・協力を得られることができた。特に、研究テーマの基点となる1939年のベルリンにおける「日本古美術展」について、また主要調査対象となる文化庁主催の海外日本古美術展の日本側の資料は、画像資料を中心にかなり整理・データ化することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度から着手した研究であるが、概ね計画通りに進んでおり、次年度以降の調査に向けての協力・準備体制も整ってきている。来年度は成果としての論文発表及び最終年度の報告書出版に向けて、収集した資料の整理及び翻訳作業をいっそう進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	23)能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）((5)-①)
【事業概要】 能狂言面は能楽の道具として芸能史研究の中で注目される一方、美術史ではその卓越した造形は認知されているものの、能狂言面の美術史研究に必要な基礎データ、制作年代や作者、伝来を特定できる基準作例が乏しいため、美術史的手法を用いた研究はほとんどされていない。本研究では多くの優れた能狂言面を調査し、基礎データの収集、多角的、総合的な分析・検討から制作年代・作者等の客観的判断基準を見出し、その美術史的研究方法を確立することを目指す。研究成果をもとに、能狂言面を美術史、特に日本彫刻史の中に位置付けることを最終目標とする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	学芸企画部付 浅見龍介
【スタッフ】 矢野賀一(学芸企画部企画課デザイン室主任研究員)、川岸瀬里(学芸企画部博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 研究開始年度である本年度は、本研究の目標のひとつである能狂言面の調査方法の確立のための試行と検証を兼ね、東京国立博物館所蔵の能面の調査を中心にすすめた。調査の結果、調査方法は概ね決定することができた。	
【年度実績概要】 (1)能狂言面の調査方法の検証 本研究では「彫刻研究の手法で能狂言面の造形について検討する」ことが前提となっている。彫刻研究の手法を能狂言面の調査に持ち込むために、調査に必要な器具、機材を検討、設計した。その器具や機材を用い彫刻研究の手法で調査及び撮影を行い、調査データ収集のテスト、データの検証及び蓄積を行った。これは従前行われてこなかったことで、今後本研究を継続するための大きな成果といえよう。 (2)能狂言面の調査研究 前述の(1)で検証した調査方法を用い、東京国立博物館所蔵作品を中心に計画的に調査研究を進めることができた。東京国立博物館以外では以下の施設所蔵の能狂言面の調査を行った。 京都国立博物館、三井記念美術館、国立能楽堂、松井家 (3)調査データ等の蓄積 (1)(2)によって得られた作品情報を整理し、データ化することで分析を正確に行う基礎ができ、次年度以降の調査研究課題を洗い出すことができた。 また、歴史史料等の収集も同時にすすめ、調査データと照らし合わせることで、これまで不明な点の多かった能狂言面の造形とその背景について検証する基礎ができた。	
 東京国立博物館での能面調査の様子	
【実績値】 調査回数 11回 撮影回数 16回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-23

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本彫刻史を考える上で、非常に多くの優れた作例が残りながら検討されてこなかった能狂言面の研究は必須であるため 独創性：能狂言面の研究はもっぱら能楽の道具として、芸能史の観点からの研究がほとんどであったが、本研究では、能狂言面を彫刻として、彫刻の調査研究の手法を用いて検証しようという、これまでにない研究であるため。 発展性：能狂言面を美術史のなかに位置づけることができれば、芸能史等他分野研究にも寄与するところが大きい ため。 効率性：限られた時間の中で効率的に調査データを収集し、効率的に検証できるよう整理をすすめたため。 継続性：初年度に基礎となる調査方法の検証をすすめ、来年度以降の調査研究を計画的に行うことが可能になった ため。 正確性：調査データの検証を複数名で、また必要な場合は複数回行うことで、データの正確性を期したため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	撮影回数				
評価	B	C				
判定理由 調査件数：当初計画通り、能狂言面の調査を行った。 撮影回数：従来開発されていなかった、仮面撮影に適した指示具を新たに開発作成し、仮面撮影に適した照明のテスト等に時間を要したため撮影回数は少なくなった。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	彫刻の調査方法を用いて能狂言面を研究することは従来行われてこなかったため、本研究の意義は大きいと言える。 研究初年度である本年度は、調査方法と調査器具の試行錯誤を重ねながら、能面のなかでも非常に重要と思われる金春家伝来の能面（東京国立博物館所蔵）の調査を重ね、本研究の基礎をつくり上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は当初計画に則り、概ね順調であり、研究の基本的な基盤を整えることができた。 本研究で得られた調査データは、統一の基準に基づく客観的データであり、これまでのデータよりも美術史的研究に有用なものとなっている。 また、次年度は適宜撮影と撮影データの整理を進め、史料として収集した文書、付属品である面袋などから得られる情報を精査する。能狂言面の調査データとあわせて検証することで、能狂言面の造形を、総合また体系的に捉えていきたい。東京国立博物館所蔵品については特集陳列で成果の一部を発表する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	24) 日本における「美術」概念の再構築－語彙と理論にまたがる総合的研究（科学研究補助金）(⑤－①)
【事業概要】 近代日本が西洋から受容した「美術」は自らの美意識とは異質な分類枠のものであり、それらの作品は西洋とは異なる価値基準によって定義され、記述されるべきものである。 真正の日本の「美術」概念を再構築する場が生成するために、“概念としての「美術」”にかかわる先行研究の成果を踏まえて、日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う作品記述の語彙を再検討する。それによりどのように日本美術を捉え、どのような記述がふさわしいのかを理論的に探究する。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 伊藤嘉章
【スタッフ】 山崎剛（金沢美術工芸大学教授）、並木誠士（京都工芸繊維大学教授）、佐藤道信（東京芸術大学教授）、鈴木浩之（金沢美術工芸大学准教授）、横溝廣子（東京芸術大学准教授）、森仁史（金沢美術工芸大学教授）、後小路雅弘（九州大学教授）、北澤憲昭（跡見学園女子大学教授）、山梨絵美子（東京文化財研究所企画情報部副部長）、青木美保子（京都女子大学准教授）	
【主な成果】 ・日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う美術作品記述の手法の再検討と、日本美術を捉え方とあるべき記述法に関する現代美術、工芸及び古美術という分野別研究。 ・アジアでの漢字文化圏における「美術」について、各地域での状況とその、さらに脱植民地化の中での状況などの研究。 ・同時代美術の動向と美術館の状況、さらに「美術」概念の再構築として翻訳とテクノロジーという面からの研究。 これらを国際シンポジウムを含む研究会の開催し、研究成果の共有と問題点について検討を行っている。	
【年度実績概要】 26年4月5日 現代美術部会研究会 東京都現代美術館 26年6月14～15日 工芸及び古美術研究会 金沢美術工芸大学 26年11月8～9日 国際シンポジウム①② 福岡アジア美術館 ①「美術」にかかわる分類の検討-漢字文化圏を中心に ②「美術」の脱植民地化-グローバル化の中で 26年12月6～7日 国際シンポジウム③④ 金沢美術工芸大学 金沢21世紀美術館 ③同時代美術の動向と美術館——「美術」のオルタナティブをめぐる ④「美術」概念の“再構築[アップデート]”、—翻訳とテクノロジー—	
 26年11月8日 国際シンポジウム	
【実績値】 研究会回数 2回(現代美術部会研究会 1回、工芸及び古美術研究会 1回) 国際シンポジウム回数 2回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-24

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：研究代表者らは先に日本の工芸・デザイン作品の検索システム構築を行う中で、西洋で形成された体系や用語のみでそれらを行うことの問題に直面した。今後の研究の進展には日本の「美術」のために新たな美術概念の構築を必要不可欠である。 独創性：この分野の研究は日本の工芸・デザインの個別研究から生まれてくるものではなく、近代美術史の進展により、近代における西洋美術概念の導入が明らかになることで、初めて生まれた問題意識である。 発展性：今回の研究では、近代のみでなく、古美術や、日本だけでなく、アジア美術についてもその研究を広げようとするものであり、発展性は大きい。 効率性：分野、地域等に内容に応じて複数の研究会、国際シンポジウムを開催することで効率良く成果をあげている。 継続性：昨年度から引き続き、計画的に研究会等を開催することを継続しており、着実に成果をあげている。 正確性：分野、時代、地域といった重要と思われる部分に着目しながら研究を積み上げることを行っており、全体の正確性が担保されつつある。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	国際シンポジウム回数				
評価	B	B				
判定理由 研究会回数・国際シンポジウム回数： 計画的な研究会と国際シンポジウムを実施できており、研究成果の共有が進みつつある。 問題点が討論等で明らかになることで、研究の方向性が定まり、進展が期待できる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	個々で進められた研究が研究会、シンポジウムによって研究成果と今後の課題についての共有が進みつつある。これによって、さらに研究を積み上げるとともに、日本のみならず、アジアにおける各国の「美術」概念研究も進展が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は昨年度に引き続き分野別の研究会を開催し、成果の共有を進めた。また国際シンポジウムの開催では、アジアにおける「美術」概念という従来に無い視野での問題意識によって検討が重ねられている。今年度としてはこれらによって明らかになった問題点を検討する段階へと進みつつある。来年度はこれらを通して見えてきた問題点の整理を進めるとともに、日本美術、東アジア美術についての美術概念の研究に新たな方向を示していくことができる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25) 描いた女性たちに関する研究－桃山時代から明治・大正期まで（科学研究費補助金） （(5)－①）		
【事業概要】 桃山時代から明治・大正期までの女性画家に関して、その実態を文献・作品の両面から明らかにし、造形的・社会的・文化的特質と意義を考察する。制作の目的、制作を可能とした社会的な要件、女性であることと表現内容との相関関係、また、各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等も分析しつつ、歴史的な社会における視覚的イメージを表現することの意味について考察する。合わせて、女性の作画に関するデータベースの作成も目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 山下善也
【スタッフ】 田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、仲町啓子（実践女子大学文学部教授）			
【主な成果】 前年度に引き続き、実践女子大学はじめ他機関の科研メンバーと協力し、9月1日～4日、福岡市で近世の女性画家の作品の調査を行い、これまで注目されていなかった作品の情報を収集するとともに、女性画家の伝記等に関するデータ収集に協力し、外部研究者と連携した質の高い研究を行うことができた。当該科研は今年度で終了するが、次年度以降も、外部との協力により当館所蔵の女性画家資料に対する研究を進めるよう準備を行った。			
【年度実績概要】 ・女性画家作品の調査 (1) 福岡市西区能古島の能古博物館で、亀井少栄作品（父南冥の作品を含む）28件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（9月2日）。 (2) 福岡市博物館で、亀井少栄作品を中心に織田瑟々、伝玉瀾などの作品30余件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（9月3日）。 (3) 福岡市図書館で、亀井少栄の伝記情報を収集すべく、亀井家の日誌をマイクロリーダーで閲覧し、情報収集を行った（9月3日）。 (4) 京都個人宅にて、清原雪信の屏風ほか女性画家作品9件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年2月13日）。 (5) 東京国立博物館で、野口小蘗ほか女性画家作品9件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年3月17日）。 (6) 大阪個人宅にて、立原春沙ほか女性画家作品8件の調査（熟覧・調書作成・撮影等）を行った（27年3月23日）。 ・女性画家の作品制作の背景を考察 個々の調査作品の制作背景について、順次調査を行った（当館にて随時）。			
 能古博物館調査風景			
【実績値】 作品調査回数 6回（上記）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-25

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：女性芸術家に対する現代的関心が高い。 独創性：女性画家を総合化した画家としての社会的要因にまで踏み込んだ研究はなされていない。 発展性：各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等、社会における視覚的イメージ表現の意味について研究を広げることができる。 効率性・継続性：実践女子学園香雪記念資料館のデータ蓄積を生かし、未紹介作品の発見・統合を行うことが可能であり、当該科研で得た新知見を、当館の総合文化展示での解説等に生かし続けることができる。 正確性：女性画家の作品研究はこれまであまり行われていなかった。そのため、科学研究費の代表者である仲町氏を中心に多くの作品の調査作業を進めたが、現時点では、質的判断に供しえる基準作品の選定段階である。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数					
評価	B					
判定理由 作品調査回数：計画していた所期の回数を実現できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。これまで実施していなかった遠隔地の女性画家の作品調査を十分に行うことができ、このテーマにおける情報の地域的な蓄積を増大させた。外部との調査協力体制も確立し、所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。実践女子大学との共同の調査に参加し、外部との調査協力体制が確立した。当該科研は今年度で終了する。今後、本テーマを基にして新たなテーマへの発展・展開を検討していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	26) 武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5)-①)
【事業概要】 古墳時代は、象徴的な器物の授受を通じて、王権中枢が地域社会との関係を構築した時代である。5世紀の古墳時代中期には、武器と武具とを組み合わせた武装具が、王権から地域社会(首長)へと配布される象徴的器物であった。本研究は、武装具が古墳に集積する現象に注目して、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。奈良県円照寺墓山1号墳の出土資料を事例として取り上げ、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という3つの視座から検討する。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 上野祥史(国立歴史民俗博物館 研究部考古研究系・准教授)、齋藤 努(国立歴史民俗博物館 研究部・教授)、坂本 稔(同 研究部・准教授)、橋本達也(鹿児島大学 総合研究博物館・准教授)、杉井 健(熊本大学 文学部・准教授)、阪口英毅(京都大学 文学研究科・助教)、諫早直人(奈良文化財研究所 都城発掘調査部・研究員)、川畑 純(同 都城発掘調査部・研究員)、高橋 工(大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・難波宮調査事務所長)、清水和明(同 大阪文化財研究所・事務企画課長)、鈴木一有(浜松市教育委員会 学芸員)、西嶋剛広(宮崎市教育委員会 学芸員)	
【主な成果】 古墳時代中期における武装具集積の典型資料の調査および研究会を実施し、今年度は次のような研究成果があった。 ① 東京国立博物館所蔵資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。 ② 調査情報を基礎として、「武装具の集積現象」を比較検討し、研究を推進した。 ③ 26年度平成館改修に伴う考古展示室計画に反映させた。	
【年度実績概要】 ① 東京国立博物館において研究会(26年5月14～17日・7月30日～8月2日・8月13～16日・9月17～20日・11月19～22日・12月24～27日・27年2月18～21日)を開催し、円照寺墓山1号墳出土資料の整理および実測調査を進めた。調査資料の際は、研究協力者を雇用して、写真・データ等の整理・分析を実施した。 ② 1) 東京国立博物館において検討会で研究報告を行い、論点の整理とその共有を図り、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。 2) 韓国・東新大学校博物館と共同研究会(26年5月3日)を開催し、同博物館所蔵資料の羅州地方出土甲冑・武器武具などの調査資料を行い、相互に問題点を検討・分析した。	
	
共同研究会：資料調査風景(東京国立博物館)	
【実績値】 ○調査日数 : 28日間 ・調査件数 : 約50件 ・主な調査資料 : 奈良県円照寺墓山1号墳出土資料・京都府久津川車塚古墳出土資料(東京国立博物館蔵) ○研究会日数 : 4日間 ○論文等公開件数 : 3件(①～③)	
【備考】 ①古谷 毅「中小古墳と大型古墳―再整理からみた七観古墳の歴史的位置―」『巨大古墳あらわる－履中天皇陵古墳を考える－』(第四回百舌鳥古墳群講演会記録集)堺市文化財講演会録第7集、堺市文化観光局文化部文化財課、pp.27-73、27年2月27日 ②古谷 毅「古墳時代武装の性格―日本列島における武器武具の社会的役割―」(埼玉県立歴史と民俗の博物館「特別展 甕の鉄剣展」記念講演会)26年11月15日 ③古谷 毅(他4名と共著)「西都原古墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査について―珠文鏡・銅釦・挂甲小札の報告―」『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第11号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.1-14、27年3月31日	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-26

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	A	B
判定理由 適時性：当館所蔵資料(列品)の調査・研究成果の緊急性・公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年度は十分な調査を実施することができた。また、韓国における共同調査など国際性の要素も含めることが出来た。 独創性：古墳時代鉄製武器・武具・馬具研究史を踏まえて発想・着想しており、鉄製武器武具馬具研究におけるオリジナリティおよび新規性と卓越性において優れていると思われる。 発展性：写真や簡略な実測図中心であった従来の武器武具馬具研究に比べて、研究視角の面からは古墳時代および金属器研究に与える応用性など、研究方向の多様性・汎用性に裨益し、一定の成果があると思われる。 効率性：研究代表者・研究分担者・連携研究者とともに調査を進め、また実測調査に先立ち研究協力者を雇用して資料の事前整理を進めており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行なっていない。 継続性：これまで交付された各種科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究事例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。 正確性：従来この規模の資料群では、実測図の作成はほとんど行なわれていないが、作成した実測図はすでに150枚を超えており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する事例は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開			
判定	B	B	B			
判定理由 調査日数：目標に照らして十分な日数を確保し、実施した。 研究会日数：必要な研究会を開催した。 論文等公開：公開性に鑑みてもほぼ適当な分量と思われる。						

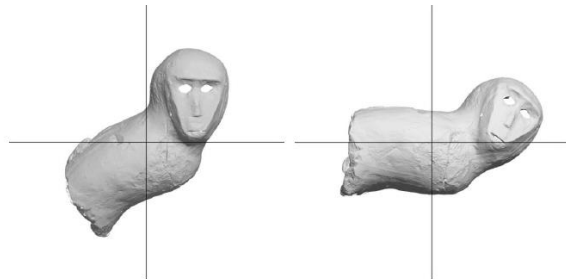
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられる。他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査回数は十分であり、調査精度の向上をさらに高めたい。東京国立博物館所蔵資料の列品整理としても顕著な成果が挙げられている。今年度はさらに韓国との共同開催など、国際性も加えることが出来た。次年度以降は、より研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会をさらに充実し、さらに発展性・独創性の拡充と確立を図る所存である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の整理・資料化、また論文発表・講演等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として十分な蓄積を行ったと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は、より高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度の計画へ反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	27) 三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獣鏡の総合的研究(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】 古墳時代前期を代表する遺物である「三角縁神獣鏡とは何か」について三次元計測技術を応用して製作技法から考えることを目的とする。舶載三角縁神獣鏡と仿製三角縁神獣鏡の対比を中心に、それを取りまく倭鏡、中国鏡、銅鐸の同一文様をもつ青銅器を分析対象として、量産技法から相互関係を分析する。そのための手段として精密三次元計測データによる客観的で詳細な分析を用いる。そして、肉眼観察では扱うことが不可能であった青銅器表面の微細な鋳型の傷や、面的な変形、収縮についての新しい情報を得ることで、これまでにない製作技法の解明を進める。 さらに、青銅器製作技術から「舶載」と「仿製」三角縁神獣鏡の技術的系譜を明らかにすることも目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所 調査課総括研究員：研究代表者)、菅谷文則(奈良県立橿原考古学研究所 所長)、奥山誠義・柳田明進(奈良県立橿原考古学研究所主任研究員・研究員)、北井利幸(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 主任学芸員)、連携研究者：今津節生(九州国立博物館) 森下章司(大手前大学)			
【主な成果】 ① 既存の調査成果の調査データ・写真の整理・分析を行なった。 ② 既存の主要古墳出土銅鏡・埴輪等の三次元データ分析と画像処理を行い、今後の活用に向けてデータ分析の方法の整備を図った。 ③ 研究成果を発表・公開した。			
【年度実績概要】 ① 東京国立博物館所蔵資料の調査成果の調査データ・写真の整理・分析および解析を行なった。 ② 新規に奈良県立橿原考古学研究所蔵資料・東京国立博物館所蔵資料のほか、古代出雲歴史博物館・天理参考館所蔵飼料などの三次元計を行った。 一方、これまでの研究成果(科学研究費補助金 基盤研究(A)：課題番号 25284161・18 年度～21 年度、基盤研究(A)：課題番号 25284161・14 年度～16 年度)において調査した東京国立博物館所蔵の主要古墳出土銅鏡のデータ・写真の整理・分析を行い、今後の研究資料の整備を図った。 ③第 80 回日本考古学協会で、三角縁神獣鏡の同型技法における使用痕跡の研究成果を発表・公開した。			
 ○三次元計測データの画像分析および可視化(オルソ画像処理(正射投影図)) [左：森尾・佐味田宝塚古墳出土三角縁神獣鏡、右：埴輪 猿(東京国立博物館蔵)]			
【実績値】 ○調査・分析日数：3 日間 ・調査件数：約 5 件 ・主な調査・分析資料：三角縁神獣鏡・日本列島製漢式鏡、埴輪 猿(東京国立博物館蔵) ○研究会日数：1 日間 ○論文等公開件数 1 件(①)			
【備考】 ①水野敏典・奥山誠義・古谷 毅・徳田誠志「三角縁神獣鏡『同范鏡』にみる同型技法の使用痕跡の研究」『一般社団法人日本考古学協会第 80 回(2014 年度)総会 発表要旨』日本考古学協会、p 22、2014 年 5 月 17 日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-27

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：既存の科学研究費補助金A(2002～2004・2006～2009年)による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが今年度は一部スタッフの都合で、十分な緊急性には応えていない部分が残った。 独創性：三次元計測データの解析・応用研究を目的に発想・着想しており、従来の青銅器研究においてオリジナリティおよび新規性には優れていると思われる。 発展性：肉眼観察が中心であった従来の青銅器研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは原始・古代金属器研究および弥生・古墳時代の考古学研究に与える応用性などに一定の影響性があると思われる。 効率性：研究代表者・研究分担者の研究協力を得ており、予算運用の計画は時間的・人的投資について有効であると思われるが、今年度は一部スタッフの都合で十分には達成できない部分が残った。なお、設備的投資については、今後の研究を進める基盤を形成した。 継続性：前回科学研究費補助金A(2002～2004・2006～2009年)による調査・研究成果を継承し、期間は適正である。また、従来の研究で得たデータは質・内容・量とも本研究テーマの資料的基盤を形成し、基礎性において優れている。 正確性：数値・データに関してはすでに従来の研究成果で基盤を形成しており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する成果は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数			
判定	B	B	B			
判定理由 ○調査・分析日数：館内の展示室改修に伴う撤収・立会等で、必要な日数を実施した。 ○研究会日数：館内の展示室改修に伴う撤収・立会等で、必要な日数を実施した。 ○論文等公開件数：公開性に鑑みてもさらに努力が求められると思われる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査とデータ分析の質をさらに高める必要があるが、今年度は研究代表者の本務の都合で十分に達成したとはいえない。来年度はより研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会で分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図り、さらに調査を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析および学術的評価に関する十分な考古学的情報の発表等を通じて、当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として蓄積は実施できたと思われる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は3.総合的評価のように、今後の計画遂行とより高度な効率性・適時性および発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度計画を策定する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 木彫像の樹種識別技術の高度化（科学研究費補助金）（(5)-①）		
【事業概要】 木彫像の樹種判別に非破壊分析手法、顕微手法を応用した精密分析手法を導入することにより、種レベルでの正確な樹種を特定する研究。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 安部久（森林総合研究所主任研究員）、渡邊宇外（千葉工業大学准教授）、渡辺憲（森林総合研究所研究員）、石川敦子（森林総合研究所主任研究員）、久保智史（森林総合研究所主任研究員）			
【主な成果】 (1)伐採後、数百年以上経過した木材中に残存する DNA の質と量について評価した。 (2)京都東寺の北総門に用いられていた伐採後 400 年以上経過したスギ材にも一定の量と質の DNA が残存することが分かった。 (3)伐採後数百年以上経過した木材からも DNA が得られることから、木彫像や建築物などから微量でも木材の試料が得られる場合、それを分析することで、樹種に関してのより詳細な情報が得られる可能性があり、文化財の製作された背景などに関して、科学的に考察できる可能性がある。			
【年度実績概要】 (1)・森林総合研究所及び京都大学生存圏研究所の木材標本庫に所蔵されている伐採後の経過年数が異なるスギ材標本、及び、千代田試験地において伐採後すぐに冷凍保存した木材をを試料として、リアルタイム PCR 法によって、木材中に残存している葉緑体 DNA のコピー数を分析した。 ・静岡県坂の上薬師堂（26 年 8 月 6-7 日）、奈良県興福寺（26 年 9 月 8 日）、岐阜県薬王寺（26 年 12 月 16-17 日）に木彫像の調査を行い、近赤外の吸収スペクトルを収集した。 (2)東寺北総門に用いられていたスギ材において 185np 以下の長さの領域の DNA は増幅され、分析する領域を 200bp 以下にすると伐採後数百年以上経過した木材でも DNA による分析が可能であると考えられた。 (3)日本木材学会の英文誌(Journal of Wood Science)に論文が掲載された。			
			
岐阜県薬王寺での調査風景			
【実績値】 調査回数 3 回 調査地(木彫像数/取得スペクトル数)：興福寺（2 体/29 スペクトル）、薬師堂（15 体/128 スペクトル）、薬王寺（22 体/150 スペクトル） (参考値) 学術論文発表 1 件 Watanabe U., Abe H., Yoshida K., Sugiyama J.: Quantitative evaluation of properties of residual DNA in <i>Cryptomeria japonica</i> wood. J.Wood Sci. DOI 10.1007/s10086-014-1447-6（2014）（オンライン） 国内学会発表 1 件 日本木材学会第 65 回記念大会 2015 年 3 月 16-18 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-28

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：特に近赤外分析法では非破壊分析が可能となるため、文化財を傷めずに調査できる手法の確立が求められている。 独創性：樹種を判別することで文化財の製作背景を探るという観点に新規性が認められる。 発展性：木彫像に限らず多様な木質文化財に調査対象を広げる事ができる。 効率性：一度の調査で数多いスペクトルを収集できるように現場での準備や調査手法を工夫している。 継続性：複数年かけて多くのスペクトルを収集し、標準的なデータベースの構築を試みている。 正確性：科学的な分析手法によって樹種同定に客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査木彫像数	取得スペクトル数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：いずれも普段は木彫像に接近することが許されない調査地であり、十分な回数である。 調査木彫像数：1年で39体の木彫像を調査対象とすることができた点はB評価に値する。 取得スペクトル数：客観的な結果を論じる上で十分な数のスペクトルを収集できたと評価する。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	全ての定性評価及び定量評価についてB評価であり、総合的に見てもB評価と判断できる。 次年度もこの水準で継続できるよう計画したいと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度もこの水準で継続できるよう計画したいと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	29) 作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】南宋時代の代表的な羅漢図である「五百羅漢図」（大徳寺伝来）は、美術史のみならず、南宋における江南地域社会の成立を解明する重要な作品である。それは日本に舶載されることによって、異なる文化のコンテキストによって解釈され、受容されてきた。その具体相を、文献と作品そして残されたさまざまな視覚資料から探ろうとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本鷹充
【スタッフ】			

【主な成果】

- (1) 博物館、寺院及び古跡に赴き、現地調査を行った。
- (2) 実際の作品を熟覧のうえ、写真撮影を行った。
- (3) 東洋館8室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。

【年度実績概要】

- (1) 山口県徳地町、山口県立美術館、大分県中津市耶馬溪羅漢寺、福岡市立博物館、などで調査を行った。
- (2) 鎌倉から近世にいたる羅漢信仰と現地の所在文化財の調査を行うことにより、宋代の羅漢信仰の流布について大きな知見を得た。
- (3) 東洋館8室における「金大受「十六羅漢像」と道釈人物画」では、所蔵される金大受羅漢像を全幅展示し、あわせてベルリン東アジア美術館、群馬県立美術館に分蔵される羅漢図を復元的に展示することができ、研究の成果を反映することができた。



金大受「十六羅漢図」の展示



西金居士「羅漢図」模写(晴水養廣模)

【実績値】

作品調査：写真撮影 600 枚、現地調査：写真 200 枚
学会発表：1 回(①)

【備考】

学会発表

- ①2014 年 12 月 6 日、「《唐繪手鑑(筆耕園)》與江戸時代中國繪畫知識の架構」「創新與創造：明清知識建構與文化交流」國際學術研討會(於：中央研究院 中國文哲研究所)

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-29

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：大徳寺伝来五百羅漢図は、国際的にも近年大いに注目されている作品であり、その意味の解明が求められている。 独創性：大徳寺伝来五百羅漢図は従来までの中国美術史研究になかった新視点をもたらす存在であり、アジアの広地域における仏教美術研究のなかでも独創的な位置を占めている。 発展性：将来的にも美術史のみならず、仏教学、歴史学に及ぶ広範な成果が期待できる。 効率性：現地の学芸員の協力の下、効果的な作業ができた。 継続性：作成済みの五百羅漢図の資料を中心に、アジア地域における羅漢信仰の調査を継続する。 正確性：計画的な調査を遂行することができたため、高解像度の画像を得ることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	現地調査	学会発表			
評価	B	B	B			
判定理由 作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 現地調査：十分な研究成果を得ることができたため。 学会発表：その成果をもとに十分に発信することができたため。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌的理解をするために、十分な調査活動を行うことができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大徳寺伝来五百羅漢図の作品誌的理解をするために、現地調査や作品調査を行うことができた。来年度も引き続き調査を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	30) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信 (科学研究費補助金) (5)-①
【事業概要】 在欧博物館が所蔵する日本仏教美術作品の悉皆調査を行なう。それらのコレクションの流通経路も調査し、作品自体のデータと合わせて、英語と日本語による画像付データベースを作成して公開する。欧州と日本相互の研究成果の交換を可能にし、在欧における日本美術史研究や日本観の研究を促進するとともに、今後の欧州における日本関係美術品の活用の進展をはかる。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	副館長 島谷弘幸
【スタッフ】 ヨゼフ・クライナー（客員研究員）、小口雅史（法政大学文学部教授・法政大学国際日本学研究所 所長）、河合正朝（千葉氏美術館 館長）、智恵・シュタイネック（チューリヒ大学）、伊藤信二（学芸企画部広報室長）、丸山士郎（学芸研究部列品管理課平常展調整室長）、小山弓弦（学芸企画部博物館教育課教育普及室長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室客員研究員）	
【主な成果】 (1) ・イギリス・大英博物館、大英図書館において、日本仏教美術の調査を実施した。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術のデータベース公開について、本研究担当者で今後の方針など検討会を行った。 ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムと同事業のワークショップにおいて、米欧ミュージアム担当者と意見交換を行った。 (2) ・イギリス・大英博物館、大英図書館が所蔵する日本仏教美術作品の確認が取れた。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術データベースの内容を充実させることができた。 ・米欧ミュージアム担当者ととの意見交換において、新たな調査対象を見つけることができた。 (3) ・米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムにて、これまでの成果を口頭発表した。	
【年度実績概要】 (1) ・イギリス・大英博物館、大英図書館において同館所蔵の日本仏教美術の調査を実施した（27年2月19日～20日）。 ・本研究の今後の調査方針やデータベースをより使いやすいものにするための検討会を実施した（於法政大学国際日本学研究所：7月25日、於東京国立博物館：6月9日、7月8日、11月8日）。 ・本研究担当者智恵・シュタイネック氏のイギリス調査実施について、現地担当者（大英博物館 担当ニコル・ルマニエール）との連絡調整を行った（於東京国立博物館：6月25日～30日）。 ・米欧ミュージアム担当者と意見交換を行った（於東京都美術館 11月11日、於大阪大学中之島センター：11月13日）。 ・在欧日本仏教美術に関する問い合わせに対応した（6月25日ほか）。 (2) ・ドイツ・ケルン東アジア美術館が所蔵する日本仏教美術作品で未公開の作品も含み、所蔵作品の全体像の確認が取れた。 ・在欧博物館所蔵の日本仏教美術データベースをさらに作品数・項目数を増加させることができた。 ・米欧ミュージアム担当者ととの意見交換において、アメリカ・フィラデルフィア美術館などアメリカ方面にも新たな調査先を確認することができた。 (3) 米欧ミュージアム専門家交流シンポジウムにて、在欧日本仏教美術の内容について報告するとともに、東京国立博物館がこれまで在欧博物館等とどのように展示交流してきたのかを発表できた。	
ドイツ・フォルクヴァンク美術館からの日本仏教美術に関する問い合わせに対応（27年1月） 	
【実績値】 ・調査件数 30 件 ・データ入稿件数 30 件 ・関連データ収集件数 50 件 ・研究報告件数 1 件 (①)	
【備考】 研究報告 ①島谷弘幸「展覧会の交換と専門家による国際交流」（シンポジウム「米欧ミュージアムの日本美術コレクションとその活用」、於東京都美術館講堂、26年11月11日）	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-30

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：在欧博物館が所蔵する日本仏教美術のデータベース化を予定通り進めており、未公開の作品を確認できるようになっており、欧州と日本の研究者相互の国際交流も進んでいる。 独創性：なかなか調査しがたい状況であった在欧博物館所蔵の日本仏教美術について、着実に調査を進めて目標を達成できている。それらの作品を悉皆調査してデータベース化することは、独創的であるといえる。 発展性：画像付データベースを予定通り公開を進めており、日本における仏教美術研究の対象を広げるのみならず、欧州における日本美術研究の促進に寄与できている。 効率性：在欧博物館への調査が一年で一度の実施であったが、日本において基礎的データ収集を進めることができた。 継続性：本研究は、すでに法政大学で数年来進めてきているもので、画像付データベースも公開済みである。調査結果はすみやかにデータ入力してデータベースとして公開できる状況である。 正確性：すでにデータベース本体が完成しているため、調査結果はすみやかにデータベースに流入することができる。データベースは、日本仏教美術研究者に活用できるものとなっている						

2. 定量的評価

観点	調査件数	データ入稿件数	関連データ収集件数	研究報告件数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：欧州の博物館において現地調査を目標通りに実施することができた。 データ入稿件数：調査を実施した結果について速やかにデータ入力して入稿することができた。 関連データ収集件数：東京国立博物館において関連作品の資料収集を十分に進めることができた。 研究報告件数：研究成果を口頭発表し、海外の研究者や博物館担当者と交流することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続してきた研究課題であり、本年度の調査対象である在欧博物館での悉皆調査も効率的に進めることができた。公開している画像付データベースについても、さらに充実した内容となるように検討会を行い、本年度の調査結果も随時データ入稿している。研究成果は口頭発表することができ、海外研究者との交流も行なった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	在欧博物館での調査実施や、東京国立博物館におけるデータ収集など計画通りに進行している。次年度は、引き続き調査を実施し着実にデータ公開件数を増やしていくとともに、日本美術研究の発展のためにも、データベース自体の普及につとめたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究(5)-①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 松本伸之
【スタッフ】 赤尾栄慶（上席研究員）、山本英男（上席研究員）、宮川禎一（企画室長）、浅見龍介（列品管理室長）、山川暁（教育室長）、永島明子（列品管理室主任研究員）、大原嘉豊（企画室主任研究員）、羽田聡（保存修復指導室主任研究員）、呉孟晋（列品管理課主任研究員）、降矢哲男（工芸室研究員）、福士雄也（美術室研究員）、末兼俊彦（企画室研究員）、水谷亜希（教育室研究員）、鬼原俊枝（学芸部研究員）、池田素子（列品管理室アソシエイトフェロー）、井波林太郎（美術室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 館蔵品、寄託品、それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりえる文化財と、その周辺領域に関して、美術史、歴史学、考古学、博物館学、保存科学等の各見地から調査研究を実施し、各種学会等・学術誌等でその成果を発表した。			
【年度実績概要】 - 研究会等で発表を行った。 - 学術雑誌他出版物に論文等を掲載した。  国際シンポジウムにおける研究発表風景			
【実績値】 - 学会、研究会等発表件数：18 件 - 論文等掲載数：34 件			
【備考】 研究発表：赤尾栄慶「京都国立博物館蔵『続高僧伝』二種」（7/19 中国・復旦大学中華文明国際研究センター 国際学術検討会「仏教と中国宗教研究の新視野と新方法」）ほか 論文等：山本英男ほか14名「京都国立博物館名品手帳」（京都新聞朝刊連載 4月1日～27年3月31日）ほか			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：特別展覧会及び平常展示との関連を重視しつつ、学会や世間の動向にも留意しながら研究を行った。 独創性：当館収蔵品・寄託品を中心に、京都の伝統文化に関わる文化財に重点を置いて研究を進めた。 発展性：新たな視点を盛り込みながら研究を行い、その成果を展示等にも反映する等、一般へ広く還元した。 効率性：人員・時間・予算・設備等に関わる様々な制約の中で、多くの研究を実施した。 継続性：長期にわたって継続的な研究を行い、折々の成果を発表した。 正確性：綿密な調査と確実な記録に基づき、実証的な研究を行った。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等掲載数				
評価	B	B				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数： いずれも、研究機関の規模及び業務の繁多を勘案した上で、適切な成果を上げている。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	充分な調査研究成果の公開を行い、絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料等の各分野にわたり、最新の学術成果を盛り込んだ情報を発信した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来の成果も活かしながら、広く一般への還元を図るなど、研究計画に基づき、順調に進捗している。 次年度には、中期計画最終年度として、総合的な調査研究に主眼を置いていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 訓点資料としての典籍に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 漢文を訓読するために施された訓点の資料は、漢籍が比較的少なく、その大半が仏典である。主に平安時代や鎌倉時代を中心とした仏典に施された訓点によって、当時の日本人がどのように本文を理解していたか、或いは当時の日本語の有り様が知られることになる。ことに当館は、国内トップレベルの写経コレクションを有していることから、専門の学識者を客員研究員に迎えつつ、それらの調査研究を行い、その成果を研究者や一般に還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 宇都宮啓吾（客員研究員、大阪大谷大学教授）、羽田聡（主任研究員）			
【主な成果】 これまでの調査を踏まえて、客員研究員の宇都宮啓吾が東京文化財研究所で開催された国際研修「紙の保存と修復」において、講師として「古写経と訓点」（東京文化財研究所 International Course on Conservation of Japanese Paper 2014 2014.9.9）の講演を行った。また、秋の特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」に展示予定の高山寺所蔵『仏説弥勒上生経』『金剛頂瑜伽経』などに付された訓点の調査を行い、展示に反映させた。			
【年度実績概要】 ・調査を年 10 回実施し、重要な部分は写真撮影を行った。 ・漢字文化圏の訓読現象をも視野に入れており、26 年 7 月及び 8 月に韓国の口訣学会のメンバーとの意見交換及び検討会を実施し、宇都宮啓吾が国際研修「紙の保存と修復」において発表を行った。 ・秋の特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」に展示予定の高山寺所蔵『仏説弥勒上生経』『金剛頂瑜伽経』などや『論語』に付された訓点の調査を行い、解説と展示に反映させた。 ・赤尾栄慶が 26 年 11 月 13 日に開催された、国宝修理装演師連盟の定期研究会で「書跡と文化財修理」と題した講演を行い、訓点の重要性など付いても指摘を行った。			
【実績値】 ・調査 11 回 ・国際交流 2 回 ・論文 2 回(①～②) ・研究成果公開（講演・発表・解説） 3 回			
【備考】 論文 ①宇都宮啓吾「智積院蔵『醍醐祖師開書』について一意教上人頼賢とその周辺を巡って－」（『智山学報』64 201 ②赤尾栄慶「隋経『阿難見水光瑞経』の出現」（『高田時雄教授退休記念東方学研究論集(日英文分冊)』）26 年 6 月			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：和紙が世界的に注目される中、料紙に付された訓点の理解に努めた。 独創性：宇都宮論文において、鎌倉中期の真言僧、頼賢に関する新たな視点を提供した。 発展性：写経のみならず、『論語』などの漢籍にも目を向けた調査を実施した。 効率性：調査結果を直ちに、特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録の解説に反映させた。 継続性：韓国の口訣学会との国際交流会と寄託品を含む文化財の調査を行い、引き続き情報交換を行うこととした。 正確性：国語学・書誌学を中心とした解説及び料紙の紙質（楮紙、雁皮）に関する最新の成果を提供した。						

2. 定量的評価

観点	調査	国際交流	論文	研究成果公開		
評価	B	A	B	B		
判定理由 調査： ほぼ、毎月の調査が実施できた。 国際交流： 韓国の口訣学会との国際交流会は、年間1回を予定していたが、2回実施できた。 論文：宇都宮2回 出版物に付した解説 赤尾1回・羽田1回 研究成果公開：予定通り、特別展覧会「修理完成記念 国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録を出版した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査及び成果を反映させた特別展覧会「国宝鳥獣戯画と高山寺」の図録を出版し、訓点に関する論文も発表したことから、所期の目的を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各年度ごとに国際交流も実施し、論文発表や図録の出版などが予定通りに実施されており、順調に成果を上げている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「彫刻」(5)-①		
【事業概要】 京都国立博物館収蔵の彫刻作品及び京都周辺社寺の仏像の調査研究、撮影			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長 浅見龍介
【スタッフ】 岡田愛（列品管理室員）、池田素子（列品管理室員）、浅湊毅（東京国立博物館）、井上一稔（同志社大学文学部教授・客員研究員）、田中健一（大阪大谷大学専任講師・調査員）			
【主な成果】 ・特別展「南山城の古寺巡礼」出品作品の調査、撮影を行った。 ・京都国立博物館収蔵の大型作品の調査、撮影を行った。 ・京都市・妙心寺の仏像調査を行い、江戸時代の銘記を複数見出した。 ・木津川市鶯瀧寺、常念寺、滋賀県彦根市・高宮寺の予備調査を行い、平安時代、鎌倉時代の像を見出した。 ・河内長野市金剛寺の大黒天立像の調査により制作年代を記した銘記を発見した。 ・京都市・知恩寺の仏像調査を行った。 ・収蔵品等のX線CT調査を行った。			
【年度実績概要】 ・京都国立博物館所蔵、寄託作品の写真は、撮影からかなりの時間が経過しているものが多く、カラー写真は限定される。今回、大型作品のデジタル撮影をまとめて行い、調書を作成した。 ・妙心寺の調査では、江戸時代の仏師康乗銘のある作品、文献から同時代の藤村仲円の作と考えられる像を発見することができた。 ・寄託品である神護寺の木心乾漆造葉師如来坐像のX線CT調査では、木心の顔、2層目の顔を観察することができた。 ・河内長野市金剛寺の大黒天立像の銘記を新たに導入したファイバースコープで観察・撮影し、展示で示すことができた。 ・知恩寺の仏像調査により、『社寺調査報告書』の刊行の目途が立った（27年度9月頃刊行予定）。			
			
妙心寺 地藏菩薩坐像調査			
【実績値】 調査日数 24 日、調査件数 100 件、撮影件数 100 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	A	B	A	B
判定理由 適時性：新館が開館し、新しい情報を発信することが望まれるため、この調査研究が有効である。 独創性：X線CT、ファイバースコープを駆使した多角的な調査を実施できる機関は極めて限られている。 発展性：京都周辺の仏像調査はすでに行われているものの、科学機器を用いた成果はまだ少ない。今後の進展の可能性が大きい。 効率性：限られた予算内で大型作品を含め、銘文の発見、時代判定に有効なさまざまな角度の写真撮影等効果的な調査・撮影を実施できた。 継続性：京都及びその周辺には対象となる仏像が極めて多いが、客員研究員、調査員や国立博物館の彫刻担当研究員の参加による現在の体制で、着実に調査を継続していくことが可能である。 正確性：X線CT、ファイバースコープ、デジタルカメラにより映像と客観的なデータを蓄積し、提示して検証可能な状況を確保している						

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査件数	撮影件数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査日数：月平均2日の調査を実施し、実績を上げることができた。 調査件数：調査は効率よく進めており、調査を実施した作品数も満足できる数である。 撮影件数：様々なカットを含め、有用な撮影ができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	金剛寺大黒天立像の像内墨書銘の解読をファイバースコープによって行なったことは新聞に掲載された。X線CT調査はテレビで取り上げられ、視聴者の注目を集めた。これらを含む成果によって京都国立博物館の展示、出版等、博物館活動の充実に寄与することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は、科学機器を用いた調査手法を導入し、新しい研究方法を開発する基盤を構築することができた。社寺所蔵の文化財調査に於いては、保存状況を確認し、地方公共団体と文化財保護について連携することができた。 次年度は、これを一層推進して成果を挙げ、京都の社寺から調査を要望されるような関係を築くことを目標とする。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 日本国内で出土・伝世した陶磁器について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員 降矢哲男
【スタッフ】			
【主な成果】 ・福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、28 件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 ・徳島城博物館の寄贈品について調査を行い、29 件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。			
【年度実績概要】 所蔵や寄贈を検討している陶磁について調査を依頼されている、福井市愛宕坂茶道美術館、徳島城博物館において、各2日、計4日の調査を実施した。いずれも近代になって収集されたものである。器形や年代、産地等についても多岐に及んでいるが、茶道具として用いるために集められたものであり、収集家の個性や地域性などを探る上で、その傾向や蒐集経路などについての知見を得ることができた。			
			
福井市愛宕坂茶道美術館調査風景			
【実績値】 調書作成件数 57 件 調査日数（館外） 4 日間 成果公表 4 件（研究発表数 2 回（①、②）、論文等執筆件数 2 件（①、②））			
【備考】 研究発表 ①「京都・堺の茶の湯文化」、大分市戦国時代館セミナー「戦国時代の庭園と茶の湯」、ホルトホール大分、2014 年 10 月 5 日 ②「秀吉と茶の湯」、河内長野地域学講座ⅤⅠ＜歴史編2＞、河内長野市立市民交流センター、2014 年 12 月 17 日 論文執筆 ①「茶道資料館開館 35 周年秋季特別展 「茶の湯の名碗」 展について」『淡交』68（11）、淡交社、2014 年 10 月 28 日 ②「名碗の魅力」開館 35 周年記念秋季特別展図録『茶の湯の名碗』、茶道資料館、2014 年 10 月 10 日			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	C	B	B	B	B
判定理由 適時性：所蔵品・寄託品の充実や、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させた。 独創性：基礎情報の収集に主眼があり、独創性にはやや乏しい。 発展性：調査成果を今後の展覧会や研究発表等に活かすことができる。 効率性：数量的にはこれまでの調査件数を下回る調査数ではあるが、茶道具とであることから付属資料も多く、そうした中では効率よく調査が行えた。 継続性：文化財に関する基礎的な情報の収集を中長期的な視野に立って実施している。 正確性：調査時間も限られた中での調査のため、一点ごとに多くの調査時間を割くことができなかったが、写真撮影を行うことにより、調査後にも再度確認を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査作成件数	調査日数	成果公表			
評価	B	B	B			
判定理由 調査作成件数：短い期間の中、計 57 件の調査を行うことができた。 調査日数：二か所、計四日間の調査日数ではあるが、短期間に他業務との兼ね合いの中で一定の調査を行うことができた。 成果公表：基礎データを蓄積でき、平常展示や講演会などにおいてもその成果を公表することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	基礎データ蓄積していくことが本プロジェクトの根本であり、一つの調査成果だけでは独創性を持った展開にはなり難い部分がある。しかし、調査成果を蓄積していくことによって、展覧会や講演会などの博物館事業の内容を充実させていくことに繋がった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究成果の蓄積を、研究発表や展示を通じて、着実に還元してきている。 次年度は、新たなデータの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを総括しながら、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査「漆工」(科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】			
科学研究費補助金(若手研究(A))「内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究」の一環として、国内外の蒔絵の伝世品を調査し、既知の基準作と比較し、また伝世の経緯を伝える史料を研究することによって、近世から近代への微妙な様式変化や、京都とそれ以外の地域の蒔絵の差異を見極めることを目標と定め、京都の蒔絵史を捉えることを目的とする。また海外の所蔵者や研究者との交流を深め、将来の共同研究の在り方を探る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 永島明子
【スタッフ】			
【主な成果】昨年度までの成果の一部を当館研究紀要に発表することができた。昨年度にひきつづき、イギリスのV&A美術館とフランスパリ装飾美術館の収蔵庫にて漆器を調査し、イギリスではV&A美術館の家具修復担当者、フランスではルーヴル美術館の学芸員やオルセー美術館の名誉学芸員、またパリの家具修復家などとも日本製漆器の受容のありようについてさまざまな意見交換も行った。パリ装飾美術館からは、先方のコレクションを用いた展覧会を企画しないかとの提案も受けた。1月にはV&A美術館のジュリア・ハット氏とパリ装飾美術館のアンヌ・フォレ・キャルリエ氏を当館へ招聘し、特にフォレ・キャルリエ氏とは「日仏漆芸交流を学ぶ」と題した国際研究セミナーを実現した。			
【年度実績概要】			
昨年度までの成果の一部を当館研究紀要『学叢』に「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ティエール(一七九七〜一八七七)蒔絵コレクション」として発表することができ、19世紀パリにおける東洋趣味の流れと流通していた日本製漆工作品の流通状況のおよその対応を掴むことができた。イギリスでは、万国博覧会の時代を中心とした膨大なコレクションを誇るV&A美術館の収蔵庫において漆器調査を進めた。調査の一部分に京都国立近代美術館の中尾優衣氏も同席し、意見を交換しながら作業を分担して、効率のよい調査を行うことができた。フランスでは、昨年度に引き続きパリ装飾美術館の漆器を調査した。昨年同様、調査内容はフランス語でも記録され、先方の台帳情報に役立てられることになっている。本年度は同館の文献情報センターでの調査も行い、2年間に調査した漆器の全てについて寄贈者等の来歴情報を収集した。パリ装飾美術館の学芸員からは同館所蔵の漆器で展覧会を企画しないかとの提案も受けた。			
			
調査中の作品をともに熟覧するフランスの学芸		V & A 及びパリ装飾美術館の収蔵品	
【実績値】			
調査作品数 136 件			
撮影カット数 3,103 カット			
【備考】			
・「ルーヴル美術館蔵アドルフ・ティエール(一七九七〜一八七七)蒔絵コレクション」『学叢』36号、京都国立博物館編、2014年5月: pp. 10-20 および 69-98。			
・国際交流セミナー「日仏漆芸交流史を学ぶ」於京都国立博物館 平成知新館 B1F 講堂、2015年1月25日開催。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	S	A
判定理由 適時性：京都製漆器の未来を考える上で重要なデータを収集しており、今年度、京都国立近代美術館で開催された「うるしの近代」展へも調査の成果を提供した。 独創性：輸出漆器のデータから国内の漆器生産の状況を知る手法の独創性が認められて科研の助成対象となった。 発展性：調査の成果をその場で所蔵者に還元。今後の展示や執筆物に活かされる情報を収集。所蔵館から国際共同研究の提案を受けた。 効率性：調査後、資料整理の時間がとれていない。限られた時間に現地語で調査を実施することができた。 継続性：3年前からの継続事業。研究の大枠は十数年来、一環して続く。比較データの蓄積。 正確性：システマチックな調査と顕微鏡画像を含む比較データの蓄積。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	撮影カット数				
評価	B	A				
判定理由 調査中に同席する研究者からの質問を多く受け、それに答えることも職務の一環と判断したため、調査作品数が予定より格段に増えることはなかった。しかし、撮影カット数はおおよび比較ポイントを押さえた画像の内容は、所期の目標を上回る成果を上げたと考える。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度の調査の成果を当館研究紀要にまとめることができた。これまで熟覧の機会が提供されることがほとんどなかったパリ装飾美術館の日本製漆器コレクションについて、その全容をほぼ把握することができた上、同館からその成果を展覧会にまとめないかとの提案を受けた。今後も研究費の取得に努め、日本製漆器を大量に所蔵しながら関連情報を十分に持っていない海外所蔵館との研究交流を深め、日本の知識の橋渡しをし、また、日本の一般市民に向けても展示や執筆を通して研究成果を還元したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	おおむね計画通りに推移している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 ((5)－①)
【事業概要】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後に収集・展示の対象となりうる文化財を調査し、併せて保存・展示・公開に関する研究を進める。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【スタッフ】 岩田茂樹（上席研究員）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、鳥越俊行（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、田澤梓（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）	
【主な成果】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後に収集・展示の対象となりうる文化財について、研究員それぞれの専門分野の立場から調査を実施し、その調査に基づく研究の成果は、展示会場におけるパネル解説や、各種刊行物に掲載の論文、館内外での講座等に反映された。	
【年度実績概要】 ・購入8件、寄託5件を受け入れるにあたり、綿密な調査に基づく調書を各担当研究員が作成した。 ・各研究員がそれぞれの研究分野に沿って文化財調査を実施し、その成果は特別展・特別陳列・名品展における会場パネル解説等と、各展示図録掲載の解説等に反映された。 ・各研究員の研究成果の一端は、「奈良国立博物館だより」、読売新聞の連載「奈良博手帖」、特別展会期中の新聞連載での展示品解説で紹介した。 ・客員研究員及び調査員の助言を仰ぐための調査会を、22回実施した（延べ人数：25人）。 ・東大寺での聖教原本調査会に参加した（26年12月11日～12日）。 ・市内個人宅での文化財調査を実施した（26年8月11日）。 ・寄託品の染田天神講連歌資料を調査した（27年1月20日）	
 連歌資料収納唐櫃の調査	
【実績値】 購入・寄託に向けた文化財調書の作成枚数 13枚 客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数） 22回（延べ25人） 研究発表等件数 34件（①～②）	
【備考】 研究発表等 ①斎木涼子「醍醐寺のすべて」（特別展図録『国宝醍醐寺のすべて』総論 26年7月19日） ②野尻忠「公盛の書状」（「奈良博手帖」読売新聞朝刊 27年1月27日） ほか32件	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：内山永久寺（奈良県天理市に所在した廃寺）開創 900 年の記念の年に、「内山永久寺と南都の密教絵画」と題する講座を開催することができ、適時に事業を実施することができた。 独創性：講座「密教法具の始まりを求めて」など、当館の長年にわたる仏教美術研究の蓄積に基づかなければ成し得ない成果を公表できた。 発展性：研究報告「写経遺品からみる宝亀初年の一切経書写と正倉院文書」は、写経本体には書写年代が記されない遺品につき、周辺史料から書写年を特定する試みであり、いまだ膨大な数がある書写年不詳写経の研究へ応用と発展が期待できる。 効率性：学術研究とは一線を画する他業務を数多く抱えながらも、研究成果を着実に発表できている。 継続性：当館が 50 年以上にわたり活動の中心に据えてきた仏教美術研究の基礎に基づき、調査・収集・展示をできた。 正確性：研究員が作成する文化財調査書は、館内で複数回の鑑査会を実施して内容の正確性を高めている。特に購入時の調査書については、外部委員による協議会に諮って了承されており、的確な内容であったと言える。						

2. 定量的評価

観点	購入・寄託に向けた文化財調査書の作成枚数	客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数）	研究発表等件数			
評価	B	B	B			
判定理由 購入・寄託に向けた文化財調査書の作成枚数：新規に受け入れた全ての文化財の調査書を作成できた（総数は例年並）。 客員研究員・調査員の調査回数：限られた時間のなかで、22回（延べ25人）（回数は例年並）を実施できた。 研究発表等件数：毎月1回のサンデートークを計画通り実施したほか、展覧会事業に対応した新聞連載を実施するなど、各研究員の専門性を生かした文化財研究の成果を公表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度も、これまでと同様、仏教美術及び奈良関係の文化財を中心としたコレクションを充実させることができ、それらの調査に基づく研究成果を各種媒体に公表、また口頭報告することができた。この分野における研究と展示で中心的役割を果たしてきた当館に期待される成果は、本年度も順調に積み上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度も多数の文化財を調査できた。調査は、当館が長年にわたり築いてきた深い知識と経験に基づくものであり、継続性が何よりも肝要である。そのなかで、館として成果を発表する場を積極的に設け、また各研究員が自らの専門分野で刊行物等に成果を報告していることは、目標達成計画実現のための着実な歩みと評価できる。今後もこの研究体制を維持できれば、さらなる上積みが可能となる。来年度も現在の研究体制を維持し、引き続き文化財調査に取り組む。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究（(5)－①）		
【事業概要】 国宝信貴山縁起絵巻及び重要文化財板絵神像の復元模写制作に伴う光学的調査及び彩色の復元的研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】 北澤菜月（美術室員）、原瑛莉子（企画室員）			
【主な成果】 (1) 文化庁の復元模写事業に伴い、国宝信貴山縁起絵巻及び重要文化財板絵神像の光学的調査で得られたデータに基づいて研究会を実施した。 (2) ポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像の撮影などの光学的調査を通じて得られたデータにより、有機色料の有無など制作当初の彩色の状態を復元的に把握することができた。 (3) 光学的調査で得られたデータを基に当初の彩色の姿について検討を重ね、その所見を復元模写制作に反映させた。			
【年度実績概要】 (1) 国宝信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）及び重要文化財板絵神像（薬師寺蔵）に関する文化庁の復元模写事業に協力する形で、当館調査室において両作品に対する熟覧・高精細カラー撮影を実施し、同時に前年度までに東京文化財研究所との共同研究形式で実施していた可視光励起による蛍光画像撮影、蛍光X線を用いた顔料分析、近赤外線撮影等の光学的調査成果に基づいて研究会を開催した（26年6月5日）。 (2) ・信貴山縁起絵巻について蛍光X線分析に基づくデータを検討した結果、着衣部分には金泥が精緻に用いられる一方、面相部には顔料が塗られていないことが判明するなど、当初の彩色を復元的に解明することができた。 ・板絵神像についてポリライトを用いた可視光励起による蛍光画像や近赤外線画像を分析した結果、有機系色料を使用していることなど、剥落部分を含めた当初の彩色を復元的に解明することができた。 ・板絵神像の透過エックス線撮影データを分析した結果、板地に端喰を固定している釘打ちの構造が明らかとなり、板地の復元に資することができた。 (3) ・信貴山縁起絵巻、板絵神像ともに、光学的調査及び研究会で得られた彩色に関する知見を、文化庁による復元模写事業に反映させることで、制作当初の姿に近い復元模写を完成させることができた。 ・信貴山縁起絵巻については完成した復元模写を28年度に当館において開催予定の信貴山縁起絵巻展で公開し、併せて調査で得られた知見を展覧会図録や展示パネル等で公表する予定である。 ・板絵神像については休け岡八幡宮（薬師寺鎮守）の秋大祭において完成した復元模写を展示し、調査成果を広く公開した（26年9月13日）。			
 重要文化財板絵神像（薬師寺蔵）の可視光励起による蛍光画像			
【実績値】 調査回数：2回（26年6月5日に信貴山縁起絵巻、板絵神像の2件について実施） 調査作品数：2件（信貴山縁起絵巻3巻、板絵神像6面） 研究会開催件数：1件(①)			
【備考】 信貴山縁起絵巻の光学的調査の成果については、28年度に当館で開催予定の信貴山縁起絵巻展の展覧会図録において公表する予定。 研究会開催 ①26年6月5日、信貴山縁起絵巻・板絵神像の光学的調査終了後、前年度までの調査で得られたデータと当日得られた調査データを分析・検討し、模写制作に資する顔料の復元案を提示した。			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平安絵巻の代表的な国宝信貴山縁起絵巻、及び鎌倉時代の南都仏画の基準作である薬師寺の板絵神像を文化庁主導で復元模写するというまたとない機会に、両作品の寄託館である当館が主導して光学的調査及び研究会を実施することができた。 独創性：信貴山縁起絵巻、板絵神像ともに可視光励起による蛍光画像撮影や蛍光X線分析など最新の光学機器を用いた調査、及びその成果をもとに復元模写を制作することは史上初めてであり、平安時代、鎌倉時代を代表する両作品の当初の彩色が解明されるという画期的な成果が得られた。 発展性：現在は変色・剥落などによって肉眼では彩色が判別できない状態になっている他の文化財に対しても、今回と同様の最新の光学機器を用いた顔料分析を実施することによって当初の彩色を解明し、復元模写へとつなげることが可能となる。 効率性：光学的調査のうち、信貴山縁起絵巻については主に東京文化財研究所との共同研究の形で実施し、板絵神像については当館の光学機器を積極的に活用した。 継続性：光学的調査そのものは前年度までに実施しており、本年度はその成果に基づく研究会を実施し、復元模写の完成へとつなげた。二つの模写事業が同時に進行していたこともあり、1日に2作品に関する研究会を同時に実施することになったが、その成果は模写事業に十分反映することができた。 正確性：信貴山縁起絵巻の光学的調査は、16年度より継続的に実施している共同研究で確立され、過去に多くの成果を挙げてきた方法を踏襲したものであり、得られたデータの信頼性は十分に確保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：作品そのものの主要な調査は前年度までに実施していたため、本年度は確認のための追加調査を年度当初の目標どおり2回実施した。 調査作品数：取り扱いの難しい国宝絵巻1件3巻と重文の板絵1件6面について年度当初の目標どおり調査を実施した。 研究会開催件数：調査データに基づく彩色復元に関する研究会を年度当初の目標どおり1回実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平安絵巻の名品である国宝信貴山縁起絵巻と、鎌倉時代における南都仏画の基準作である薬師寺所蔵の重要文化財板絵神像に関する復元模写事業を実施するというまたとない機会を捉え、光学的調査実施とその調査データに基づいた制作当初の彩色の復元的研究を行い、その成果を復元模写に反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻と板絵神像という二つの重要作品については、すでに昨年度までに光学的調査は終わっており、本年度は研究会を開催して調査データの分析で得られた成果を復元模写に反映させることが中心課題となった。中期計画最終年度である次年度新たな復元模写の対象として当館所蔵の重要文化財大仏頂曼荼羅を取り上げる予定であり、引き続きこれまでと同様の光学的調査を実施していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての情報資源化を図る(学術研究助成基金助成金)((5)-①)
【事業概要】 安時代に日本で書写された『大般若波羅蜜多經』(略して「大般若経」とも)の網羅的な調査を通じて、当該期における写経の形態的特徴を明らかにするとともに、写経遺品から得られる情報を歴史学の研究資料として利用するための基盤を構築しようとするものである。平安時代のなかでも9～11世紀のものは情報の共有が不足しているため、本研究ではその時代に書写された『大般若波羅蜜多經』の基礎データの蓄積に重点を置く。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻 忠
【スタッフ】 斎木涼子(教育室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 ・昨年度に引き続き、「安倍小水麻呂願経」と呼ばれる貞観13年(871)の願文を持つ大般若経を、巻頭から巻末まで全巻開いて調査し、写真撮影した。その結果、慈光寺所蔵分の大般若経は全て調査を終え、調書整理とデータ化に着手した(27年3月完了予定)。調査及びデータ整理の途上において、この大般若経は巻による筆跡の相違が顕著であることが判明した。 ・本研究課題の一環として海住山寺所蔵の大般若経(11世紀)、及び長弓寺所蔵の大般若経(12世紀)を調査したが、これは当館で来年度開催の特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」の準備にも繋がるものである。	
【年度実績概要】 ・安倍小水麻呂願経の調査(26年12月1日)。調書作成12巻。 ・安倍小水麻呂願経の写真撮影(26年12月2日、27年1月7日)。撮影巻数13巻。 ・安倍小水麻呂願経の残存巻次のテキストを『大正新脩大藏経』と照合(142巻分)。 ・安倍小水麻呂願経の調書整理と、調査項目のデジタルデータ化。 ・安倍小水麻呂願経の追加調査とデータ整理法の検討(27年2月23日) ・大般若経595帖(長弓寺所蔵)のうち10帖を調査(26年12月22日)。 ・大般若経599帖(海住山寺所蔵)のうち10帖を調査(27年1月10日)。	
 調査風景(27年2月23日)	
【実績値】 文化財調査の回数 6回 研究成果発表件数 5件(①～⑤)	
【備考】 研究成果発表 ①野尻忠「大般若経」ほか作品解説(静岡市美術館ほか特別展図録『法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り—』26年4月19日) ②野尻忠「理趣経」ほか作品解説(奈良国立博物館特別展図録『国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—』26年7月19日) ③野尻忠「東南院院主房起請」(『なにわ』711号 26年8月28日) ④野尻忠「東大寺封戸処分勅書」ほか作品解説(奈良国立博物館特別展図録『第六十六回 正倉院展』26年10月23日) ⑤野尻忠「春日御社御造営事(断簡貼交屏風)」ほか作品解説(奈良国立博物館特別陳列図録『おん祭と春日信仰の美術【特集】威儀物—神前のかざり—』26年12月9日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：これまで九世紀の写経に関する研究は前後の時代に比べて手薄であり、調査と研究の進展が望まれている。 独創性：長く研究の必要性が認識されながら、着手されていなかった安倍小水麻呂願経の全巻調査に、初めて本格的に取り組んでいる。 発展性：この基礎研究によって得られる成果は、同時代の他の写経研究だけでなく、前後の時代の大般若経調査にも有用な情報を提供することになると思われる。 効率性：1日で10巻以上の調査を実施するなど、調査開始初期に比べ1巻あたりの調査にかかる時間が短縮されている。 継続性：古写経研究は、当館がこれまで、そしてこれからも一貫して取り組む研究課題であり、今回の調査で培われたノウハウは、今後他の写経群を原本調査する際にも役立つと考えられる。 正確性：調書の作成は限られた研究者で行っており、書式の統一と正確性の維持は達成しやすい。今年度はできあがった調書のデータ入力に着手したが、これは調書内容の再チェックも兼ねており、調査の正確性はさらに高まる。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査の回数	研究成果発表件数				
評価	B	B				
判定理由 文化財調査の回数：3年間のプロジェクト期間の2年目で、当初の目的であった安倍小水麻呂願経は全巻をひとつとり調査し終えた上、他の経巻調査にも取り組むなど、十分な調査回数を実施できた。 研究成果発表件数：研究成果を複数回発表することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平安時代写経史研究のなかでも、9～11世紀については研究蓄積が少ない。この分野に取り組む本研究は、地道な基礎研究にならざるを得ないが、原本調査の数をこなし、確実に成果を上げている。次年度に向けては、当館寄託分を除く僚巻の調査に取り組み、一方でこれまでに作成した調書の精度を上げていき、最終的な報告書へと繋げていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記のとおり本研究は順調に成果をあげている。中期計画の「文化財に関する調査及び研究の推進」における本研究の役割は十分に果たせている。次年度は科研の最終年度でもあるため、これまでに作成した調書や画像をもとに研究を進め、報告書等の形にまとめる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 仏教工芸の総合的調査（(5)－①）		
【事業概要】 仏教工芸品の総合的な調査・研究を行う			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長兼工芸考古室長 内藤 栄
【スタッフ】 清水健（主任研究員）、田澤梓（工芸考古室員）			
【主な成果】			
・特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」の事前調査を行い、同寺所蔵の仏教工芸品を調査した。 ・収蔵する仏教工芸品に関して光学調査を含む調査を行った。 ・修理中の国宝・釈迦如來說法図（館蔵）について、東京国立博物館、京都国立博物館、九州国立博物館、正倉院事務所等の研究員を招き、研究会を行った。 ・特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」では初出陳の工芸品を展示することができ、工芸史研究に新たな資料を提供できた。 ・同展に出陳され、後に当館の所蔵となった能作性宝珠（能作性塔付属）に舍利らしき納入品が発見され、中世の宝珠信仰の研究に新たな資料を提供できた。			
【年度実績概要】			
・4月28日、醍醐寺の工芸品調査を行った。 ・5月22日、6月12日、国宝 刺繍釈迦如來說法図の研究会を行った。 ・国宝 釈迦如來說法図に関しては、以前の修理個所に貼り間違えがあること、その本来の位置がどこであるかなど、専門家による討議が行われた。また、制作された地域についての新知見も得られた。 ・醍醐寺の密教法具作品に未紹介の優品を見いだすことができた。 ・収蔵する工芸品（館蔵品、寄託品）の光学調査等の研究によって、材質、内部構造等に新知見が得られた。 ・醍醐寺の工芸品については、特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」図録に写真図版と解説、作品データを掲載した。 ・刺繍釈迦如來說法図についての知見は、修理後の報告書等で公表される予定。 ・収蔵する工芸品の新知見に関しては、当館発行の紀要論文集等で公表される予定。			
 醍醐寺のすべて展に向けた調査			
【実績値】			
研究会回数：3回			
調査回数：10回			
刊行物等件数：1回			
【備考】			
・内藤栄「醍醐寺の舍利・宝珠信仰」（『醍醐寺のすべて』展図録、奈良国立博物館編集、奈良国立博物館・日本経済新聞社発行、26年7月発行）			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国宝 刺繍釈迦如來說法図、醍醐寺の工芸品をはじめわが国を代表する工芸品について専門家による意見交換を行った。醍醐寺の作品に関しては展覧会という発表の機会を踏まえての研究であり、緊急性があった。 独創性：博物館という作品を扱う部署ならではの研究活動であり、得られた情報は今後の研究活動の基本になるものと思われる。 発展性：刺繍釈迦如來說法図の研究は法隆寺金堂壁画などの研究にも影響を与え、醍醐寺の工芸品に研究はわが国の請来仏具の系譜の研究に貢献するものと思われる。 効率性：当館の研究員だけでは人手不足、研究範囲の問題などがあり、外部研究者を招待することでカバーすることができた。 継続性：今後も工芸品の作品調査は持続的に行う必要がある。 正確性：実際に作品を扱う立場だからこそできる研究方法を大切に、外部の研究機関に発信できる基礎的な情報を蓄積してゆくように考えている。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	調査回数	刊行物等件数			
評価	B	B	B			
判定理由 研究会回数・調査回数・刊行物等件数：予定通り実施、発行することが出来た。 - 調査は古代染織の優品である刺繍釈迦如來說法図、醍醐寺の工芸品など、貴重な作品が対象であり、充実した内容となった。外部から招聘した研究者も多く、当館としても得るところが大きかった。 - 客員研究員1名、調査員1名による収蔵品調査を行い、調書を作成した。着実に成果を上げている。 - 公表の媒体は展覧会図録であり、図録に最新情報を盛り込むことができた。この事業は継続的に実施されており、今後の継続も期待される。所期の成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	概ね当初の予定を実施することができた。改良点は調査対象を増やすこと、外部での調査回数を増やすことなどをあげることができる。次年度は主に南都の寺社の工芸品の調査を継続的に行うことにある。とりわけ、平成30年度に開催を予定している春日大社の宝物等を対象としたいと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に則して順調に調査を行っている。調査成果は展覧会図録のほか、紀要論文集等に掲載するなどして公表している。とりわけ、中期計画における博物館の中核的存在としての国立博物館としての使命を、調査研究面でも発揮できていると考えられる。コンスタントな調査研究は、充実した展覧会内容に反映しており、新資料の発表、寺社の総合的な文化財の展観など、当館ならではの切り口の展覧会の基盤となっている。次年度は翌年に計画される信貴山朝護孫子寺の寺宝や鎌倉時代の僧侶、忍性の関連遺品などの調査を実施していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 古墳・古墓出土品の調査と研究 ((5)－①)
【事業概要】 当館所蔵の五條猫塚古墳（奈良県五條市）の出土品は、蒙古鉢形冑や龍文透彫金具など大陸系の文化を背景にした武器・武具、工具、装飾品類が特徴的であり、我が国の5世紀の文化交流を検討する上で非常に貴重な資料となっている。過去数年間、科研費の交付などの気運を得て当古墳の出土品の再実測や写真撮影を行ってきたが、本事業ではこれを報告書にとりまとめるべく情報の整理と図版・原稿の編集をすすめ、併せて外部研究者との情報交換を行い、最新の成果の公表に努めることとする。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 吉澤 悟
【スタッフ】 内藤栄（部長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩戸晶子（列品室員）	
【主な成果】 五條猫塚古墳出土品の各遺物の実測図や写真数百枚をとりまとめ、出土地点や遺物の種類ごとに分けて序列化し、報告書の作成をすすめた。写真図版編、報告編、考察編の三分冊の構成をとることにして、写真図版編を完成させ、報告編も編集を終了した。当年度内に二分冊の印刷を終え、残りの考察編のとりまとめを進め、次年度にて三冊揃いの報告書を公表する計画である。また、この報告書の作成により、各遺物の現況が明らかになったため、錆や破損の著しい鉄製品を抽出し随時修理に回すことが容易になった。	
【年度実績概要】 ・「五條猫塚古墳出土遺物の研究」写真図版編、報告編の編集、印刷が完了した。 ・報告書掲載の実測図に基づき、眉底付冑ほかの修理方法を検討し、次年度の修理事業の仕様を作成した。 五條猫塚古墳出土遺物の研究	
【実績値】 ・報告書作成部数 2冊（各700部） 「五條猫塚古墳出土遺物の研究」写真図版編・報告編 各700部の印刷を終了（三冊目が完成するまで未公表）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4513-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本国内はもとより、中国・韓国の研究者からも注目されている資料を整理し報告書化することができた。 独創性：外部研究者の協力を最大限に活用し、個々の遺物の報告としてはきわめて質の高い報告が作成できた。 発展性：本報告や研究知見を通じて、5世紀の対外交渉史に関する研究進展に貢献することができる。 効率性：武器・武具など鉄製品の専門家に原稿執筆を依頼して、適格な情報を収集することができた。 継続性：本報告書をもとにして五條猫塚古墳出土品を重要文化財に指定するよう努める計画である。 正確性：四半世紀前に作成された報告書の誤謬を正し、今日的な学術的評価を加えることができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書作成部数					
評価	B					
判定理由 報告書作成部数：2冊（各700部） 五條猫塚古墳の出土品は総計で600点以上を数える。このすべてを器種同定し、大半を実測図付で報告書に掲載できた。報告書は写真図版編、報告書とも各700部を製作することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	五條猫塚古墳の出土品は5世紀の大陸との文化交流に関する基準資料である。それを専門家の知見を借りながら今日的な学術的水準で報告書を作成できたことは、考古学界における大きな貢献である。この成果は展示や解説にも反映され得るであろうし、同古墳の鉄製品の修理にも役立てることができる。研究の基盤形成の点で大きく評価されるべき仕事である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査に基づく保存（保管）や活用という目標に沿って、地道に活動を継続して成果を上げている。中期計画の当該項目に対して順調に進展していると言ってよいと思われる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 井上洋一
【スタッフ】 基信祐爾（企画課長）、原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷺頭桂（企画課特別展室研究員）、西島亜木子（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、酒井田千明（企画課文化交流展室アソシエイトフェロー）、富坂賢（文化財課長）、丸山猶計（文化財課資料登録室主任研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、荒木和憲（文化財課資料登録室主任研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）、藤生京子（文化財課：佐賀県教育委員会研修生）、竹内俊貴（文化財課資料管理室アソシエイトフェロー）、本田光子（学芸部特任研究員）、今津節生（博物館科学課長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）、秋山純子（博物館科学課環境保全室研究員）、渡辺史之（博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー）、赤田昌倫（博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー）、三角菜緒（博物館科学課アソシエイトフェロー）、楠井隆志（展示課長）、岸本圭（展示課展示調整室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、一瀬智（展示課展示調整室研究員）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、小嶋篤（展示課情報サービス室研究員）、池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）			
【主な成果】 ・収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学・保存科学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を様々な展示に反映させ、また学会・研究会ならびに学術雑誌・書籍等でも発表・公開した。			
【年度実績概要】 ・様々な研究成果を以下のような展覧会に反映させた。 特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」（26年4月15日～6月8日） 特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」（26年7月8日～8月31日） 特別展「武寧王時代の東アジア世界」：韓国・国立公州博物館開催（26年9月23日～11月23日） 特別展「台北 国立故宫博物院—神品至宝—」（26年10月7日～11月30日） 特別展「日本発掘 —発掘された日本列島2014」（27年1月1日～3月1日） 特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」（27年1月1日～3月1日） 特別公開 国宝 琉球王国尚家関係資料修理完成記念特別公開（26年4月8日～5月18日） 特別公開 国宝「西光寺梵鐘」（26年4月22日～8月31日） 特別公開「解剖書に見る東洋と西洋—ファブリカからターヘル・アナトミアへ—」（26年5月20日～7月13日） 特別公開「海を越えた再会—クリーブランド美術館の仲間たち—」（26年7月15日～8月24日） 新春特別公開「徳川美術館所蔵 国宝 初音の調度」（27年1月1日～1月25日） 特集展示「『鳴りもの』の世界—九州ゆかりの梵音具を中心に」（26年11月18日～27年2月15日） v 関連展示 小中学生からの考古学（26年7月1日～9月23日） トピック展示「館蔵近世絵画名品展」（前期：26年2月25日～4月6日、後期：26年4月8日～5月18日） トピック展示「中国を旅した禅僧の足跡」（26年5月27日～7月6日） トピック展示「全国高等学校考古名品展」（26年7月15日～9月23日） トピック展示「大涅槃展」（27年1月14日～2月15日）			
【実績値】 調査・研究会等発表件数：25回 論文等掲載数：25回 展示への反映：17回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：学会動向に留意するとともに、社会的な関心や展覧会等と関連づけた研究を行っている。 独創性：アジア史的観点から日本文化の形成を捉える研究を行い、その成果を展示や図録に反映させている。 発展性：国内外の研究者との学術交流を深めながら、常に新たな問題意識をもって研究を行っている。 効率性：館藏品や寄託品の管理や展示に伴う諸作業等、他業務に多くの時間が割かれながらも研究成果を蓄積している。 継続性：各研究員の長期にわたる学術的関心をもとに研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等発表件数	論文等掲載数	展示への反映			
評価	B	B	B			
判定理由 学会・研究会等発表件数ならびに論文掲載数：いずれも研究機関の規模（研究員の人数）と業務の繁多を考慮したうえで、適切な成果をあげている。 展示への反映：多岐にわたる調査研究の成果を17回の様々な展示活動に反映させた。						

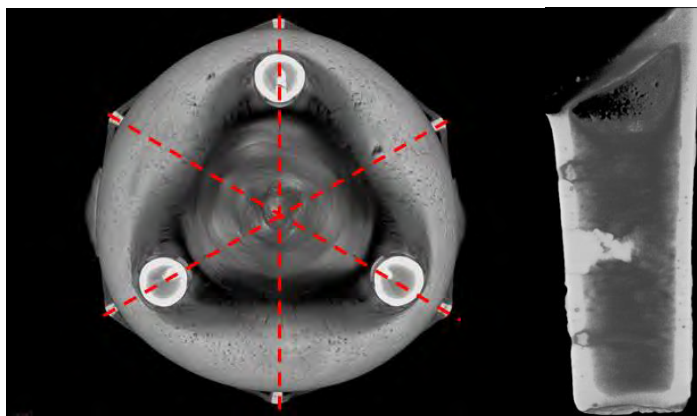
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究員の様々な調査研究を通し、博物館活動としての資料収集、調査・研究、公開が一体となり、極めて充実したものとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査研究に基づき館藏品・寄託品の計画的収集や魅力ある展示活動を展開するなど、計画は順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析（(5)－①）		
【事業概要】 日本国内で最も優れた中国古代青銅器コレクションである住友コレクション 180 点を中心に、日本国内で所蔵されている中国古代青銅器を調査する。古代中国青銅器の鑄造技術の解明のための採り得る方法として、X線CTスキャナ調査、三次元計測による調査、3Dプリンタによる造形出力、鑄造実験による検証を実施する。本研究をまとめた研究報告を中国で出版する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 井上洋一（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】 (1) 泉屋博古館の所蔵品を中心に中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積すると共にX線CT、3Dデジタル、3Dプリンタ等の科学調査機器を用いて、調査研究を行った (2) 本研究成果として、中国国内の研究者に公開するために、中国科学院自然科学史研究所と協力して研究報告書を作成した。 (3) 調査研究の成果として、中国古代青銅器の構造・技法研究を非接触・非破壊で解明することができた。作品の安全を第一とする博物館における新しい研究方法として世界でも最初の研究成果である。また、中国古代青銅器の高い製作技術をパネルで紹介することができた。			
【年度実績概要】 (1) 26 年 6 月以降、展示で借用した機会にCT 調査 や3Dデジタルによる精密三次元計測を実施した。特に、青銅器の様々な装飾、持ち手、釣り手などの立体造形をどのように器本体に付けたのかを解明することを主眼において観察を進めた。 (2) 本研究により実物では観察が不可能な青銅器の内部構造の観察を行うことができた。三足の器である鼎（てい）の脚部の内部構造について新知見を得た。鑄型を製作する際に青銅の壁を均一にする工夫や幾何学的に鑄型を組み立てる構造を明らかにした。 本研究の成果は、論文として報告書に発表すると共に文化交流展の展示に活用している。			
			
		X線CTで明らかになった鼎の足の構造	
【実績値】 調査回数 3 回 収集資料数 12 点 発表数・論文数等（論文 1 件（①）、学会研究会等発表 1 件（②）、報告書・図録等 1 件） 研究者海外派遣数 1 回 展示への反映 1 回			
【備考】 論文 ① 論文「X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財調査・研究・展示への活用」『三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究』（27 年 3 月 31 日） 学会研究会等 ②学会研究会等発表 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」（26 年 12 月 20 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：CT調査は形状や保存状態の把握に効果がある。 独創性：我が国の博物館で唯一、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形を行うことができる。 発展性：X線CT・3Dデジタル・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線CT・3Dデジタル・三次元プリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線CTでは文化財内部の構造を約0.2mm、3Dデジタルでは0.02mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料 収集数	発表・論文数	研究者海外 派遣数	展示への反映		
評価	B	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 資料収集数：予定通り実施することができた。 発表・論文数：中国科学出版社から『泉屋透賞』として研究報告を出版するなど、計画通り順調に実施することができた。 研究者海外派遣数：北京に研究者を2回派遣して中国科学院の研究者と情報交換した。 展覧会数：文化交流展示に活用した。							

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化交流展示室で展示した泉屋博古館など中国古代青銅製品について調査を実施することができた。今後も展示借用計画と連動して計画的な調査を実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行できた。また、研究をまとめた報告書を刊行した。最終年度である次年度は彫刻についての研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本の中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究((5)－①))		
【事業概要】 茶の湯を彩るさまざまな道具の世界を館蔵品を中心に紹介するトピック展示「茶の湯を楽しむ」は、文化交流展における重要テーマのひとつとして位置づけ、平成 20 年以来これまでに 6 回開催してきた。このトピック展示は今後もさまざまな観点から展開を行う予定である。今後のテーマ立案のため、日本の中世から近世にかけて制作された茶道具（とくに陶磁器、漆器、金工、染織など）の基礎的な調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室研究員 遠藤啓介
【スタッフ】 川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）、酒井田千明（企画課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 芦屋鋳物師が製作した鋳造作品について、地元自治体文化財担当者や関連施設研究員の協力を得ながら三次元実測、X線 C T スキャン調査を実施し、芦屋鋳物師に特徴的な制作技法と構造を確認することができた。その成果は特集展示「「鳴りもの」の世界－九州ゆかりの梵音具（ぼんおんぐ）を中心に－」で公開した。			
【年度実績概要】 ・ 芦屋釜については、24 年に「茶の湯を楽しむ V」として「芦屋釜と館蔵茶道具」を開催したが、そのとき企画協力を頂いた「芦屋釜の里」（福岡県遠賀郡芦屋町）の研究員とともに関連資料の調査を実施した。 ・ 特集展示「「鳴りもの」の世界－九州ゆかりの梵音具（ぼんおんぐ）を中心に－」（会期：26 年 11 月 18 日～27 年 2 月 15 日）の開催にあわせて、茶窯以外の罌口、梵鐘等、出陳した芦屋鋳物師の鋳造作品について写真撮影と三次元実測、C T スキャン調査を行い、芦屋鋳物師に特徴的な制作技法と構造を確認することができた。調査の成果は展示の作品解説に反映させ、公開した。 ・ これらの調査成果は、27 年度、「茶の湯を楽しむ」シリーズの関連企画として「芦屋鋳物師」（仮称）に反映する計画である。			
			
特集展示「鳴りものの世界」会場風景			
【実績値】 調査回数：4 回 (参考値) 刊行物件数：1 件(①)			
【備考】 刊行物 ①コラム「梵鐘の魅力」（『アクロス福岡文化誌 8 福岡県の仏像』所収 アクロス福岡文化誌編集委員会 26 年 3 月 31 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：トピック展示「茶の湯を楽しむ」は九州国立博物館における毎年秋の企画としての期待も高い。 独創性：九州にゆかりのある作品を重点的に紹介する企画であり、独創性は高い。 発展性：過去の調査の成果を別の新たな企画に発展させることができた。 効率性：次年度の企画検討、調査、出陳依頼に時間をかけて取り組むことができた。 継続性：トピック展示「茶の湯を楽しむ」は九州国立博物館のシリーズ企画として定着をみている。 正確性：限られた時間のなかで次年度以降の企画につながる調査を着実に実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
評価	B					
判定理由 調査回数：現地調査を4回実施し、目標を達成した。調査内容としても将来の企画に発展していく数々の成果が得られた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	次年度以降の企画検討・調査研究に力を入れた。地元九州に立脚した本調査研究の成果はトピック展示など様々な企画に発展しつつあり、九州国立博物館らしい将来性が期待されるプロジェクトといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	茶道具に関する本調査研究は、地元九州に立脚した、多様な視点を形成しつつある。地元教育委員会文化財担当者等とも密接な連携をはかり、文化財保護施策の立案及び文化財の評価等にも大きく寄与しているといえ、順調に実施されている。次年度以降もこの方向性を重視し、一層展開させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 日本中世における仏涅槃図の基礎的研究((5)-①)		
【事業概要】 日本中世に制作された作品を中心に、涅槃図の調査研究を広く行った。調査の中で新しく見出された作品、初公開となる作品も複数あり、このたびの調査の意義は大きい。また、その成果はトピック展示「大涅槃展」に結実させる。当館が所蔵する命尊筆仏涅槃図の修理期間中でもあったことから、赤外線撮影や非破壊の顔料分析など科学的な調査も実施する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 森實久美子
【スタッフ】 畑靖紀（学芸部文化財課資料管理室主任研究員）、鷲頭桂（学芸部企画課特別展室研究員）、志賀智史（学芸部博物館科学課保存修復室主任研究員）、秋山純子（学芸部博物館科学課環境保全室研究員）			
【主な成果】 ・日本中世の涅槃図を中心に作品調査を実施した。 ・事前調査により、日本中世を中心にアジアにおける涅槃図の図像的、様式的展開を見通すことができた。展覧会開催前後には、写真撮影（赤外線撮影を含む）や詳細な調査を行い、作品に関する基礎データを集積した。 ・調査の成果として、トピック展示（特集陳列）「大涅槃展」を開催した。アジア全域に広がった涅槃像及び涅槃図の展開をわかりやすく展示した。			
【年度実績概要】 ・調査の実施 兵庫・妙法寺、岐阜・汾陽寺、神奈川・鎌倉国宝館、奈良、福岡・東長寺、鹿児島・輝津館、鹿児島・黎明館、福岡市博物館、福岡・慈光寺、福岡・伯林寺、アメリカ・フレア美術館にて、涅槃図の調査を行った。各所蔵先、寄託先における事前調査により、図録等の画像では確認しにくい細部まで観察を行うことができた。 ・調査の成果 日本中世の涅槃図を詳細に調査することにより、図像だけでなく、これまでと比較の難しかった表現のレベルまで考察を及ぼすことができた。 ・展覧会の開催と出版物の刊行 当館において、トピック展示「大涅槃展」を開催した（27年1月14日～2月15日）。特に日本・平安～鎌倉時代及び中国・南宋時代の作品を重点的に集めることにより、描写や図像の比較を同時に行い、涅槃図の展開を実物で迫る展示を行った。また、修理報告や細部写真を多く掲載した図録を出版した。 ・本作品は鎌倉時代の基準作であり、その分析結果を図録などで公開することで研究者間の情報共有にも配慮するなどした。			
			アメリカ・フレア美術館での調査
			展示室の風景
【実績値】 ・調査回数 11回 ・論文 1件（①） ・展示への反映 1回 （参考値） ・刊行物 1件			
【備考】 論文 ①「命尊筆仏涅槃図試論」『図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承（浄土教・説話画）—〈仏教美術論集3〉』竹林舎（26年5月10日） 刊行物 ①『〈トピック展示〉大涅槃展 図録』九州国立博物館（27年1月14日）			

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-4

(様式2)

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鎌倉時代の基準作である当館所蔵の命尊筆涅槃図が約80年ぶりに一般公開されるという好機にあたる。 独創性：日本中世の涅槃図を中心に丁寧な調査を行い、その成果を展示においても視覚的に示すことができた。 発展性：調査の成果をトピック展示として広く一般に公開することができた。 効率性：研究者との情報共有を積極的に行い、協力も得ることで、効率よく調査を進めることができた。 継続性：長期に及ぶ調査成果を十分に反映した展覧会を実施することができた。 正確性：詳細な調査の実施により、正確なデータを取得することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会研究会等 発表	展示への反映			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：11回の調査を実施し、計画通り実施することができた。 学会研究会等発表：本研究の成果をまとめた論文を専門書に1件掲載し、また図録を作成し、目標を達成することができた。 展示への反映：研究で得られた図様伝播の流れを視覚的に展示構成に反映させることができ、目標を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査を実施することができ、その成果を展示において来館者に紹介することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。展覧会終了後も引き続き、涅槃図の調査は順調に進んでおり、研究者との情報共有も行っている。次年度以降についても、すでに調査及び高精細画像の撮影などが予定されており、計画は順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」に関する調査研究(5)-②)
【事業概要】特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」(26年6月24日～9月15日)に関する調査研究 26年6月24日～9月15日にかけて開催された特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」出陳作の安全な輸送と、 展示及び図録内容の充実を図るための調査研究。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課長 富田淳
【スタッフ】谷豊信(学芸研究部長)、竹内奈美子(学芸研究部調査研究課工芸室長)、川村佳男(学芸研究部列品管理課 平常展調整室主任研究員)、小山弓弦葉(博物館教育課教育普及室長)、塚本鷹充(学芸研究部調査研究課東洋室研究員)	
【主な成果】	
・事前の作品調査に基づき、各作品に最も適した梱包を検討し、安全かつスムーズに輸送を行うことができた。 ・前年度からの作品調査の蓄積に基づき、皇帝コレクションの意味を確認するとともに、その特性を分かりやすく図録及び展示に反映することができた。 ・展覧会開催中も、内外の研究者を招いたシンポジウムを開催することで、國立故宮博物院所蔵品に対するより深い認識を得ることができた。	
【年度実績概要】	
・台北國立故宮博物院における作品梱包時の調査により、画像では確認できない作品細部の観察を行うことができた。また、通常は見ることのできない作品の伝来を示す資料や、題跋識語の状況を確認することができた。(26年6月3日～9日)それをふまえ、皇帝コレクションの意味と伝統文化の再編にかかわる知見をもとに、充実した図録の執筆と訴求力・説得力のある展示をすることができた。 ・台北國立故宮博物院における作品梱包・陳列時の調査により、通常は見ることのできない多宝格に収納される各種文物の詳細を観察することができた。(26年6月16日～20日) ・シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」を開催し、日本と中国の文化交流、作品研究等の観点から内外の研究者10名が発表し、あわせて総合討論を行った。所蔵者や時代によって文物の持つ意味合いが変貌する状況の一斑を明らかにすることができた。(26年7月5日・6日)	
 中国古代の宇宙観「天円地方」をふまえた 多宝格のディスプレイ  内外の研究者10名による シンポジウムでの総合討論	
【実績値】	
・調査・研究 5回 ・刊行物・講演等 25件 (図録1件)、論考4本(①～④)、コラム16本(⑤～⑩)、シンポジウム2件(⑪～⑫)、記念講演会2回(⑬～⑭)	
【備考】	
①川村佳男「中国皇帝コレクションの淵源－青銅器・玉器と祭礼」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、序章総論、26年6月24日) ②富田淳「中国士大夫の精神－宋元時代の書画」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、第一章総論、26年6月24日) ③三笠景子「天と人との競合－宋・元・明・清の工芸品」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、第二章総論、26年6月24日) ④塚本鷹充「中国伝統文化の再編－清朝皇帝の世界」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、序章総論、26年6月24日) ⑤谷豊信「青銅器の銘文」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム1、26年6月24日) ⑥富田淳「孫過庭の草書書譜巻」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム3、26年6月24日) ⑦塚本鷹充「唐代から五代・北宋山水への発展」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム4、26年6月24日) ⑧三笠景子「皇帝が愛したやきもの－汝窯青磁」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム10、26年6月24日) ⑨竹内奈美子「色彩と彫技の豊－明代漆芸の魅力」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム12、26年6月24日) ⑩小山弓弦葉「染織で表わされた「絵画」－中国絵画、知られざる伝統」(特別展図録『台北國立故宮博物院神品至宝』、コラム13、26年6月24日) ⑪塚本鷹充「乾隆コレクションにおける模写・模造事業－乾隆帝の書画コレクションと狩野派」(開催記念国際シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」、26年7月5日) ⑫富田淳「徽宗の7璽と乾隆帝の8璽について」(開催記念国際シンポジウム「皇帝コレクションの意味－書画における復古と革新－」、26年7月6日) ⑬川村佳男「故宮コレクションと「倣古」－青銅器・玉器のかたち象徴された伝統－」(特別記念講演会、26年6月28日、東京国立博物館大講堂) ⑭塚本鷹充「文物がつくる社会－中国書画・故宮コレクションからアジア世界へ」(特別記念講演会、26年7月26日、東京国立博物館大講堂)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	S	S	A	A	A	B
判定理由 適時性：2011年に施行された美術品保障制度・海外美術品等公開促進法をうけて、従来は実現が難しかった特別展が開催できた。 独創性：アジアで初めて実現した国立故宮博物院の特別展であり、皇帝コレクションという独自の観点から展覧会を構成した。 発展性：皇帝コレクションの持つ意味は時代とともに変容し、日本に与えた影響も大きい。今後も様々な側面から研究を推進し、新たな特別展が期待される。 効率性：2011年の上記法施工後、速やかに先方と協議を重ね、きわめて短期間で実現できた。 継続性：古くからの人的交流に基づき、通常では海外への貸与が難しい名品を借用しえた。 正確性：作品の綿密な調査と、現地スタッフとの協議を重ねて展覧会を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査研究	刊行物・講演等				
評価	B	S				
判定理由、 調査研究：当初の予定通り順調に進行した。 刊行物・講演等：論考4本、コラム16本、開催記念国際シンポジウム2発表、特別記念講演会2回と、刊行物・講演ともに当初の予定に倍する内容を盛り込むことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本特別展は長年にわたる先方との人的・学術的交流のもと、2011年に施行された上記法を受けて速やかにプロジェクトチームを編成し、門外不出の名品を含む諸文物を借用したもので、アジアで初めて実現した。さらに刊行物・講演等についても当初の予定を大幅に上回る内容となった。皇帝コレクションに対する深い理解のもとに、鑑賞者に分かりやすくその魅力を提示しえた本展は、所期の目標を大きく上回り、社会的に一定の貢献を果たしたと考えられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	アジア初の開催となった本展覧会は、数十年に及ぶ準備のもとに、現地スタッフと学術交流を重ね、きわめて質の高い研究成果を展示及び多数の刊行物・講演等に結実することができた。世界に散在する中国美術の根幹をなす皇帝コレクションは、今後、作品の価値体系の多様性を解明するうえでも重要なテーマの一つである。所期の目標を質量ともに大きく上回るとともに、次年度以降の発展性を考慮してS評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-2 2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」(9 月 17 日～11 月 24 日)に関する調査研究 26 年 9 月 17 日～11 月 24 日に開催した 2014 年日中韓国立博物館合同企画特別展「東アジアの華 陶磁名品展」の出品予定作品の調査研究を行う。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	企画課特別展室研究員 横山梓
【スタッフ】 伊藤嘉章(学芸企画部長)、三笠景子(学芸研究部保存修復課保存修復室研究員)	
【主な成果】 (1) 中国国家博物館、韓国国立中央博物館の所蔵品を調査して作品選定を行うことで、それぞれの館の所蔵品の特性を活かしながら、それぞれの国の陶磁の展開を特徴的に示すことができた。 (2) 日中、日韓、そして中韓の相互の陶磁の文化交流をテーマに中国、韓国の研究者と共同研究の中から作品を選定し、東アジアの陶磁の世界での交流の状況と各国の独自性を示す展示となった。 (3) 展覧会会期中に中国国家博物館、韓国国立中央博物館を招き、三ヶ国の研究者による記念講演会を実施した。	
【年度実績概要】 (1) 26 年 2 月 12 日～13 日、韓国国立中央博物館において、展示準備のための出品予定作品の調査を行った。 (2) 26 年 3 月 19 日、中国国家博物館において、出品作品の選定と展示準備のための調査を行った。 調査の結果得られた知見・発見等 ・韓国国立中央博物館においては、国宝 96 号・青磁亀形水注をはじめとする高麗青磁を中心に調査を行い、中国国家博物館では 2 級文物・三彩馬を含む、唐三彩等貴人墓出土品を中心に行った。それぞれにおいて、作品の展示に際しての状態、展示具の必要性等について確認を行うことができた。 調査・研究の成果への反映 ・図録の編集にあたっては、日中韓三ヶ国でその方針について協議を重ね、調査の知見をもとに出品作品を中心とした総論、作品解説を各国それぞれで執筆した。これを展覧会図録として発刊した。 ・26 年 9 月 27 日に東京国立博物館にて記念講演会を実施し、展覧会の出品作品に即しながらそれぞれの所蔵品の特色、各国相互尾の影響関係などについて講演を行った。	
 中国国家博物館 調査  展覧会場風景  展覧会図録	
【実績値】 ○展示構成等検討会回数 5 回 ○展示作品数 中国：15 件、韓国：15 件、日本：15 件 (参考値) ○論文数：3 件(日、中、韓 各 1 件) ○作品解説：45 件 ○作品調査回数 2 回(前年度) 中国・国家博物館 韓国・国立中央博物館	
【備考】 横山梓「2014 年日中韓国立博物館合同企画 特別展「東アジアの華 陶磁名品展」に寄せて」陶説 No. 738 2014 年 9 月	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
評価	B	B	B			
判定理由 適時性：東京国立博物館は中国・国家博物館、韓国・国立中央博物館と隔年で会議を開催し、相互理解を深め、相互協力を進めている。その成果を広く還元するための第一回目の共同企画展としての開催であった。日本、中国、韓国が古くから文化交流によって深く結びついていることを示す上でも意義深いものであった。 独創性：日中韓の三国立博物館最初の共同企画展として、三ヶ国にあり、それぞれが関係し、また独自の展開を示す陶磁を「東アジアの華」として取り上げたことで、交流とそれぞれの独自性を示すことが可能となった。 発展性：東京国立博物館の展示体系では日本と東洋は本館、東洋館と別の館での展示となっている。今回、中国、韓国、日本という三ヶ国の陶磁を一堂に展示することで、観客にお互いの影響関係などを伝えることができるとともに、それぞれの特徴を示すことでも有効であった。今後、陶磁あるいはその他の分野において、こうした展示を行うことで、より深い理解に導くことができる。						

2. 定量的評価

観点	展示構成等 検討会回数	展示作品数				
評価	B	B				
判定理由 展示構成等検討会回数：調査結果に基づいて展覧会を構成、展示照明などについて、十分に検討することができた。この結果を三ヶ国で討議し、展示の全体像の構築が可能となった。 展示作品数：会場となった特5展示室において、日中韓三ヶ国の陶磁を余裕を持った空間構成により効果的に展示することができた。各国の陶磁の歴史をそれぞれの館のコレクションの性格にあわせながら、初の三館共同企画展としてバランスの良い構成ができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査とその際の所蔵館担当者との展覧会に対する検討を基礎として、その後の相互検討を加えていく中で、日中韓三ヶ国の陶磁の国際交流を示す展覧会を実現することができた。 三ヶ国の国立博物館による共同研究とその成果の国民への還元について、ひとつのあり方を示すことができた。 今後、隔年での共同展覧会の開催が計画されており、今回の経験の上でさらなる成果が期待される。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査、研究の成果を展覧会、講演会等に反映することができた。 三ヶ国の研究者による共同研究であるとともに、国際交流の姿を展示によって示すことができた。 国際共同研究とその成果発表にとってのひとつのモデルとなるものとなった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別展「日本国宝展」に関する調査研究((5)－②)		
【事業概要】 特別展「日本国宝展」(26年10月15日～12月7日開催)に関する調査研究 26年10月15日～12月7日で開催された特別展「日本国宝展」の展示予定作品の調査研究。 ワーキンググループによる事前の作品選定に基づき、作品の所有者に対する出品交渉及び作品の所在・状態調査を実施した。また関係者との協議を行った。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	広報室長 伊藤 信二
【スタッフ】 田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、丸山士郎(学芸企画部平常展調整室長)、沖松健次郎(学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員)、品川欣也(学芸研究部調査研究課考古室主任研究員)			
【主な成果】 ・出陳交渉に併せて作品の所在・保存状態を調査するとともに、安全な運搬・展示、効果的な展示方法などについて検討し、展覧会の内容充実に大きく寄与することができた。			
【年度実績概要】 ・仏像、仏画、工芸品、考古資料、歴史資料、建造物のうちいずれも国宝に指定されている貴重な作品について、「信仰」「祈り」というテーマから、作品を厳選した。 ・出陳交渉の終了している作品で、大型・重量物であるような作品について、作品の調査を5回実施し、作品を安全に展示するための梱包・輸送方法について、所蔵者、共催者、輸送業者などとともに協議を行った。 ・このうち特に奈良・元興寺に伝来する国宝元興寺極楽坊五重小塔(奈良時代・8世紀)については、展示に際する作品の解体・輸送に先立って、26年4月7日～12日の日程で、解体事前調査及び彩色剥落止、クリーニング処置を実施した。この調査によって、塔の構造、解体方法、保存状態、運搬状況を事前に把握することができ、展示に際しての本番の解体・輸送・組み立てを極めてスムーズに行うことができた。			
			
奈良・元興寺での五重小塔の事前解体調査、剥落止、クリーニング			
【実績値】 ○出陳交渉及び現地調査 5回 ○協議会・検討会回数 20回(共催者との協議12回、展示会場デザイン検討会 8回) (参考値) ○講演会等 10回(記念講演会2回、自治体講演会8回)			
【備考】 伊藤信二「日本国宝展－「祈り、信じる力」の造形」(特別展図録『日本国宝展』総論 26年10月15日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	継続性		
判定	B	A	B	B		
判定理由 適時性：自然災害や経済状況から「こころの時代」が叫ばれる現代、人々が求める「祈り」の造形という観点から、国宝の世界を再構築するというテーマ設定を行った。 独創性：従来国宝展といえば絵画、彫刻、工芸などとジャンル別に展示構成が行われていたが、ジャンルを横断する「信仰」をテーマにすえたことにより、日本文化精神の形成過程を「オール国宝」により提示するという独創的な展示となった。 効率性：テーマに沿ってあらかじめ国宝作品を選定することで、文化財所蔵者の理解も得やすく、スムーズな作品調査にもつながった。また事前調査により展覧会開催前の作品の梱包、運搬、展示を安全かつスムーズに行うことができた。 継続性：今後も研究や展示活用が大いに期待される貴重な国宝の数々について、多くの情報を得ることができた。また文化財の所蔵者にとっては、今後の保存、管理のあり方にも参考となる情報となることが期待される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	協議会・検討会回数				
判定	B	B				
判定理由 調査回数：全国各地に所在する国宝作品について、5回にわたり精力的な現地調査を実施することができた。 協議会・検討会回数：共催者や施工業者など関係者との間で定期的に12回の協議会を行い、安全な輸送、効果的な展示、運営体制に関して共通理解を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国宝作品の安全な搬送・展示及び作品研究、充実した展覧会構成、効率的かつスムーズな展覧会の運営体制などにおいて着実な成果を挙げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査並びに協議会・検討会の成果を、着実に安全かつ効果的な展覧会運営へ反映させることができた。次年度以降の作品の借用・展示計画に寄与するものであり、かつ所有者にとっては保存管理および防災上の重要な知見となったものとする。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-4

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別展「みちのくの仏像」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「みちのくの仏像」(27年1月14日～4月5日開催予定)に関する調査研究 27年1月14日(水)から4月5日(日)開催の、特別展「みちのくの仏像」出品作品の作品調書、写真資料の作成及び研究を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】 浅湊毅(学芸企画部博物館教育課教育講座室長)			
【主な成果】 (1) 出品作品について作品調書、写真資料の作成を行ない、基礎データの集積を行うことができた。 (2) 岩手・黒石寺の薬師如来像の像内墨書銘の赤外線撮影を行った結果、従来とは異なる読み方ができた。 (3) 事前の調査によって得られた知見や写真を会場や図録に掲示し観覧者の理解を深めることができた。			
【年度実績概要】 (1) 展覧会期間中に作品の調査を行い、表現・技法について詳細な観察を行うことができた。 (2) 岩手・黒石寺の薬師如来像について事前の調査を実施し、像内墨書銘の赤外線撮影を行った結果、従来とは異なる読み方が出来た。 (3) 出品作品について事前の調査を実施し、充実した会場、図録の解説を書くことができた。展示・照明についても効果的な方法を検討することができた。			
			
会場風景			
【実績値】 ○現地調査 12箇所 ○会場デザイン検討会 12回			
【備考】 丸山士郎「みちのくの仏像と東北における仏像表現の受容」(特別展図録『みちのくの仏像』平成27年1月15日)			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本展覧会は東日本大震災の復興支援を目的とするもので、記憶が薄れてきたいま実施する意義は大きい。 独創性：東京で東北の仏像に的を絞った展覧会は初めてであり、その魅力を伝える貴重な機会となる。 発展性：作品調査で新たな知見が得られ今後の研究に活かすことができる。 効率性：短期間のうちに多くの調査を実施することができた。 継続性：会場デザイン検討会で得られた成果は今後の展示に活かすことができる。 正確性：共催者、業者と打合せを重ねることで、データの正確性を確保できた。						

2. 定量的評価

観点	現地調査	会場デザイン 検討会				
判定	B	B				
判定理由 現地調査：短期間のうちに現地調査延べ12箇所と、多くの調査を実施することができた。 会場デザイン検討会：作品調査の成果を踏まえ効果的なレイアウト、照明方法を検討することができた。 出品作品19件のうち15件について高精細カメラによる写真撮影を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	震災復興支援という時機に適った目的と今までになかったテーマの展覧会を企画し、出品交渉・作品調査も順調に実施することができた。 162,948名（1日平均2,396名）の観覧者があった（27年3月31日現在）

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	時機に適った展覧会を企画し開催することができた。撮影した写真資料を今後の館内外の研究に活用できる。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-5 特別展「3.11 大津波と文化財の再生」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 特別展「3.11 大津波と文化財の再生」(27年1月14日～3月15日開催)に関する調査研究 27年1月14日(水)から3月15日(日)開催の、特別展「3.11 大津波と文化財の再生」出品作品の調査、東北地方太平洋沖地震被災文化財の再生に関連する資料の作成及び研究を行う。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 和田浩(学芸研究部保存修復課環境保存室長)、救仁郷秀明(学芸研究部列品管理課貸与特別観覧室長)	
【主な成果】 (1)被災文化財の調査を行い安定化処理技術に関する研究をまとめた。 (2)文化財レスキューの概要と陸前高田市立博物館の文化財の再生の過程をまとめた。 (3)文化財レスキューが現在抱える課題と上記の成果を合わせて展示グラフィック等で公開し、情報の充実を図った。 (4)ギャラリートーク、講演会、シンポジウム等で文化財再生の現状を広く社会に伝えることができた。 (5)成果を論文や学会で発表した。	
【年度実績概要】 (1)安定化処理技術に関する研究をまとめた書籍『安定化処理』を出版した。 (2)文化財レスキューの概要と陸前高田市立博物館の文化財の再生の過程をまとめ、リーフレット「3.11 大津波と文化財の再生」を発行した。 (3)特別2室で多くの文化財を公開するとともに、特別4室において「文化財再生のみちのり」をテーマとしたパネル展示を実施した。 (4)以下の事業を実施し、文化財再生に関する現状を社会に伝えた。 2015年1月30日(金)ワークショップ「被災資料の安定化処理技術」 2015年1月31日(土)ミニ講演会&ギャラリートーク「被災現場からの報告」 2015年1月31日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏) 2015年2月21日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏) 2015年3月11日(水)シンポジウム「文化を守る絆ー津波被災文化財再生への挑戦」 2015年3月14日(土)オルガン演奏会(安定化処理が完了したリードオルガンを演奏) (5) ○論文 神庭信幸・和田浩「環境および施設整備の考え方」(『安定化処理』) 神庭信幸・和田浩「環境および施設整備の実態」(『安定化処理』) 和田浩・神庭信幸「環境モニタリング」(『安定化処理』) ○学会発表 神庭信幸 他「津波被災資料の安定化処理ー陸前高田市立博物館の取り組みー」(文化財保存修復学会第36回大会 26年6月7日) 神庭信幸 他「Stabilization processing of cultural assets damaged by the tsunami of 11 March 2011」(ICOM-CC26年9月17日)	
【実績値】 ○出版物 2冊 (書籍1冊、リーフレット1冊) ○関連事業 6回 ○論文 3本 ○学会発表 2回	
【備考】	



展示室の様子

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：震災後約4年たった今も被災文化財の修理が継続して行なわれていることを社会に普及する意義は大きい。 独創性：被災文化財の安定化処理に的を絞った展覧会は初めてであり、その内容を伝える貴重な機会となる。 発展性：安定化処理技術をまとめた研究成果は将来の災害発生時に活用することができる。 効率性：短期間で展覧会、関連事業、学術発表、出版物に関する実績を蓄積できた。 継続性：関連して実施したシンポジウム等の情報発信は来年度以降も実施主体を変えて継続する。 正確性：陸前高田市立博物館、岩手県立博物館、日本博物館協会等の専門家とともに正確な情報を伝えた。						

2. 定量的評価

観点	出版物	関連事業	論文	学会発表		
判定	B	B	B	B		
判定理由 出版物：書籍1冊、リーフレット1冊を出版できたことは十分な評価に値すると考える。 関連事業：短期間で多くの関連事業を実施できたことは十分な評価に値すると考える。 論文：展覧会に関連する研究内容で3本の論文を書籍に発表できたことは十分な評価に値すると考える。 学会発表：展覧会に関連する研究内容で2回の学会発表ができたことは十分な評価に値すると考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	安定化処理という日本で初めての取り組みを多くの人々に伝えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示とメディアを通じて過去4年間の安定化処理に関する取り組み広く伝えると共に、今後の災害対応に関する中期的な見通しを確認することができた。研究成果を将来起こりうる大規模災害への備えとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 特別展「鳥獣戯画一京都 高山寺の至宝」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「鳥獣戯画一京都 高山寺の至宝」(27年4月28日～6月7日開催予定)に関する調査研究 27年4月28日(火)～6月7日(日)に開催される特別展「鳥獣戯画一京都 高山寺の至宝」に出陳される作品の出品交渉及び事前調査を行う。また、会場での展示ディスプレイ、グラフィック等の充実を図るため、高山寺他での現地踏査をあわせて行なう。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】 松嶋雅人(企画課特別展室長)、浅湊毅(博物館教育課講座室長)			
【主な成果】 ・出陳交渉により、鳥獣戯画の伝わる高山寺、及び中興の祖明恵上人に関わる作品をかつてない規模で展観する見通しが立った。 ・出品作品の事前調査を行うことで、作品の保存状態などを詳しく精査することができた。 ・高山寺、明恵上人関連史跡を踏査することで、展示ディスプレイ、グラフィック等の充実をはかることができた。			
【年度実績概要】 ・総計120件を越す作品が出陳予定である。 ・高山寺については、出陳交渉、事前調査を含め計5回訪れ、展覧会図録、会場ディスプレイへの反映が期待される。 ・高山寺以外でも、40箇所の出陳交渉、作品調査を行うことができた。これらの成果を図録等の解説に反映することができる。 ・高山寺をはじめ、明恵上人の生地である紀州など、5箇所の現地踏査を行うことができた。ここでの成果は会場グラフィック等に反映する予定である。			
 京都・高山寺での事前調査  和歌山・浄教寺での事前調査  明恵上人が修行した鷹島・刈藻島			
【実績値】 ・出陳交渉、事前調査 40箇所 ・現地踏査 5回 ・共催者との打合せ 15回 ・展示会場デザイン検討会 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：4年間の修理を終え、東京での初公開となる鳥獣戯画、及び高山寺の文化財を公開する貴重な機会となった。 独創性：成立や伝来など、謎の多い鳥獣戯画に関して、高山寺所蔵の文化財の伝来などから検討する独自の視点を提示することができた。 発展性：知名度の高い鳥獣戯画により、より広範な観覧者に多くの文化財を観覧いただく機会となる。 効率性：限られた調査期間の中で、関西地区を中心に、九州、関東を含めた広範囲となる出品予定作品の所蔵機関を効率的に調査することができた。 正確性：共催を含めた担当者間で複数の打合せを行うことで、データ等の正確性を確保できた。						

2. 定量的評価

観点	出陳交渉、事前調査	現地踏査	共催者との打合せ	展示会場デザイン検討会		
評価	B	B	B	B		
判定理由 出陳交渉、事前調査：限られた期間内に、多くの交渉、調査を行なうことができた。 現地踏査：展示グラフィックに十分な踏査を行なうことができた。 共催者との打合せ：メール等での検討含め、十分な打合せを行うことができた。 展示会場デザイン検討会：施工会社等も含め、混雑対策を踏まえた検討を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的かつ積極的に出陳交渉、作品調査を行い、多くの出品数を達成することができた。また、作品の保存状況等を確認することで、展示のディスプレイ等にも反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度得られた成果は十分であり、これを踏まえ、次年度の実際の展示、図録・会場解説、ディスプレイ、グラフィック等に反映させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-7 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流」(27年3月17日～5月17日)に関する調査研究 表記の特別展の展示の内容策定、充実のための調査研究。古代インドの仏教美術の作品調査等を通じて展示手法、 展示構成を検討し、展覧会を実施する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	企画課長 小泉恵英
【スタッフ】 三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸考古室)	
【主な成果】 (1)コルカタ・インド博物館において、展覧会出品予定の作品調査、撮影を実施した。展覧会の構成、図録原稿などを準備した。 (2)日本では見る機会の少ないインドの仏像について、古代初期の前2世紀頃から12世紀以後の1000年以上の幅で多様な作品を調査できた。原始仏教からの発展や、密教の隆盛など仏教の大きな展開を様々な作品を通して通覧した。 (3)調査によって得られた成果は、展覧会の展示構成や、図録原稿に反映し、観覧者へ供与した。	
【年度実績概要】 (1)・コルカタ・インド博物館において、展覧会出品予定の作品調査及び撮影を実施、館長及び担当学芸員と運営に関する協議を行った(26年9月20～24日)。 ・上海博物館において、先行巡回していた同展覧会を視察し、展示に関する技術的な情報交換や、補足的な作品調査を実施した(26年12月12～14日)。 ・名古屋市博物館において、出品作品と関連する貝葉經典の調査を実施した(27年2月16日)。 (2)コルカタ・インド博物館所蔵のパールフット遺跡出土彫刻の調査を行い、寺院の造営や当時の教団の運営に関しての歴史的背景を考察し、インドの広域にわたる人々が寺院と関わっていることを確認した。また、パーラ朝の貝葉經典を調査し、密教信仰の展開と図像表現についての歴史的な展開についての知見を得た。 (3)パールフット調査については、古代初期のインド仏教遺跡について最新の研究成果を反映した論文を展覧会図録に発表した。經典資料については、図像の解釈をより噛み砕いた形で展覧会場に紹介する教育普及的なパネルを作成し、一般になじみのない密教信仰や様々な仏教信仰について、幅広い世代に紹介するよう努めた。	
 コルカタ・インド博物館での調査  上海博物館での調査	
【実績値】 ○作品調査回数 3回 コルカタ・インド博物館、上海博物館、名古屋市博物館。 ○出版物 展覧会図録1冊 ○論文 1本(①)	
【備考】 論文 ①小泉恵英「パールフットーインド古代仏教美術のあけぼの」『コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏—仏教美術の源流』H27年3月	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評価	S	A	A	S	A	
判定理由 適時性：現代国際社会において日印関係は両国首脳の間往があるなどきわめて緊密であり、インドに対する社会的な関心はきわめて高い。仏教は我が国に長く根付き、文化の根底をなす重要な宗教であり、その源流をたどることの意義は大きい。本展のインド政府からの開催依頼は26年6月であり、それに対して即応的に対応した。 独創性：我が国では古代インドの美術に接する機会は極めて少なく、一般の認知は必ずしも高くない。この度の調査・展示では日本で知られていないインドの重要な作品を数多く展示する内容となっており、インド文化の深層的な理解に寄与する内容となっている。 発展性：インド仏教文化の基層から多様な展開までを示す内容の展示によって、今後の我が国におけるインド研究に新たな材料を提供している。 効率性：わずか9ヶ月前の開催依頼から、きわめて限られた時間で、調査から図録作成、展示の構成までを実現した。 継続性：東京国立博物館では、インド亜大陸に由来する収蔵品を所蔵しており、今回の調査や展示で得られた資料や情報は、今後の総合文化展にも活用でき、特別展だけでなく幅広く将来にわたって活用が見込まれる。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	出版物	論文			
評価	A	B	B			
判定理由 作品調査回数：インド側の協力も得つつ、必要な調査を極めて限られた時間で実施できた。 出版物：作品解説、論文を含め、出土遺跡の紹介など網羅的に作品を理解できる図録を作成した。 論文：日本側で準備した論文に加え、インド側からも寄稿を得て、インド仏教美術を紹介する豊富な情報を提供した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現代の国際情勢を踏まえて時宜を得た内容の展覧会をきわめて限られた時間で準備し、実施した。その内容は我が国の文化においても深い影響を歴史的に与えてきた仏教に関するもので、展覧会の観覧者に仏教文化の基層への理解を深めるものであった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が収蔵管理、展示を行っている東洋美術の分野において、特別展の形でインドの仏教文化の展開を紹介できた。特別展そのものによるインド理解に加えて、総合文化展の観覧に際しての情報の付与という観点からも本展は大きく寄与している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-8 特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」(27年7月11日から9月23日に開催予定)に関する調査研究。 27年7月11日から9月23日に開催予定の特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」の出品交渉ならびに事前調査を行う。また会場での展示方法などの参考のために、関連する作品の展示を行っている美術館・博物館の調査を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室主任研究員 品川欣也
【スタッフ】 小泉恵英(企画課長)、小野塚拓造(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、近藤二郎(早稲田大学文学学術院教授・ゲストキュレーター)、CHRISTAIN ZIEGLER(ルーヴル美術館古代エジプト美術部門名誉部長・ゲストキュレーター)			
【主な成果】 ・出品交渉によって12カ国、40を超える所蔵先から古代エジプトの王妃に関する作品を集め、効果的な展示を行う見通しが得られた。 ・なかでもベルギー王立美術館博物館所蔵「アメンヘテプ3世の王妃ティイのレリーフ」の出品は、日本初公開であるだけでなく、本例が出土したウセルハト墓を2011年に近藤氏が約100年ぶりに再発見したこともあって、本展の目玉の一つになると考える。 ・出品作品の事前調査を行うことで、作品の状態などを詳しく確認することができた。また関連作品の展示調査などによって支持具などの展示方法についても知見を得ることができた。			
【年度実績概要】 ・総数200件弱の作品が出品予定である。 ・現在の継続している近藤氏の発掘風景は展示映像などに、調査成果は図録などに盛り込む予定である。 ・出品作品の状態確認などの事前調査や関連する作品の展示調査を受けて、展示構成や作品に合わせた効果的な展示を行うことが可能となった。			
			
ボストン美術館での作品調査		ボストン美術館での展示調査	
【実績値】 ・出品交渉・事前調査 10回 (ルーヴル美術館・ボストン美術館・大英博物館・カイロエジプト考古学博物館など) ・展示構成などの打ち合わせ 4回 ・共催社など含む打ち合わせ 8回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：女性の活躍促進が内閣府の政策として進められているなかであって、古代エジプトの女性(王妃や女王)の活躍に注目した本展は時宜を得たものであると考える。 独創性：過去の日本におけるエジプト展は王であるファラオに注目したものが多く、本展のような女性(王妃や女王)に注目したものはほとんどなく、古代エジプトへ対する新たな視点を提示することができる。 発展性：従来の古代エジプト展とは異なり女性(王妃や女王)に注目した本展は、多く観覧客に対して古代エジプトへ対する関心を広げ、また知識を深めるよい機会になると考える。 効率性：ZIEGLER氏と近藤氏をゲストキュレーターに迎えることで、古代エジプトに関する世界各地の博物館・美術館の所蔵品に関する情報を効率的に集め、出品交渉を的確に進めることができた。 継続性：本展で得られた知見などは、今後東洋館での古代エジプトの展示に活用することができる。 正確性：担当者・共催社・所蔵先との連絡を密にとることで情報の遺漏を減らし、現状の研究では複数案が出されている年代観や名称なども一定の基準に従って準備を進めている。						

2. 定量的評価

観点	出品交渉・事前調査	展示構成などの打ち合わせ	共催社を含む打ち合わせ			
評価	B	B	B			
判定理由 出品交渉・事前調査：所蔵先が複数国・複数館にまたがるものの、効率よく所蔵先との出品交渉と事前調査を行なうことができた。 展示構成などの打ち合わせ：展示順や展示方法だけではなく、観覧客が古代エジプトの王妃や女王に関心がもつことができるように配慮して検討を行った。 共催社を含む打ち合わせ：メール等での連絡や検討も含め、十分な打ち合わせを行うことができた。						

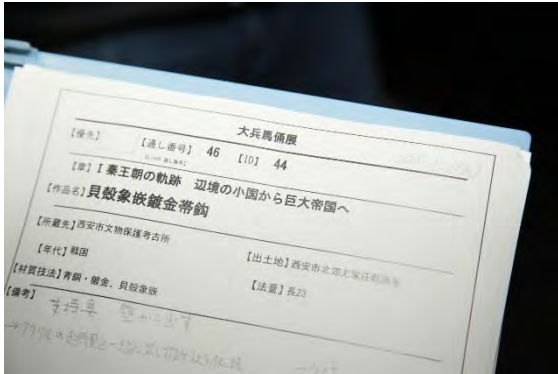
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出品交渉や事前調査を効率的に行い、12カ国40を超える所蔵先から多くの出品が可能となった。また関連作品の展示方法の調査や最新の発掘調査の成果を盛り込むことで、より効果的な展示ができると考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は古代エジプトへ対する関心を広げ、また知識を深めるよい機会になると考える。加えて、東京国立博物館東洋館にて収蔵・展示している古代エジプト資料を観客へ周知するという点からも本展は大きく寄与すると考えている。調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、来年度の広報・展示・図録・講演会など本展にかかわる様々な事業にその成果を反映させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-9 特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「始皇帝と大兵馬俑」(27年10月27日～28年2月21日)に関する調査研究 27年10月27日～28年2月21日に開催予定の特別展「始皇帝と大兵馬俑」の展示を充実させるための調査研究。 20世紀最大の考古学発見ともいわれる兵馬俑の魅力、及び兵馬俑に象徴される秦・始皇帝のなしとげた歴史的大事業の数々を適切に示すため、展示品及び関連遺跡の調査を通して、より安全かつ効果的な展示手法・構成の検討を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課主任研究員 川村 佳男
【スタッフ】 谷 豊信(学芸研究部長)、井出浩正(学芸研究部調査研究課考古室研究員)、和田浩(学芸研究部保存修復課環境保存室長)、市元星(九州国立博物館学芸部企画課主任研究員)			
【主な成果】 (1) 秦始皇帝陵博物院など中国陝西省にある展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、所蔵機関における展示状況を調査して、より安全かつ効果的な展示手法を検討した。 (2) 報告書の写真・図版・記載だけではわからない作品の詳細を実査することで、形態・製作技法などに関する実態を確認するとともに、新知見を得ることができた。これにより、作品解説などの執筆にかかる、より確実で詳細なデータを用意することができた。 (3) 作品の保存状態ならびに、現在の展示状況も把握することで、特別展会場において適切な作品配置や安全対策を検討することができた。			
【年度実績概要】 (1) 陝西省歴史博物館・陝西省考古研究院・秦始皇帝陵博物院(26年11月5日)、商洛市博物館・陝西省考古研究院・西安博物院・西安市文物保護研究院(27年1月26日)、秦始皇帝陵博物院・臨潼博物館・陝西省歴史博物館(27年1月27日)、咸陽博物館・咸陽市文物保護中心・咸陽市文物考古研究所・秦咸陽宮遺址博物館(27年1月28日)、中国書画芸術博物館(27年1月29日)などの展覧会出品候補を所蔵する中国陝西省の機関において、作品の形状・保存状態・展示状況などの調査を行った。 また、陝西省文化交流中心(26年11月4日、27年1月26日)、中国国家博物館(26年11月5日)、北京大学サックラー考古と芸術博物館(27年1月31日)において、本展覧会関連情報を収集した。 (2) 細部を含めて作品を熟覧・計測・撮影し、調書に記入することで、支持具の製作や作品解説などの執筆に必要な情報と知見を得ることができた。 (3) 作品調査と展覧会関連情報収集の結果を受けて、展覧会会場における効果的な作品配置や安全対策の検討を行い、展覧会の準備を大幅に進めることができた。			
			
秦始皇帝陵博物院における作品の展示状況		作品調査で得た情報や知見を記入した調書	
【実績値】 ○作品調査回数 20回 陝西省歴史博物館・陝西省考古研究院・秦始皇帝陵博物院・商洛市博物館・西安博物院・西安市文物保護研究院・臨潼博物館・陝西省歴史博物館・咸陽博物館・咸陽市文物保護中心・咸陽市文物考古研究所・秦咸陽宮遺址博物館・中国書画芸術博物館等(複数回数調査した機関も含む) ○調書作成件数 73件 ○撮影カット数 約4500カット ○打合せ回数 24回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
評価	A	B	A	B		
判定理由 適時性：兵馬俑発見から約40年が経過した現在、「20世紀最大の考古学的発見」とも称される兵馬俑の魅力と中国史における位置づけを今日的視点から再評価する貴重な契機となった。 独創性：展示予定作品の調査機会を得たことで、作品の形状・材質だけでなく、保存状態や所蔵館における現在の展示状況なども調査を実施したことで、作品のより良い展示手法を検討できることとなった。 効率性：ワーキンググループのメンバーのみならず、環境保存担当者や外部の関係者とともに役割分担を明確にしつつともに調査することで、展覧会準備を学術・安全・展示効果などの様々な面から多角的に効率よく進めることができた。 発展性：様々な展覧会関係者が集まり、作品調査を総合的かつ効率的に行う今回の手法は、今後、本展覧会の未調査作品を調査する際にも効果を期待できるものである。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	調査作成件数	撮影カット数	打合せ回数		
評価	C	B	A	B		
判定理由 作品調査回数：悪天候のため、現地で予定していた作品調査計画を途中で見直さざるを得なくなった。 調査作成件数：作品調査回数は初期の数値に及ばなかったものの、効率的な調査を実施することで、調査作成件数の目標を達成することができた。 撮影カット数：通常レンズのカメラとともに、作品の詳細部分を専用で撮るためのマクロレンズ付カメラを併用することで、より多くのカット数で撮影することができた。 打合せ回数：十分な回数の打合せを実施することで、有意義な調査研究を効率的に進めることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に作品調査を行い、作品の現状における展示状況も把握できたことで、作品の詳細情報を得ることとともに、その成果を取り入れた兵馬俑とその関連遺物のより安全かつ効果的な展示準備を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査ならびにその内容の検討の成果によって、本展覧会において、より適切な展示を可能とする体制と基盤を構築することができた。次年度は展覧会実施のためにさらに調査、検討を続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-10 特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)に関する調査研究
【事業概要】特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)(28年3月23日～5月15日)に関する調査研究 28年3月23日～5月15日に開催予定の特別展「生誕150年 黒田清輝」(仮称)の展示を充実させるための調査研究。近代美術史において極めて大きな位置を占める黒田清輝の画業を適切に示すため、展示作品の作品調査により、照明効果を勘案した展示手法、展示構成の検討を行う。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋 雅人
【スタッフ】 山梨絵美子(東京文化財研究所企画情報部副部長)、三浦篤(東京大学人文科学研究科教授・ゲストキュレーター)	
【主な成果】 (1)山形美術館など展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、所蔵機関における展示状況を調査して、適切な展示手法を検討した。 (2)近年、公開されていない作品も含め、作品を実査することで、表現技法の詳細を把握、黒田清輝の画業のなかに位置づけることができた。 (3)作品の保存状況並びに、現状の展示状況も把握することで、特別展会場において適切な作品配置や照明効果を検討することができた。	
【年度実績概要】 (1)ブリヂストン美術館(26年8月29日)、山梨県立美術館(26年9月30日)、静嘉堂文庫美術館(26年10月22日)、後藤美術館、山形美術館(26年12月14日)などの展覧会出品予定作品の所蔵館において、作品に関わる情報の聞き取り調査、ならびに作品調査を行い、作品の保存状況、展示状況などの調査を行った。 黒田記念館(26年12月10日)において、黒田清輝作品の代表的作品の展示手法の現状調査を行った。 (2)作品の所蔵展示施設における展示状況を調査し、作品の画面詳細を調査することで、展示における効果的な配置、照明設計を検討する必要な情報を得ることができた。 さらに近年、作品の公開機会がなかった黒田清輝作品の所在等の情報を得ることができた。 (3)作品調査ならびに作品情報収集の結果を受けて、展覧会会場における効果的な作品配置や照明効果の検討を行い、十全な展示の想定が可能となった。	
  黒田清輝作品の現状における展示状況の調査(実施場所・黒田記念館)	
【実績値】 ○作品調査回数 11回 ブリヂストン美術館、山梨県立美術館、静嘉堂文庫美術館、後藤美術館、山形美術館、日本銀行等(個人所蔵にかかるものなど、表記不可の機関も含む) ○展示構成等検討会回数 4回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-1-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
評価	A	B	B	B		
判定理由 適時性：明治維新から150年が経過した現在、近代美術に大きな足跡を残した黒田清輝の画業を検討する貴重な契機となった。 独創性：展示予定作品の調査機会を得たことで、作品の現状把握だけでなく、通例はほとんどかえりみられないことのない所蔵機関における照明状況など現状の展示状況も調査を行うことで、作品のより良い展示手法を検討できることとなった。 効率性：関東を含めた九州から東北地方にかけての広範囲となる出品予定作品の所蔵機関を効率的に調査することができた。 発展性：作品調査によって作品の詳細情報を得た上で、現状の展示状況を吟味する手法は、絵画作品だけでなく、他分野作品の展示においても、照明効果を含めた種々の展示効果を検討する上で参考となるものである。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	展示構成等検討 会回数				
評価	B	B				
判定理由 作品調査回数：想定される展覧会の展示に適切に反映させることのできる十分な調査結果を得ることができた。 展示構成等検討会回数：調査結果に基づいた想定できる展覧会構成、展示照明などについて、十分に検討することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に作品調査を行い、作品の現状における展示状況も把握できたことで、作品の詳細情報を得ることとともに、その成果を取り入れた黒田清輝の画業と作品に対する鑑賞者の理解を深める展示を想定することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品調査ならびにその内容の検討の成果によって、本展覧会において、より適切な展示を可能とする材料を得ることができた。次年度は展覧会実施のためにさらに調査、検討を続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究((5)-②)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。対象としたのは、安政6年にドイツ人医師シーボルトが再来日したときに携えてきた洋書、および滞留中に収集した洋書である。明治2年に長子アレキサンダー・シーボルトが外務省に寄贈した後、同17年に農商務省博物館の所管となり、現在にいたったもので、約300冊を数える。西欧の日本に対する深い関心が知られる内容のものが少なくない。貴重図書として保管されてきたこれらの詳細調査をもとに画像データベースを作成し、その学術的意義を明らかにすることを目的とする。なお、本年度に公益財団法人図書館振興財団の助成を得て、実施した。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 住広昭子（博物館情報課情報資料室専門職員）			
【主な成果】 ① 当館の所蔵するシーボルト献納本について、その書誌学的調査を行い、データベースを作成した。 貴重な図書を永く保存・活用するために 修復とデジタル撮影を実施した。 ② シーボルト献納本に最小限の修理を施し、安全に取り扱うことが可能になった。 ③ 修理の方針や、その過程を伝える画像などを、当館のウェブ上で公開した。			
【年度実績概要】 ① 調査の内容 ・シーボルトが来日してまもなく作成した献納本の目録をもとに、データベースを作成した。 ・収集した資料や、台帳などの基礎データによって、目録中の書誌情報を分析した。 ② 研究の成果 ・データベースによって、シーボルト献納本の全体像を解明するための手がかりを得ることができた。 ・表紙に貼付されたラベルの記載をとおして、献納本の活用の状況が明らかになった。 ③ 成果の公開 ・当初の姿を伝える残す修理の様子や、保存箱の作成手順などをウェブ上で公開したことで、貴重図書に対する博物館の取り組みを広く伝えることができた。			
【実績値】 調査件数 308 冊 修理件数 77 件 写真撮影件数 57 件 (26,000 カット)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：公益財団法人図書館振興財団の助成を得る過程で、事業のあり方などが審査の対象となり、その意義が認められた。 独創性：これまで解明されていなかったシーボルト献納本の全貌や、献納するにいたった動機などを明らかにすることを目標とする。 発展性：本の内容についても検討を行い、解題などを付けることで、その意義を広く一般に伝え、研究の進展をうながす。 効率性：修理の進捗状況にあわせて、人員の配置や確保を行っており、本の状態によって、修理と撮影の手順を変更・調整している。 継続性：次年度の助成が確定しており、事業を進める際には、修理とデジタル撮影の質のバランスに配慮して計画を立案している。 正確性：シーボルトが作成した目録をもとに、常に献納本の全体のなかでの位置づけを行うことを心がけた。さらに書誌情報の分析を原本の調査にもとづいて実施することで正確を期した。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修理件数	写真撮影件数			
判定	B	B	B			
判定理由 調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 修理件数：当初の計画に基づき作品の修理を実施できた。 写真撮影件数：当初の計画に基づき公開用の画像を撮影できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館にまとまって所蔵されているシーボルト献納本の書誌学的調査を実施するため、公益財団法人図書館振興財団の助成を得て、シーボルトが作成した目録をもとに構築したデータベースを駆使して、献納本の全貌を明らかにした。さらに画像データベースをWeb上で公開することで、貴重図書に対する博物館の取り組みを周知させるなど、所期の目標を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	公益財団法人図書館振興財団の助成として実施している事業であり、次年度の助成も確定している。 計画に従って着実に進行し、所期の目標を達成している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5)－②)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究を行う。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】 丸山清志（客員研究員）			
【主な成果】 (1) 東京国立博物館と天理大学附属天理参考館においてオセアニア、及び台湾のタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料に対して調査を実施した。 (2) 東京国立博物館が所蔵する東洋民族の列品に関する基礎データを整理するとともに、いくつかの新知見を得ることができた。 (3) 調査で得られた知見は、東洋館 13 室で実施した次の展示に反映させた。 ・「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」（26 年 4 月 15 日～26 年 7 月 6 日） ・「南太平洋の暮らしと道具」（27 年 1 月 2 日～27 年 4 月 5 日予定）			
【年度実績概要】 (1) 26 年 9 月 19 日に東京国立博物館で平埔族の民族資料を、10 月 17 日に東京国立博物館でオセアニアの民族資料を、10 月 27 日に天理大学附属天理参考館でタオ族、パイワン族、平埔族の民族資料を、12 月 17 日と 18 日に東京国立博物館でオセアニア、タオ族、パイワン族の民族資料を調査した。 (2) オセアニアの民族資料については、オーストラリアのものとされてきた一群のなかにバヌアツなど他地域の民族資料が混在していること、また、いくつかの資料に用いられた従来不明だった材質を明らかにすることができた。 台湾の民族資料については、東京国立博物館、天理大学附属天理参考館、国立台湾博物館にそれぞれ清時代の平埔族首長を描いた絵画が所蔵され、なおかつ、互いにたいへん近似した作品であることが判明した。このほか、東京国立博物館所蔵のタオ族、パイワン族の民族資料について、形状、材質、保存状態などの基本情報を整理した。 (3) オセアニアと台湾の民族資料調査で得られた新知見や基本情報は、東京国立博物館のデータベースとともに、東洋館 13 室における展示の題箋やキャプションに反映させることで、展示内容をさらに充実させることができた。			
			
「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」の展示品		「南太平洋の暮らしと道具」展示作業	
【実績値】 調査回数：5 回。作品調査件数：185 件。関連展示回数：2 件。撮影点数：約 250 カット。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本ではあまり知られていないオセアニアや台湾の民族資料の魅力を調査・展示によって積極的に発信・公開することができた。とくに東洋館 13 室の展示「台湾の海の民・タオ族の伝統文化」は、東京国立博物館の平成館・本館において開催した特別展「神品至宝 台北 国立故宮博物院」の会期と一部重なる時期に実施することで、台湾文化に対する関心をさらに高めることができた。 独創性：東京国立博物館が所蔵する東洋民族の資料は、アジア、オセアニアのさまざまな地域のものだけでなく、19 世紀後半にまでさかのぼる古いものが豊富に含まれている。したがって、これらは民族資料であるとともに、明治から昭和にかけて日本の東洋民族資料に対する認識がどのように変化していったのかを知る貴重な歴史資料でもある。この視点に立つことで、今年度の調査で判明したオーストラリア民族資料の一群におけるバヌアツ民族資料の混在などは、単なる「誤り」としてではなく、明治時代当時の認識をうかがい知る「情報」として積極的に評価することができた。 発展性：これまでの調査による知見の着実な蓄積により、天理大学附属天理参考館や台湾の博物館が収蔵する資料との比較研究を進めやすくなってきた。 効率性：今年度の調査は、他の研究プロジェクトと連携することで効率性を非常に高めることができた。 継続性：毎年度、東洋館 13 室の展示コーナー「アジアの民族文化」において東洋民族の列品を活用した内容の展示を企画、実施している。本研究成果の公開手段として展示を位置づけることで、継続性を確保させている。 正確性：東京国立博物館の列品データベースに得られた知見や基礎データを個体ごとに随時記録、保管することで正確性を担保した。また、動物遺存体を使用した材質は、動物考古学の専門家に同定を依頼することで、正確性のさらなる向上を図った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	関連展示回数	撮影点数		
評価	B	B	B	A		
判定理由 調査回数：目標としていた回数（5 回）で調査を実施し、かつ、いくつかの新知見を得ることができた。 作品調査件数：目標の180件を若干上回る件数の作品を調査することができた。 関連展示回数：目標通りの回数で関連展示を実施した。 撮影点数：目標200件を上回る件数の作品を撮影することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	基礎的な情報データベースのさらなる充実、タオ族、パイワン族といったテーマ性のある展示ソフトの増加に加えて、天理大学附属天理参考館など他館の所蔵品と比較することで、当館が所蔵する東洋民族資料の新知見をいくつか得ることができた。また、博物館コレクション形成史など関連するテーマの研究と連携することで、調査をより効率的に進めることができた。次年度も、当館所蔵品に対する調査研究に基軸を置きつつ、外部博物館所蔵品との比較研究、及びほかのテーマ研究との連携を継続することで、いっそうの成果を期したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ここ数年、東洋館 13 室における東洋民族資料の展示ソフトは着実に数を増している。これは、これまで蓄積させてきた基礎的なデータベースをもとに、オセアニアや台湾のタオ族、パイワン族といったテーマごとに知見を深め、展示という具体的な成果の公開につなげるサイクルが軌道にのりつつあることの表れである。次年度はこれまでの調査研究で得ることのできた知見を踏まえた、東洋民族資料の新規展示案をさらにもうひとつ作成したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究(5)－②)		
【事業概要】 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって津波被害に遭った文化財の保存修復についての保存環境、安定化処理、本格修理に関する調査研究を行い、被災資料の保全を図るとともに今後想定される自然災害に対する有効な手立てを開発することを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 和田浩(保存修復課環境保存室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、荒木臣紀(保存修復課調査分析室長)			
【主な成果】 ・ 陸前高田市立博物館内の環境を調査し、問題点については環境改善を実施した。 ・ 陸前高田市立博物館が所蔵する工芸資料及び美術資料の安定化処理を実施した。 ・ 研究成果を学会で発表し、刊行した出版物に掲載した。			
【年度実績概要】 ・ 環境調査及び改善 26 年 5 月 26 日から 28 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 6 月 16 日から 18 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 8 月 24 日から 25 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 8 月 27 日から 29 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 9 月 29 日から 30 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 10 月 19 日から 21 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 11 月 17 日から 19 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 12 月 16 日から 17 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 26 年 12 月 18 日から 19 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 27 年 1 月 21 日から 23 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 27 年 2 月 25 日から 27 日 陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施 ・ 安定化処理 陸前高田市立博物館所蔵の工芸資料(10 件)の安定化処理を実施 陸前高田市立博物館所蔵の美術資料(3 件)の安定化処理を実施 ・ 学会発表 26 年 6 月 文化財保存修復学会にて研究発表を行う(2 件)。 ・ 出版物 27 年 1 月 研究成果物として「安定化処理」を出版する(一部を執筆)。			
			
		収蔵環境改善のための防虫施工	
【実績値】 環境調査回数：11 回(29 日間)、工芸資料の安定化処理件数：10 件、美術資料の安定化処理件数：3 件 学会発表件数：2 件、出版物数：1 冊			
【備考】			



収蔵環境改善のための防虫施工

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：津波で被災した文化財を迅速に処理し、長期間保管する具体的な解決策を探る研究である。 独創性：現場や被災資料からデータを密に入手し、活用している。 発展性：将来発生しうる自然災害に対して成果の活用が大いに期待できる。 効率性：研究成果を現場に即座にフィードバックしながら進めることができた。 継続性：現場の学芸員等が持続可能な方策を提案する研究である。 正確性：豊富なデータを多角的に解析して評価し、改善策を構築することができた。						

2. 定量的評価

観点	環境調査回数	工芸資料の安定化処理件数	美術資料の安定化処理件数	学会発表件数	出版物数	
判定	B	B	B	B	B	
判定理由 環境調査回数：正確な状況把握を行なうのに必要かつ十分な調査回数である。 工芸資料の安定化処理件数：限定された期間内に実験を含めて処理を実施できた件数としては十分である。 美術資料の安定化処理件数：限定された期間内に実験を含めて処理を実施できた件数としては十分である。 学会発表件数：成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。 出版物数：一般に販売する書籍に成果を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初予定の作業を実施すると共に、環境改善に対する具体的な指針、あるいは安定化処理に関する具体的な方法論を創出することができたので、実績として十分なものと判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り達成しているものを判定する。次年度の研究調査によって中期計画期間中の目標を達成し、次期中期計画においてはより高度な問題について取り組む予定でいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 絵巻の〈伝来〉をめぐる総合的研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】 本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】 【主な成果】 前年度に引き続き、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、以下の調査研究を進めた。 ・古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 ・東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 ・東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査とデータ整理			
【年度実績概要】 (1) 文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博搜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、本年度はおおよそ 57 タイトルの文献資料から約 5300 件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。 (2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理を行った。調査順は列品番号順を基本として進め、本年度は幕末の復古やまと絵師による模本など約 60 件の調査を行うことができた。 (3) 売立目録の調査 (1)と(2)が前近代における絵巻情報の収集と整理であるのに対し、近代における作品の移動等を追うため、売立目録に記載された絵巻の調査を進めた。とりわけ、東京文化財研究所には国内有数の売立目録が所蔵されており、その全てから、絵巻を中心とするやまと絵の情報を抜き出し、PDF化を進める準備を整えた。本年度は、昨年度までの抽出したデータの校正と、試験版データベースでの画像ファイルとのリンクを進めた。 (4) 調査・研究の展示での公開 上記の調査・研究の成果を踏まえ、26年7月23日から8月31日の間、東京国立博物館特別2室において「特集陳列 春日権現験記絵模本Ⅰ―美しき春日野の風景―」を開催した。このほか、綿田稔・江村知子・土屋貴裕「続稀蹟 雑纂―ポートランド美術館所蔵作品簡解」(『美術研究』414号、27年2月掲載)を発表した。			
 「特集陳列 春日権現験記絵模本Ⅰ―美しき春日野の風景―」 展示風景			
【実績値】 絵巻伝来関係資料の抜き出し件数 約 5,300 件 絵巻模本の調査件数 約 60 件 売立目録の調査件数(既入力データの校正含む) 約 5,000 件 展示への反映 1 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉える本研究の意義は大きい ため。 独創性：作品の付属情報に留まらず、日記、古記録などの文献資料、売立目録の情報により多角的に研究を推進する 本研究の独創性は高いため。 発展性：絵巻研究のみならず、仏画、肖像画をはじめとする絵画の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、対象資料の目処を立て、効率的にデータ収集を行えたため。 継続性：前年度までの計画を引き続き継続して調査研究を進めることができたため。 正確性：データに関しては、入力時、入力後の二度確認を行うことで、資料の正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	関係資料の 抜き出し件数	絵巻模本の 調査件数	売立目録の 調査件数	展示への反映		
評定	B	B	B	B		
判定理由 関係資料の抜き出し：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 絵巻模本の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 売立目録の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 展示への反映：一般にも開かれた研究成果の公開を行うことができた。 論文等の成果公開：1件。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	最終年度である今年度は、これまでの研究蓄積、そして研究手法を踏まえながら、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、売立目録の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、成果公開を展覧会という形で一般向けに行うこともでき、論文等も公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は絵巻の研究を作品のみならず、その付帯情報から総合的にとらえるべく進めてきたが、研究開始当初の計画に沿ったデータ収集を行うことができた。また、絵巻模本の調査もリストはおおむね整理することができた。ただし、本研究が対象とする調査対象は、限られた年度のなかで全ての調査を完遂するのは不可能である。蓄積データの効率的な公開に向け、継続して研究を推進していくことを目指したい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 神像表現における物語性に関する研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-②）		
【事業概要】 本研究は、多くの神像は固有の物語（伝承・信仰）を背景に製作されたという視点に立つもので、表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探ることを目的にする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部平常展調整室長 丸山士郎
【スタッフ】			
【主な成果】 25 年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群についての論文を執筆した。			
【年度実績概要】 ・25 年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群の作品概要と、表現の物語性に関する論文を執筆した（「広島・南宮神社神像群と神像の物語性」『MUSEUM』652、2015 年 10 月、東京国立博物館）。 ・静岡県河津町所在の南禅寺所蔵の神像 7 体（男神 1 体、女神 1 体）の調査を実施し、作品調書及び写真の作成をした（26 年 6 月 21 日）。 ・東北地方の仏像は、仏であるとともに神でもあるといわれ、ナタ彫りはその性格を示す表現である。ナタ彫りの代表作品である岩手・天台寺の聖観音菩薩立像など、東京国立博物館で開催された「みちのくの仏像」展出品作品 26 点の調査を実施した。			
			
南宮神社神像群の調査風景			
【実績値】 調査作品数：彫刻 33 体 論文執筆数：1 件(①)			
【備考】 論文 ①丸山士郎「広島・南宮神社神像群と神像の物語性」『MUSEUM』652、2015 年 10 月、東京国立博物館			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：近年神像彫刻研究への関心が高まっており、調査結果はその推進に寄与することができる。 独創性：神像彫刻の表現を固有の物語（伝承等）から考察する視点はこれまでになく、新たな成果が期待できる。 発展性：未紹介作品の調査を実施できたので、その成果は今後の神像研究に活用できる。 効率性：東京国立博物館で開催された展覧会における成果も反映しており、効率よく研究を進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	論文執筆数				
判定	B	B				
判定理由 調査作品数：展覧会出品作品 26 体を含む 33 体の調査を実施し、予定通りの成果を挙げることができた。 論文執筆数：25 年度に調査を実施した広島・南宮神社神像群に関する論文を執筆した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年関心の高まっている神像について、東京国立博物館で開催した展覧会成果も取り入れながら、予定通りの作品調査、論文執筆を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度の研究実施計画どおり展覧会出品作品を中心に、作品調書、写真撮影を実施し、昨年度調査した作品の論文を執筆した。来年度は、引き続き同様の調査を実施するとともに、それらの成果を基にした論文を執筆する。

業務実績書

中期計画の項目	4 有形文化財に関する調査及び研究推進		
プロジェクト名称	7)江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究（学術研究助成基金助成金）((5)-②)		
【事業概要】 自然観察によって自然の原理や根源を求めていこうとする動向は、我が国においては博物学として江戸時代にすでにその兆しがみられた。江戸幕府による本草学や博物学の興隆は、江戸中期、特に享保年間（1716-36）以降と考えられてきた。しかし本事業では、その萌芽の時期を江戸初期すなわち17世紀に求めるべく、狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」を調査するものである。これら膨大な写生図を調査することで、江戸初期の幕臣や御用絵師らによって、自然観察や諸産物の集成といった科学的視点が牽引され、その後に享保年間以降の本草学や博物学の興隆が導き出されたことを明らかにしたい。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室 主任研究員 小野真由美
【スタッフ】 松島 仁（徳川文化財団 特別研究員）			
【主な成果】 前年度の狩野探幽及び狩野常信の写生図の調査をふまえて、本年度は常信と交友のあった京都の公家・近衛家熙が制作した写生図の調査研究ををすすめた。 (1)家熙の日記『家熙公記』、及び家熙の言行を記録した山科道安著『槐記』を精査した。 (2)京都・陽明文庫所蔵「花木真写図巻」（近衛家熙作）三巻を調査した。 (3)『家熙公記』『槐記』の精査によって、家熙が本草学・名物学については、『和名類聚抄』（源順・平安時代）、『本草綱目』（李時珍・明時代）から影響をうけていたことを指摘し、そして「花木真写図巻」の調査によって、家熙が探幽・常信のみならず、ドドネウス著『草木誌』のような西洋の植物図からも新たな構図法を学んでいた可能性がみいだされた。さらに、家熙が典薬頭の錦小路頼庸や絵師の渡辺始興と交流しながら、本草学・博物学への造詣を深め、「花木真写図巻」のような植物図譜を制作した背景を考察した。 (4)家熙は宮廷や公家のみならず、将軍家、幕府の御用絵師、縁戚の水戸藩、薩摩藩、津軽藩などの人脈をもっていた。写生図制作についても、宮廷、幕府、藩主といった知的人脈をさらに明確にしていく必要があり、今年度は将軍家、水戸藩について調査した。 (5)本年の調査によって得られた知見は論文（【備考②】）として発表した。また前年度の調査をふまえた狩野探幽とその写生図についての研究成果を論文として発表した（【備考①】）			
【年度実績概要】 ・京都・陽明文庫にて近衛家熙作「花木真写図巻」の調査を行った（26年8月20日）。 ・水戸・個人宅にて水戸藩御用絵師関連作品の調査を行った（26年10月24日）。			
 (左) ドドネウス著『草木誌』東京国立博物館 (右) 近衛家熙「花木真写図巻」陽明文庫			
【実績値】 ・研究会回数 2回（5月・27年3月 於東京国立博物館） ・作品調査回数 2回（8月 京都・陽明文庫、10月 水戸・個人）			
【備考】 ①松島 仁「狩野探幽筆 海棠に尾長鳥図」『國華』1428号、2014年10月20日 ②小野真由美「予楽院の庭—陽明文庫所蔵「花木真写」考—」『國華』1429号、2014年11月20日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本年度は陽明文庫所蔵「花木真写図巻」三巻の全ての画像を撮影し、データベース化することができた。これは美術史、歴史学、博物学、自然史などの諸分野の研究に資するものである。 独創性：これまで江戸初期（17世紀）における自然観察の事例は実証されていなかったが、本事業は狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」に着目することで、江戸初期における博物学の萌芽の様相や、そこに関わった幕府の状況について新知見を示し、さらにその直接的な影響が江戸中期（18世紀）において、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」に及んでいることを明らかにした。 発展性：本事業における江戸初期の写生図についての調査は、幕府主導の事例である。そこからさらに幕府及び御用絵師と交友のあった撰関家・近衛家熙の事例とを関連付け、その調査へと発展させたことで、前年度以上に美術史や歴史学、博物学史などに資する内容となった。 効率性：本年度行った陽明文庫所蔵「花木真写図巻」三巻の法量、注記、料紙についての情報は国立情報学研究所のResearchmapにおける資料公開（https://researchmap.jp/onomayumi/%E8%B3%87%E6%96%99%E5%85%AC%E9%96%8B/）に掲載し、多くの研究者が利用可能なものとしている。 継続性：本年度の調査によって陽明文庫所蔵「花木真写図巻」が公家文化における伝統に立ちながら、新たな西洋からの知識を取りいれていることが明らかになった。そしてそこに幕府や御用絵師が関わったこともみえてきた。そうした人的ネットワークの解明を課題とし、継続的に調査をすすめている。 正確性：陽明文庫所蔵「花木真写図巻」全てのデータ化を行った。すでに先行研究として淡交社刊行『花木真写』があるが、本研究は先行研究に、各図の法量、料紙の状況、制作背景の考察を加えたものとなっている。そのため正確で客観性のある研究成果が得られたといえる。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	作品調査回数				
評価	B	B				
判定理由 研究会回数：5月と27年3月に前年度の成果の確認と本年度の調査計画を行った。研究会は2回と少なかったが、メールでの情報共有により充分な確認と意見交換を行うことができた。 作品調査回数：作品調査のうち、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」は、撰関家筆頭近衛家の伝来品であり、調査の機会を得ることが困難な作品であった。この貴重な調査によって、江戸中期の植物図譜の一端が明らかになったといえる。また水戸藩御用絵師関連の調査では、今後の研究に関わる様々な知見を得ることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	春期から計画的に調査とデータ構築を行い、陽明文庫所蔵「花木真写図巻」のデータ化を行うことができた。さらに家熙をめぐる知的人脈やその制作背景などを明らかにすることができた。今後は幕府や水戸藩、常信などとの関連を調査し、多角的な研究へと発展させたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」の網羅的調査が計画通りに達成され（【備考②】）、更に幕府と関わりの深い近衛家熙へと研究を進展することができた（【備考②】）。次年度は、江戸初期の写生図制作が、江戸中期以降にどのような展開をみせたのかを明らかにしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 刀装具一派後藤家の鑑定 極帳 (鑑定控) の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-②)

【事業概要】

本研究は、東京藝術大学附属図書館が所蔵する後藤家文書の調査などによって、近世最大の刀装具一派であった後藤家の鑑定活動と、同家の作品の価値付けの様相を具体的に捉えるものである。後藤家では刀装具制作とともに、祖先の作品の鑑定も行っており、その結果は後藤家文書のうち「極帳」という鑑定控に記録されていた。本研究では、極帳を含む後藤家文書の撮影を行い、鑑定された作品のリストを作成し、現存作品との照合を可能な限り進める。そして、その作業から鑑定基準などの鑑定の様相を考察し、近世における工芸品の価値付けの実際を考察する。

【担当部課】

学芸研究部

【プロジェクト責任者】

保存修復課保存修復室研究員 酒井元樹

【スタッフ】

【主な成果】

- ・極帳の翻刻を継続し、後藤家の鑑定活動や極帳との関係について更に理解を深めた。
- ・極帳の鑑定記録と東京国立博物館所蔵にされる刀装具との照合が部分的に行えた。
- ・上記研究成果を、展示会に協力することで視覚的に発表し、同展カタログにおいてその詳細を論述できた。

【年度実績概要】

- ・極帳の翻刻、及び鑑定活動の様相の検討を行った。
- ・当館所蔵品を調査し、極帳との照合作業を部分的に行うことができた。
- ・極帳の文書としての構造に関して新たな知見が得られた。それは、初めて鑑定が依頼され、同家の作品と認められた刀装具に対して、極帳には「折紙」と呼ばれる鑑定書を発行した記録だけがあるものと考えていたが、同帳にはこれとともに鑑定所見を刀装具裏面に彫り付ける「極銘」の記録も残っていたことが判明した。
- ・上記研究成果を、東京藝術大学附属図書館貴重資料展「後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②」(会期 26年12月1日～25日)に協力することで視覚的に提示し、その詳細を「後藤家文書 極帳について②」と題して同展カタログにおいて論述した。



左図 「後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②」展 カタログ表紙
右図 同展カタログ所収 論文「後藤家文書 極帳について②」(部分)

【実績値】

論文件数 1件。

【備考】

「後藤家文書 極帳について②」(『後藤家文書 刀装金工の鑑定と記録②』 25年12月)

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：最新の研究成果を展示会において展示・文献面で公開できたため。 独創性：極帳について従来知られていなかった文書の構造に言及できたため。 発展性：今年度判明した文書の構造への更なる理解は、今後の研究で基礎的、かつ重要な検討要素となるため。 効率性：東京国立博物館の所蔵品を精査することで、人材・設備の投資を最大限に抑えられたため。 継続性：翻刻や実作品との照合において継続的な検討の時間を設けているため。 正確性：研究成果の詳細を論述した論考を発表できたため。また、東京国立博物館の所蔵品について鑑定記録を得られ、自館の文化財について新たなデータが得られたため。						

2. 定量的評価

観点	論文件数					
評価	B					
論文件数：予定通り研究の中間報告を論文などで発表できたため。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度の目標どおり、研究成果を展示会と論考で公開でき、さらには自館の文化財に対して新たな理解ができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、極帳の画像作成、部分的な翻刻を中心にした情報整理、実作品との照合といった課題が段階的にあり、後者二項目は併行して行われている。現状では研究成果を複数回発表しており進捗は計画通りである。今後も継続して翻刻作業を行い、現存する刀装具との照合を計りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9) 中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）(5)-②
【事業概要】 中世から近代までの日本絵画を照らす照明の状況を大きな指標ととらえ、まずく現代の展示空間における光が、どのような状況にあるのかを把握する。そして制作された当時、絵画がどのように受容されていたのかを考察しながら、＜歴史的な光＞を先進的照明機器によって復元することで、絵画の展示の手法を拡張しようとするものである。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 松嶋雅人
【スタッフ】 和田浩（保存修復課環境保存室長）、矢野賀一（学芸企画部企画課デザイン室主任研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室員）	
【主な成果】 (1)・東京国立博物館展示室において、輝度カメラ、分光光度計を用いて、既存照明器具で構成される展示照明環境の現状分析を行った。 ・東京国立博物館敷地内の施設並びに館外施設の展示室内の光の計測、調査を行い、比較資料となるデータ収集を行った。 ・研究協力社のもとで、LED 照明、有機 EL 照明器具の先進装置を調査、実験を行った。 (2) 調査、実験結果のデータを考慮、検証することで、絵画の制作当時の状況を復元的に考察することで可能となり、先進的 LED 照明、有機 EL 照明をに用いた展示室で実際の展示効果を検証することができた。 (3) 調査、実験成果をもとに、先進的 LED 照明、有機 EL 照明を用いた展示照明を実際の文化財展示に反映させた。	
【年度実績概要】 (1) 下記の調査、実験を行った。 東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 30 箇所) (26 年 4 月 2 日～20 日) 特別展「栄西と建仁寺」において輝度分布調査(輝度計測 5 箇所) (26 年 4 月 20 日) 東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 11 箇所) (26 年 4 月 22-25 日) 東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 10 箇所) (26 年 5 月 11 日) 東京国立博物館春草蘆・六窓庵にて輝度分布調査(輝度計測 28 箇所) (26 年 5 月 12 日) 東京国立博物館総合文化展にて輝度分布調査(輝度計測 12 箇所) (26 年 5 月 16 日) 新規導入照明器具の調査(輝度計測 22 箇所、分光スペクトル計測 22 箇所) (26 年 6 月 13 日) 龍谷ミュージアム展示室にて輝度分布調査(輝度計測 31 箇所) (26 年 9 月 6 日)	
 春草蘆  春草蘆内の輝度分布画像	
(2) 文化財照明における諸データを収集したことで、先進的 LED 照明、有機 EL 照明等の照明機器の効果的な仕様作製に関連付けすることができた。(26 年 4 月～12 月) (3)・上記調査結果の知見をもとに、有機 EL 照明による文化財照明について学会発表を行い、論文を発表した。 ・平成館特別展室の照明器具改修に上記調査結果を反映させた。(26 年 12 月～27 年 3 月)	
【実績値】 東京国立博物館展示室、館外施設（屋外、寺院）の計測調査箇所 171 箇所 (輝度計測 計 149 箇所 分光スペクトル計測 計 22 箇所) 展示への反映 2 回	
【備考】 和田浩・松嶋雅人・矢野賀一・土屋貴裕「次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究」文化財保存修復学会第 36 回大会(26 年 6 月 8 日) 和田浩・松嶋雅人・矢野賀一・土屋貴裕「OLED 光源を用いた面発光照明器具による伝統的な屋内光環境効果の復元」『展示学』52 号(27 年 3 月)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：各展示施設における既存の照明器具から先進器具への転換が数多くなされている現状において、本研究は極めて緊急性、公共性が高く、また数多くの計測資料は国内のみならず、国外施設との比較材料として極めて有効である。 独創性：美術史、展示デザイン、保存科学各分野を統合した本研究は、これまでに他に類をみない。 発展性：本研究の実測データ、その効果の多様性は、今後の文化財展示に様々な示唆、影響を与える。 効率性：東京国立博物館総合文化展の展示替機会を、調査実験のデータ収集機会として効率的に利用している。 継続性：年間に数多く実施される東京国立博物館総合文化展、並びに特別展において、さまざまな文化財分野の調査機会を多数得ることができる。 正確性：現状の展示環境、並びに先進的照明器具の各種データは数多くの収集機会を得ることによって、その正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	計測調査箇所	展示への反映				
評価	A	B				
判定理由 計測調査箇所：東京国立博物館内外の展示室における照明環境について、絵画作品の形状、素材について各種の測定が数多く実施することができた。 展示への反映：調査研究の成果をもとに、実際の展示に先進照明器具を用い、高い展示効果が得られた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は、東京国立博物館総合文化展、並びに特別展等の既存展示環境の現状把握を数多く行ったことで、各種データを効率的に収集することができ、より先進的な展示環境を構築する先進的照明器具の仕様作製に反映させることができた。 次年度にはさらに広範囲における展示環境の数値、データを収集しつつ、実際に新規の先進的照明器具を採用した文化財照明についての検証を行いつつ、これまでにない展示環境の提示が広範にできるよう理論構築を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現状における展時室等の展示環境の調査を十全に行うことができ、さらに各種の先進照明器具の検討を実施したことで、その成果が実際に東京国立博物館展示室へ反映されることとなった。 次年度以降、さらに諸環境における計測値を多数収集し、特別展等で本研究の成果を反映させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 東アジアにおける繡仏の基礎的研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)－②)		
【事業概要】 本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査にもとづいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史及び染織史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的にとらえることを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	広報室長 伊藤信二
【スタッフ】 塚本鷹充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、高木結美（学芸企画部企画課特別展室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 (1)研究2年目である本年度は、主として国内外に所在する中国の作例の実見調査を実施することで、図像・材質技法・様式の詳細な分析を行った。 (2)これらの調査によって得られた繡仏の現存作例に関する、法量・図像・材質・技法・銘文・箱書・関連情報などを整理した。			
【年度実績概要】 (1)繡仏作品実見調査 ・26年 6月12日 ・国宝刺繍如來說法図 1幅 唐時代8世紀（奈良国立博物館）実見調査 ・26年 8月14日 ・刺繍如来三尊図 1幅 唐時代8世紀（大英博物館）実見調査 ・刺繍幡残欠 5点 唐～宋時代8～10世紀（大英博物館）実見調査 ・26年 8月15日 ・刺繍キリスト像 2枚 明時代17世紀か（V&A美術館）実見調査 ・刺繍種子文袈裟 1領 江戸時代末期～近代（V&A美術館）実見調査 ・刺繍幡残欠 3点 唐～宋時代8～10世紀（V&A美術館）実見調査 ・26年10月10日 ・刺繍千手観音菩薩図 1幅 南宋時代 12～13世紀（台北國立故宮博物院）実見調査 ～11日 ・刺繍仙人図 12幅 明時代 17世紀（台北國立故宮博物院）実見調査 ・刺繍咸池浴日図 1幅 南宋時代12～13世紀（台北國立故宮博物院）実見調査 ・刺繍師普賢菩薩 1幅 清時代17世紀（台北國立故宮博物院）実見調査 ※台北國立故宮博物院所蔵作品は展示施設である九州国立博物館にて調査 (2)奈良国立博物館の釈迦說法図（通称勸修寺繡仏）は、現存作例の極めて少ない唐時代の繡仏作品の代表作として名高いが、現在同館で解体修理が行われており、肌裏を除去した本紙裏が観察されるという千載一遇の好機を得て、中国繡仏に特有な技法である相良繡、鎖繡の裏側の具体的な運針を観察できた。また同時期でやはり大型の当代繡仏である大英博物館の釈迦三尊図（通称敦煌請来繡仏）を詳細に観察することができた。比較検討により、勸修寺繡仏の極めて手堅い技法、敦煌請来繡仏の緻密だがおおらかな技法という差異が看取され、これが工人や工房などの制作環境に由来するもの（例えば官製と民間製あるいは私製のような）との仮説が得られた。 また明時代の繡仏作品については、面部に刺繍糸を平行に運針する「平繡」が多用されていることをかつて指摘したことがあるが、すでに南宋時代の作品にもこの傾向が見られることが判明した。			
 調査風景 V&A 美術館			
【実績値】 繡仏作品の調査件数 約28点 調査作品デジタル画像撮影件数 約1,000枚 繡仏現存作例の作品情報データ化件数 約100件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：中国の繡仏について現存作例を網羅的に調査する作業は従来ほとんど行われてこなかったため、本研究の意義は大きい。 独創性：繡仏現存作例について図像・技法を詳細に分析し、様式編年化する本研究の独創性は高いため。 発展性：染織研究のみならず、仏画をはじめとする絵画ひいては仏教美術の研究にも寄与することができるため。 効率性：中国繡仏では特に古くかつ稀少な大型の唐代の作品2点をはじめ、限られた時間の中で、効率的に調査を実施できたため。 継続性：研究開始年度に基礎データを整備することで、来年度以降の調査研究課題を洗い出すことができたため。 正確性：データ作成に関しては、入力後、確認者を替えて複数の確認を行うことで、資料の正確性を期したため。						

2. 定量的評価

観点	繡仏作品の調査件数	調査作品デジタル画像撮影件数	繡仏現存作例の作品情報データ化件数			
判定	B	B	B			
判定理由 繡仏作品の調査件数：当初の計画に基づき作品調査を実施できた。 調査作品デジタル画像撮影件数：当初の計画に基づき作品調査と画像撮影を実施できた。 繡仏現存作例の作品情報データ化件数：当初の計画に基づき研究の基盤となるデータを作成できた。						

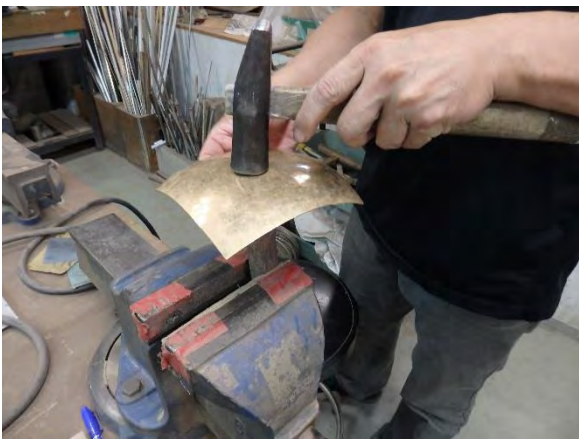
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本中世～近世期の繡仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義は極めて大きいと言える。本年度は、中国の繡仏作品、特に現存作例が極めて少なく、東アジア繡仏研究においては極めて重要な位置を占める唐代の大型作品2点を初め、多数の中国繡仏を実見調査し、本研究推進にあたって基盤となるデータを作成することが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究開始から2年度目にあたる本年度は、中国繡仏の現存作例について掌握することに努めたが、重要作例についての作品調査もあわせて着実に進めることができた。本研究は当初の研究計画に則り概ね順調であり、基本的な研究基盤を整えつつある。また、調査によって得た詳細情報を整理し作成した基礎データ及びデジタル画像は、繡仏を東アジア仏教美術史に体系的に位置づける本研究にとって極めて重要な情報と考える。次年度以降も引き続き、繡仏に関する作品実験調査及びデータ集積を進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 極薄青銅器の製作技術解明－中国金属工芸史を再構築するための基盤研究 (5)－②)		
【事業概要】 厚さ1mmに満たない青銅製容器が、戦国時代(前5世紀)以降の中国で急速に普及していった。その製作技術を3次元計測、蛍光X線元素分析装置などの光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明することで、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】 谷豊信(部長)、和田浩(保存修復課環境保存室長)、矢野賀一(学芸企画部企画課デザイン室主任研究員)、松本伸之(京都国立博物館副館長)、赤沼潔(東京藝術大学教授)			
【主な成果】 (1) 国内外の博物館において極薄青銅器ないしそれに関連するユギの調査と分析を実施し、いくつかの製作技法を明らかにすることができた。 (2) 調査で明らかにした製作技法を東京藝術大学における実験で検証し、技法各種を可能とする条件について知見を得た。 (3) 調査で得た途中成果を刊行物、学会などで発表した。			
【年度実績概要】 (1) 天理大学附属天理参考館(26年10月21日)、黒川古文化研究所(26年10月22日)、和泉市久保惣記念美術館(26年10月26日、28日、29日)、泉屋博古館(26年10月30日、31日)、京都国立博物館(27年3月18日)において、極薄青銅器の調査及び3次元計測、蛍光X線分析、CT撮影などを実施した。このほか、韓国中央国立博物館、国立古宮博物館、ソウル大学博物館、宗廟、安城博物館、安城ユギ工房において極薄青銅器の参考資料として韓国出土青銅器及びユギの調査(26年8月6日～8月14日)を実施した。 (2) 東京藝術大学では昨年度、銅・錫・鉛の成分比率を変えながら鋳造したサンプルに対して加工実験を8回行った(26年8月3日～5日、18日～21日、25日)。また、加工前後で表面の成分比率や色がどのように変化するのかを調べるため、サンプルに対して蛍光X線分析と分光計測も1回実施した(27年3月27日)。 (3) 調査で得られた途中成果は『日本中国考古学会2014年度大会 発表資料集』(26年12月6日発行)、韓国国立中央博物館での学術交流発表会(26年8月8日)、及び広島大学で開催された日本中国考古学会平成26年度大会(26年12月6日～12月7日)にて報告した。			
			
和泉市久保惣記念美術館における調査(26年10月28日)		サンプルを用いた加工実験(26年8月21日)	
【実績値】 調査・分析実施回数：1回 サンプルの加工実験回数：8回 加工実験を行ったサンプルの点数：56点 研究成果の公開回数：3回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	S	A	B	B	B
判定理由 適時性：発掘の増加によって大幅に資料数が増加しつつある中国古代の極薄青銅器が、どのように製作されたものであるのか探究することは、中国古代金属工芸史の新領域を開拓する可能性につながる。 独創性：熟覧に加えて、3次元計測、蛍光X線分析、分光計測といった様々な分析手法を多角的に取り入れて、極薄青銅器の製作技法を探究し、その知見を実験によって検証しようとする試みは、これまでに例のないものである。 発展性：本研究による成果が蓄積されることにより、他地域や中国のより新しい時代における極薄の青銅器との比較をより詳細に行うことができる。 効率性：東京藝術大学の夏季休暇期間にサンプルの加工実験を実施して作業人員が集まりやすくするなど、予定していた計画に沿って調査分析を進めることができた。 継続性：研究の進展によって、極薄青銅器のなかにも時代や形状によって異なるいくつかの技術体系のあることがわかってきた。引き続き、各種技術体系の詳細を明らかにすることが必要である。 正確性：調査分析データは計測結果だけでなく、計測条件および計測部位を詳細に記録することで、客観的な検証が可能となるようにしている。						

2. 定量的評価

観点	調査・分析 実施回数	サンプルの加工 実験回数	加工実験を行った サンプルの点数	研究成果の 公開回数		
評価	B	B	C	A		
判定理由 調査・分析実施回数：目標通りの回数で調査分析を実施し、かつ、いくつかの新知見を得ることができた。 サンプルの加工実験回数：目標通りの回数でサンプル実験を行うことができた。 加工実験を行ったサンプルの点数：加工時におけるサンプルの破損が予想を上回り、加工実験の目標としていたサンプル点数には届かなかった。 研究成果の公開回数：当初予定しなかった韓国においても、成果発表の機会を得ることができた。						

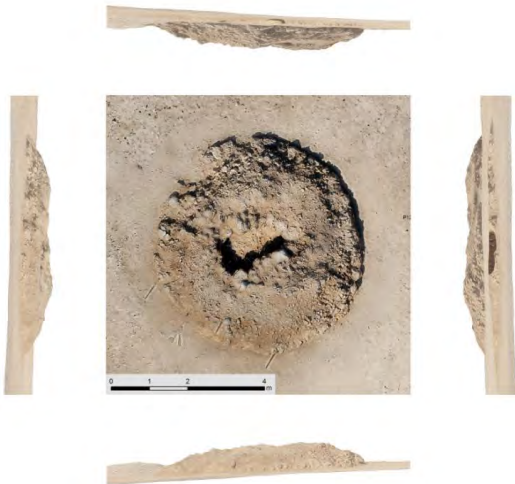
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	昨年度、東京国立博物館が所蔵する極薄青銅器をおもな対象として実施した調査・分析の成果を、今年度は館外収蔵品を調査・分析することによっていっそう深化させることができた。例えば、極薄青銅器の製作技術から抽出されたいくつかの技術系統は、今年度の最たる成果であるが、次年度は中国における出土資料を用いて、各種技術系統の時期や分布の差異を明らかにしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査、分析及び実験によって、極薄青銅器の製作技術を解明しつつあるだけでなく、研究の進展によって複数の技術系統を予察できるようになった。最終年度となる次年度は、それぞれの技術系統から中国古代における極薄青銅器製作集団の動向を読み解くことができるように、中国における出土品の調査にとくに注力したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12) ディルムン文明の起源－バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究((5)-②)
【事業概要】ペルシア湾では、前 2050 年頃、現バハレーン王国にある「バハレーン砦」に首都を置くディルムン文明が興ったことが知られている。本研究では、この原因と過程を、同国に多数存在する高塚式古墳の考古学的発掘調査を実施し、その内容を分析することによって解明する。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 後藤 健
【スタッフ】 浜崎一志(滋賀県立大学人間文化学部教授)、原田 怜(東京文化財研究所客員研究員・JICA 専門家)、安倍雅史(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター前アソシエイトフェロー)、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所技術顧問)	
【主な成果】 (1)バハレーン王国に所在する古墳群において考古学的発掘調査を実施し、また関連学術情報を収集した。 (2)古墳群の地政学的データ、3Dデータ、考古学的・建築学的・人類学的データ等を取得した。 (3)成果を国内外の関係学会で発表し、また一部は一般向けメディアでも公開する予定である。	
【年度実績概要】 本研究は 26～30 年度の 5 年度にわたる研究の第一年度である。 (1)考古学的調査：27 年 1 月 6 日～1 月 28 日、バハレーン王国内陸部に所在するワーディー・アッ=サイル古墳群において、地形測量、3D撮影、高塚式古墳群の考古学的発掘調査を実施する予定した。またバハレーン国立博物館、バハレーン砦遺跡博物館等に収蔵される関連資料、とりわけ粘土板文書に関するデータを収集した。 (2)調査の結果得られた知見・発見等：ワーディー・アッ=サイル古墳群の考古学的発掘調査により、「ディルムン文明」成立直前期（前 2200～前 2050 年頃）の高塚式墳墓の構造・内容・被葬者等に関する新知見が得られた。 (3)調査研究成果の公表：バハレーン王国文化省考古局に成果の概要を報告書として提出した（備考）。また今後日本西アジア考古学会、日本オリエント学会、Seminar for Arabian Studies 等の国内外の学会で成果を公表し、また一般書、ブログ、公開講座等でも成果の普及活動を行う予定である。	
 発掘後、3D撮影によって作成された バハレーン王国ワーディー・アッ=サイル古墳群の「前期型古墳」の写真。	
【実績値】 ・調査件数 1 件（国外）、写真撮影点数 約 5,000 枚、測量図 約 20 面。	
【参考値】 刊行物等 バハレーン王国文化省に対する公式の調査概報 2 巻を作成。また国内外の学会機関紙等に論文 2 篇を執筆予定。 本研究は 5 年度（24～28 年度）にわたる計画であり、本年度はその初年度にあたる。各年次の成果は当該年度以降に随時公表される予定である。	
【備考】 T. Gotoh, K. Saito, M. Abe, R. Harada et al. First 15 th Day's Report of the 2015 Season of the Bahrain Wadi as-Sail Archaeological Project by Japanese Archaeological Team in Bahrain (27 年 1 月 20 日) 及び続巻 (Second 15 th Day's ... 27 年 1 月 31 日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：ペルシア湾の考古学・歴史学研究は近年世界の研究者の焦眉の課題であり、古代文明解明の糸口となる最新テーマである。 独創性：主な調査対象であるワーディー・アッ=サイル古墳群は「ディルムン文明」誕生直前の「前期」古墳群で、文明期の「後期」古墳群の前身にあたるため、発掘によって文明成立の原因を解明するに最適と考えられる。しかしこれまでは不十分な調査しか行なわれたことがない。 発展性：三次元写真の撮影・計測により、古墳群の立体的画像を作成した。この技術は最先端のものであり、今後他の文化財の調査研究にも大いにされるであろう。 効率性：考古学者を中心に、測量、3D写真技術者、建築学者、シュメル学者、人類学者、環境科学者、文化財学者らを、順に各1～4週間交代で順に派遣し、国外における効率的な調査活動を実施することができた。 継続性：相手国であるバハレーン王国政府による5カ年間の調査研究許可が得られている。また機材の貸与、調査補助員の派遣などの全面的支援が得られている。 正確性：調査対象である古代遺跡の地形測量を最新技術によって実施し、地球座標に載せることができた。また3D写真・計測により現在最も正確なデータが得られた。その他の専門家による被葬者の形質、関連資料（史料）の精査・解説等を実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	測量図			
評価	B	B	B			
判定理由 調査件数：1ヶ月弱の期間に最も標準的な規模・形状の高塚式古墳1基を完掘し、次年度以降の調査計画に大いに資する成果を得た。 写真撮影点数：対象古墳の三次元写真を完成させるために必要な枚数を撮影することができた。 測量図：対象古墳の学術記録に必要な枚数の測量図を作成することができた。						

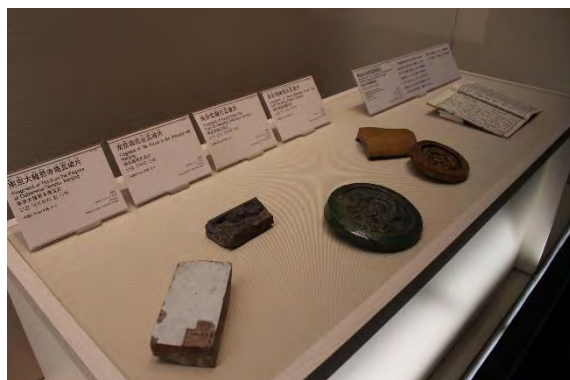
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通りの成果を得たため、Bと判定した。 本年度精査した古墳は1基に絞ったため、十分な精査を行うことができ、それによって基本的な構造を理解することができた。しかしそれは次年度以降も同程度の古墳を対象とすることを意味するものではない。 本年度得られた被葬者の人骨は保存状態が良好でなかったが、次回以降は調査対象数を増やすことで、保存の良好な資料を入手することを考慮したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の研究としては所期の目的を達成したが、時間的制約による不備もなかった訳ではない。 次年度以降は同じ古墳群において、「より大型のもの」、「より小型のもの」を含む複数の古墳を精査し、それらのヴァリエーションを解明したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進				
プロジェクト名称	13) 東アジアからみた乾隆画壇の総合的研究 (科学研究費補助金) ((5) - ②)				
【事業概要】 本研究は、18 世紀に盛行を迎えた“乾隆画壇”を、東アジアの視点から総合的に研究するものである。乾隆画壇の研究は、従来まで豊富な文献資料と作品を所有する台湾と中国において盛んに行われてきたが、そこでは乾隆画壇が東アジア全域においてどのような影響を与えたのかという視点が欠けていた。また、東京国立博物館に所蔵される (伝) 木挽町狩野派模本類も、乾隆画壇との関係が予測されるものであるが、それを東アジア的視点から研究したものは甚だ少なかった。本研究では、これらの問題点から出発し、“乾隆画壇”の成立過程とその具体相を解明し、あわせて東アジア全域に及ぶその意味を解明しようとするものである。					
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本鷹充		
【スタッフ】					
【主な成果】 (1) 中国の博物館及び古跡に赴き、現地調査を行った。 (2) 実際の作品を観覧して写真撮影を行った。 (3) 東洋館 8 室での展示、及び学会発表、論文等で成果を公表することができた。					
【年度実績概要】 (1) 南京、上海、香港への調査を実施した。また「國立故宮博物院 神品至宝」展にあわせて、作品調査を実施した。 (2) 清代を中心にした宮廷画壇、及びその周辺の作品を調査したことにより、乾隆画壇について大きな知見を得た。 (3) 東洋館 8 室における特集「南京の書画—仏教の聖地、文人の樂園—」では、列品、寄託品を中心に、宋元時代から明清に至る作品を展示し、あわせて現地の風景を並べて展示することで、研究の成果を反映することができた。また今年度は東洋館 10 室「朝鮮の美術」において、朝鮮の宮廷画員の作品を展示予定である。					
					
「南京の書画」展示					
【実績値】 作品調査：写真撮影 600 枚 現地調査：写真 200 枚 学会発表等：7 件(論文発表 5 件(①～⑤)、学会発表 2 件(⑥～⑦))					
【備考】 論文(以下、特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」図録に掲載) ①「中国伝統文化の再編—清朝皇帝の世界—」 ②「唐代から五代・北宋山水への発展」 ③「徽宗のコレクション」 ④「趙孟頫と元末四大家—反俗・友人・故郷へのまなざしと筆墨文化—」 ⑤「國立故宮博物院開院の以前と以後」 学会発表 ⑥26 年 10 月 5 日、「北京・故宮博物院本「清明上河図」と中国都市図の展開」「開館 50 周年記念シンポジウム「描かれた都、開封と京都」(於：林原美術館) ⑦26 年 7 月 5 日、「皇帝コレクションにおける模写・模造事業—乾隆帝の書画コレクションと狩野派—」「特別展シンポジウム「中国皇帝コレクションの意味」—書画における復古と革新—」(於：東京国立博物館)					

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：乾隆画壇は、国際的にも近年大いに注目されており、今年度に行われた「国立故宫博物院 神品至宝」展において関連作品を十分に調査することができた。 独創性：乾隆画壇は従来までの中国美術史研究になかった新視点をもたらす存在であり、アジアの広地域における清朝美術の役割を考えるためにも独創的な位置を占めている。 発展性：将来的にも美術史のみならず、歴史学におよぶ広範な成果が期待できる。 効率性：現地の学芸員の協力の下、効果的な作業ができた。 継続性：作成済みの写真を中心に、アジア地域における清朝美術の調査を継続する。 正確性：計画的な調査を遂行することができたため、高解像度の画像を得ることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	現地調査	作品調査	学会発表等			
評価	B	B	B			
判定理由 作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 現地調査：十分な研究成果を得ることができたため。 学会発表等：その成果をもとに十分に発信することができたため。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	乾隆画壇の理解のために、十分な調査活動を行うことが出来たため。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	乾隆画壇の理解のために、現地調査や作品調査を行うことができた。来年度も引き続き調査を実施する

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相（科学研究費補助金）（(5)-②）。		
【事業概要】 本研究は京都・神護寺に伝来する高雄曼荼羅を中心とする研究である。高雄曼荼羅は空海が中国より請来した曼荼羅を写したものであるが、類する作品は中国には残っていない。その表現は多分にインド的であるが、当代にさかのぼる絵画作品はインドにはわずかししか残っておらずインドとの関係も明らかになってはいない。おそらく、インドの表現が、中国、日本で受容される過程で、それぞれの表現的要素を取り入れたものと考えられる。本研究は、日本、中国、インドの絵画、彫刻、工芸を研究するスタッフによって、高雄曼荼羅とそれに関する国内外の作品を検討し、古代アジアの仏教美術の様相を探ろうとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部付 松本伸之
【スタッフ】 丸山士郎（平常展調整室長）、小泉恵英（学芸企画部企画課長）、伊藤信二（学芸企画部広報室長）、沖松健次郎（保存修復課環境保存修復室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、塚本鷹充（学芸研究部東洋室研究員）、安藤香織（徳川美術館学芸員）			
【主な成果】 インドに残る古代絵画の希少な作例であるアジャンタ石窟、エローラ石窟の調査を実施した。			
【年度実績概要】 アジャンタ石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟群、エレファンタ島遺跡で調査を実施した。アジャンタ石窟には5世紀後半－7世紀、エローラ石窟には9世紀－10世紀の絵画が残されている。十分な画像が公開されていないが、今回の調査では壁画が残る窟を中心に、細部の表現まで確認することが出来る高精細な画像を撮影した。それらは今後の研究に活かすことができる。			
			
アジャンタ石窟（第1窟）			
【実績値】 関連作品調査：4件(アジャンタ石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟群、エレファンタ島遺跡) 資料作成：約2,000画像			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4521-14

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：高雄曼荼羅は日本絵画史のみならず、中国、インドなどアジアの絵画史を考える上でも重要で、それらを俯瞰する本研究の成果は国内外に発信できる。 独創性：本研究では高雄曼荼羅を通してアジアの広い地域の仏教美術を比較検証する研究であり、これまでに無い視点である。 発展性：高雄曼荼羅は美術史のみならず仏教学、歴史学上も重要な作品で、本研究の成果はそれらにも活用できる。 効率性：事前にインド政府当局より撮影許可を得て、効率的な作業ができた。 継続性：作成済みの高雄曼荼羅資料を中心に、アジア地域の調査を継続する。 正確性：撮影許可を得て調査に当たったため高解像度の画像を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	関連作品調査	資料作成				
判定	B	B				
判定理由 関連作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 資料作成：インド政府当局の事前許可を得て実施し、高解像度の資料を多く作成できたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アジアの中で高雄曼荼羅を捉えるという研究目的を達成するために、その源流と考えられるインドの現存する希少な絵画作品を調査することができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高雄曼荼羅をとおして古代アジアの様相を探る上で、最も重要となる古代インド絵画作品の調査を実施できた。来年度は作成した資料を検討するとともに、引き続き調査を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】 本研究は、後のユダヤ教、キリスト教に引き継がれるヤハウェー神教を確立させた古代イスラエルの民間における宗教実態を実証的に解明し、旧約聖書に基づく古代イスラエル宗教史の理解の盲点を補うことを目的とする。具体的には、中期青銅器時代第II期（前二千年紀中葉）から鉄器時代第IIA期（前一千年紀中葉）にいたるパレスチナ諸遺跡で発見されている墓の遺構および副葬品を調査研究の対象とし、それらを地域別、時代別に分類しつつ、古代イスラエルにおける葬制とそこに表れる他界観、さらには旧約聖書が禁じた死者儀礼の実態の解明を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室アソシエイトフェロー 小野塚 拓造
【スタッフ】 月本昭男（上智大学神学部教授）			
【主な成果】 イスラエルにて現地調査を実施し、関連考古資料の収集を行った。国内では天理大学及び天理大学付属天理参考館が所蔵するゼロール遺跡出土資料を調査した。調査・研究の成果は、すでに日本オリエント学会での研究発表や、早稲田大学エジプト学研究所主催の国際シンポジウムで発表している			
【年度実績概要】 ○海外での調査・研究（イスラエルでの現地調査、8月9日～24日） ・レヘシュ遺跡の発掘調査に参加し、同遺跡で出土した埋葬遺構及び関連出土物を調査した。 ・イスラエル考古局が保管するゼロール遺跡の出土物を再調査（実測図作成、写真撮影など）し資料化した。 ・調査成果や得られたデータの検討会を現地で実施した。E. マルクス博士（ハイファ大学海洋学研究所）、グンナー・レーマン教授（ベングリオン大学）など、現地の著名な研究者が参加し、最新の調査成果を共有することができた。 ○国内での調査・研究（天理大学考古学・民俗学専攻、天理大学付属天理参考館での資料調査、11月18日～24日） ・1960年代に実施されたゼロール遺跡の発掘調査記録（調査日誌、写真、図面）を整理しデジタル化した。 ・天理参考館が所蔵するゼロール遺跡出土遺物を実見し、必要に応じて実測図作成・写真撮影を行った。 ○調査・研究の成果 ・古代イスラエルの民間信仰がある程度反映されていると考えられる新たな考古資料（埋葬遺構、副葬品、土偶や祭儀台などの宗教遺物）をデータ化し、専ら文献資料によって語られてきた当時の信仰の実態を、出土資料に基づいて考察することができた。 ○調査・研究成果の発信 ・調査研究の成果は、学会発表や講演を通して、学会と社会の双方に発信している。			
			
		ゼロール遺跡で出土した甕棺墓 （1965年の調査記録からデジタル化した写真）	
【実績値】 調査件数 2件（調査回数：国内1回、国外1回） 写真撮影画像や調査記録のスキャン画像：約1,500件 研究発表等 6件（論文発表2件 ①～②、講演2件③～④、学会発表2件⑤～⑥）			
【備考】 研究発表等 ①論文発表「考古資料に見るフェニキア人による最初の交易活動」『高梨学術奨励基金年報（18年度）』2014年11月（査読無）。 ②共同論文発表「新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査（2014年）」日本西アジア考古学会編『考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会報告集』、97-101頁（査読無）。 ③招待講演「『油滴の地—聖書時代のオリーブ油生産—』『聖書の世界を発掘する—聖書考古学の現在—』（上智大学キリスト教文化研究所 2014年度聖書講座）、2014年11月15日。 ④招待講演 Multiple aspects of the ‘Egypto-Canaanite system’ during the Late Bronze Age and the Early Iron Age Symposium “The Levant and Egypt in Contact”（早稲田大学エジプト学研究所主催・公開シンポジウム）、11月30日。 ⑤学会発表「アッシリア後のパレスチナ—テル・レヘシュ第8次発掘報告—」（共同ポスター発表）日本オリエント学会 第56回大会、2014年10月26日（共同ポスター発表）。 ⑥学会発表「新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次発掘調査（2014年）」『平成26年度考古学が語る古代オリエント 第22回西アジア発掘調査報告会—2014年度発掘調査の速報』、2015年3月22日（共同発表）。			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-15

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本研究は一神教宗教の成立と実態を解明しようとするもので、キリスト教やイスラームを根っこから理解するための基礎研究でもある。「アラブの春」以降の中東地域の騒乱は、国際社会の様々な側面に影響を及ぼしており、「不可解な」中東地域の理解につながる本研究はますます重要となっている。 独創性：研究課題である古代イスラエルの墓制と他界観の研究は文献資料の解釈を中心に進められてきた。これに対して本研究は、考古資料を最大限に活用した実証的な研究となっている。出版されているデータに加え、自身で発掘した資料を中心に、未発表の資料を数多く分析することができたことが特筆される。 発展性：国際的に注目されている研究課題であり、海外の研究機関から共同研究の打診を受けるなど、計画以上に研究の射程が広がっている。 効率性：関係機関・研究協力者と密に連絡をとり、調査の事前準備を整えたことで、限られた時間の中で計画以上の資料を実見しデータとすることができた。調査記録のデジタル化も、協力機関（天理大学、イスラエル考古局等）の設備を利用することができ、より効率的に進めることができた。 継続性：本研究はプロジェクト責任者が継続的に取り組んできた研究テーマの依拠するものである。研究の成果は、日本西アジア考古学会、日本オリエント学会等で15年にわたって継続的に報告されている。今年度の成果もこれらの学会で報告することができたほか、その成果の一部は国際シンポジウムでも発表できた。 正確性：調査対象の考古資料はプロジェクト責任者自身が時間をかけて実見し資料化している。これに加えて、得られたデータを、科研のメンバーらと常に共有し、複数の眼でチェックすることを実践できた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影画像や調査記録のスキャン画像	研究発表等			
評価	A	A	A			
判定理由 調査件数：予定していた国外調査に加え、日常業務との日程調整の結果、天理大学での資料調査を追加して行うことができた。 写真撮影画像や調査記録のスキャン画像：出土物の撮影、調査記録のスキャンについては1000件程度をこなす見込みであったが、作業を工夫したことで、約1500件のデータを収集することができた。 研究発表等：本年度は学会発表1件を予定していたが、2件の学会発表に加え、講演会等でも調査成果を公表できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は国内外で関連考古資料を収集することができ、予想を大きく上回る成果を得ることができた。来年度は本科研の最終年度であるため、これまでに収集した資料をうまく活用し、研究課題である古代イスラエルの墓制や他界観について結論づけることが求められる。また、そのためには業務スケジュールを調整し、調査・研究の時間を確保することも必要となる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における当該年度計画を達成するとともに、追加の調査やデータ収集も実施することができた。次年度も、所属部署の業務との連携を図り、その中で調査・研究成果を活用していくとともに、館内外の査読誌や海外の学術雑誌に論考を投稿できるようにしたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-16

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 中国典籍日本古写本の研究(科学研究費補助金) ((5)-②)		
【事業概要】 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(A)(研究代表者 高田時雄)による研究で、25年度から5ヵ年継続予定である。日本国内に所蔵されている日本古写中国典籍を網羅的に調査し、その総目録を作成することを主たる目的としている。			
【担当部課】	調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島哲
【スタッフ】			
【主な成果】 研究に関連する文献の収集に努めた。			
【年度実績概要】 ・研究の資料として、原本との比較の素材となる漢籍の影印本、複製本を収集した。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-16

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	B	B	B			
判定理由 適時性：中国典籍研究は、国際的な必要性が高くなっており、時宜を得た研究計画である。 独創性：世界的にも希少性の高い古写本を研究対象としており、他では困難な研究である。 発展性：人文学各分野の基礎となる資料を構築する研究であり、広い範囲に影響を与える。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は直接当館に関連する調査等は行われなかったが、随時研究代表者と連絡を取っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後の年次で当館に関連する残余の文化財についても順次調査を行う。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】 本研究は、5～9世紀の中国・韓国・日本の金銅仏について、蛍光X線、マイクロスコープ撮影、X線CTスキャン等の科学的調査によって製作技法を検討し、様式と技法の両面からその製作地、さらには製作年代の推定を導き出すことを目的としている。これら東アジアの金銅仏、とりわけ小金銅仏は、その可動性ゆえに製作地を離れて伝来しているものが少なくない。本プロジェクトの前段階として、大阪大学では「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」という科研による調査を行い、浅湊も研究分担者として参加した。同研究は半跏思惟像を中心に6～7世紀の東アジアの小金銅仏について調査するものであった。その結果、これらの中に本来の製作地を再検討すべき作例が多く張ることが判明したが、本研究はこれを継承発展させ、5～9世紀の東アジア金銅仏研究において新たな基盤を築くことを目的としている。本年度は4年計画の第2年次である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 浅湊 毅
【スタッフ】 藤岡穰（大阪大学大学院文学研究科准教授）、浅見龍介（京都国立博物館列品管理室長）、岩田茂樹（奈良国立博物館上席研究員）、楠井隆志（九州国立博物館展示課）・皿井舞（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）、稲本泰生（京都大学人文科学研究所准教授）、加島勝（大正大学文学部歴史学科教授）、関丙賛、権江美、郭東錫（韓国国立中央博物館）			
【主な成果】 ・東京国立博物館において法隆寺献納宝物中の金銅仏及び金工品の調査を行った。 本調査では、日韓の同時代に製作された金銅仏でも、鉛の含有率など、銅に含まれる成分に違いがあることが判明した。 ・九州国立博物館で開催された『百済展』に出品される日韓の金銅仏に関して、2月12～13日調査を行った。 本調査では、日韓両国の金銅仏の表情や肉体表現などにおける様式的な相違および金工作品の加飾技法と金銅仏の加飾技法の共通性などについて検討を行った。			
【年度実績概要】 ・法隆寺献納宝物のうち、重文の摩耶夫人及び天人像4軀（N-191）をはじめとする金銅仏、光背、金銅幡等、20件の作品について、蛍光X線撮影による成分分析、マイクロスコープによる細部の詳細な撮影と調査を行い、詳細な観察に基づく調書を作成した。その結果として、日本の古代金銅仏は銅の割合が高く、鉛がほとんど含まれていないということが判明した。全体としての成果は、最終年度に発行する調査報告書において詳細は報告を行う予定である。個人的には、本館、法隆寺宝物館、東洋館での総合文化展における展示及び解説等で活用する予定である。 ・九州国立博物館『百済』展においては、出品されていた金銅仏に関して、わが国の金銅仏との相違点に着目して調査を行った。また、金工作品に用いられているタガネ等による加飾技法について観察し、法隆寺献納宝物をはじめとするわが国の金銅仏で用いられている加飾技法との関連について考察した。			
【実績値】 調査回数2回 論文1本 浅湊毅「須磨家旧蔵の木造菩薩坐像と像内納入品」『学叢』36 京都国立博物館 2014年5月 (参考値) 研究会1回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-17

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評価	B	B	B	B		
適時性：各国個別の研究という枠を超えて、韓国の研究者も交え国際的な観点から金銅仏に関して調査を行う本研究は、国際交流のさらなる推進が望まれる美術研究のうえで、時宜にかなったものと考えられる。 独創性：蛍光X線による金銅仏の成分分析という手法と、その成果に基づく製作地の判定ということは、これまで誰もなしていなかった研究である。 発展性：次の段階としては、9世紀以降の金銅仏や東南アジア、南アジアの金銅仏に対象を広げていくことが可能である。 継続性：古代の金銅仏は日、中、韓とも遺例が多く、本研究は三国の金銅仏の相違点についてさらなる成果を得るための基礎となる研究である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	論文				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：大阪大学藤岡穰氏を中心とする全体的な計画は、当初の予定通り遂行している。 論文：浅湫個人も本科研に付随する研究として行った中国の仏像に関する論文を1本執筆した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大阪大学藤岡穰氏を中心とする全体的な計画としては、順調に計画通り行われている。個人的には、研究自体が関西を中心に遂行されているため、東京への転勤以降は調査及び研究会への参加が限られることとなった。次年度以降は計画通りの参加を行い、さらなる成果を目指すとともに、当館の事業への反映を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	全体の計画としては順調に遂行されている。次年度以降も同様に、当館所蔵の法隆寺献納宝物中の金銅仏をはじめとする作品に関し、蛍光X線分析装置等を用いた科学的分析を継続して行う予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-18

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-②)		
【事業概要】 日本に於ける木彫技法の変革や鎌倉時代新様式の確立に伴う用材観の変化及び形成に関する調査研究、及びその用材観に東アジア世界が及ぼした影響に関する調査研究を行う事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、浅見龍介(京都国立博物館学芸部列品管理室長)、岩佐光晴(成城大学文芸学部教授)、小澤正人(成城大学文芸学部教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域チーム長)、藤井智之(八ヶ岳中央農業実践大学校長)、安部久(森林総合研究所木材特性研究領域主任研究員)、金子啓明(興福寺国宝館長)			
【主な成果】 ・国内に点在する木彫像の調査及び木片採取を実施した。 ・昨年度採取した木片の分析が完了しによって、木彫像の素材となる樹種の同定ができた。			
【年度実績概要】 ・南禅寺(静岡県)にて木彫像の調査を実施した(26年6月19日～6月22日) ・坂ノ上薬師堂(静岡県)にて木彫像の調査を実施した(26年8月6日～8月9日) ・興福寺(奈良県)にて木彫像の調査を実施した(26年9月8日～9月9日) ・薬王寺(岐阜県)にて木彫像の調査を実施した(26年12月15日～17日) ・昨年度採取した木片237個の分析を森林総合研究所で実施し、163個の木片について樹種同定ができた。			
			
南禅寺での調査			
【実績値】 国内調査回数 4回、樹種同定木片数 163個			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-18

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：科学的根拠のない樹種特定がなされた木彫像に対して科学的な判断とその公開が求められている。 独創性：「用材観」という独創的概念から着想に至った研究である。 発展性：素材の使い分けを究明することで、各地域における信仰対象としての木彫像のあり方及び仏教の伝播についての推察など発展的に進めることができる。 効率性：異分野(美術史、保存科学、木材科学)の研究者が共同で遂行し、一回の調査で多角的な分析を可能としている。 継続性：10 数年来継続している木彫像の樹種に関する研究を受け継ぐ事業である。 正確性：樹種同定の正確性は木材分析の専門家及び専門的施設が担うことで担保されている。						

2. 定量的評価

観点	国内調査回数	樹種同定木片数				
評価	B	B				
判定理由 国内調査回数：所蔵者の同意を得た上で安全に調査を完了できる回数としては十分であると判定する。 樹種同定木片数：科学的な根拠として樹種同定結果を取り扱うには十分な量であると判定する。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価及び定量的評価の全ての項目に関してB評価であり、総合的評価もBが妥当である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標を達成している。次年度も引き続き、木彫像の調査、木片の採取及び分析を実施する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究(科学研究費補助金) ((5) -②)		
【事業概要】 プロジェクト名称、年度計画と内容が一致するよう記載してください。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課出版企画室長 勝木言一郎
【スタッフ】 守屋正彦 (筑波大学芸術系教授)			
【主な成果】 中国美術に関する文献資料及び画像資料に徴し、中国儒教美術データベースの構築を進めた。また調査研究の過程で、中国西南部における神仏習合の様相が明らかとなった。			
【年度実績概要】 中国における絵画・彫刻・工芸・建築・考古資料・歴史資料など、幅広くジャンルを網羅した儒教美術データベースの構築を開始した。今年度は彫刻と建築に重点を置き、下記の作例の文献資料及び画像資料の収集を行った。			
(1) 中国儒教彫刻			
重慶市 大足石窟石篆山第6 龕文宣王像及び弟子像 (北宋時代) 大足石窟妙高山第2 窟釈迦仏像、老君像、孔子像 (南宋時代)			
			
大足石窟石篆山第6 龕文宣王像及び弟子像		大足石窟妙高山第2 窟釈迦仏像、老君像、孔子像	
(2) 中国儒教建築			
山東省曲阜市 曲阜孔廟 (金元明清時代) 顔廟 (元時代)			
山東省鄒県 孟廟 (明時代)			
北京市 北京孔廟 (元時代)			
北京市 国子監 (明時代)			
天津市 天津文廟 (清時代)			
江蘇省蘇州市 蘇州府文廟 (明時代)			
上海市 嘉定文廟 (明時代)			
四川省資中県 資中文廟 (清時代)			
雲南省建水市 建水文廟 (元時代)			
調査研究の過程で、大足石窟からは本来、石窟総体が仏教寺院でありながら一つの洞窟の中に仏教や道教、儒教の三つの宗教が混交した尊像がつくられた作例や、儒教の尊像龕が単独に造営された作例が確認され、中国西南部では仏教・道教・儒教の融合が礼拝対象の製作のレベルで展開されていたことが明らかとなった。			
【実績値】 データ入力数 73 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-19

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：東アジアにおいて儒教が保ち続けてきた共時的、通時的な価値観を研究することに国際性が認められるため。 独創性：日本はおろか、中国、台湾、朝鮮における儒教美術の研究は極めて僅少であり、研究に新規性が認められるため。 発展性：東アジアにおける精神史の一翼を担ってきた儒教をテーマとした美術史研究に発展性や影響性を認めるため。 効率性：東京国立博物館における美術史、考古学、歴史学の研究者の協力によって効率的なデータの収集が可能であるため。 継続性：東京国立博物館が所蔵する文献資料及び画像資料によって継続的なデータの収集が可能であったため。 正確性：中国儒教美術データベースの対象を絵画・彫刻・工芸・建築などジャンルを幅広く網羅したため。						

2. 定量的評価

観点	データ入力数					
評価	B					
判定理由 データ入力数：中国における儒教美術に関するデータを順調に入力することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は中国儒教美術データベースの構築を開始するとともに、中国の仏教石窟への儒教美術の受容にまで考察が進んだ。

4. 中期計画の実施状況の確認

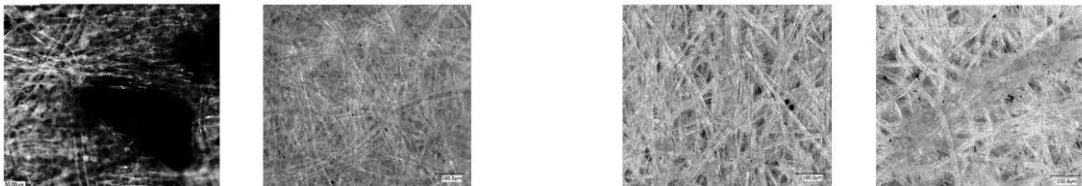
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は科研費研究の1年目に当たり、中国儒教美術に関するデータベースの構築を開始した。次年度は日々の業務との連携を図りながら、データベースの構築を継続していく予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展覧会「国宝 鳥獣戯画と高山寺」に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】 特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」(26年10月7日～11月4日)に関する調査研究 10月7日から11月24日まで開催する、特別展覧会「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」に展示する作品の調査を行い、作品選定に反映させ、特別展覧会を開催する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 調査員 石塚晴通(北海道大学名誉教授、高山寺責任役員)、浅見龍介(列品管理室長)、永島明子、大原嘉豊、羽田聡(以上、主任研究員)、鬼原俊枝、呉孟晋、末兼俊彦(以上、研究員)			
【主な成果】 ・調査によって、学問印信・課業印信掛板を確認し、紀州に於ける明恵の事績の一端を初公開した。 ・龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センターと合同して、非破壊による写本と版本の紙質調査を実施し、展覧会図録に反映させた。 ・84件の展示作品を選定した。			
【年度実績概要】 ・国宝「鳥獣人物戯画」の修理を担当した修理技術者との検討会を3回実施した。 ・作品調査を2回、顕微鏡による紙質調査も2回実施し、図録に反映させた。 ・宋版の断簡類を調査し、重要な刊記を有する断簡を調査し、4点を展示、公開した。 ・調査によって、学問印信・課業印信掛板を確認し、紀州に於ける明恵の事績の一端を初公開した。その際には、墨書が見やすいように赤外線撮影した写真を会場に掲示し、図録にも掲載した。  「国宝鳥獣戯画と高山寺展」図録より			
【実績値】 ・調査回数 4回(文化財調査2回、光学機器を利用した調査2回) ・検討会 3回(修理技術者との検討会) ・特別撮影 1回(赤外線撮影)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	A
判定理由 適時性：国宝「鳥獣人物戯画」の修理完成後の、初公開を行った。 独創性：写本と版本に関して、光学機器を利用した紙質調査を実施し、500 倍の倍率で撮影した写真を4点、図録に掲載した。 発展性：書跡の分野に於ける紙質の問題について、非破壊による調査を実施し、今後の方向性を提示した。 効率性：出品作品84件のうち、寄託されている文化財が半数以上を占めた。 継続性：数多い紙本の文化財の紙質調査が、今後、容易の実施に実施可能となる。 正確性：目視による観察に加え、光学機器を使用した紙質調査を行った結果、作品に関する新事実が判明した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	検討会	特別撮影			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：予定していた調査回数をこなすことができた。 検討会：初期の検討を複数回実施した。 特別撮影：赤外線撮影を行い、通常の画像では見えにくい箇所を可視化した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定通り、調査を実施し、84件の展示作品を選定し、紙質調査などの成果を特別展覧会の図録などに反映させることに努めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展覧会において、文化財修理の模様や新知見を広く公開するとともに、科学的な調査を活用した成果を図録の解説に盛り込んだ。今後の料紙調査の方向性を示した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関する調査研究 ((5)-③)		
【事業概要】 特別展覧会「桃山時代の狩野派」(27年4月7日～5月17日開催予定)に関する調査研究 27年4月7日～5月17日の開催予定である特別展覧会「桃山時代の狩野派」に関して、展覧会出陳予定作品の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼美術室長 山本英男
【スタッフ】 福士雄也(美術室研究員)			
【主な成果】 (1) 関東・近畿・四国・九州地方の博物館・美術館及び社寺や個人が所蔵する桃山時代後期の狩野派出陳予定作品(障壁画・屏風・掛幅)の調査を行った。 (2) これまで未紹介の作品の発見があり、出陳予定作品の候補に加えることができた。 (3) 桃山時代の狩野派」展の出陳予定リストを確定させることができた。			
【年度実績概要】 (1) 東京国立博物館、徳川美術館(「芒燕図屏風」「三十六歌仙図絵馬」ほか)、伊勢神宮(「唐美人図貝桶」ほか)、佐賀県三岳寺(「閑室元侘像」ほか)、伊達宇和島文化保存会(「豊臣秀吉像」ほか)、滋賀県・個人宅(「槇に白鷺図屏風」)ほか、30回にわたる調査を行った。 (2) 「芒燕図屏風」については小栗宗湛筆の伝承があったが、細部表現から狩野孝信の作と判断された。「槇に白鷺図屏風」は未紹介の作品で、作者も狩野山楽と判断された。 (3) 障壁画・屏風などの大画面から掛幅などの小画面まで網羅した、バラエティー豊かな構成の展示構成が可能となった。			
 槇に白鷺図屏風 山楽筆			
【実績値】 調査回数 30回 調査作品数 120点 出品作品数 69件			
【備考】 「桃山時代の狩野派」展図録にその成果を反映させる予定である。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：極めて上質な作品が多数あるにもかかわらず、狩野永徳没後、狩野探幽が登場するまでの桃山後期狩野派に焦点を当てた展覧会が開催されてこなかったため。 独創性：障壁画や屏風のような代表作はもちろん、これまで取り上げられてこなかった肖像画や書状類などを含む網羅的な調査研究に新規性が認められる。 発展性：肖像画など、作者を認定するための基準（目安）が確定すると、これまで作者不詳とされてきた作品の作者比定が可能となる。 効率性：展覧会場のスペースをあらかじめ考慮した上で、上質な作品から順に調査に着手した。そのため短い期間内に調査を行うことができた。 継続性：膨大な数量に上る作品が全国各地に所在しており、その調査研究が控えている。 正確性：詳細な画風比較によって障壁画・屏風・掛幅など代表作となるであろう作品はほぼ調査を完了した。これにより、桃山時代の狩野派の特質は展覧会において披露できる準備が整った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	出品作品数			
評価	B	A	B			
判定理由 調査回数：予定していた所蔵先の調査を全て終了した。 調査作品数：予定していた100件を大きく上回る数の作品を調査することができた。 出品作品数：予定していた出品作品数60件を上回る69件の出陳件数の承諾を得た。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定していた作品の出陳が叶った。加えて、新発見の作品が数点あり、充実した内容となった。ただし、展覧会場のスペースの問題があり、重文指定の作品でも候補から外さざるを得なかったのが残念である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	順調に作品選定が進んでおり、意図通りに展覧会が開催できる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別展覧会「琳派 京を彩る」に関する調査研究((5)-(3))		
【事業概要】 特別展覧会「琳派 京を彩る」(27年10月10日～11月23日開催予定)の調査研究 (1)27年度秋期特別展覧会「琳派 京を彩る」の開催に向け、琳派関連文献を調査・研究を行う。 (2)当館が収蔵する琳派作品及び外部機関所蔵琳派作品について、可能な限り実見調査を行う。 (3)京都全体で進める琳派400年祭の中核展覧会として、関係機関と連携する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】 福士雄也(美術室研究員)、降矢哲男(工芸室研究員)、羽田聡(保存修理指導室主任研究員)、永島明子(列品管理室主任研究員) 中部義隆(工芸室客員調査員)			
【主な成果】 (1)琳派関連書籍の収集を行い、研究史の整理を進めた。 (2)当館及び外部機関が収蔵する琳派関連作品の実見調査に基づき調書を作成した。この調査により、これまでに紹介されていない琳派作品を知る機会を得た。 (1)、(2)の成果により、展覧会出品作品を選定し、出品交渉を進めた。 (3)京都市内4館連携会議や、琳派400年祭実行委員会と連携し、関連教育事業を策定した。			
【年度実績概要】 ・琳派関連書籍を収集し、絵画・陶磁・書跡・漆工・染織、各分野スタッフが、それぞれに研究史の整理を進めた。 ・毎月一回、調査員中部氏をまじえ、収蔵品調査及び外部機関調査を進め、展覧会出品作品の検討を行った。 ・スタッフそれぞれが外部所蔵機関に赴き、出品候補作品の実見調査を行い、調書を作成した。 ・京都市内4館連携会議フォーラムの主催、琳派400年祭実行委員会との国際シンポジウムの共同主催について、調整を進めた。 ・調査研究成果を基に、山川が「琳派と染織」という研究発表を行った(5月23日・京鹿の子絞振興協同組合総会)。			
			
琳派作品実見調査風景			
【実績値】 調査回数 17回 調書作成数 約45件 研究成果の公表 1件(①)			
【備考】 研究成果の公表 ①京鹿の子絞振興協同組合総会講演「琳派と染織」 5月23日 山川暁			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：琳派 400 年祭を一丸となつて行う京都にとって、琳派の本質を明らかにする研究及び展覧会は、極めて時宜に合うものである。 独創性：調査の結果、新出作品が幾つか見い出すことができた。 発展性：新出作品の検討など、今後の研究進展へと結びつく要素を見出すことができた。 効率性：近隣の外部調査機関をまとめて訪問するなど、調査日程の調整を行い、効率的に調査を進めた。 継続性：各スタッフが調査を継続するとともに、月一回の検討会を行い、継続的に討議を進めた。 正確性：実見調査に基づく調査作成に加え、琳派専門家を調査員として迎え、詳細な検討を重ねた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作成数	研究成果の公表			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数・調査作成数：所期の調査をこなすことができた。 研究成果の公表：本年度は事前調査の段階ながら、研究成果の一端を示すことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	琳派誕生400年、尾形光琳没後300年という、琳派にとって記念すべき年を控え、各地で琳派を中心とする展覧会が企画されるなか、当館開催琳派展の方向性を検討した。本年の研究成果を基に、展覧会開催年となる次年度は、琳派誕生の地に所在する当館ならではの、地域性を活かした展覧会および付随教育事業を企画したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の結果、出品作品がほぼ決定し、順調に進展している。 来年度は、展覧会の開催、図録作成に取り組むとともに、京都全体で取り組んでいる琳派400年祭の中核となる展覧会として、関係機関と相互に連携しながら、様々な付随事業を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別展観「山陰の古刹 島根鰐淵寺の名宝」に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】 特別展観「山陰の古刹 島根鰐淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)に関する調査研究 島根県・浮浪山鰐淵寺伝来の文化財の調査及び、調査成果発表としての特別展観の開催を行う。なかでも京都を含める畿内の天台宗が山陰地方に与えた文化的影響関係を主眼とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室研究員 末兼俊彦
【スタッフ】 浅見龍介(列品管理室長)、羽田 聡(保存修理指導室主任研究員)			
【主な成果】 鰐淵寺伝来の重要文化財2件、重要美術品1件を含む彫刻作品について調査研究を進め、従来不明確であった尊格の同定や、銅造仏について蛍光X線による成分分析を行った。また、鰐淵寺伝来の金工作品について密教法具を中心に調査研究を進め、同寺所蔵の大形塔鈴の存在に着目し、近世初頭における無動寺と鰐淵寺との関係性を発見した。これらの調査研究をもとに、特別展観「山陰の古刹 島根鰐淵寺の名宝」(27年1月2日～2月15日)を開催した。			
【年度実績概要】 鰐淵寺及び、鰐淵寺所蔵文化財が寄託されている島根県立古代出雲歴史博物館において出陳文化財の作品調査を行った。また、外部資金として公益財団法人仏教美術研究上野記念財団の出版助成(60万円)を受け、展覧会配布用の解説付出陳目録と出陳作品のポストカードを製作し、これらを配布した。 展覧会出陳作品34件の選定を行った。			
			
重要美術品・銅造不動明王像の調査風景			
【実績値】 作品調査：2回(調査作品数30件)(展観準備以外にも過去に科研調査や、特別展覧会「大出雲」開催時に調査を行っており、その結果も含む) 教育普及：出陳目録1件 ポストカード4件 公益財団法人仏教美術研究上野記念財団の出版助成を受け、作品解説付き目録等を無償配布した。 作品選定：34件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鰐淵寺所蔵の文化財が島根県指定になるのに合わせて天台宗としての繋ぎの強い京都で公開した。 独創性：島根県を代表する古刹の文化財を精査し、山陰地域の文化的な特質に迫った。 発展性：天台密教の広がり、中央と地方との結びつきの強さ等、重要なテーマの研究を進める足掛かりとなった。 効率性：限られた回数の中で多数の文化財を調査し、展示公開まで結びつけることができた。 継続性：中世以降の京都や畿内の宗教文化の波及を俯瞰的にとらえる理解の足がかりとなった。 正確性：作品調査を1点ずつ作成してデータを整備し、研究及び展覧の基礎をすることができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	教育普及	作品選定			
評価	B	B	B			
判定理由 作品調査：綿密な調査の下、所期の調査を順調にこなした。 教育普及：一般の観覧者に対して、予定通り、充実した教育普及事業を実施できた。 作品選定：初出陳作品1件を含め、計画上、必要十分な作品を選定できた						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既に知られた作品のみならず、「京都と地方の繋がり」という視点の元、初出陳となる作品を見出し、京都で地方の寺院を紹介する意味合いを具体的に示すことができた。文化の地方波及を考える上で、具体的な手がかりを提示することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

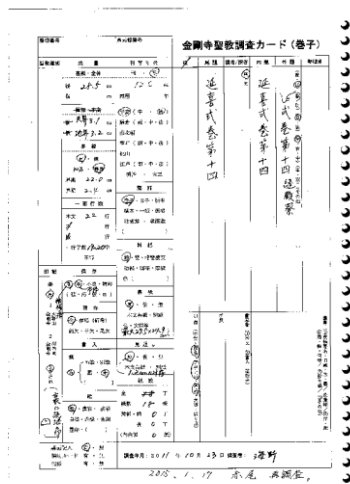
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費等をもとに行ったこれまでの調査研究の成果を活かして効率的な調査を行い、それを展示公開に結実させた。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-5 特別展観「天野山金剛寺の名宝」に関する調査研究((5)-③)
【事業概要】 特別展観「天野山金剛寺の名宝」(27年3月4日～3月29日)の関する調査研究 天野山金剛寺の本尊・大日如来坐像及び不動明王坐像(ともに重文)をはじめ、金剛寺所蔵の文化財を広範に調査し、その成果を特別展観に反映する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 浅見龍介(列品管理室長)、永島明子、大原嘉豊、羽田聡(以上、主任研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)、鬼原俊枝(美術室研究員)	
【主な成果】 金剛寺所蔵の文化財について、彫刻、書画、工芸の各分野にわたって調査を実施した。近年の調査を踏まえ、今まで紹介されていない仏教と文学に関する典籍類を確認することができた。調査成果を活かし、国宝3件、重文16件、重美1件を含む38件の文化財を特別展観用に選定した。	
【年度実績概要】 ・金剛寺にて、6回にわたって各分野の文化財を実査し、調書作成や写真撮影等を行った。 ・10月25日に中国・北京の中国人民大学外国語学院で開催された「仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム—」において、プロジェクト責任者の赤尾栄慶上席研究員が「天野山金剛寺の文化財」という講演を行った。 ・展示作品38件の選定を行った。	
	
特別展観「天野山金剛寺の名宝」の調書	
【実績値】 ・調査回数 6回 ・研究発表 1回(中国・北京の中国人民大学外国語学院において) ・作品選定 38件	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年9月にオープンした平成知新館に本尊を展示し、さらに金剛寺の全体像を紹介する展覧を実施した。 独創性：近年の調査で確認された仏教文学や音楽関係の書跡を初公開するため。 発展性：真言密教寺院に所蔵される多彩な文化財を研究者及び一般の人々に広く公開するため。 効率性：展示中の二軀の文化財を中心として、コンパクトにまとめた展示となるため。 継続性：仏教文学関係の書跡の内容など、今後とも引き続き調査研究が必要となるため。 正確性：調査や画像など、関連情報を収集し、それらを的確に整備した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究発表	作品選定			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：ほぼ予定した調査を実施することができた。 研究発表：予定通り、国際的な成果の発表に結び付けることができた。 作品選定：計画していた件数を確保することができた						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年9月にオープンした平成知新館の展示に合わせて、その他の金剛寺所蔵の文化財を関連づけて展示、公開する機会を設けた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンに合わせた企画であり、今まで知られていなかった文化財を広く公開する展示となるため。次年度以降も、適宜、社寺所蔵文化財に関する調査及び展覧を計画していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金)((5)-③)		
【事業概要】 科学研究費補助金「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」(基盤研究B 課題番号 23320038)代表 佐々木丞平、による調査研究。対象は京都府南部の古寺院（笠置寺・浄瑠璃寺・岩船寺・海住山寺・現光寺・神童寺・蟹満寺・寿宝寺・観音寺・酬恩庵・禅定寺）に関する所蔵文化財である。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 宮川禎一
【スタッフ】 赤尾米慶（上席研究員）、山本英男（上席研究員）、大原嘉豊（企画室主任研究員）、羽田聡（保存修理指導室主任研究員）、山川暁（教育室長）、永島明子（列品管理室主任研究員）、水谷亜希（教育室研究員）、末兼俊彦（企画室研究員）、呉孟晋（列品管理室研究員）、岡田愛（列品管理室員）			
【主な成果】 25年度末までの文化財の調査研究成果をもとに特別展覧会『南山城の古寺巡礼』を京都国立博物館の明治古都館（本館）において26年4月22日から同年6月15日まで開催した。この特別展覧会に出品するため20体ほどの彫刻作品の移動を行い、その移動に際して彫刻作品に関する新たな知見が得られた。			
【年度実績概要】 ・26年4月22日～6月15日に京都国立博物館の明治古都館で開催した特別展覧会『南山城の古寺巡礼』展において前年度までの調査成果をもとに寺院伝来の古文化財139件の展示を行い、調査研究成果を一般公開した。50日弱の公開期間に凡そ7万人の来館者があった。調査研究成果の公開という点で重要な展覧会であった。 ・展示作業のため仏像を移動した際に材質などの新しい知見が得られた。 ・展示会場においてはお寺で文化財調査の様子を写真と文章で掲示して、科学研究費による調査研究がどのようなものであったかを来館者に理解いただいた。アンケートなどでは博物館による調査の様子が良く分かった、と好評であった。 ・展覧会に合わせて博物館講堂で土曜講座を4回開催し、調査成果の公開に努めた。 ・調査時に撮影した写真を含む展覧会図録を作成し来館者に販売した。その図録には科学研究費による成果公開であることを明記した。なお科学研究費による調査報告書については制作中である。			
			
宇治田原町禅定寺本尊十一面観音立像（平安時代・重文）の搬出風景			
【実績値】 ・調査対象寺院：11ヶ寺 ・総調査日数：14日 ・調査件数：140件 ・調査で撮影した写真はおよそ100件。 ・特別展図録 1冊(①)			
【備考】 特別展図録 「南山城の古寺巡礼」朝日新聞社刊 26年4月刊行 6000冊			



宇治田原町禅定寺本尊十一面観音立像（平安時代・重文）の搬出風景

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：地域の仏教文化に焦点をあてた文化財の調査であったこと 独創性：京都国立博物館の学芸スタッフならではの多面的な文化財調査であったこと。 発展性：地域の対象寺院以外の文化財の所在情報も集積されて、今後の調査研究の発展性を予期させること。 効率性：日帰り圏内の寺院のために宿泊が不要で効率的な調査が行えた。 継続性：調査は一旦終了している。 正確性：作品調書の作成、写真の撮影など客観的で正確な調査を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査寺院数	調査日数	調査件数	写真撮影数	報告書	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 ・調査寺院数：11 箇寺の文化財の一部を博物館へ搬入搬出し、展示の前後に追加調査を行った。 ・調査日数：14 日間 ・調査件数：総数 140 件（展示作品数） ・写真撮影数：約 100 件（博物館内での新撮） ・報告書：展覧会図録『南山城の古寺巡礼』1 部を刊行した。						

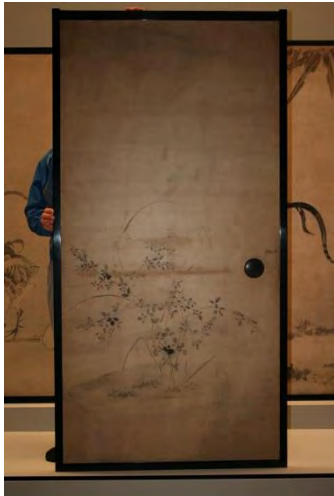
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館の本務のひとつである地域の文化財の調査として所期の目標であった南山城の古寺11箇寺の文化財調査を終えて、その成果を特別展覧会『南山城の古寺巡礼』という形で社会に還元することができたことは評価される。調査研究だけでなくこの南山城地域の仏教美術・文化財・歴史に関する知見を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都および近畿地方の社寺の文化財の調査と保存という目標の中で社寺調査を継続的に行う目標のうち23～25年度に科研費を用いて「南山城地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」を行った。従来京都市内の調査が多かったが、今回京都府南部地域での社寺調査が行えたことは調査範囲の拡大という点で評価できる。また展覧会にも反映することができた。今後は対象を改めて継続的に社寺の文化財調査を続けることとし、文化財の保存保護と研究及び展示に役立てることとする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 近世絵画に関する調査研究((5)-③)		
【事業概要】 ・当館に保管及び寄託される近世絵画に関する調査研究を行う。 ・京都市内を中心に、近世絵画の所在調査を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 山本英男
【スタッフ】 福士雄也（美術室研究員）、鬼原俊枝（美術室研究員）			
【主な成果】 ・当館に保管及び寄託される近世絵画に関する調査研究を進め、平成知新館の展示及び展示計画に必要な情報収集・整理を行った。 ・京都市内を中心に近世絵画の所在調査を行い、一部は今後寄託作品とすべく当館に移送した。			
【年度実績概要】 ・池大雅筆「寒山拾得図」、呉春筆「芋畑図」等、当館に保管及び寄託される近世絵画を調査し、詳細画像等作品のデータを収集、展示テーマに即した解説の執筆等を行うことができた。 ・上京区の個人宅等、作品情報が寄せられた京都市内の個人所蔵家を中心に近世絵画の調査を行い、特別展覧会を含む今後の展示活動、研究活動に有用な作品としてその一部は順次寄託手続きを取るべく当館に移送した。 ・通常は見ることのできない襖絵の裏面についても調査を行い、室内装飾としての襖絵の機能について考察するデータを得た。			
		伊藤若冲筆「群鶏図襖」（当館蔵） の調査	
【実績値】 ・調査回数 20 回 ・調査作品数 100 件 ・成果提示 20 件（展示解説等）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-3

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館での展示計画、今後の特別展覧会の準備に向け、着実な成果を上げた。 独創性：京都の地に伝わる文化財についての情報収集は、地域に根差す活動を標榜する当館ならではの活動といえる。 発展性：作品所蔵者とのコネクションは、新たな作品情報に結び付き得る発展性を有している。 効率性：平成知新館の展示においては、作品調査の成果を順次解説等に反映させることができ、この点は効率的であった。 継続性：作品に関する情報は日々増加しており、継続性は極めて高い。 正確性：基礎データの収集、細部撮影、関連資料の収集等により、正確性を期すことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	成果提示			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：責任者が平成知新館オープンを担当して、またスタッフ1名も年度途中からの採用であったが、予定していた回数を行うことができた。 調査作品数：同上 成果提示：同上						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託の近世絵画に関する調査研究及び作品の所在情報収集は、順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵・寄託の近世絵画に関する調査研究及び作品の所在情報収集は、新館オープンと連動して概ね順調に進んでいる。寄託品も着実に増加していることは、今後の展示・研究活動の充実に資するものといえる。 次年度は、本中期計画期間最終年度として、近5年間の成果をまとめ、展示等を通じて一般へ還元していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 近畿旧家伝来文化財総合調査((5)-③)		
【事業概要】 近畿地方の江戸時代から続く旧家が所蔵する伝世文化財の総合調査を実施する。 24 年度から継続している調査研究事業の一環であり、その成果として、旧家所蔵文化財の中から質の高い作品を当館が選定し、寄贈の推進を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室 末兼俊彦
【スタッフ】 佐々木丞平（館長）、松本伸之（副館長兼学芸部長）、永島明子（列品管理室主任研究員）、羽田聡（保存修復指導室主任研究員）、降矢哲男（工芸室研究員）、福士雄也（美術室研究員）、水谷亜希（教育室研究員）、岡田愛（列品管理室員）、鬼原俊枝（美術室研究員）、池田素子（列品管理室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 現地に担当研究員が赴き、漆工 300 件、陶磁 200 件、金工 100 件の調書作成、ならびに資料写真撮影を行った。また、調査関連データの整備とデータベース化を図った。 24 年度からの調査成果をもとに、所蔵者より多数の文化財が当館へ寄贈された。			
【年度実績概要】 計 10 名の当館研究員が参画し、計 25 日に及ぶ調査を実施した。 作品調査と共に、現地の収納場所である土蔵（4 棟）において、温湿度及び昆虫生息の調査を実施した。 調査の結果、当館の展示・研究等に活用できるものを選定し、所蔵者と協議の結果、それらの中から、計 488 件の寄贈を受けた。			
			
		近畿旧家調査風景	
【実績値】 調書作成件数：約 600 件 調査日数：25 日（のべ 49 日人） 寄贈件数：364 件（この他、124 件を備品登録） 内訳：絵画 44 件・書跡 16 件・金工 56 件・陶磁 85 件・漆工 161 件・染織 1 件・考古 1 件			
【備考】 年度当初計画には独立した項目を立てていない事業であるが、年度計画「4 文化財に関する調査及び研究の推進(5) ①収蔵品・寄託品等の基礎的かつ総合的な調査・研究」の一環として実施した。今年度は、調査の結果を受けて、多数の寄贈を受けることができたので、独立した一項目を立てて報告する次第である。 なお、来年度も継続的な調査及び寄贈が見込まれるため、来年度の年度計画には独立した調査研究項目として明記する予定である。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	A	B	B	B
判定理由 適時性：旧家伝来の文化財の総合的調査を進めてその価値を明らかにすると共に、文化財散逸の防止にもつなげることができた。 独創性：江戸時代からの旧家の伝世品を総合的に調査するという稀少な機会を得ての事業である。 発展性：今後の展覧会や研究に大いに活用が期待される文化財が数多くあり、予想を大幅に上回る多数の寄贈によって収蔵品の充実に繋げることができた。 効率性：業務繁多な折、片道2時間近くを要する場所での調査に様々な障害が伴ったものの、十分な回数と件数をこなすことができた。 継続性：数年来、継続的かつ着実に調査を進めることができ、来年度も引き続き実施する予定である。 正確性：これまで未調査であった文化財のデータを地道に採取・蓄積し、多数に上る文化財の基本情報整備を進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査作成件数	調査日数	寄贈件数			
評価	B	B	A			
判定理由 調査作成件数：未整理の状態で長年蔵の中に放置されていたおびただしい数の文化財を、一つ一つ仕分けながら実施するという手間暇かかる作業を勘案すれば、十分な数量をこなすことができた。 調査日数：新館開館前後の業務繁多のなか、のべ49日人の研究員が参加できた。日常業務効率化の努力によるところが大きい。 寄贈件数：当初100件前後の寄贈を予想していたところ、360件余りに上る多数かつ多様な作品の寄贈を受けることができた。						

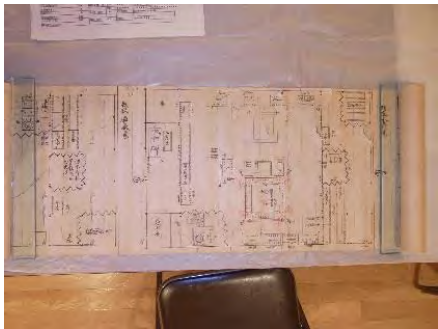
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	数年にわたる作業を通じて、所蔵者との厚い信頼関係を構築し、膨大な種類・数量に及ぶ文化財について、効率的かつ有用な調査を進めることができ、360件余りに上る寄贈を受けることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	数年にわたって予想をはるかに上回る数の文化財を調査し、その結果、収蔵品の充実にきわめて大きな役割を果たした。 来年度には、本調査研究に一定の区切りをつけ、さらなる受贈の増加を図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 醍醐寺文書聖教7万点 国宝指定記念特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」に関する調査研究 (5)－④)
【事業概要】特別展「国宝 醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」(26年7月19日～9月15日)に関する調査研究 醍醐寺の歴史や文化に関わる文化財調査を行い、その成果を展覧会の内容に反映させるとともに出陳作品の選定を行う。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室員 斎木涼子
【スタッフ】内藤栄(部長)、岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、清水健(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、原瑛莉子(企画室員)、田澤梓(工芸考古室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 (1)醍醐寺の所蔵する彫刻・絵画・工芸・書跡・考古・建築の各分野の文化財について、調査・撮影を行った。 (2)各研究員がそれぞれの専門分野に沿って文化財調査・撮影を実施した結果、新たな知見や資料を得ることができた。 また展覧会開催中にも写真撮影を含む調査研究を行い、展示品に関する基礎データの集積を行う事ができた。 (3)調査成果を反映し、従来の醍醐寺をテーマとした展覧会とは一線を画す、醍醐寺の歴史的特色をわかりやすく示す展覧会構成を実現した。	
【年度実績概要】 (1)・醍醐寺において、出陳予定作品の調査を行った(4月21日)。 ・京都国立博物館文化財修理所において、修理寄託中の醍醐寺文書聖教の調査・撮影を行った(4月22日)。 ・醍醐寺において、出陳予定作品の調査・撮影を行った(5月22日)。 ・醍醐寺五重塔四天柱(国宝)について、展覧会期間中に表面に描かれた彩色画の詳細な調査・撮影を行った(7月28日、31日)。 ・醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、展覧会期間中にX線透過撮影を行った(8月18日)。 (2)・醍醐寺における文化財調査により、膨大な所蔵品の中から本展覧会のテーマにふさわしい文化財を選定することができた。特に、国宝指定された7万点の文書聖教の中からは、展覧会において重要な意味を持ち、また効果的展示が期待される数十点を選び出すことができた。 ・展覧会に出陳した醍醐寺文書聖教の多くは未紹介であるため、詳細な調査と写真撮影を行った。 ・醍醐寺五重塔四天柱(国宝)について、展覧会期間中に表面に描かれた彩色画の調査・撮影により、新たな知見と資料を得ることができた。 ・醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、X線透過撮影により像内部に五輪塔が納められていることが確認された。 (3)・醍醐寺の美術工芸品の中心とした文化財と醍醐寺文書聖教の包括的調査と分析により、かつての名品紹介や時代順展示とは異なる、醍醐寺の歴史的特色を鮮明に、かつわかりやすく示す展示構成を実現した。 ・文書聖教の十分な選定により、単調になりがちな書跡の展示に工夫を凝らし、観覧者の注目と興味を引き出した。 ・醍醐寺における文化財調査で得られた知見をもとに、より充実した作品解説を執筆することが可能となり、彫刻・絵画・工芸・書跡部門の調査・研究の成果は、各研究員によって展覧会図録中の総論・各論として発表された。 ・醍醐寺の理源大師像(重要文化財)について、X線透過撮影によって判明した像内納入品について報道発表を行った。	
 (文書聖教の調査風景)  (工芸品の調査・撮影風景)	
【実績値】・調査回数 (人数×日数の延べ回数) 15回 ・刊行物発行数 1回 ・論文等発表数 5回(①～②) ・講座等発表回数 13回	
【備考】 ①斎木涼子「醍醐寺のすべて－密教のほとけと聖教－」(特別展図録「国宝 醍醐寺のすべて」総論 26年7月19日) ②谷口耕生「醍醐寺聖教としての白描図像」(特別展図録「国宝 醍醐寺のすべて」各論 26年7月19日) ほかに3件	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：25年度に国宝に指定されたばかりの醍醐寺文書聖教について、長年の調査成果をもとに展覧会の趣旨に合わせた調査を行った。これにより、指定された文書聖教の全容と歴史的意義を広く一般に公開することができた。 独創性：醍醐寺の所蔵する文化財の包括的調査により、名品紹介や単純な時代順展示ではなく、「密教修法」「聖教」「修験道」「政治世界との関わり」など、醍醐寺の歴史的特徴を明確にかつわかりやすく紹介する展示を実現した。また、一般には分かりにくい文書聖教の全体像と、文化財保存の意義や重要性を広く喧伝した。 発展性：各分野の研究員が専門分野に沿った調査を行い、新たな知見を得たことで、今後の各自の研究や、新しい展覧会へのアイデアを得ることができた。 効率性：長年の醍醐寺文化財調査の成果を参考に、効率的な調査を行った。また各分野の研究員が同時に調査に赴き、綿密に意見交換を行うことで、短時間の調査でも、互いにより良いアイデアや新しい知見を得ることが出来た。 継続性：調査により、新たなデータや写真資料などを数多く得ることが出来、今後の研究・展示活動にも活用することが期待される。 正確性：各研究員の調査により、文化財の基礎データを再確認することで、図録などの内容を正確なものにすることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物	論文等発表数	講座等発表回数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。 刊行物：調査結果を十分に反映した充実した内容の展覧会図録を発行することができた。 論文発表数：調査で得られた知見などを反映し、各分野の研究員がそれぞれ研究成果を発表することができた。 講座等発表回数：調査で得られた知見などを反映した講座等を企画することができ、各分野の研究員が研究成果を発表することができた。また昨年夏の特別展で1回だった展覧会公開講座を、4回開催することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教美術に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別展「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとすべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開した。特に、国宝指定された醍醐寺文書聖教の全容と歴史的意義を広く公開することは、本調査、そしてその成果を反映させる展覧会において、最も重要なテーマの一つであったが、その点において十分な実績を挙げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「国宝 醍醐寺のすべて―密教のほとけと聖教―」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「文化財に関する調査及び研究の推進」という計画に沿うよう展開し、その点において順調に実績を積み重ねた。調査成果は展覧会構成、図録等刊行物に反映され、また各研究員の個別研究発表にも結びついている。 さらに、本調査・研究で得られた新たな知見や資料は、来年度以降の研究、展覧会等に反映されることが期待される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」に関する調査研究 ((5)-④)		
【事業概要】 特別展「天皇皇后両陛下傘寿記念 第66回正倉院展」(26年10月24日～11月12日開催)に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【スタッフ】 岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(企画室主任研究員)、鳥越俊行(保存修理指導室主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 (1)展覧会に先立ち、正倉院事務所において正確かつ最新の情報を得るために当館研究員が調書の精読、書写を行った。その情報は展覧会図録や展示パネル、題箋等に反映している。また、日頃の各研究員の研究は、展覧会図録の「宝物寸描」(小論文)に掲載したほか、公開講座等で発表した。 (2)宝物をいかに美しく、かつ快適にご覧いただき、さらに宝物への安全性も重要な研究課題である。例えば、照明の方法、ケース内の環境変化への対応、展示台の高さや角度の問題などであるが、アンケートによれば見やすさ、快適さは数年前に比べ各段に好評となっており、この分野における当館の対応も実を結びつつあることを実感している。 (3)正倉院展図録の印刷数は3万冊を超えており、発表媒体としてはきわめて多い点の特筆される。観覧者が購入することはもとより、多くの図書館等に収蔵されるので、展覧会後も探すことは容易である。さらに公開講座(当館職員は1回)、正倉院学術シンポジウムの発表(当館職員は1回)を実施している。 正倉院展図録のコラム「宝物寸描」は当館研究員2名が執筆したほか、概論が新規に執筆され、日頃の当館の研究成果が盛り込まれている。			
【年度実績概要】 (1)・正倉院事務所において調書、研究報告を調査し、一部の宝物については事前に実見した。また、会期中の開館時間以外の時間を使って、可能な限り宝物を実見するように努めた。 ・正倉院展図録の解説、宝物寸描、概論等に反映したほか、展示室内にもパネル等で紹介した。 (2)照明については、見やすさ、温度変化の少なさなどを考慮してLED照明を用い、また会場の空気の滞留とケース内環境との関連について研究し、環境変化の少ない会場構成を実現した。			
			
正倉院宝物の調査点検			
【実績値】 ◎講演会回数 3回 (参考値) ・正倉院学術シンポジウム 1回(発表3回、討論会1回) ・正倉院フォーラム(展覧会前の講演会) 東京・大阪・福岡・名古屋各1回 ・大学での講義(京都美術工芸大学、奈良女子大学等) 2回 ・『第66回正倉院展』目録			
【備考】 講演会 ・10月25日 「鳥毛立女屏風と唐代絵画」(東京大学東洋文化研究所教授 板倉聖哲氏) ・11月3日 「正倉院宝物の科学的調査」(宮内庁正倉院事務所保存科学室員 中村力也氏) ・11月8日 「正倉院の武器・武具」(奈良国立博物館学芸部研究員 岩戸晶子)			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：正倉院展は秋の奈良を代表する行事として定着し、観覧者はきわめて多い。研究を発表する場としてきわめてふさわしいものであり、時期的にも適うものであった。 独創性：正倉院宝物は、その重要性にも関わらず、研究者の総数は多いとは言えない。その理由は実際に手に取ることができないという制限によるかと思われるが、その点当館は宝物に直接接することのできる数少ない機関であり、独創性、正確さの点で優れた業績を納めている。 発展性：正倉院展は毎年当館で開催されているため、宝物の研究は継続して行っている。将来的にも奈良国立博物館の重要な研究分野として発展が期待される。また、正倉院宝物以外の奈良時代の文化財にも触れる機会は多く、広い視野から宝物を研究できる。 効率性：実際に宝物を実見する前に研究を行う点に効率上の問題があるが、実見後に研究を修正するなどして対応しており、効率に問題はない。 継続性：正倉院展は毎年実施されるため、研究は単年度ごとの観があるが、実際には毎年継続して研究していることになり、その蓄積は大きい。正倉院宝物を研究する機関として、奈良国立博物館は今後ますます重要度を増すことが着たいされる。 正確性：正倉院事務所の調書を参照すること、そして実際に正倉院展に際して実物を見ること、さらに必要とあれば宝物を詳細に観察することも可能である。これによって研究の正確さが確保されている。						

2. 定量的評価

観点	講演会回数					
評価	B					
判定理由 講演会回数： 講演会の回数は計画通り例年と同じく3回開催した。講演内容は出陳宝物に関わる内容であり、毎回多くの聴衆が聴講した。いずれも最新の研究成果に基づくものであり、学術的にも成果の高いものであった。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の正倉院宝物に対する研究は、総合的に判断してきわめて高い水準を保っていると自負している。その水準は正倉院展図録の概論や宝物寸描、さらに各解説に現れている。この図録は正倉院宝物を知る上での最も入手しやすく、信頼のおける資料として多くの人から重宝されている。可能ならば海外調査を行い、正倉院宝物の源流を考えたいところであるが、宝物の故郷とも言われる中東地域に調査が適わない点は残念である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院宝物に対する研究は、博物館施設の中核的存在としての活動に該当すると考えられる。正倉院宝物という日本国内に留まらない世界的な価値を持つ文化財を、研究対象とすることは当館の存在意義を高めていると考えられる。今後の継続性も望め、しかも光学調査など新資料の提供もあり、今後ますます楽しい研究分野であると言える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-3 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関する調査研究（(5)－④）		
【事業概要】 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の開催に先立って、おん祭に関わる祭儀や伝統芸能、奉仕集団などに関する調査を行い、その成果を展示や図録解説に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 吉澤 悟
【スタッフ】 内藤栄（部長）、吉澤悟（情報サービス室長）、北澤菜月（美術室員）			
【主な成果】 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」は今年で9回目を数える。毎年異なるテーマを特集しており、これまで田楽や舞楽、神事の相撲や競馬、社家の文芸活動、大和士などについて詳細を紹介してきた。今年度の特集は、春日大社と協議の上で、祭礼に場に飾られる「威儀物」について特集することとした。過去のおん祭に使われた威儀物はほとんど現存しないことから、その探索は困難をきわめたが、京都の呉服の老舗「千総」に「千切台」なる威儀物の旧物が伝わることを知り、その調査と現物の展示公開を行うことができた。春日大社の祭礼に関わることは老舗のステイタスシンボルであり、「まつり」の原動力の一斑はこうした点にも求め得ると紹介できた。また、春日大社の式年造替が始まることもあり、過去の造替にまつわる遺品、例えば室町時代の本殿の御簾金具や、江戸時代の社殿の設計図などについても調査、公開することができた。			
【年度実績概要】 ・26年7月 おん祭の田楽装束賜の式に飾られる「千切台」の旧物についての調査を行った。 ・26年9月 春日大社に伝わる「献菓子台」の旧物の調査を行った。 ・26年10月 おん祭に使われる威儀物を図解した冊子「春日若宮祭礼図」の調査を行った。 ・26年10月 江戸時代の本殿の障壁に描かれた絵馬の写し図など、ご造替に関わる遺品の調査を行った。 ・全ての調査成果は26年12月～27年1月の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の展示品、会場パネル、解説図録等に反映させて公開した。威儀物に関する研究はこれまでにないため、研究基盤としての展示の役割を示すことができた。 ・27年1月10日 春日大社権宮司の岡本彰夫氏による講演会「おん祭と威儀物」を実施。 ・威儀物に関する論考を、春日大社が発行する「おん祭解説書」と、当館の展示図録の双方に掲載し、おん祭の観覧者と博物館の来館者に示した。 ・展覧会の入館者は本展の過去9年では最高の2万7千人であった。			
			
新たに見つかった祭具・千切台の旧物			
【実績値】 ・ 展示への反映 1件 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」 出陳作品数 54件、うち初出陳品は24件 入館者数は2万7千人 刊行物等件数 1件 ・ 同上の図録 総頁数80頁、うち総論4頁、特論6頁			
【備考】 『おん祭と春日信仰の美術－特集 威儀物：神前のかざりー』展示図録 奈良国立博物館			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：おん祭は約 800 年続く伝統行事であるが、その中でも本来の意味や役割が不明となった祭具や祭儀が含まれている。今回はその一部である威儀物をはじめ調査し、展覧会の特集として世に示した。 独創性：これまで歴史学も民俗学も扱わなかった祭具について焦点をあてた。 発展性：現時点で分かる威儀物の実態や役割を示したが、これは今後の研究の基礎資料として役立つと思われる。 効率性：春日大社の禰宜や権宮司との協業によって新出資料を探し出すことができた。 継続性：おん祭や春日信仰の展示は次年度以降も継続するものであり、さらに別の角度からも調査研究が進められる予定である。 正確性：現物を調査した上で報告、紹介している。また過去の史料にも遡及的な調査に努めており、資料精度は高い。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	刊行物等件数				
評価	B	B				
判定理由 展示への反映：春日大社おん祭の祭具に対する新たな資料を展示に反映することができたのは大きな成果である。 刊行物等件数：展覧会図録は予定通りに作成し、内容的にも新情報を含めたものを発行することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では大和の寺社の歴史や美術の調査研究と展示による一般公開を大きな活動の柱にしている。本事業は春日大社と長い付き合いと信頼関係によってはじめて実現する調査であり、地味ながらも普段は注目されない事象を深く掘り下げてその歴史性を示したことは高く評価され得ると考える。向後も、さらに別の切り口から伝統行事や信仰の歴史を検討し、展示として成果発表をして行く責務があると思われる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に従って着実に成果を蓄積しており、今後にも発展性を含んでいるため、引き続き春日大社おん祭や春日信仰に関する調査を継続する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-4 特別陳列「お水取り」に関する調査研究（(5)－④）		
【事業概要】 南都諸社寺等における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良において著名な伝統行事の一つである、東大寺二月堂修二会（お水取り・毎年三月に催行）に関する調査・研究を行い、その成果を毎年恒例開催となっている特別陳列「お水取り」に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室員 斎木涼子
【スタッフ】 内藤栄（部長）、岩田茂樹（上席研究員）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、原瑛莉子（企画室員）、田澤梓（工芸考古室員）、佐々木香輔（資料室員）			
【主な成果】 (1) 東大寺ミュージアムにおいて、文化財担当者と出陳候補文化財に関する打ち合わせを行い、また調査を実施した。 (2) 出陳可能な文化財の決定と、その内容の確認を行うことができた。 (3) 特別陳列「お水取り」の展示構成、また図録に上記の内容を反映させた。			
【年度実績概要】 (1) ・ 展覧会担当者2名が、出陳を前提とする古文書の調査を東大寺にて行った（26年9月9日）。 ・ 展覧会担当者2名が、出陳を前提とする文化財（古文書除く）の調査を東大寺にて行った（27年1月14日）。 (2) ・ 東大寺が所蔵する重要文化財「二月堂修二会記録文書」について、内容を検討した。現在、当該文書が部分的に修理に入っているため、修理未着手分の出陳と、来年度以降の修理終了分の展示予定が提案された。 ・ 工芸品の調査と聞き取りにより、従来の作品名称が誤りであることが判明し、新たな名称が付された。 ・ 東大寺が所蔵する修二会（お水取り）関係の文化財、特に塔頭が所蔵する民俗資料的な文化財を中心に調査を行った。			
  （牛玉櫃の内容物調査）			
(3) ・ 調査により得られた文化財の正確な使用目的、伝来など、新たな知見を元に、26年度特別陳列「お水取り」出陳作品を選定し、展示を実現した。			
【実績値】 ・ 作品調査回数 （人数×日数の延べ回数） 4回 ・ 刊行物発行回数 1回 ・ 講座等開催回数 2回			
【備考】 ・ 斎木涼子「東大寺二月堂お水取りの歴史」（特別陳列図録「お水取り」総説 27年2月7日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：奈良の著名な伝統行事、東大寺二月堂の修二会（お水取り）の時期に合わせ（行事期間平成 27 年 3 月 1 日～14 日）、特別陳列「お水取り」を開催した。また、新たな知見の反映した展覧会図録を刊行した。 独創性：特別陳列「お水取り」は、奈良の古社寺への調査を継続的にを行い、その行事に深い理解を有し、長年にわたり資料収集を行う当館ならではの企画である。 発展性：修二会のような行事に関わる文化財の調査は、今後の伝統行事研究への大きな礎となるものである。 効率性：長年の調査研究の蓄積により、新たな調査を必要最低限かつ的確なものに絞ることが出来た。 継続性：来年度以降も、修二会（お水取り）をテーマとした特別陳列を計画しており、調査研究の蓄積が期待される。 正確性：調査などにより展覧会図録や展示内容をリニューアルし、また作品名称を訂正するなど展示内容を正確なものとする事ができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	刊行物発行回数	講座等開催回数			
評価	B	B	B			
判定理由 作品調査回数：展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。 刊行物発行回数：最新の研究成果を反映した展覧会図録を刊行した。 講座等発表回数：特別陳列「お水取り」開催中、東大寺二月堂修二会（お水取り）に関連する講座・展示解説を開催した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別陳列「お水取り」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとするべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は、新たな知見を反映した新しい図録を刊行することができた。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別陳列「お水取り」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うよう展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。また、複数回の調査によって新たな知見を得ることができ、最新の研究成果を反映して作品名称の訂正なども随時行われている。 次年度も、同特別陳列の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積へと導く業務のサイクルが、すでに確立されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-5 特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」に関する調査研究 (5)-④
【事業概要】 特別展「まぼろしの久能寺経に出会う 平安古経展」(27年4月7日～5月17日開催予定)に関する調査研究 修理の完了した法華経(久能寺経)4巻を公開するとともに、同時代またはこれに先行する時代の写経・經典遺品を展示し、平安時代經典史を概観する展覧会に向け、文化財を調査し、研究を進める。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻 忠
【スタッフ】 内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、清水健(主任研究員)、鳥越俊行(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、齋木涼子(教育室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、大江克己(保存修理指導室員)	
【主な成果】 ・紺紙金字経や彩牋墨書経を調査して製作年代を推定し、展覧会への出陳の有無を決定した。 ・経塚出土の經典遺品を数多く調査し、本展の内容に相応しい遺品を絞り込んだ。	
【年度実績概要】 ・経塚遺物の集中調査を実施した。(26年4月17日) ・五島美術館(東京都世田谷区)において、彩牋墨書 法華経 序品 1巻を調査するとともに、展示中の種々の経巻を閲覧した。(26年8月1日) ・彩牋墨書 法華経 8巻(龍興寺所蔵、11世紀)の調査を実施した。(26年8月22日) ・紺紙金字 観普賢経 1巻(個人蔵、11世紀)の調査を実施した。(26年11月24日) ・浅草寺(東京都台東区)において、紺紙金字経の調査を実施した。(26年12月4日) ・紺紙金字 細字法華経 1巻(個人蔵、12世紀)、紺紙金字 大毘盧遮那成仏神変加持経 卷第一 1巻(長谷寺所蔵、12世紀)、紺紙金字 撰大乘論 卷第一 1巻(光慶寺、12世紀)等の調査を実施した。(26年12月8日) ・大般若経 595帖(長弓寺所蔵)のうち10帖を調査し(26年12月22日)、既刊報告書の全面的な再検証を必要とすることが判明した。 ・大般若経 599帖(海住山寺所蔵)のうち10帖の調査を実施した。(27年1月10日)。	
 個人蔵経筒の調査	
【実績値】 文化財調査の回数 8回 研究成果発表件数 3件(①～③)	
【備考】 研究成果発表 ①野尻忠「平安時代の写経一九・十世紀篇一」(サンデートーク、於. 奈良国立博物館、26年5月18日) ②野尻忠「写経遺品からみる宝亀初年の一切経書写と正倉院文書」(口頭報告、人間文化研究機構連携研究「正倉院文書の高度情報化研究」研究会、於. 国立歴史民俗博物館、26年7月31日) ③野尻忠「流転する正倉院の古文書―「万昆嶋主不参解」を中心に―」(口頭発表、正倉院文書連続座1、於. 金鶏会館 宝形塔屋講義室、26年11月1日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近年修理が終了した写経を初めて公開する機会にあわせ、関連文化財の出陳に向けた調査を実施できた。 独創性：平安時代に作成された一点一点の写経には著名なものが多いが、それらを通時代的に概観する展覧会は初めてであり、その開催に向けた有意義な研究が展開できた。 発展性：本展覧会の開催を契機に経巻遺品への注目度が上がることにより、新発見資料の出現が期待される。 効率性：サンデートークや口頭研究発表などの場で、他の独自テーマではなく、展覧会の内容に直結する話題を取り上げることで、本来の研究と業務に割く時間のバランスを図っている。 継続性：写経研究は、当館がこれまで重点的に取り組んできた分野であり、今後もその方針は変わらない。このプロジェクトで得た成果は、1回限りの展覧会だけでなく、今後の研究活動にも生かされる。 正確性：展覧会に向けた調査は、企画担当の個人だけでなく、館内の複数の研究者によって実施されており、正確性は保たれている。さらに、研究成果を発表する図録は、企画担当とは別の研究員が編集し、査読機能を果たしている。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査の回数	研究成果発表件数				
評価	B	B				
判定理由 文化財調査の回数：回数・内容とも十分な成果を上げることができた。 研究成果発表件数：件数・内容とも、特別展に向けた研究として相応しい成果を上げることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトにより、世に余りその名を知られていない、しかし貴重な平安時代の経典遺品を見出すことができた。その成果は、展覧会開催という形で博物館の事業に直結するものであり、意義は大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	上記のとおり本研究は順調に成果をあげた。中期計画の「文化財に関する調査及び研究の推進」における本研究の役割は十分に果たせた。次年度は今年度の調査のノウハウを生かし、追加調査を実施したうえで、研究成果をまとめ論説等の形で発表する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 開館 120 年記念特別展「白鳳」に関する調査研究 (5)－④)		
【事業概要】 開館 120 年記念特別展「白鳳」(27 年 7 月 18 日～9 月 23 日開催予定)に関する調査研究 7 世紀後半から 7 1 0 年までの仏教美術品、考古遺品の調査。この時代は全国的に寺院造営が広がり、造形的にも優れた作品が生まれた時代であった。この時代は金銅仏や塑像などが作られたが、飛鳥時代と奈良時代との境が明らかでないため、作品の特定が難しい。この調査では白鳳美術の作品を特定する作業を中心に行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤 栄
【スタッフ】岩田茂樹(上席研究員)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、清水健(主任研究員)、鳥越俊行(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)			
【主な成果】 (1)館外の作品調査(鳥取県、島根県、大分県、福岡県、奈良県、京都府、大阪府、愛知県、三重県、滋賀県、千葉県、東京都)を実施。写真撮影、詳細な観察、構造等の精査などを実施した。既知の資料はもちろん、新出の資料も多く発見することができた。また、関連する展覧会や研究会がある場合は、可能な限り脚を運び、成果を蓄積した。 (2)館内の作品調査。これまで白鳳時代の作と認められていなかった品、未発表の作品も数多くあり、それらを改めて精査した。			
【年度実績概要】 (1)各地域において多大の成果を得ているが、とりわけ滋賀県の埋蔵文化財に興味深い資料が多く見いだされた。この地は天智天皇による近江宮の造営など重要な白鳳文化の中心地である(27 年 1 月～2 月)。また、鳥取県の白鳳寺院の調査も行い、この地に朝鮮半島系の文化が開いた時期があったことを確認した(26 年 9 月)。千葉県では龍角寺の調査を実施(27 年 2 月)。奈良県は飛鳥、藤原京を中心に随時行っている。 (2)館内の収蔵品では考古部門に白鳳美術が多く収蔵されている。しかし、これまで十分に評価されていなかった作品も多く見られ、この機会に見直しを行った。館内調査は随時開催している。 研究の成果は27年度夏に開催される、開館120年記念特別展「白鳳―花ひらく仏教美術」展において発表される予定である。			
 鳥取県・北新造院跡の調査			
【実績値】 ・調査回数 32 回 (鳥取県と島根県 1 回、大分県 1 回、福岡県 5 回、奈良県 10 回、京都府 3 回、大阪府 2 回、愛知県 1 回、三重県 2 回、滋賀県 3 回、千葉県 2 回、東京都 2 回) ・調査点数 150 件以上			
【備考】 開館120年記念特別展「白鳳―花ひらく仏教美術」展において発表される予定である。			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：総合的な白鳳文化研究はこれが初めてである。近年、博物館の表記等から「白鳳」が消える傾向にあり、白鳳を見直す良い機会になったと思われる。 独創性：奈良国立博物館は仏教美術を専門にした博物館である。白鳳を当館が取り上げることはきわめて重要であり、当館の使命でもあると言える。近年、藤原京の発掘の進展などにより、白鳳時代の様子がかなり明らかになってきた。この研究はそのような発掘の成果も取り入れたもので、独創性に溢れている。 発展性：白鳳の研究はそれだけで完結せず、飛鳥時代や奈良時代の研究にも大きく影響を与える。 効率性：彫刻、考古学、工芸など、各分野の担当者が分担して実施し、効率性を上げることができた。 継続性：調査は継続して実施しており、多くの地域を網羅することができた。 正確性：調査する地域の教育委員会、博物館研究員などと連携して、詳細な発掘の状況、作品の構造等に正確な情報を得るように努めている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査点数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：予定した回数の調査を実施することが出来た。 調査地域は12都道府県に及んでおり、奈良県に至っては飛鳥や斑鳩など複数地域に及んでいる。白鳳文化は日本全国に広まってはいるが、実際に遺品が残る地域は限定されており、今回の調査で一部を除きほぼ網羅できていると考えられる。 調査点数：予定した点数の調査が実施でき、豊富な情報を蓄積することができた。調査人数は基本的に学芸部員全員で当たっており、各研究員の得意分野を活かした研究を行っている。調査内容は国宝、重要文化財をはじめとする名品から、新出の資料に及んでいる。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初海外調査を予定していたが、研究を進めるうちに、白鳳文化の故郷をどこに求めるべきかが担当者間で問題となった。当初は中国の山東省を候補に挙げていたが、実際には韓国・慶州や扶余などが故郷の有力候補であろうという結論に達した。この地域に関しては、当館研究員は既に踏査しており、さらなる調査の必要性が認められなかったため、国内調査に重点を置いた。一部計画の変更はあったが、それは研究の進展に基づくものであり、所期の目的は果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は仏教美術を展示、研究の柱に据えており、白鳳文化はそれにふさわしい内容である。この成果は展覧会や紀要論文集などに反映することが可能であり、当館の中期計画に則した活動であったと考えられる。当館の中期目標に奈良を中心とした社寺の宝物調査を掲げているが、この研究はそれに則した内容であり、今後の継続が望まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 南都の古代・中世の彫刻に関する調査と研究 ((5)－④)		
【事業概要】 展覧会における借用品及び収蔵・寄託品、また館外の寺社等で収蔵される作品のなかから、南都に伝来した古代・中世彫刻につき、調書を作成し、詳細な記録写真を撮影し、データの収集・蓄積に努める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【スタッフ】 岩井共二(教育室長)、山口隆介(情報サービス室研究員)			
【主な成果】 ・館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。主要な作品は、法隆寺夢違観音像、深大寺釈迦如来像、海住山寺四天王像、正寿院十一面観音像、額安寺虚空蔵菩薩像、北僧坊虚空蔵菩薩像など。 ・いずれの像についても、調査の結果、学術的に重要な新知見が得られた。 ・特別展や名品展における図録の解説や題簽執筆、また公開講座での報告に新知見を反映させることができ、新たな解説を行えた。			
【年度実績概要】 ・調査対象、時期 法隆寺夢違観音像(4月17日、於：福岡市美術館)、海住山寺四天王像(4月23日、於：海住山寺)、正寿院十一面観音像(4月24日、於：正寿院)、深大寺釈迦如来像(7月22日、於：静岡市美術館)、ロサンゼルス州立美術館十一面観音像(9月1日、於：ロサンゼルス)、同美術館蔵王権現像(9月2日、於：ロサンゼルス)、浄教寺阿弥陀如来像(12月4日、於：当館)、北僧坊虚空蔵菩薩像(12月5日、於：当館)、額安寺虚空蔵菩薩像(1月13日、於：当館) ・調査の成果 法隆寺夢違観音像と深大寺釈迦如来像については、作品の構造及び彩色技法に関する新知見を得た。海住山寺四天王像については、製作年代と当初の安置場所を解明した。正寿院十一面観音像については、鎌倉時代にさかのぼる作品であることが判明した。浄教寺阿弥陀如来像については、像の詳細な形状を3D計測した。北僧坊虚空蔵菩薩像については、X線透過撮影により、像の詳細な構造及び修理箇所が判明した。 ・調査成果の反映 法隆寺夢違観音像・深大寺釈迦如来像は、27年夏の特別展「白鳳」に出陳されるので、得られた新知見を図録解説等に反映させ、かつ公開講座等で報告する。また法隆寺夢違観音像に関する知見は、奈良国立博物館発行『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』に反映させた。海住山寺四天王像については、26年5月12日に行われた(公財)仏教美術研究上野記念財団(事務局京都国立博物館内)主催のシンポジウムで成果を公表し、また新しい題箋を作成した。北僧坊虚空蔵菩薩像についても、調査結果を反映した題箋を作成・掲示した。			
 正寿院_十一面観音像			
【実績値】 ・調査回数 9回 ・刊行物等 1件 『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』(奈良国立博物館発行、12月2日)			
【備考】 ・シンポジウムでの発表実績 岩田茂樹「海住山寺四天王像とその周辺」((公財)仏教美術研究上野記念財団(事務局京都国立博物館内)主催シンポジウム「南都をめぐる僧と造仏」5月12日、於：京都国立博物館) 岩田茂樹「海住山寺四天王像とその周辺—大仏殿様四天王像再考—」(上記シンポジウム報告書、3月下旬発行予定)			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像は、平成27年夏の奈良国立博物館における特別展「白鳳」に出陳予定であり、展覧会で新たな知見を公表できる。また両像の調査は、奈良国立博物館が学術協力した展覧会「法隆寺展－聖徳太子と平和への祈り」(4月19日～6月1日、於：福岡市美術館、6月14日～7月27日、於：静岡市美術館、8月9日～9月21日、於：岡崎市美術館)の展示期間を利用して行った。 独創性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像の頭部の彩色技法に関して全く指摘されていなかった新知見を発見できた。海住山寺四天王像の製作年代と当初の安置場所についても確定でき、定説を提出できた。正寿院十一面観音像の製作年代もこれまで知られていず、その重要性は初めて確認できた。北僧坊虚空蔵菩薩像の構造についても新知見が得られている。 発展性：法隆寺夢違観音像や深大寺釈迦如来像は、27年夏の奈良国立博物館における特別展「白鳳」に出陳し、新たな知見を公表するが、同様の調査手法によって、出陳される他の作品についても比較検討を経て、新知見を獲得できる可能性がある。北僧坊虚空蔵菩薩像に試みたX線透過撮影により、同像が造られた平安時代初期(9世紀)の仏像の製作技法に関する貴重な資料が得られたが、これを他作品と比較検討することにより、当該時代の仏像制作技法の展開を把握することが期待できる。 効率性：X線透過撮影方法をデジタル化したことにより、調査に要する時間は大幅に減少したにもかかわらず、獲得できる情報量は格段に増加した。なお奈良国立博物館には彫刻担当研究員が3名いるので、それぞれが別個に調査に赴く機会も確保し、調査回数が増すように努めた。 継続性：館の内外における展覧会のおりには、ふだんは寺社にあってなかなか調査が困難な作品も調査・撮影が可能なので、その機会を逸しないよう努めた。また科研費を使用して海外調査(アメリカ・ロサンゼルス州立美術館)も実施し、もとは南都にあったと考えられる在外作品の調査も行ったが、今後も同様の試みを持続する予定である。 正確性：調査の作成だけでは主観の混入する余地があるので、デジタル写真、X線透過写真など、できるだけ成果公表における可視化を心がけた。また成果をシンポジウムで公表して他の研究者の意見を聞いたり、個別に学識経験者の意見を求めるなどして、公表前には客観性の確保に努めた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物等				
評価	A	B				
判定理由 調査回数・刊行物等： 目標値は設定していないが、展覧会(学術協力として参画した館外の展覧会を含める)や科研費による計画的調査、作品所蔵者である寺社等からの依頼による調査など、様々な機会を利用して着実に調査を行い、刊行物の制作を行うことができた。						

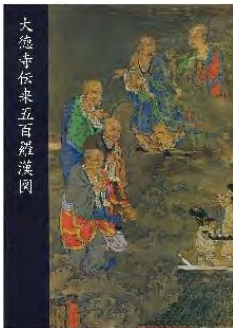
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会等の事業開催に合わせて積極的に館内外における調査の機会を設け、着実に調査を行った。その結果、新たな知見がいくつも得られた。その成果をシンポジウムや報告書、あるいは展示の題箋等で公表することができた。次年度も同様の機会をできるだけ多く利用してほぼ同数の調査を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	数値目標はないが、適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性のいずれの観点からも着実に成果を得ており、順調に中期計画を遂行中である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 綴織當麻曼荼羅(當麻寺蔵)、信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する(5)－④)
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、高精細フルカラー画像の作成、可視光励起による高精細蛍光画像の作成、高精細反射近赤外線画像の作成、高精細透過近赤外線画像の作成、蛍光X線による非破壊分析、を実施する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】内藤栄(部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、【東京文化財研究所】田中淳(企画情報部長)、皿井舞(企画情報部主任研究員)、早川泰弘(分析科学研究室長)、城野誠治(専門職員)	
【主な成果】 (1) 大徳寺五百羅漢図の光学調査に関する成果を報告し、天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査成果の公表方法について検討を重ねた。 (2) 調査報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』の刊行に伴う研究会および関連作品の追加調査を実施。天台高僧像及び信貴山縁起絵巻の調査報告書の刊行時期とその方法について協議を行った。 (3) 報告書刊行に伴う研究会を通じて共同研究の成果を広く公表。天台高僧像の調査報告書を27年度中に刊行、信貴山縁起絵巻の調査成果を28年度開催予定の信貴山縁起絵巻展に反映させることで合意。	
【年度実績概要】 (1) ・21年度から5年間にわたり本共同研究の一環として実施してきた調査の成果報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』を刊行し、その成果報告の研究会を大徳寺で実施した(26年6月6日)。 ・当館において大徳寺本系統の図像を踏襲する神奈川円覚寺本五百羅漢図の調査(26年6月2日)、同じく山口県立美術館において東光寺本の調査を実施(26年11月22日)。 ・国宝聖徳太子及び天台高僧像(一乗寺蔵)及び国宝信貴山縁起絵巻(朝護孫子寺蔵)について、今後の追加調査実施の計画について協議し、併せて調査成果の中間報告及び最終的な調査報告書刊行の計画について検討を重ねた。 (2) ・調査報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』刊行後の研究会を通じて共同研究の意義を広く広報することができた。 ・円覚寺本、東光寺本の調査を通じて、大徳寺系統の図像が広く我が国に受容されたことを確認することができた。 ・共同研究で得られた膨大な画像データを共有するための検討会を当館で開催し(26年5月28日)、ネットワークシステムの構築により当館・東文研双方においてコンピュータ上での閲覧を可能とすることで、報告書刊行に向けて画像の分析がスムーズに進められることとなった。 (3) ・『大徳寺伝来五百羅漢図』を思文閣出版から刊行し、本共同研究の5冊目の成果報告書として世に公表した。 ・国宝聖徳太子及び天台高僧像については透過エックス線撮影を伴う追加調査を実施した上で、27年度中に報告書を刊行することで合意した。 ・信貴山縁起絵巻については、顕微鏡写真撮影を追加で実施した上、その成果を28年度に開催予定の信貴山縁起絵巻展の図録に中間報告として反映させ、最終的に調査報告書を刊行することで合意した。	
	
共同研究報告書『大徳寺伝来五百羅漢図』の表紙	
【実績値】 調査回数2回(6/2、11/22) 調査作品数2件 研究会開催件数2件(5/28、6/6) (参考値) 刊行物等1件『大徳寺伝来五百羅漢図』(思文閣出版、26年5月20日刊行)	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：調査対象となる国宝信貴山絵巻及び国宝天台高僧像は平安絵画を代表する名品である。28年度に当館で開催予定の信貴山縁起絵巻展をひかえたこの時期に調査を実施することで、その成果を展覧会で広く公表できる。 独創性：信貴山縁起絵巻、板絵神像とともに高精細デジタルカメラによるカラー画像及び近赤外線写真、蛍光画像等の撮影を伴う光学的調査は初めてであり、その調査データの分析に基づく制作当初の彩色の復元は、美術史研究にも大きく寄与する。 発展性：すでに同様の方法で光学的調査が実施されている伴大納言絵巻のデータや、当館所蔵の大仏頂曼荼羅などを対象に実施する追加調査で得られたデータと比較分析を行うことにより、平安時代絵画に広く用いられる彩色の復元的な考察が可能となる。 効率性：東京文化財研究所との共同研究として実施することにより、文化財調査に伴う所蔵者への事務連絡等の調整を当館、最新の光学機器を用いた調査を東文研が担い、その成果を両機関で分析するという協業によって効率的に研究成果を上げることができる。 継続性：本共同研究は平成16年から始まってすでに10年が経過しており、その成果も5冊の報告書に結実している。 正確性：調査に用いる光学機器はいずれも最新かつ信頼性の高いものであり、一つの文化財に対してカラー画像、近赤外線画像、可視光励起による蛍光画像、透過エックス線写真等を分割撮影することで、彩色や基底材の画像情報を網羅的に取得できる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：年度計画どおり、調査報告書を刊行した大徳寺五百羅漢図の関連作品について2回の作品調査を実施した。 調査作品数：大徳寺五百羅漢図と密接に関連する円覚寺本1件4幅、東光寺本1件14幅の合計2件16幅を調査し、年度計画を達成した。 研究会開催件数：年度当初の予定どおり、大徳寺五百羅漢図の調査報告書刊行に伴う成果報告会、天台高僧像・信貴山縁起絵巻の成果報告書刊行に向けて画像データ取り扱いに関する検討会の2回実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	21年度から調査を進めて大徳寺五百羅漢図について、5月に総合調査報告書を刊行した。大徳寺五百羅漢図については本年度に関連作品の追加調査も実施し、出版によって公表された共同研究の成果がもつ意義をさらに深化させることができた。また前年度までに調査を進めている国宝信貴山縁起絵巻及び国宝天台高僧像について報告書の刊行を目指し、追加調査の計画や、データ共有の方法などについて協議を重ねた。今後は追加調査を踏まえつつ、報告書の刊行準備を着実に進めていく。さらにこれまで当館の館蔵・寄託品を主な対象として調査を進めてきたが、今後は東京国立博物館及び京都国立博物館など法人内の他の博物館とも連携を取りつつ、広く平安仏画の作品を調査対象としていくことも検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、着実に成果を挙げることができた。特に本共同研究の5冊目の報告書となる『大徳寺伝来五百羅漢図』を5月に刊行し、各方面から高い評価を得ている。本年度は平安絵画を代表する信貴山縁起絵巻及び天台高僧像の調査報告書刊行に向けて準備を進め、画像データの分析をスムーズに行えるように、ネットワークシステムを通じたデータの共有のあり方について協議を重ね、システム構築に向けて一定の合意を得ることができた。今後もさらに本共同研究を通じて膨大な画像データが作成されていく見込みであり、その共有化の方式が定まったことで、分析の精度と効率性が一層上がることは間違いなく、さらに充実した共同研究の成果が期待できる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」に関する調査研究 (5)-(5)
【事業概要】特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」(27年1月1日～3月1日)に関する調査研究古代日本の文化形成において朝鮮半島にあった百済は非常に重要な立場にある。古墳時代から飛鳥時代にかけて数々の交流を通じてそれぞれの文化を築いてきた。特に26、27年は百済の技術者の指導により水城・大野城・基肆城が築かれてから1350年の節目の年である。本研究では両国に所在する交流を物語る文化財を調査し、その成果を特別展の開催により広く公開するものとする。	
【担当部課】	学芸部展示課
【プロジェクト責任者】	展示調整室主任研究員 岸本圭
【スタッフ】井上洋一(部長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、進村真之(情報サービス室主任研究員)、小嶋篤(情報サービス室研究員)、赤司善彦(福岡県教育庁文化財保護課長)	
【主な成果】 (1)韓国国内の文化財について、国立博物館・国立文化財研究所での調査及び遺跡での現地踏査を行った。また各館の学芸員と意見交換を行い、多くの示唆を得た。 (2)日本国内に所在する百済関係の文化財調査を行い、遺跡での現地踏査を行った。 (3)研究成果を特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」として九州国立博物館で行った他、韓国国立公州博物館でも研究成果を活かした特別展「武寧王時代の東アジア世界」が行われた。 (4)日韓の研究者が最新の研究成果を発表する講演会を開催し、討論を行った。	
【年度実績概要】 (1)・国立中央博物館・国立公州博物館・国立扶餘博物館・国立清州博物館・国立扶餘文化財研究所で文化財の調査(26年6月29日～7月3日):百済関連の土器や金属製品の詳細な観察を行い、製作技法等について比較検討を行った。各館の学芸員からは百済の文化財の諸特徴を絡めた多くの教示を得た。また公州宋山里古墳群や扶餘王興寺址、益山弥勒寺址等、百済の重要遺跡の踏査を行い、研究者から様々な最新成果を聞くことができた。 ・関東における文化財調査(高崎市観音塚考古資料館・木更津市郷土博物館金のすず・かすみがうら市郷土資料館、26年4月22日～25日):国立公州博物館担当者とともに調査を行い、銅鈿の日韓比較を主題とした資料の熟覧等の研究を行った。 (2)・九州内における文化財調査(熊本県立装飾古墳館・大刀洗町教育委員会・九州歴史資料館等、26年7月14日等):九州各地に所在する百済関係の資料調査を行い、製作技法等の類似性等を検討した。水城・大野城・基肆城築造1350年の年にあたり、関連文化財の現地踏査・出土品の検討は頻繁に行い、各自治体の研究者との意見交換を行った。 ・武寧王生誕祭での日韓研究者意見交換(加唐島・名護屋城博物館、26年6月7日):武寧王生誕祭が行われる加唐島において日韓研究者とともに現地調査及び意見交換を行った。日韓交流のルートである加唐島の現地地形を把握することができた。 ・日本国内百済関連文化財の調査(飛鳥資料館・法隆寺・柏原市立歴史資料館、26年8月11日～13日):関西方面の代表的な百済関連の文化財調査を行い、極めて百済との類似度が高い文化財等の熟覧を行った。 (3)・韓国国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア世界」における調査(国立公州博物館、26年9月21日～26日、11月23日～26日):国立公州博物館で開催された特別展は、日中韓の交流を物語る文化財が多数展示されるまたない機会であった。国立公州博物館・中国南京博物館の研究者と百済時代の交流に関して意見交換を行った。大刀を中心とした出土品の熟覧の機会をもち、日本との比較研究に関する意見交換を行った。 ・研究成果は特別展図録として出版した。百済との交流をストーリーにとって展開させ、遺跡写真を多数併せて掲載する等により最新の研究成果をわかりやすい形で提示することができた。 (4)「七支刀と百済研究の最前線(①)」と題する講演会を行い、日韓の最新研究成果の発表・討論を行った。	
【実績値】調査回数 韓国5回 日本国内20回 資料収集数 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア世界」への日本からの出陳件数7件 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」出陳件数74件 展示への反映2件 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア」(26年9月25日～11月23日) 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」(27年1月1日～3月1日) 図録等 2件 国立公州博物館特別展「武寧王時代の東アジア」展示図録 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」展示図録 講演会数 4回(①～④)	
【備考】 ① 特別展記念講演会「七支刀と百済研究の最前線」(27年1月17日;森正光(石上神宮宮司)、金鍾萬(韓国国立公州博物館長)、李炳鎬(韓国国立中央博物館研究企画部学芸研究官)、赤司善彦(福岡県教育庁文化財保護課長)) ② しつこ九博!「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」解説講座(筑紫野市)(27年1月30日;岸本圭) ③ 九博研究員が語る!考古学を100倍楽しむ方法(27年2月1日;岸本圭、河野一隆) ④ 九博研究員が語る!考古学を100倍楽しむ方法(27年2月22日;小嶋篤、進村真之)	



調査風景(韓国国立扶餘博物館)

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：26年度は水城・大野城・基肆城築造 1350 年の節目の年にあたり、さらに日韓国交正常化 50 周年記念の年でもあり、タイムリーな展覧会であった。また、各機関との積極的な連携が十分にとれ、韓国国立公州博物館開催の特別展との方向性が合致した。 独創性：日韓の最新の調査研究成果を活かすことができた。 発展性：多数の調査を行ったことで博物館との交流、韓国研究者とのネットワークの構築ができ、今後の調査研究を発展的に進めることができる。 効率性：韓国からの研究者の来日に合わせて、事前に綿密な打合せを行い、効率良く共同の調査研究を行うことができた。 継続性：これまでの研究成果を発揮できる展示・図録刊行を行うことができた。 正確性：日韓には多数の百済関係の資料が所在しており、今後も継続した調査研究が必要である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	展示への反映	図録等	講演会等	
評価	A	B	B	B	B	
判定理由 調査回数：予定回数が韓国 2 回・国内 16 回に対し、韓国 5 回・国内 20 回という多くの調査を行うことができた。 資料収集数：韓国国宝 2 件、宝物 1 件を含め充実した収集ができた。 展覧会数：九州国立博物館のみでなく韓国国立公州博物館で同様のテーマでの特別展に関わることができた。 図録等：研究成果を踏まえた図録を刊行することができた。 講演会等：当初の予定通り 4 回実施でき目標を達成した。1 月 27 日開催の講演会（①）に関しては、定員 280 名に対し約 500 名の応募が殺到したので定員枠を広げ、319 名が聴講した。他の講演会も同様に、多くの方から応募人数を大幅に上回る聴講希望を頂き、4 回とも大変反響が大きい企画を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立博物館や文化財研究所、日本国内の各機関の学芸員・研究員との共同研究・意見交換を多数行うことができ、今後の調査研究に活かせる活動を行うことができた。調査成果は本年度の特別展で活かされたが、これで留まるものではなく、今後の発展が見込まれる研究者間の交流を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立公州博物館での特別展とも関連する調査研究テーマとなり、研究者間の意見交換・交流が例年よりも増して活発に行うことができた。新たな調査成果に関する情報の交換を行い、次年度以降の調査研究に繋がるものと期待される。また特別展はこれまで継続して行われてきた百済との交流に関する調査研究を発揮する集大成的な場となった。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展「発掘された日本列島 2014」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「発掘された日本列島 2014」(27 年 1 月 1 日～3 月 1 日開催)の期間中に当館で借用した作品の金属の内部状況の基礎データを得るための調査を行った。			
【担当部課】	学芸部展示課	【プロジェクト責任者】	情報サービス室主任研究員 進村真之
【スタッフ】 河野一隆(企画課文化交流展示室長)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、岸本圭(展示課展示調整室主任研究員)、小嶋篤(展示課情報サービス室研究員)			
【主な成果】 (1) 展示で借用した島内地下式横穴墓群の金属製品について X 線 C T 調査を実施した。 (2) 従来の X 線写真より詳細な象嵌のデータを得ることができた。また、外面から判断できない金属内部の脆弱な部分についての調査も行った (3) 従来の象嵌データに新たに反映をすることができた。			
【年度実績概要】 (1) 九州国立博物館内に於いて重要文化財島内地下式横穴墓出土銀象嵌大刀の X 線 C T 調査を行った。(26 年 12 月 8 日) (2) 従来の X 線写真より詳細に象嵌の太さや深さなどのデータを得ることができた。 (3) 従来の象嵌データの一部不鮮明だった部分に新たなデータを反映させ、加筆することができた。 ・ 外見的には丈夫そうに見える部分に置いても錆びによる劣化が進んでいる点が観察できた。			
			
より鮮明に得られた銀象嵌大刀の画像データ			
【実績値】 調査回数 2 回 資料収集数 3 件 展示への反映 1 件 特別展「発掘された日本列島 2014」(27 年 1 月 1 日～3 月 1 日開催)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-2

自己点検評価調査

2. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：近年、考古学上の新発見が相次ぎ、一般の方々の考古学への関心が高まっている時期に開催を行った。 独創性：発掘担当者の野帳（メモ帳）の展示など、当館ならではの取り組みを盛り込んだ。 発展性：わかりやすい展示を目指し、専門家でない人々を校正に加えた。 効率性：限られた予算のなかで効率的に研究成果を発信した。 継続性：日本各地の出土品を展示することで、今後研究を深めていく上での足がかりが各所にできた。 正確性：X線CTの検査結果を元に危険部位に注意する展示を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	展示への反映			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：調査可能な作品に対して十分な調査を行った。 資料収集数：今後の展覧会を解する上で、基礎資料となるに十分な件数の調査を行った。 展覧会数：目標の件数を達成し、研究成果を来館者に十分還元ができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	巡回展であるが、「野帳」の展示など、館独自の取り組みを行ったことで、来館者数は当初の予測を上回ることができた。また、X線CTの調査結果により、危険部位を判定し、安全な展示を行うことが可能となった。またその研究成果を講演会などで紹介するなど、来館者に十分に還元することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTを活用した内部の状況調査など、今後、安全に展覧会を開催する上で貴重な資料を蓄積することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-3 特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」に関する調査研究((5)-⑤)
【事業概要】 特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」(27年4月21日～5月31日開催)に関する調査研究 室町～江戸時代初期の日本の国際関係は、九州を玄関口として展開された。本調査研究は、東アジア・東南アジア・ヨーロッパ諸国との外交・貿易を積極的に推進した九州の大名に焦点をあて、歴史資料・考古資料等を通してその足跡を明らかにするとともに、各大名家に伝来した安土桃山～江戸時代初期の大名道具のあり方についても検討しようとするものである。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】 川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、岸本圭(展示課展示調整室主任研究員)、一瀬智(展示課展示調整室研究員)、望月規史(資料登録室アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 ・計23機関で陶磁・金工・刀剣・漆工作品、及び考古資料・歴史資料の詳細調査を行った。 ・各作品の状態・法量を把握し、陶磁・刀剣作品及び考古資料の製作技法、漆工作品の加飾技法・木地構造、歴史資料の形態的特徴・文字情報等に関して知見を得た。 ・本調査研究の成果は、次年度当初の特別展「戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—」展に反映する予定である。	
【年度実績概要】 総合調査：松浦史料博物館(6月18日)、佐賀県立博物館(6月30日)、熊本県立美術館(7月9日)、立花家史料館(9月14日)、杵原八幡宮(11月7日)、南蛮文化館(12月11日) 陶磁・金工・刀剣・漆工・歴史資料分野の作品調査を行い、作品の状態・法量・技法等に関する知見を得た。 金工調査：阿久根市立郷土資料館(6月4日)、餘慶寺(6月13日)、秋月郷土館(6月24日)、竹田市立歴史資料館(6月25日)、光ミュージアム(10月31日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態・法量、製作・鋳造技法に関して知見を得た。 漆工調査：対馬歴史民俗資料館(7月9日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態・加飾技法・木地構造に関して知見を得ることができた。 考古資料調査：大分県埋蔵文化財センター(5月7日)、福岡市埋蔵文化財センター(8月20日) 歴史資料調査：鹿児島大学附属図書館(6月3日)、鹿児島県歴史資料センター黎明館(6月4日)、尚古集成館(6月4日)、静岡市立芹沢銈介美術館(6月12日)、米山寺(6月13日)、京都大学総合博物館(7月28日)、山口県立山口博物館(9月11日)、柳川古文書館(9月25日)、大分市歴史資料館(11月20日) 詳細な観察・撮影を行い、作品の状態等に関する知見を得た。	
	
立花家史料館での調査風景	
【実績値】 調査回数 23回	
【備考】 特別展図録『戦国大名—九州の群雄とアジアの波濤—』(27年4月21日刊行予定) 収録論考①荒木和憲「九州の群雄とアジアの波濤」 ②荒木和憲「戦国大名と戦国時代」 ③川畑憲子「桃山の南蛮美術」 ④岸本圭「貿易都市の考古学」 ⑤一瀬智「戦国大名の肖像画と賛」 ⑥望月規史「戦国時代の刀剣」 ⑦酒井田千明「西国大名と九州・山口の陶磁」	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：開館 10 周年記念事業の一環で、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」との基本理念に即している。 独創性：九州の戦国大名・豊臣大名を包括的に捉えつつ、アジア・ヨーロッパとの国際交流の歴史に重点を置いている。 発展性：江戸時代の幕藩体制形成の前提となる重要なテーマであり、今後の調査研究の発展が期待できる。 効率性：限られた期間内において最大限の時間的・人的投資を行い、効率的に調査研究を行うことができた。 継続性：限られた期間内において必要とする調査研究を実施し、今後の調査研究の基礎を築くことができた。 正確性：九州の戦国大名・豊臣大名にかかる美術工芸品の情報を網羅的に収集することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
評価	B					
調査回数：限られた期間内において必要回数の作品調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	開館 10 周年記念特別展の開催を目標として実施した本調査研究は、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」という基本理念に基づいたものである。九州の戦国大名を切り口としているが、単に九州という一地域の歴史に焦点を当てたものではなく、日本の国際交流の歴史を明らかにしようとする試みであり、ここに本調査研究の大きな意義がある。本調査研究の成果は、次年度当初に開催する特別展に反映させる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、多種多様な国際交流が営まれた中世後期～近世初期に対象とする時代を設定し、かつ国際交流の玄関口である九州に拠点を置く戦国大名・豊臣大名に着目したもので、中期計画4-(5)-⑤「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う」の趣旨に適うものである。最新の研究動向を踏まえ、当該期の日本の歴史・文化をアジア史的観点から明らかにするという所期の目標を達成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-4 特別展「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」に関する調査研究((5)-⑤)
【事業概要】 特別展「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」(27年7月14日～9月6日開催)に関する調査研究 世界最古にして最大の博物館である大英博物館は、2014年にワールド・コンサベーション・アンド・エキシビジョンセンター(WCEC)がオープンし、揺ぎ無い地位を確立している。この大英博物館を視察、館員との討議を踏まえて、館の理念や歴史を調査すると同時に、次年度開催予定の特別展に反映する。併せて、展示室の設計や図録の作成を効率的に進めるための各種情報を入手し、円滑なプロジェクト推進を目指す。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
【スタッフ】 市元壘(特別展室主任研究員)、西島亜木子(アソシエイトフェロー)、富永絵美(特別展室研究補佐員)、池内一誠(交流課教育普及室主任研究員)	
【主な成果】 (1)26年9月6日～13日に、河野と西島が大英博物館を訪問し、相手側展覧会担当者と協議を進め、さまざまな施設・部門を見学するとともに、展覧会に出陳予定の作品をつぶさに調査できた。 (2)大英博物館のコレクション及びそれを支えた英国の歴史について現地調査ができ、展覧会のメッセージについて具体的なイメージを確立することができた。 (3)現地調査研究の成果を、展覧会の企画や図録の翻訳作業に反映することができ、プロジェクトが飛躍的に前進した。	
【年度実績概要】 (1)大英博物館訪問を通して、本展担当者をつぶさに企画の調整、実見調査を進めることができ、画像だけでは確認しにくい作品のコンディションについても確認することができた(26年9月6日～13日)。さらに、大英博物館スタッフより施設や歴史等について詳しく教示を受けるとともに、大英博海外展担当者による当館訪問を契機とする相互交流を進めることができた。 (2)27年度開催予定の「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史—A History of the World in 100 objects」について、作品の歴史背景や展示方法について、実見しなければ分からない事実を確認することができ、また各部門スタッフと意見交換することができた。 (3)26年3月刊行予定の展覧会公式カタログ訳文の批判的検討及び校正に、上記の成果を反映することができた。本展は、200万年にも及ぶ世界の歴史を扱うため、記述の裏取りに膨大な時間や労力を必要とするところであるが、実見調査によってスムーズに校正作業を進めることができた。また、併せて題箋等の作成にも様々な形で反映させることが期待できる。 (4)27年2月22日～24日に、河野と西島が國立故宮博物院(台北)を訪問し、バハレーンに引き続き開催された「大英博物館展—100のモノが語る世界の歴史」の展示状況、作品について調査することで、当館での展示造作プランに反映することができた。	
	
大英博物館での調査	
【実績値】 調査回数 2回(海外2回) 研究員海外派遣数 延べ4名 研究員受入数 延べ2名 調査日数 10日間	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-4

自己点検評価調査

3. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：効率的な準備作業を進めることができた。 継続性：継続的な取り組みを続けている。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	調査日数		
評価	B	B	B	B		
調査回数：所期の目標通り2回の調査を行い、大英博物館において担当者と展示意図について協議することができた。また台北国立故宮博物院では実際の展示手法や解説パネルなどの設置状況など、当館における陳列の参考とすることができた。 研究員海外派遣数：海外調査の実績を積み重ねることができ、所期の目標が達成できた。 研究員受入数：大英博物館側からも担当者2名を招聘し、推進に向けて協議を進めることができた。 調査日数：1週間という短い期間ながら、十分な調査を積み重ねることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会出陳作品について、実見調査や意見交換を行うことができ、効率的な準備作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	図録解説や単行本を参照しながら、大英博物館館長が構想した本展の内容の理解に努めたうえで、図録の解説がより分かりやすい日本語となるよう、関係者間で十分な打ち合わせを行った。そのため、展覧会の設計について、より具体的かつ効率的に進めることができた。次年度の展覧会の実現に向けて、本年度は具体的な戦略策定や効果的に推進するための基盤を確立することができ、そのための足がかりとなる成果となった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-5 特別展「美の国日本」に関する調査研究(5)-⑤)
【事業概要】 特別展「美の国 日本」(27年10月18日～11月29日開催予定)に関する調査研究 27年度開催予定の開館10周年記念展「美の国 日本」に向けて、内容について検討するとともに候補作品の出陳交渉を進める。	
【担当部課】	学芸部展示課
【プロジェクト責任者】	課長 楠井隆志
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、井上洋一(部長)、本田光子(特任研究員)、臺信祐爾(企画課長)、富坂賢(文化財課長)、今津節生(博物館科学課長)、秋山純子(博物館科学課環境保全室研究員)、志賀智史(博物館科学課保存修復室主任研究員)、渡部史之(博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー)、赤田昌倫(博物館科学課環境保全室アソシエイトフェロー)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)、鷺頭桂(企画課特別展室研究員)、西島亜木子(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、酒井田千明(企画課特別展室アソシエイトフェロー)、丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、荒木和憲(文化財課資料登録室主任研究員)、畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、望月規史(文化財課資料登録室アソシエイトフェロー)、藤生京子(文化財課資料登録室研修生)岸本圭(展示調整室主任研究員)、進村真之(情報サービス室主任研究員)、一瀬智(展示調整室研究員)、遠藤啓介(展示調整室研究員)、小嶋篤(情報サービス室研究員)、池内一誠(交流課教育普及室主任研究員)	
【主な成果】 27年度開催予定の開館10周年記念展「美の国 日本」の出陳交渉を進めるとともに、各所蔵者の協力を得ながら出陳予定作品の現地調査を行い、輸送計画及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。	
【年度実績概要】 (1)出陳交渉先 正倉院事務所・宮内庁書陵部・興福寺・法隆寺・平等院・神護寺・仁和寺・六波羅蜜寺・清凉寺・松尾大社・金剛峯寺・大將軍八神社・清水寺・毛越寺・中尊寺・東大寺・西大寺・沖縄県立博物館・那覇市歴史博物館・広島県立歴史博物館・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館・藤田美術館・香川県立ミュージアム・長崎歴史文化博物館・韓国国立中央博物館・韓国国立公州博物館・中国揚州市文物考古研究所・国家文物局・個人ほか (2)候補作品及び関連資料調査 ・東京国立博物館法隆寺宝物館にて法隆寺献納宝物の調査に参加する機会を得て、本展における作品選定に役立てた(26年6月19・20日)。 ・法隆寺金堂にて候補作品の状態確認を行った(26年6月26日)。梱包・輸送作業にあたり注意すべき箇所などの事前把握ができた。 ・中国揚州市博物館にて隋煬帝墓(1号墓)出土品を実見する機会を得た(27年1月12日)。墓誌については状態に難点があり、候補より外すことにしたが、金玉帯や金銅鋪首は問題がなく、見応えもあった。 ・東京国立博物館法隆寺宝物館にて候補作品の状態確認調査を実施し、担当者と展示方法などについて意見交換を行った(27年3月17日) ・長崎歴史文化博物館にて候補作品の状態確認調査を行った(27年3月24日)。	
【実績値】 出陳交渉延べ回数：40回 作品調査：5回	
【備考】	



法隆寺宝物館における
調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	C	B	C
判定理由 適時性：開館 10 周年を記念する特別展として企画するものであり、公共性・国際性・公開性を満たす。 独創性：開館記念展「美の国 日本」の第二弾として企画するものであり、独創性は高い。 発展性：10 周年記念展として影響性は極めて高い。地元の期待度も高い内容である。 効率性：準備期間が短く、対象とする文化財はほとんどが国宝・重要文化財であるため必ずしも出陳交渉は順調ではない。 継続性：10 年節目に開催する九州国立博物館の特別展として、今後の継続性が期待される。 正確性：出陳内諾を得られた文化財については、順次、輸送及び展示計画の策定のため事前調査を進めていく予定である。						

2. 定量的評価

観点	出陳交渉回数	調査回数				
評価	B	C				
判定理由 出陳交渉回数：順調に交渉数を増やし、目標を達成できた。 調査回数：出陳交渉を優先的に進めていることから、実数としての調査回数は少ないが、調査内容としては輸送・展示計画立案に有益な情報が多く蓄積できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	短期間での企画構想や出陳交渉となり、やや出遅れている感是否めないが、優れた作品が集まりつつある。共催者との協議も定期的に行っており、開催に向けて着実な準備を進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会の実施に向けて、準備作業を順調に進めている。今後は具体的な展示計画を立案するための作品調査を精力的に進め、その調査成果を輸送・展示作業の安全性を高めることにも活かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-6 特別展「アフガニスタン美術展」に関する調査研究（(5)－⑤）		
【事業概要】 特別展「アフガニスタン美術展」（28年1月1日～2月14日開催予定）に関する調査研究 シルクロードの要衝・古代アフガニスタンで栄えた様々な文化を、金、象牙、青銅製などの名品（カブール国立博物館所蔵）を通して紹介する。またソ連侵攻後の内戦などに伴う社会的混乱などから、多くの文化財が失われたアフガニスタンにおける奇跡的な作品の再発見のドラマも伝える。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】			
【主な成果】 ・展覧会図録（英文）を入手し、展覧会の内容と出品作品について把握した。オーストラリア・西オーストラリア博物館会場内の展示状況などを調査した。展覧会出品作品の輸送用外箱の保管状況を含む、展覧会に関する様々な情報収集を行った。 ・展示室内の実物をつぶさに観察でき、展示作品の質の高さと保存状態を確認することができた。また国際巡回にあたって準備された展示具を多用する展示の手法についても検討することができた。 ・展覧会企画書作成、文化庁を含む関係者との打ち合わせにあたって、本展覧会に出品された作品の質の高さと文化財保護に関する意義を説くことができた。図録解説執筆及び展示のイメージを固めることができた。			
【年度実績概要】 ・オーストラリア・西オーストラリア州パースにある西オーストラリア博物館にて、「アフガニスタン展 カブール国立博物館所蔵の秘匿された至宝」を調査し、展覧会図録図版からでは確認しにくい出品作品細部の観察を行うことができた。（26年11月17～19日） ・金製品、銀製品、青銅製品、石製品、象牙製品など、旧石器時代から約2000年前に遡る、異なる時期に作られた作品群を調査し、ティリアテペ出土の金冠が帯と三つの前立て部品を組み立てたものであることなど、個別の作品制作技法及び作品の状態についての詳細な知見を得ることができた。 ・西オーストラリア博物館における展示作品を細かく調査することによって得られた制作技法やインド本国でも残存例のない古代の象牙製品の保存状態に関する詳細な知見を基に、より充実した解説を図録へ記載するための準備ができた。 ・西オーストラリア博物館における、支持具の状態や展示方法を調査したため、当館における展示の構想をより豊かにすることができた。			
 ティリアテペ出土金冠			
【実績値】 調査回数 1回（海外：1回） 研究員海外派遣数 延べ 1名			
【備考】			



ティリアテペ出土金冠

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際巡回展という枠組みによって、文明の十字路口に位置する古代アフガニスタンが体现していた国際性を認識するとともに、アフガニスタンの歩んできた歴史を各国と共有することができる。 独創性：社会的な混乱に伴い失われてしまったと思われていた至宝の数々を扱う本展は、我々日本人にとってなじみのない古代中央アジアにおける、複雑かつ高度な文化交流のありさまをはっきり示す点で、極めて独創的である。 効率性：国際巡回展という位置づけであるため既に出版された本展覧会図録や、これまで各分野で蓄積されてきた研究成果を利用でき、時間的・人的投資は比較的軽い。 継続性：展示品は、それぞれ旧石器文化、ギリシャ文化、遊牧民文化などが生み出した他に例を見ない優品揃いであり、我が国にあまりなじみのないアフガニスタンについてこれからも学んでいくための優れた契機を提供する。 正確性：発掘時の記録やその後の学問的蓄積があり、作品のデータや数値について正確さが担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：事前に図録を通して展覧会の内容を把握できていたため、最小限回数で対応できた。 研究員海外派遣数：事前に図録を通して展覧会の内容を把握できていたため、最小限回数で対応できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	シルクロードの要衝であり、文明の十字路口とも呼ばれるアフガニスタンは、ソ連軍侵攻、その後の内戦などの混乱の結果、多くの文化財が失われてしまった。そうした中、奇跡的に再発見されたカブール国立博物館所蔵の至宝を我が国で紹介することは、アフガニスタンの過去と現在について周知することにつながるため、時宜を得た企画である。予定通り準備作業が進んでおり、次年度の作業計画策定に向けて準備作業も順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展の内容は、アジアを中心とする諸外国の歴史と文化を広く国民に紹介することを使命とする当館にふさわしく、また文化交流の象徴としてのシルクロードの役割を明瞭に示す点でも有意義なものであり、外務省及び文化庁との協議を重ねながら、アフガニスタン政府と作品のオーストラリアから我が国への輸送、会期前の保管、会場設営、広報や国内輸送などに関する様々な展覧会準備作業も順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)－⑤)
【事業概要】 当館がコンセプトに掲げているアジアとの交流について、関係諸国との様々な形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告の形などで示していく。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 原田あゆみ（特別展室主任研究員）、渡部史之（博物館科学課保存修復室アソシエイトフェロー）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）、川畑憲子（文化交流展室主任研究員）、市元壘（特別展室主任研究員）、小泉恵英（東京国立博物館学芸企画部企画課長）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）、藤田励夫（文化庁美術学芸課調査官）、猪熊兼樹（文化庁伝統文化課調査官）、佐藤留実（五島美術館学芸員）、續伸一郎（堺市博物館学芸課主査）、後藤恒（福岡市美術館学芸員）、山田均（名桜大学教授）	
【主な成果】 (1) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ・百済と倭国の交流を出土品で跡づけることができた。 ・特別展「古代日本と百済の交流一大宰府・飛鳥そして公州・扶餘一」の企画や実施が大変効率的に進められた。 (2) 内蒙古所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの構築 ・内蒙古博物院が所蔵する、内蒙古所在壁画墓壁画の高精細画像データベースの整備を進めた。 ・高精細画像データベースの展示事業への利活用のための基礎的作業を開始した。 (3) タイにおける異文化の受容と変容 ・国内にあるタイ由来文物や、タイに持ち込まれた我が国由来の作品について、両国研究者の理解が一層深まった。 ・27年の特別展のための準備が順調に進んだ。	
【年度実績概要】 (1) ・韓国及び国内の研究機関において、関連遺物を調査した。 （計5回） ・国内出土鏡と、武寧王陵出土鏡との先後関係に関する調査の結果、国内出土鏡について、従来考えられていた以上に踏み返しが進んでいるという新たな知見を得た。 (2) ・内蒙古自治区フフホトの内蒙古博物院において、関連壁画の高精細画像データを作成した。（計2回） ・赤外線を利用して、下描き線に関する明瞭な高精細画像データが取得できた。 (3) ・タイ及び国内の博物館などで調査を実施した。（計7回） 共同調査の成果を、我が国とタイで報告会の形で広く公表することができた。（場所：バンコク国立博物館、実施日：27年11月25日、タイトル：“Japan and Thailand Beyond Boundaries-Understanding Two Countries’ Cultural Relations through Antiquities and Living Museums.”）	
【実績値】 調査回数：14回（韓国・日本 5回 内蒙古 2回 タイ・日本 7回） 研究員海外派遣数：17人（韓国 5人 内蒙古 2人 タイ 10人） 研究員受入数：16人（韓国 10人 タイ 6人）	
【備考】	



内蒙古壁画墓剥ぎ取り壁画

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：アジアとの関係の中で我が国の歴史を考えるという目的をもつ当館に必要な研究である。 独創性：現地研究機関との緊密な協力体制のもと、国際的な視野に立った共同研究を実施している。互いに違う視点を持ち寄り、討議検討をしている点から博物館レベルとしては他にあまり例がなく卓越的な活動である。 発展性：現地研究機関との緊密な協力体制のもと、多様な研究成果を上げている。 効率性：事前の打ち合わせなどにより、現地調査は効率的に実施できている。 継続性：ここで挙げた計画以前から、関係研究機関とは研究実績があり、継続性に富んでいる。 正確性：現地研究機関がこれまでに蓄積してきた成果を適宜参照しているため、正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：14回の調査を実施し、計画通り推移している。 研究員海外派遣数：順調に計画を実施している。 研究員受入数：計画通りに推移している。						

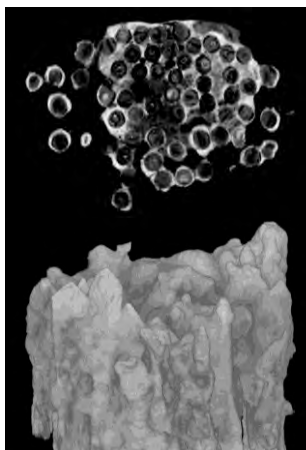
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	百済と古代日本との関係を取り上げた特別展、図録、シンポジウム、連続講演会などを通して、最新の研究成果を来館者に対して分かりやすく示すことができた。内蒙古所在の壁画墓剥ぎ取り、壁画に関する3種類の高精細画像データの集積が順調に進んでいる。国内及びタイにおける現地調査・研究報告会を通して、研究成果を共有し、今後の研究計画についても協議を深めていることから、計画に沿って順調である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は年度計画に沿って毎年所定の成果を上げた。次年度が最終年度となる内蒙古関連壁画墓剥ぎ取り壁画に関する高精細画像の集成については、次年度も継続し、展示への応用を図る。タイ関連共同研究については、協議内容に基づいて継続し、研究成果を国内及びタイにおける研究会で共有すると同時に公表していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設（科学研究費補助金） （(5)－⑤）		
【事業概要】 九州はその地政学的特質から日本列島の窓口としてアジアや西洋の文化や技術をいち早く受け入れてきた。そのため、九州には対外交流に関連する文化財が多く残されている。本研究では、九州及びその周辺諸国・地域に所在する対外交流に係る文化財を対象とする。九州に東西南北 4 つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	学芸部付 伊藤嘉章
【スタッフ】 井上洋一（部長）、今津節生（博物館科学課長）、楠井隆志（展示課長）、赤司善彦（福岡県教育庁文化財保護課長）			
【主な成果】 (1)九州の特質とも言える外来文化の受容と展開における先進性や辺境性を示す文化財を対外交流文化財として位置づけ、東西南北 4 つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開している。本研究期間内では、北ルート（古代を中心とする大陸との交流）及び西ルート（中世・近世を中心とするアジア・ヨーロッパとの交流）を中心に調査を展開した。 (2)各地で現地調査した文化財を必要に応じて九州国立博物館に移動して、大型 X 線 C T、精密三次元計測機、高精細大型スキャナなどの最新鋭のデジタル計測機器を活用した科学調査を実施した。また、高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを新しい博物館情報として利用するために、展示への活用を計画した。 ・本年度は研究の最終年度にあたるので、本研究の総括報告書を作成した。			
【年度実績概要】 (1)北ルート・西ルートを中心にテーマを設定し、それぞれに研究を進めた。 研究テーマは、古代日本と百済の交流、元寇に関する鷹島海底遺跡出土遺物の C T 調査、船原古墳・西都原古墳群出土資料の X 線 C T 等の調査、南海産の貝の調査、公州、扶与招聘加唐島調査、長崎市内黄檗宗寺院の所蔵品調査、中近世社寺所蔵対外交流文化財の調査、近世初期における日本と海外との交流などである。 (2)調査の結果得られた知見として、長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物に関する調査については、X 線 C T 調査を実施し、錆と泥に覆われた遺物の立体形状を明らかにした。元軍が用いた武器の中で数多く残っているのは矢束である。 従来は矢の数や矢先の形状が不明であったが、本調査によって、元軍の使った矢は殺傷能力の高い短距離用の矢であることが判明した。 ・近世琉球の船と港について、那覇市内において、近世の首里及び那覇を描いた絵図の調査を実施した。沖縄の研究者と絵図史料に関する研究会を 2 回開催した。 ・研究の成果は特別展「古代日本と百済の交流」と当館文化交流展示にて活用した。			
			
元軍が使用した矢束の X 線			
【実績値】 調査件数 12 件 収集資料数 200 点 学会発表数 1 件 (①) 論文 1 件 (②) 展覧会への反映 2 回 (参考値) 新聞等報道 1 件			
【備考】 発表 ① 福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土資料の X 線 C T スキャナによる調査『日本文化財学会第 31 回大会研究発表要旨集』 26 年 7 月 5 日 論文 ② 「古代日本と百済の交流－太宰府・飛鳥そして広州・扶餘－」『古代日本と百済の交流』（赤司善彦；27 年 1 月 1 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-3

自己点検評価調査

4. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：九州各地には対外交流関連文化財が多く残されており、当博物館が中心となって研究に取り組む必要がある。 独創性：高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを構築することで、画期的な博物館情報を蓄積する。 発展性：高精度デジタル計測機器を用いた科学調査を実施して、汎用性の高い高精度の情報を網羅できる。 効率性：高精度の情報を基に文化財の保存状態、内部構造・材質技法を網羅した情報を効率的に取得できる。 継続性：対外交流文化財の基礎調査として、本研究を契機に各機関と連携して発展的に展開することができる。 正確性：高精度デジタル計測機器を用いた調査であり、世界最高レベルの信頼性を得ることができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	収集資料数	学会発表数	論文	展覧会への反映	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 調査件数：計画通り実施できた。 収集資料数：目標を達成できた。 学会発表数：日本文化財科学会で研究発表を行うなど目標を達成できた。 論文：『古代日本と百済の交流』に論文を掲載するなど、計画通り実施できた。 展覧会への反映：特別展や文化交流展示室に反映するなど計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	多様な九州の対外交流文化財について12の研究テーマを設定して研究を実施している。本年度は北ルートの研究成果として特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」を開催し、国宝七枝刀や韓国武寧王陵出土品などを展示することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って、研究内容の水準を保ちながら、順調に遂行した。本年度は研究の最終年度にあたるので、特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」を開催すると共に、報告書を作成することによって目標を達成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 中国・山東省を中心とする漆工品に関する調査研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-(5)）
【事業概要】 22 年秋、中国山東省荷澤の工事現場で発見された一艘の木船から、螺鈿箱（いわゆる高麗経箱）をはじめとして、漆器、陶磁器、玉器、金属器、硬貨など 117 点の遺物が見つかった。本研究は、この沈没船遺物、なかでも螺鈿箱に焦点をあて、いまだ未解明である制作技法や、制作年代などについて、科学分析や伝世品との比較調査を通じて明らかにし、高麗螺鈿の歴史的な展開を捉えることを目標とするものである。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 川畑憲子
【主な成果】 (1) 調査対象とする螺鈿箱の調査分析を、他作例と比較しながら多角的に進めることができた。 (2) 螺鈿器及び関連漆器の調査を広範囲に行うことにより、今まで知られていなかった比較作例を数多く集めることができた。 (3) 調査の過程で明らかになった新たな検討課題について、総括に向けて考察を深めることができた。	
【年度実績概要】 本年度は、これまでの調査をさらに進めるとともに、研究の総括に向けて調査データを整理し、考察を進めることに努めた。	
(1) 国内外に所蔵される高麗螺鈿器及び関連する漆器作品について、さらに広範囲に作品調査を行った。本年度、調査に訪れた主な所蔵先は、北京故宫博物院、個人（台湾）、個人（東京）などである。 (2) 調査では、高麗螺鈿器のみならず、時代の近い宋元漆器までも調査対象とし、当初の計画よりも多くの貴重な作品データを集積することができた。 (3) 調査データをもとに所蔵者や国内外の研究者と活発な議論を交わすことができた。このことは本研究のみならず、今後の当館の展示にも繋がる人的な交流を得ることになり、大変有益であった。また、文献資料をあらためて博搜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討するなど、高麗螺鈿の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。	
○本調査研究を通して得られた知見を、当館文化交流展示室における漆器展示解説等において公表することができた。	
	
作品調査の様子（台湾・個人）	
【実績値】 調査回数 5 回（国内 3 回、海外 2 回） 収集資料数 漆器ほか 約 100 点 研究者海外派遣数 2 回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：高麗螺鈿の制作技法や制作年代について検討する、必要な課題に取り組むことができた。 独創性：高麗螺鈿の初めての出土遺物であり、新規の知見を得ることができた。 発展性：調査を通して得られた知見を、展示を通して、広く一般に公開することができた。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 継続性：期間、質・内容において充実した成果を得ることができ、基礎的なデータを集積することができた。 正確性：各所蔵者の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究者 海外派遣数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 収集資料数：目標を達成することができた。 研究者海外派遣数：計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的にも定量的にも、当初の計画を達成することができた。これまで同様、作品調査をさらに進めつつ、研究の総括に向けてこれまでの調査データを整理し、設定した課題について考察を深めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って、作品調査及び検討を進めることができた。研究の成果は展示解説等で既に公表しているが、新たに報告書刊行の準備をすすめており、目標を達成したといえる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)タイにおける異文化の受容と変容－13世紀から18世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（5）－⑤）
【事業概要】 本研究は美術史的視点に立脚して、13～18世紀のタイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。タイにおける異文化の受容と変容を明らかにするために、交易品に着目してその関係資料を横断的に調査する。これまでに知られていた資料の理解を深め、新出資料も加えた基礎資料集成を行うとともに、それぞれの資料について正しい評価を行う。なお、本研究はタイ文化省芸術局と共同で行い、その成果は九州国立博物館と同芸術局の学術交流事業の研究につながっていく。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 原田あゆみ
【スタッフ】 小泉恵英（東京国立博物館学芸企画部企画課長）、末兼俊彦（京都国立博物館学芸部企画室研究員）藤田励夫（文化庁美術学芸課調査官）、猪熊兼樹（文化庁伝統文化課調査官）、佐藤留実（五島美術館学芸員）、續伸一郎（堺市博物館学芸課主査）、後藤恒（福岡市美術館学芸員）、山田均（名城大学教授）、望月規史（九州国立博物館文化財課アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 ・前年度に続き、タイ及び日本においてタイ関係交易資料の調査を実施した。 ・日タイ双方においては個人コレクター所蔵資料を含む調査研究を行い、基礎データを強化できた。特に在日本タイ資料についてはタイ側の協力により新しい視点から見直すための資料情報を得ることができた。 ・タイにおいてセミナーを開催し、調査研究について発表し、その成果について現地に還元することができた。	
【年度実績概要】 (26年) ・ 6月12日～18日 タイ関係交易品について堺市博物館、京都国立博物館、大谷大学博物館、佐賀県立九州陶磁文化館、松浦史料博物館、福岡市美術館にて調査及び情報交換会を行った。 ・ 6月26日～7月2日 横浜・三会寺、名古屋・日泰寺、五島美術館、東京国立博物館において、在日タイ文化財について調査を行った。大谷大学に所蔵されているタイから日本に送られた貝葉経包裂には西洋更紗も含まれており、端物裂本帳の西洋更紗と比較することで資料について再評価を行うことができた。 ・ 8月16日～21日 バンコク国立博物館、アユタヤ・チャオサームプラヤー国立博物館等において日本刀を含む外来の金属工芸の調査を実施。タイにおいて日本刀は、その束や鞘を美しく装飾し上層位の持物として伝わっただけではなく、実際の戦闘に用いられたのち、威信財として刀身そのものが彩色され祀られていた例も確認できた。 ・ 11月22日～24日 バンコク国立博物館、バンコク都内王宮関係博物館、個人コレクションの調査を行い、現地研究協力者からタイにおける資料の位置づけ、来歴、関係資料に関する情報を得た。 ・ 11月25日 バンコク国立博物館において共同調査研究に係る発表を行った。セミナーは関係者含む100名を超える多くの参加者を得た。 ・ 11月26日 現地共同研究者と本研究を基盤に2017年開催を目指した展覧会についての協議を深めた。 ・ 27年1月26日～2月3日 文化省芸術局にて展覧会協議、バンコク国立博物館ほか古代沈没船遺跡において交流史に関する調査・意見交換を行った。 ・ 27年3月21日～3月25日 九州国立博物館、吉野ヶ里遺跡、東京国立博物館等において調査・意見交換を行い、次年度共同調査等の協議を行った。	
【実績値】 調査回数 6回（海外：3回 国内：3回） 調査報告会回数 2回（海外：1回 国内：1回）（①～③）	
【備考】 調査報告会（共同セミナー 11月25日：バンコク国立博物館） ① 原田あゆみ・小泉恵英 “Intercultural and Comparative study of Buddhist narrative art” ② 望月規史 “Acceptance and Transformation of Japanese Sword in Siam” ③ 原田あゆみ “A subsequent report on investigation about Thai arts in Japan”	



タイ交易品調査 堺市博物館



タイ美術品調査 五島美術館

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：29年の日タイ修交条約130周年記念事業特別展開催準備として、公共性、国際性、緊急性、公開性に優れている。 独創性：従来確認されていなかった日本とタイに残る両国の文化財に関する具体的な調査をさらに進めることができた。 発展性：日タイ両国の研究者による共同調査と情報交換や発表会により、研究がさらに進展している。 効率性：事前の打ち合わせにより、短期間に多くの成果を効率よくあげている。 継続性：本事業は19年から始まった長期間の共同事業で、24年から改めて学術交流事業として位置づけられた。 正確性：両国における研究成果の蓄積を適宜参照することで、内容の正確性が担保されている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査報告会回数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：国内外合わせて6回の調査回数を確保でき、当初の予定を達成した。 調査報告会回数：目標通り調査報告会を2回行うことができ、日タイ両国の研究者が、研究成果を共有することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	学術交流事業として24年から新たにはじまった本事業は本年が3年目となる。本年度も、日タイ両国の研究協力者と十分な連携をとることができ、現地調査において多くの新知見を得た。また日タイ両国の研究者が一堂に会して、意見交換を行うことで、情報共有ができた。信頼関係も深まっているため、今後も調査は順調に進むものと思われる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日タイ両国における現地調査と意見交換など、予定していた事業は順調に実施できており、29年の展覧会（九州国立博物館から東京国立博物館へ巡回予定）実施に向けての準備も順調である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) 中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－⑤）
【事業概要】 本研究は、中世～近世初期における対馬宗氏領国の特質を、日本列島の政治史、とりわけ中央政権との関連性のなかで連続的にとらえ、もって日本・朝鮮両国の国境地域に存立する宗氏領国の主体性・従属性のありかたを明らかにしようとするものである。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】	
【主な成果】 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館及び神宮文庫において、古文書・経典の調査を計4回実施した。 ・中世～近世初期の対馬の古文書の収集（撮影）・整理（データベース化）を行うとともに、対馬所在の大蔵経の印刷・将来年代等に関する知見を得ることができた。 ・前年度に引き続き、中世松浦地域に関する史料の収集（刊本めくり作業）・整理（データベース化）を行った。	
【年度実績概要】 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、中世～近世初期の古文書集といふべき宗家判物写の調査を行った（7月23日～24日）。調査対象の史料は、全丁のカラー写真を撮影し、本研究のための基礎データを充実させた。 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、対馬所在の高麗版大蔵経、及び宗家判物写の調査を行った（8月20日～22日）。 ・神宮文庫において、中世の伊勢参宮帳（写本）の調査を行った（11月21日～22日）。 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館において、高麗版大蔵経の調査を行い、印刷年代・将来年代を明らかにするための基礎的データを得た（12月16日～17日）。	
 論文掲載図書2点	
【実績値】 調査回数 4回 調査史料数 60点 収集図書数 105点 発表論文数 2本（①～②）	
【備考】 ① 荒木和憲「応永の外寇」（高橋典幸編『戦争と平和』（生活と文化の歴史学5）竹林舎、26年10月） ② 荒木和憲「中世対馬における朝鮮綿布の流通と利用」（佐伯弘次編『中世の対馬』勉誠出版、26年12月）	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国際交流史研究は近年活発化している分野である。 独創性：中世～近世初期の宗氏領国・日朝交流を連続的に把握する研究は他にない。 発展性：日朝交流史研究にとどまらず、広く国際交流史研究に資するものである。 効率性：通常業務の繁忙のため本研究への時間的投資が制約されたが、効率的な研究の遂行に努めた。 継続性：制約された時間のなかで、最大限の成果を収めた。 正確性：正確なデータに基づくデータベースを作成した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査史料数	収集図書数	発表論文数		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：所期の目標を達成した。 調査史料数：所期の目標を達成した。 収集図書数：必要な図書を必要数収集した。 発表論文数：順調に研究成果を公表した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画通りの調査成果を収めることができた。 次年度は本研究の最終年度であるため、調査結果の整理を完了させ、研究成果のより一層の公表に努める。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、日本列島と朝鮮半島との交流の窓口であった対馬をフィールドとする調査研究であり、中期計画4-(5)-⑤「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」の趣旨に適うものである。順調に成果を挙げており、3ヵ年計画の最終年度となる次年度は、当該調査・研究の集計を図る。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-⑤)		
【事業概要】 唐滅亡後の東アジアにあって、中国北方に覇をとなえた遊牧民族国家契丹（遼）は、中国文化や仏教を継承する一方、契丹文字を創出するなど文化的な自立を示している。こうした契丹国家形成における重層性を考えるのに、当時の社会構造を視覚的に示す、内蒙古自治区内所在の契丹壁画墓壁画を研究・記録/集成し、公開のための環境整備と新しい展示手法を検討する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課長）、市元壘（特別展室主任研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）			
【主な成果】 (1) ・内蒙古自治区フフホト市の内蒙古博物院で、内蒙古自治区所在の壁画墓からはぎ取られた壁画資料について、高精細画像データ（通常の画像、斜光線下の画像及び赤外線画像の三種）を作成した。 ・内蒙古自治区エチナ旗の黒水城遺跡で、契丹と同様、独自の文字を作り出した西夏の文物について現地調査を行った。 (2) 契丹以前の五代の壁画墓資料についても高精細画像データを作成したため、契丹壁画の特性について比較する良質の材料が入手できた。 (3) 通常光下、斜光線下及び赤外線下の3種類の画像高精細画像データを比較しながら、技法を含む研究を進めている。			
【年度実績概要】 (1) ・内蒙古自治区フフホト内蒙古博物院において、内蒙古自治区所在壁画墓剥ぎ取り資料の高精細画像データを作成した。（26年11月8～11日） ・内蒙古自治区エチナ旗黒水城遺跡及び博物館にて、西夏文物の調査を行った。（26年7月27日～8月3日） (2) ・契丹国が制定した契丹文字に相当する西夏文字文書などの、西夏文物に関する調査を行い、かつての唐帝国周辺地域において見られた独自の文化形成に関する知見を得た。 ・内蒙古所在の壁画墓の剥ぎ取り壁画について、通常光、斜光線及び赤外線を利用した高精細画像データを作成したため、下描きの墨線と最終的な仕上げ画面との構図上の差異など、技法を含む様々な観点から研究する条件が整いつつある。 (3) 今回作成した膨大な高精細画像データを統合し、一般的なパソコンでも取り扱えるようなデータ形式に変換・整備した。五代壁画墓に関する写真データを利用して、パソコン上で内部空間を再現するデモプログラムを作成し、次年度以降の当館展示室内における応用について検討する条件が整った。			
 高精細画像データ作成作業風景			
【実績値】 海外出張回数 2回 出張人数 延べ 5人 取得データ数 300点（切り取り壁画 約40点について高精細画像データを作成した。） （参考値） 新聞報道 1件（①）			
【備考】 ① 新聞報道 西日本新聞社 27年1月7日朝刊 「内蒙古の壁画 画像保存 九州国立博物館 10～12世紀の地下墳墓 契丹文化 再評価へ」			



高精細画像データ作成作業風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	効率性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：中国内蒙古博物院との共同研究という国際性に富んでおり、同院と高精細画像データを共有している。 発展性：高精細画像データを博物館における展示に活用することを前提としており、応用性に富んでいる。 継続性：内蒙古博物院とは、本研究以前から学術文化協定を結んでおり、長期間に及ぶ協力関係にある。 正確性：フラットベッドスキャナーを利用しているため、画像データにレンズ収差から生ずる歪みがなく、正確である。 独創性：剥ぎ取り壁画の現状について3種類の高精細画像を集成している点で、独創的である。 効率性：事前の打ち合わせにより、現地での高精細画像データ作成を短期間で行っており、効率性に富んでいる。						

2. 定量的評価

観点	海外出張回数	出張人数	取得データ数			
評価	B	B	B			
判定理由 海外出張回数：計画通り実施できた。 出張人数：計画通り実施できた。 取得データ：前年度の通常光条件下における高精細画像データに加えて、斜光線と赤外光という新たな種類のデータ2種を含む合計3種類の高精細画像データを取得・整備することができたため、当初予定以上の成果が得られた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	壁画作成の準備から、構図上の変化や仕上げに至る様々な段階について研究できるよう、合計3種類の高精細画像データの集積及び整備作業を継続した。次年度は、契丹壁画墓剥ぎ取り壁画に関する、3種類の高精細画像データを作成できる見込みであり、順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高精細画像データの作成及び集積作業は順調に進んでいる。また、壁画墓内部空間を、一般的なパソコン画面上で再現するデモプログラムを作成できており、次年度以降、当館展示室内において実用化できる可能性が高くなっており、順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 水中遺跡の保存活用に関する調査研究（文化庁受託事業）（(5)-⑤）		
【事業概要】 我が国は、海外との交流によって歴史文化を育んできた。この直接の担い手が船であるが、近年も長崎県鷹島神崎の海底遺跡から沈没した元寇船が発見されるなど、海中には多くの船体や遺跡が存在すると思われる。こうした水中遺跡は、海外との交流を語る貴重な文化遺産であるが、水中という特殊な立地条件にあるため、その調査や保存活用の手法が確立されていない。そこで水中遺跡の保存活用について国内外の取組みについて調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、西村栄造（副館長）、井上洋一（学芸部長）、臺信祐爾（企画課長）、志賀智史（保存修復室主任研究員）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、赤司善彦（福岡県教育庁文化財保護課長）			
【主な成果】 海外の水中遺跡についての取組状況を取りまとめるために、現地を訪問し調査を行った。 ・本年度はデンマーク・スウェーデンを訪問して当該国の機関を調査した。また、日本の水中遺跡の探査に必要な機器の性能を把握するために、鹿児島県奄美大島宇検村倉木崎海底遺跡の調査を実施した。 ・本調査・研究の成果は我が国の海事文化財研究を推進する上で貴重な基盤事業となっている。また、水中遺跡の魅力をどのように市民に伝えるか、魅力的に展示するのかという課題についても、デンマークのヴァイキング博物館やスウェーデンの WASA 号博物館が参考になった。さらに、海底遺跡の魅力を臨場感豊かに伝える手段として 8K 映像を撮影した。			
【年度実績概要】 ・諸外国の水中遺跡の調査と保存活用に関する取組み状況調査 1 回 主にヨーロッパ地域を対象として現地調査や、関係者を招聘する等、水中遺跡の一連の課題を調査した。 デンマーク・スウェーデン 現地調査 26 年 8 月 8 日～14 日 ・27 年 1 月 24 日～2 月 5 日にデンマーク国立博物館保存科学担当者 1 名を招聘 元寇船が発見された松浦市を訪問し、沈没船を活用した博物館のあり方について協議した。 水中文化遺産の調査と保存について長崎・福岡・東京で協議した。 ・国内の水中遺跡の把握調査 6 回 水中遺跡の発見は主に漁で引き揚げられる遺物がその契機となっている。その実態について調査した。 現地調査 6 回 長崎県松浦市鷹島町 26 年 5 月 21 日、7 月 15・16 日、9 月 30・10 月 1 日 鹿児島県大島郡宇検村 26 年 6 月 11・12 日、10 月 17～28 日 沖縄県那覇市 26 年 12 月 6・7 日 ・倉木崎海底遺跡の探査 水中遺跡の探査に必要な機器の性能を把握するために鹿児島県大島郡宇検村倉木崎海底遺跡の調査を実施した。 ・国外関連資料の収集 ヨーロッパを中心に、主要な海外の諸機関を対象にして、課題についての印刷物の中から必要なものを翻訳している。 オランダ、英国、デンマーク、スウェーデンの文献。 ・博物館での水中遺跡の活用手法（展示）の調査検討・展示の試み 海底遺跡の魅力を臨場感豊かに伝える手段として 8K 映像を撮影した。			
			
		倉木崎海底遺跡の水中磁気探	
【実績値】 海外調査 1 回 国内調査 6 回 海外招聘 1 回 （参考値） 文化庁との打ち合わせ 4 回 発表件数 1 件(①) 報告件数 1 件(②)			
【備考】 発表 ① X 線 C T スキャナを活用した出土木製品の構造解析に係る基礎研究Ⅱ - 保存処理後の木製品内部における処理薬剤及び水分の分布について - 『日本文化財科学会第 3 1 回大会研究発表要旨集』、(26 年 7 月 4 日) 報告 ② 『水中遺跡の保存活用に関する調査研究』（27 年 1 月 31 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-8

自己点検評価調査

5. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：鷹島海底遺跡で2隻目の船体が確認され、国民的な話題となっている。 独創性：水中遺跡の国内外の取組状況の把握はこれまでにない貴重な成果である 発展性：水中遺跡の調査研究のガイドライン作成につながる研究と期待できる。 効率性：翻訳業務等、委託できるものは外部に業務をお願いするなど、コストを意識した業務遂行となった。 継続性：ヨーロッパの主な水中遺跡に取り組んでいる国の状況を把握することができた。 正確性：各国のデータを刊行物によって基礎資料を作り、実際に訪問して関係者と面談したことで、正確かつ豊富な内容を収集することができた。						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査	海外招聘	発表数	報告数	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 海外調査：計画通り実施することができた。 国内調査：計画通り実施することができた。 海外招聘：予定通り実施することができた。 発表数：計画通り実施することができた。 報告数：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

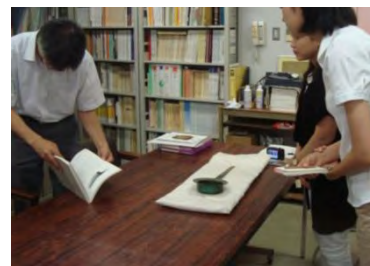
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究によって我が国の水中遺跡のこれからの取り扱いを考えるための基礎資料を集積することができた。次年度はアメリカ等の現状把握に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、計画に沿って順調に遂行している。次年度はまとめの報告（中間報告）を刊行すると共に、引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果を普及させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 (5) - (5)
【事業概要】 百済・新羅・高句麗の三国時代の文化を中心とした朝鮮半島の文化財について、日韓共同で考古分野を中心に美術・工芸等の分野での調査研究を実施するものである。現地で実物資料を実見することを基本にするが、同時に我が国に将来された文化財を当館の X 線 C T などの科学機器を利用した分析をすすめる。この成果は、26 年度に開催予定の特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」、ならびに「日本発掘―発掘された日本列島 2014―」で活用する。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展室長 河野一隆
【スタッフ】 井上洋一 (学芸部長)、今津節生 (博物館科学課長)、河野一隆 (文化交流展室長)、市元壘 (特別展室主任研究員)、楠井隆志 (展示課長)、岸本圭 (展示課展示調整室主任研究員)、進村真之 (展示課情報サービス室主任研究員)	
【主な成果】 ・ 展覧会の出陳作品調査と併せて、百済と倭国の交流を示す出土資料を実見し、調査することができた。 ・ 画像だけでは分かり難い作品コンディションや、細部の構造について、調査・検討を加えることができた。また、所蔵機関スタッフとの交流の中で、歴史背景をはじめとする付帯情報を入手することができた。 ・ 特別展「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」ならびに「日本発掘―発掘された日本列島 2014―一展」の展示企画や図録製作に活用することができ、準備作業を効率的に進めることができた。	
【年度実績概要】 ・ 関東や関西の百済文化と関連の深い伝世品や出土品について、実見を進めることができた。特に、当館所蔵の武寧王陵出土の獣帯鏡の 3 次元画像解析など、当館の最新分析機器を活用した新知見を得ることができた。また、韓国国内でも扶餘王興寺や公州・武寧王陵などの資料実見調査を、秋に実施した。 ・ 獣帯鏡の 3 次元画像解析調査の結果では、従来よりも踏み返しが進んでおり、武寧王陵出土鏡との製作の先後関係を再検討するデータが得られた。また、韓国国内出土品では、コンディションの確認ができ、輸送や展示方法等の企画を効率的に進めることができた。 ・ 調査の結果、作品カタログの色校正や執筆に係るコストを大幅に軽減することができた。また、展覧会の企画を効率的に進めることができた。	
【実績値】 調査回数 5 回 (韓国との共同調査) ・ 韓国国内での調査 2 回 ・ 日本国内での調査 3 回 X 線 C T 分析 3 件 (宮崎県内出土考古資料・大分県出土考古資料・福岡県内出土考古資料) 刊行物 1 件 (①) 展示への反映 2 回	
【備考】 ① 特別展図録「古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―」 (27 年 1 月 1 日発行) (執筆者: 井上洋一・楠井隆志・岸本圭・進村真之・小嶋篤・市元壘・河野一隆)	



高井田山古墳出土品調査

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-9

自己点検評価調査

6. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：資料の実見、研究討議を行ったことで、展覧会・図録の設計や製作の進行に遅滞を生じることなく推進することができた。 継続性：学術文化交流協定を締結した韓国側の姉妹館との共同調査を今後も推進するための展示・研究を今後も継続していくための実績を積むことが出来た。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	X線CT分析	論文数	展示への反映		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査回数：展覧会の開催・図録執筆のための調査として十分な回数であるため。 X線CT分析：日韓考古資料の比較検討のための、十分な分析データを得ることが出来たため。 論文数：研究成果を、展覧会図録の形で1件公表することができ、目標を達成した。 展示への反映：調査・研究結果を展覧会に反映させるという形で2回実施でき、所期の目標を達成した。 展覧会内容はもちろん、図録の内容にも反映させることができ、充実したものとなったことは、本展図録の購入率が5%に迫る近年稀に見る売り上げを記録したことからも、明らかである。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会出陳作品について、韓国内における実見調査や韓国人研究者と活発な意見交換を行うことができ、効率的な準備作業を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度推進、実現した展示・研究活動を足がかりに、韓国側の調査・研究機関、博物館との緊密な連携を進め、交流を推進することが出来た。特に、次年度も展示事業を抱えており、そのための足がかりを着実に積み重ねることが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) VR技術を活用した装飾古墳アーカイブに関する調査研究（(5)－⑤）		
【事業概要】九州を代表する文化財である装飾古墳に対して、当館では開館以来、実際に計測して作成したVRデータを蓄積してきた。これをより身近でインタラクティブに活用するために、AR技術と融合させて、HMDで楽しむことが出来るコンテンツを作成する。さらに、それをより良いものに高めていくための実証実験を、文化交流展示室における展示企画として行う。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展示室長 河野一隆
【スタッフ】			
【主な成果】			
(1)桂川町立王塚装飾古墳館で、王塚古墳石室模型を撮影し、実際の石室の装飾文様が浮かび上がるような AR コンテンツを作成した。			
(2)今まで蓄積した装飾古墳 VR データを、映像コンテンツ以外で活用するため、様々な実験的な取り組みを行った。			
【年度実績概要】			
(1)王塚古墳のVR（バーチャル・リアリティ）データを、映像以外で活用するために、ARの技術を活用したHMD（Head Mount Display）を考案し、スマートフォンのジャイロを使ったインタラクティブな装飾古墳の見せ方を試みることができた。			
(2)王塚古墳以外の古墳でも、同じような試みをすべく、作成方法を検討し、またデータ配信についても各方面から検討を進め、VRデータをARの中で活用する見通しを得ている。			
・今回の試みについては、27年2月3日から文化交流展示室で開催した企画展示「進化する博物館Ⅲー最新技術でよみがえる九州の装飾古墳」の中で、実証実験を兼ねた展覧会を行い、そのヒアリングを反映しつつ、より精錬された形へとまとめていきたい。			
○27年3月14日に開催した「装飾古墳がやってきたーe-Heritage への招待ー」では、報告会と講演会を開催し、当館が開館以来推進している情報技術の調査研究・展示への活用の方向性を「e-Heritage」という形で示す事ができ、世界の潮流である文化財のデジタルアーカイブに大きな前進を示すことができた。			
・また、「e-Heritage」の推進と関連して、中国科学院から招聘した研究者と文化財デジタルデータの研究面での展開の可能性や、展示への活用密接な検討、討議を行なうことができた。その結果、日中間でのデジタルアーカイブの推進に向けて萌芽的な課題の整理を行うことが出来た。			
			
文化交流展示室「進化する博物館Ⅲー最新技術でよみがえる九州の装飾古墳」会場風景			
【実績値】			
海外共同調査数：1回			
海外研究者招聘・受入数：1人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：今まで当館が取り組んできた九州の装飾古墳プロジェクトの成果を活用することが出来たため、短期間で完成度の高い成果を達成することが出来た。 継続性：本研究では開館時から取り組んでいる装飾古墳のデジタルアーカイブ事業の延長線上に位置づけられるものであり、大きな成果を得ることが出来た。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	海外共同調査数	海外研究者招聘・受入数				
評価	B	B				
判定理由 海外共同調査数：e-Heritage という世界的に推進されている文化財のデジタルアーカイブ規格に則ったコンテンツの製作のために、海外研究者・機関から指導を得、展覧会、研究会（シンポジウム）を各1回開催し、目標を達成した。 海外研究者招聘・受入数：e-Heritage を推進している中国科学院から研究者1名を招聘し、コンテンツを実見、高評価を得ると共に今後の展開の方向性について、討議することが出来た。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、e-Heritage という世界標準化が進められている規格に基づいて発信したものであり、製作されたコンテンツは博物館の世界では初の試みであり、大きな反響と高評価を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実本研究は九州の装飾古墳の当館が開館以来推進してきたデジタルアーカイブ事業の延長線上に位置づけられるものであり、かつその成果は今までに例の無い達成である。今後は、本年度示された活用可能性を広げ、野外博物館等、地域連携に立った博物館活動の展開に寄与したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11) 平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への継続的かつ発展的な調査研究((5)－⑤)
【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動についての継続的調査研究である。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 井上洋一
【スタッフ】 原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、望月規史（文化財課資料登録室アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 (1) 染織工芸（久留米絨、久米島紬）、芦屋釜鋳造工房、津屋崎人形工房において作品及び制作方法や制作用具について調査を行った。 (2) 上記の調査に伴い、体験プログラムに応用する方法が確認できた。 (3) 次年度実施する体験プログラムの企画に調査結果を盛り込むことが可能となった。	
【年度実績概要】 (1) ・久米島紬工房調査：26 年 5 月 30 日（久米島紬の制作技法について） ・久留米絨工房調査：26 年 6 月 5 日（最近の作品の特徴、技法について、染織体験の方法について）；11 月 29 日（絞り技法を用いた染織体験プログラムの手法について） ・芦屋釜鋳造工房：26 年 7 月 24 日及び 12 月 17 日（芦屋釜及び梵鐘の鋳造方法について） ・津屋崎人形工房：26 年 12 月 17 日（津屋崎人形の制作方法について、型の時代的変遷について）； ・工芸の全体的な傾向について調査（27 年 2 月 6 日） 津屋崎人形の型について調査中 (2) ・染織技法の調査を通して、年少者も参加できる染織体験プログラム開発へのヒントが得られた。また、絞り技法を用いた染織法の調査において、幾何学文様の染め抜き技法についての知見を得た。 ・鋳造方法の調査において、鋳造方法の基本を利用した鋳造体験プログラムの手法についての知見を得た。 ・津屋崎人形の制作方法の調査において、伝統的な意匠、彩色素材及び手法等についての知見を得、体験プログラム、郷土人形展示への応用に関する見通しが得られた。 (3) ・染織体験の調査で得た知見を基に、当館でアウトリーチプログラムを実施し、100 人程度の参加を得た。また、製織方法の基本を伝えるプログラムの調査を通して、次年度のアウトリーチプログラム開発のための新たな材料を準備することができた。 ・次年度のトピック展示（「芦屋鋳物師（仮称）」）において予定している教育普及事業の実施計画を立てることができた。 ・津屋崎人形工房の調査において、ボランティアによる郷土人形の展示活動を推進するうえでのテーマの設定方法、及びボランティアによる体験プログラム運営にむけての手がかりを得た。次年度の展示活動、及び体験プログラム運営に活用できる。 ○ 芦屋釜鋳造工房での調査成果を踏まえ、筑前・芦屋鋳物師が製作した現存する全ての鰐口をはじめ、九州と関わりの深い梵音具（鐘・雲版・鰐口）の特集展示を行った。 ・九州における中世の雲版を全点調査し、そのうちの 4 点を C T 調査及び三次元実測を行い、製作技法を明らかにした上で展示した。 ・展示室内に、芦屋町立芦屋釜の里に所属する鋳物師が 22 年度に製作した鐘を懸垂し、来館者に実際に鐘を撞いてもらう体験コーナーを設けた。	
【実績値】 調査回数 7 回 作家に関する調査 6 回（久米島紬、久留米絨×2、芦屋釜鋳造×2、津屋崎人形） 全体的な状況調査 1 回（日本伝統工芸展） 展示への反映 1 件 特集展示「「鳴りもの」の世界―九州ゆかりの梵音具を中心に」（26 年 11 月 18 日～27 年 2 月 15 日）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：作家・工房の調査を通じて、各工芸の現時及び過去との比較を調査することができ、適時性は高い。 独創性：通常工芸の調査は作品本体の調査が主であり、体験プログラムの開発まで視野に入れた調査には独創性がある。 発展性：作品調査のみならず、技法を応用した体験プログラムの開発につなげているため、発展性は高い。 効率性：限られた予算・時間のなかで、各研究員が計画的かつ効率的に調査を行った。 継続性：伝統工芸展開催以降、長期にわたる調査研究を継続できている。 正確性：技法的な詳細について、作家本人からの聞き取り調査を実施したことにより、伝統工芸を支える正確な技法を把握することができた						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示への反映				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：染織・金工・塑造技法に関する調査を予定通り実施できた。 展示への反映：調査研究の成果を、次年度の展示及び教育普及事業へ反映できる具体的な目処が立った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	体験プログラムを考えるにあたり、伝統工芸作家から聞き取りした技法を年少者にどのようにかみ砕いて伝えるか、また体験してもらうにあたり、どの程度まで簡略化できるかといった観点から、検討できた。また「鳴りものの世界」に、調査の成果を反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動について継続的な調査が順調に実施されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 和泉市久保惣記念美術館の収蔵品の調査研究 ((5)–(5))		
【事業概要】 和泉市久保惣記念美術館が所蔵する中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタル、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 井上洋一（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）			
【主な成果】 ・本年度は帯鉤金具を中心に計測画像から、青銅器の内部構造について非接触・非破壊で青銅器の構造を解析した。 ・殷周青銅器では取っ手などの立体造形の接続状況に着目して解析を行った。その結果、無垢でつくるものと中子を挿入して金属湯をまわすものの2種類が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するためのスペーサーについても具体的な位置を確認することができた。この研究成果は久保惣記念美術館の展示として生かすことができた。			
【年度実績概要】 ・当館にて久保惣記念美術館所蔵品の科学的調査を行った（26年9月）。 ・本年度の調査では、殷周青銅器を対象として、肉眼観察と共に画像解析を実施した。殷周青銅器では青銅器本体から伸びる立体造形の接続状況に着目してデータ解析を行った。その結果、全て無垢でつくるものと中子を挿入して金属湯をまわすものの2種類の技法が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するためのスペーサーについても具体的な位置を確認することができた。このスペーサーを中心に蛍光X線による非破壊分析を行った。その結果、スペーサーに使用された金属は、わずかに銅の成分比率が高い金属を使用していることが確認できた。 ・青銅器の構造に関する非破壊的な調査研究によって、青銅器の製作技法について新知見を得た。			
			
		和泉市久保惣記念美術館所蔵 爵の三次元	
【実績値】 調査回数 2回 分析点数 8点 発表数 2件（学会研究会発表数 1件（①）、論文1件（②））			
【備考】 学会研究会等発表 ① 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」（26年12月20日） 論文 ② 「X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財調査・研究・展示への活用」『三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究』（27年3月31日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-12

自己点検評価調査

7. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：国内・海外の研究者から注目を集めた。特徴ある博物館との連携研究として先駆的な研究である。 独創性：中国青銅器の構造研究に非破壊的手法を本格的に導入した最新の研究である。 発展性：調査資料の増加により世界に例のないデジタルアーカイブに発展している。 効率性：従来に比較して短時間でデータを取得できるために、時間的投資、人的投資が少ない。 継続性：X線CTは文化財の内部構造を非破壊で三次元的に調査できる唯一の方法である。 正確性：0.1mmの精度で記録することができ、正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	分析点数	発表数			
評価	B	B	B			
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 分析点数：できうる分析は全て終了している。 発表数：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究に使用している調査研究機器は、世界的に最も優れた装置の一つとしてすでに高く評価されている。大阪・和泉市久保惣記念美術館との連携研究の他に中国古代青銅器の著名なコレクション（住友コレクション）を有する泉屋博古館との共同研究の結果をまとめている。その成果は中国科学院との連携研究によって中国国内で研究成果を発表した。本年度をもって調査は終了するので、今後は双方で蓄積したデータの活用を図って行きたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では、文化財を外部の博物館から借用して展示することが多いので、展示借用の際に、当館の最新機器を用いて科学機器による共同研究を進めている。これまでの研究協力において、広く国内外の博物館や研究機関と共同研究が進んでいる。久保惣記念美術館との連携研究は報告書をもってひとまず終了するが、今後さらに他館とも連携を進めて共同研究を実施していきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-13

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 中世大般若經の史料学構築に向けての基礎的研究 ((5)-(5))		
【事業概要】 日本中世の大般若經に関する資料を収集し、日本史研究に資する。このため、未翻刻史料を含む諸史料を広く調査するとともに、主要な大般若經の調査・展示を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室アソシエイトフェロー 渡部史之
【主な成果】 (1) 翻刻史料及び未翻刻史料を広く調査し、中世大般若經に関する資料を収集した。 (2) 前年度に引き続き、中世大般若經に関する基礎資料の収集を進めることができた。また、これにより、大般若經の果たした歴史的役割の変遷を跡づけることができた。 (3) 大般若經の果たした歴史的役割の変遷についての知見を展示に反映することができた。			
【年度実績概要】 (1) 刊行済みの翻刻史料に加え、未翻刻史料を含む諸史料を広く検索し、中世大般若經に関する基礎資料を収集した。 (2) 未翻刻史料にまで調査対象を拡大して、中世大般若經の基礎資料の収集を進めることができた。また、これにより、大般若經の転読など、古代から中世に至る大般若經が果たした歴史的役割について、その変遷を跡づけることができた。 (3) 未翻刻史料を含む諸史料の調査により得られた大般若經が果たした歴史的役割の変遷についての知見をもとに、より充実した解説を執筆することができた。			
			
「鎮護国家と仏教」の展示風景			
【実績値】 資料収集 500 点 展示への反映 1 回 (①)			
【備考】 展示 ① 展示名「鎮護国家と仏教」、展示期間：27 年 1 月 6 日～3 月 1 日、展示場所：文化交流展示室 大般若經の展示を実施した。			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：現在、大般若経については個別研究が盛んであり、本研究はこれらを集大成するものである。 独創性：同様の研究は他になされていないため。 発展性：基礎資料の収集及びそれらの詳細な分析により、大きな発展が期待できる。 効率性：未翻刻史料の画像を先にまとめて収集することにより、資料収集を効率的に進めることができた。 継続性：未翻刻史料を含め、質量ともに十分な資料を収集することができた。 正確性：調査対象を未翻刻史料にまで拡大することで、中世大般若経に関する基礎資料を精密に収集した。						

2. 定量的評価

観点	資料収集	展示への反映				
評価	B	B				
判定理由 資料収集：未翻刻史料を含む諸史料について、関連資料を多く収集することができた。 展示：予定通り、展示することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大般若経の個別研究が盛んに行われるなか、前年度に引き続き基礎資料の収集を着実に進めることができた。また、それらの調査結果を踏まえた展示を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査が実施され、基礎資料の収集を進めることができた。今後、これらの分析を更に進めることにより、研究の進展を図るとともに、その成果を今後の大般若経の展示内容に反映させることが可能である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 九州南島の交流史に関する調査研究(5)-(5)		
【事業概要】 九州の対外交流の特質を考える上で、奄美・琉球等の南島は大変重要な地域と位置付けられている。とりわけ奄美地域の縄文文化は、九州本土と同系統と位置づけられる。しかし、相対的な様相が異なることも事実である。従って、当該地域の縄文土器のあり方を調査・研究することは、南島全体の縄文時代の交流を知る手がかりとなる。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課）			
【主な成果】 前年度に調査を行った徳之島と喜界島の個人所蔵の縄文時代の土器・石器について、外部の専門家を交えて詳細な検討を行なった結果を、各調書に纏めた。このうち、特に重要であった喜界島の土器について論文に纏め、九州と南島に深い交流があったことを明らかにすることができた。			
【年度実績概要】 ・前年度作成した調書 195 枚に対し、観察所見を記載した。 ・調査結果のうち、特に重要と考えられる喜界島の土器について考察を加えた。南九州の土器との共通性が多い点から交流が活発であったことが判明した。一方で喜界島独自の要素も認められ、これらの特徴が南島一帯でどの程度の広がりを持つのかも含め、今後さらに検討が必要である。			
観察所見を記載した調書			
【実績値】 ・前年度作成した調書 195 枚（土器 135・石器 6・陶磁器 29・貝製品 7・陶器 6・骨 12）への観察所見の記載 ・論文作成 1 件(①)			
【備考】 論文 ①水ノ江和同鹿児島県喜界島採集の縄文土器に関する考古学的位置づけ—英啓太郎コレクションから—『九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設』科研費基盤研究A報告書（研究代表者：伊藤嘉章）（27 年 3 月）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-14

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本文化の成立を考える上で、南島ルートの起点の研究は必要である。 独創性：奄美大島以外の喜界島や徳之島の縄文時代資料はこれまでほとんど調査が行われておらず、独創性が高い。 発展性：沖縄以南へ至る交流のルートを解明する手がかりとなる。 効率性：前年度に作成した調査カードを基に熟覧と所見を記載できたので、調査の効率が良かった。 継続性：ほぼ出土資料の全てをカード化したので、将来の研究の基盤が確立できた。 正確性：九州を中心とした縄文土器の専門家を共同研究に加えたことで信頼性が増した。						

2. 定量的評価

観点	調査記録の記載	論文				
評価	B	B				
判定理由 調査記録の記載：カード 195 枚に観察結果を記載することができた。 論文：九州と南島の交流について考察することができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り調査内容を纏めることができ、その成果を論文で公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。 展示への反映、資料作成、論文という形で研究成果を発表し、十分に活かすことができ、目標を達成することが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)博物館の環境保存に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 和田浩(保存修復課環境保存室長)			
【主な成果】 今年度は展示環境に関する調査研究の内、展示ケース内の湿度環境について特殊な要件を実現するための手法に関する研究と既存の照明器具(蛍光灯、ハロゲンランプ)及び次世代型照明器具(LED、OLED)の比較評価と、次世代型照明器具を効果的かつ安全に導入するための研究を中心に実施した。具体的な成果は下記の通り。 ・展示ケース内を低湿度環境に維持するための研究を行い、文化財の材質の安定及び所蔵先からの要求条件を実現することができた。 ・展示室内及び展示ケース内蔵の照明器具から発する熱的影響を赤外線サーモグラフィーで観測・評価し、文化財への影響を回避するための手法を実践した。 ・展示環境をより安定化できる展示ケースを新たに設計した。 ・照明器具の熱的影響に関して学会発表を行ない、次世代型照明器具の評価と使用に関する論文を発表した。			
【年度実績概要】 ・26年6月24日から9月15日 特別展示室において10台の展示ケース内湿度環境を低湿度に維持した。 ・26年6月24日から7月3日 特別展示室及び総合文化展展示室において照明器具から発する熱的影響を赤外線サーモグラフィーで観測・評価した。その結果から文化財への熱的影響を緩和することができた。 ・26年12月2日 新たに設計した展示ケースの性能について製作工場で安全性を確認した。 ・26年6月8日 文化財保存修復学会において照明器具の熱的影響に関して学会発表「次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究」を行った。 ・27年3月 『展示学』52号に論文「OLED光源を用いた面発光照明器具による伝統的な屋内光環境効果の復元」を発表した。			
		赤外線サーモグラフィーを用いた展示ケース内蔵照明の熱的影響の調査	
【実績値】 低湿度環境化実施展示ケース台数：10台 サーモグラフィー調査実施箇所数：29箇所 学会発表件数：1件、論文(査読付)発表数：1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展示効果を高めつつ展示環境の安定化を実現する研究である。 独創性：実際に用いられる展示ケースを対象にして、具体的な解決策を提示できた。 発展性：様々な材質や環境に対する要求に対して成果を活用できる。 効率性：課題や問題点が見出された際には即座に現場で改善できる体制の下で進められた研究である。 継続性：前年度実施した空調稼動に関する研究を踏まえ、今年度はより局所的な環境に絞り研究した。 正確性：各種の観測装置を駆使して客観的なデータを収集しながら実行した。						

2. 定量的評価

観点	低湿度環境化実施 展示ケース台数	サーモグラフィー 調査実施箇所数	学会発表件数	論文(査読付) 発表数		
判定	B	B	B	B		
判定理由 低湿度環境化実施展示ケース台数：多くの展示ケースにおいて実現することができた。 サーモグラフィー調査実施箇所数：客観的評価を行うには十分なデータを収集できた。 学会発表件数：成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。 論文(査読付)発表数：学術雑誌において成果を社会に公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実績として十分なものと判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り達成しているものを判定する。展示及び収蔵環境における保存のあり方について、今期中期計画期間中に現場における運用面での基礎研究を完了し、次期中期計画においてはより高度な応用研究を目指す。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究(科学研究費補助金)((5)-(6))		
【事業概要】 研究全体を通して、被災資料の情報収集調査、施設の空気室調査、資料汚染ガス調査、汚染空気室の改質調査研究を実施する予定であり、本年度は被災資料の情報収集調査として、災害発生時の取り扱いに関して災害対策プログラムに関する資料収集などをパリ市内で実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 松井敏也(筑波大学芸術系准教授)、栗本康司(秋田県立大学木材高度加工研究所教授)、天野真志(東北大学災害科学国際研究所助教)、長野克則(北海道大学工学研究科教授)、片岡太郎(弘前大学人文学部特任助教)、奥山誠義(奈良県立橿原考古学研究所主任研究員)			
【主な成果】 ・パリ市内に所在する博物館施設を訪問し、セーヌ川氾濫時における緊急避難プログラムの詳細を聞き取り調査した。			
【年度実績概要】 ・ルーブル美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月22日) ・ケ・ブランリ美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月22日) ・装飾博物館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月23日) ・オルセー美術館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月23日) ・国立図書館にて危機管理プログラムについての聞き取り調査を行った(26年9月24日)			
			
オルセー美術館での調査			
【実績値】 ・調査実施施設数 5 箇所			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	C	B	B	C	C
判定理由 適時性：東北地方太平洋沖地震で被災した施設の復興および今後の備えの一つとして本研究の成果が早急に求められている。 独創性：研究目的自体には独創性が認められるが本年度の成果としては評価できない。 発展性：過去に被災した施設の現在における取り組みを調査することで、今後災害対策を導入する上でより強固な仕様を作成できるという応用性が高い。 効率性：最小限度の時間で十分な施設の調査を実行できた。 継続性：初年度であり、継続性については評価するに至らない。 正確性：初年度であり、正確性を十分に担保できるデータが揃っていない。						

2. 定量的評価

観点	調査実施施設数					
評価	B					
判定理由 調査実施施設数：パリ市内に所在する大規模な博物館施設をほぼ全て調査することができた。						

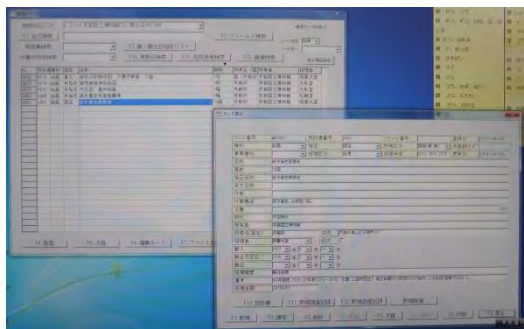
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の実績としては十分なものと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度の目標としては、達成しているものを判定する。次年度以降も研究計画に沿って実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究((5)-⑥)
【事業概要】 京都国立博物館に設置された文化財保存修理所内の修理工房において、修復または模写事業が行われている文化財に関して、それらの情報を収集・整理し、必要に応じた調査を行う。あわせて、得ることのできた情報を年度ごとの報告書として刊行し、共有する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 羽田聡（保存修理指導室主任研究員）	
【主な成果】 (1) 新規に搬入された文化財について、「修理計画書（設計書）」に基づきデータを入力した。また、京都国立博物館研究員による定期的な修理工房の巡回、あるいは適宜、行う調査を通して、修理中でなければ得ることのできない情報を収集した。 (2) 修理が完成し、搬出した文化財については、修理工房から提出された「修理解説書（報告書）」によって、データの追加、及び更新を行った。 (3) 以前、修理が完成した文化財に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第12号に掲載し、修理時の調査により発見された銘文を「銘文集成」として報告した。	
【年度実績概要】 (1) 情報の収集と調査 ・26年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、101件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 ・京都国立博物館研究員により12回行った修理工房の巡回のほか、適宜、修理技術者とともに実施した調査を通じ、文化財の構造や使用材料、内部納入品など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 (2) 情報の整理 ・25年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、1,698件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 (3) 情報の共有 ・23年度に修理が完成した文化財116件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第12号(27年3月31日発行)に掲載した。 ・修理時の調査により発見された銘文14件を「銘文集成」として同書に報告した。	
 「修復文化財データベース」作業画面  修理時に発見された「三八教 日蓮筆」(妙顕寺蔵)の軸木	
【実績値】 ・データ収集件数 101件 ・巡回回数 12回 ・データベースの追加更新件数 1698件 ・報告書 1冊（修理報告116件、銘文報告14件を含む）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4562-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：文化財の修理は社会的関心の高い問題であり、収集したデータがその貴重な資料となっている。 独創性：修復文化財を寄託品として受け入れ、修理によって得られたデータを各研究員の間で共有している。 発展性：修理データをデジタル化して、修復データベースへ登録し、将来の公開に備えている。 効率性：データをデジタル化することによって、修復文化財の情報検索を容易にしている。 継続性：収集したデータにより『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』を継続的に発行している。 正確性：報告書の発行に際して、データの正確性について再確認をしている。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	巡回回数	データベースの追加更新件数	報告書		
評価	B	B	B	B		
判定理由 データ収集件数：予期した件数のデータ収集を実施した。 巡回回数：予定していた巡回を順調に行った。 データベースの追加更新件数：例年の実績を引き継ぎながら、データベースの追加更新を順調にこなした。 報告書：計画通り、修理報告書を刊行した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都国立博物館内の文化財保存修理所で行われた修復文化財から得られる情報を収集・整理、そして必要に応じた調査を実施し、その成果を報告書に反映させ、共有を図っている。これによって、修復文化財に関する情報の公開を適正に行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修復文化財に関する資料の収集・整理及び調査研究を順調に実施して関連データの収集や整備を進め、相当程度の蓄積を果たすことができた。 次年度には、収集された情報を更に充実させながら、従来得られた情報との類似性や相違性の比較・検討など、相互の関連づけを図っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究((5)-(6))		
【事業概要】 修理を実施している館蔵品をメインに、その保存修復に関する調査研究を修理事業者と協力して行い、文化財の保全と公開に役立てる。あわせて、調査研究の過程で得ることのできた貴重な情報を蓄積し、学術的な利用のみならず、最適な修理方針の策定など、今後の保存修復事業にも活用する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員兼保存修理指導室長 赤尾栄慶
【スタッフ】 鬼原俊枝（美術室研究員）、羽田聡（保存修理指導室主任研究員）、大原嘉豊（企画室主任研究員）			
【主な成果】 (1)23年度から4カ年計画で修理を行っている国宝「病草紙」について、本紙の裏面に接着する肌裏紙の調査を行いつつ、修理完成にむけた装幀の検討会を実施した。 (2)本年度から2カ年計画で修理を行う「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」について、調査を実施し、修理の方針を策定した。 (3)国宝「釈迦金棺出現図」について、彩色に使用されている顔料の色見本を作成した。			
【年度実績概要】 (1)国宝「病草紙」 ・本紙の裏面に接着する肌裏紙について、その明度・色目・紙厚・簀目に関する調査を博物館と修理事業者（岡墨光堂）とのあいだで実施した。 ・その結果、本紙の彩色を最も活かし、文化財の観賞性を高めるため、これまで用いられていた肌裏紙より明るい色目のものを採用した。 ・来年度の修理完成にむけた装幀の検討会を行い、一場面ずつ10面に分かれていた本紙を卷子装に改めることで、観賞性と保全性の両立を目指すよう決定した。 (2)「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」 ・本格的な修理に着手するに際し、本紙の破損状況、紙質の調査を博物館と修理事業者（光影堂）とのあいだで実施し、あわせて適正な修理方針を策定するための検討会を催した。 ・これらの結果をふまえ、本年度は当該文化財に対し、本紙の剥落止め、クリーニング、表打ちまでを実施するよう決定した。 (3)国宝「釈迦金棺出現図」 ・平成知新館の開館にむけ、ハイビジョン映像「国宝 釈迦金棺出現図―奇跡の瞬間 驚愕と歓喜―」を製作するため、平成26年度には当該文化財に対し、博物館と修理事業者（六法美術）とのあいだで蛍光X線分析装置による顔料調査が行われた。 ・今年度は調査結果の再度検討を行い、データの信頼性を確認したうえ、展示での活用も視野に入れた資料として、これらの色見本を作成した。			
			
「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」本紙破損箇所		国宝「釈迦金棺出現図」色見本（試作品）	
【実績値】 ・調査項目 7項目 (国宝「病草紙」…肌裏紙の明度・色目・紙厚・簀目、「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」…紙質・破損状況、国宝「釈迦金棺出現図」…顔料) ・修理方針など検討会 5回 (国宝「病草紙」…2回、「賀茂御祖神社絵図（下鴨神社絵図）」…2回、国宝「釈迦金棺出現図」…1回)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4562-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：適正な修理方針を決定するため、その進行状況にあわせて、必要な調査と検討会を実施している。 独創性：調査と検討会を通じて、文化財の保存とあわせ、修理後の公開も視野にいたった方針作りを行っている。 発展性：将来的に館蔵品以外の文化財修理に関しても応用することのできる重要な情報を蓄積している。 効率性：決められた修理年限にそって、段階的な調査と検討会を行っている。 継続性：博物館の予算に館蔵品の修理事業を位置づけることで、毎年、継続的な調査を実施している。 正確性：検討会を数回実施することで、博物館と修理事業者とのあいだで意見の齟齬が生じないよう努め、客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	調査項目	修理方針など 検討会				
評価	B	B				
判定理由 調査項目：館蔵品の修理にとどまらず、他の文化財修理においても応用することの可能な項目について調査を行い、その情報を蓄積している。 修理方針など検討会：保存と公開とは本来、相反するものであるが、これらの両立を目指し、多角的な可能性を考慮している。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	保存と公開を念頭に置きながら、肌裏紙の明度や色目の調査、装幀の検討等、文化財修理のための重要な指針となりうる要素を核として、順調に調査研究活動を展開した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、順調に成果を上げている。 次年度においては、基礎的な調査研究の方向性を収斂し、何十年、何百年という長期的な視野で文化財の保存と公開を図るうえでの指針等について、一定の成果をまとめていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る (5)－(6)		
【事業概要】 展示室・展示ケース・収蔵庫等の環境が文化財に与える影響の解明を目的として、温湿度センサーによる展示室・展示ケース内等の温湿度データ収集、展示ケース内に浮遊する粉塵の電子顕微鏡観察、パッシブインジケータによるVOC調査、文化財害虫調査トラップの定期的な設置・回収等を継続的に実施し、調査で蓄積されたデータを分析することで展示室等の保存環境向上を計る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】 内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(ボランティア室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 (1)展示室・展示ケース内や収蔵庫に設置した温湿度センサーのデータを分析し、展示・収蔵環境の保持に努めた。 (2)展示ケース内から回収した粉塵の種類や量を計測し、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。 (3)展示室・収蔵庫等への昆虫トラップの設置回収により、文化財害虫の生息状況を調査し害虫被害の回避につなげた。 (4)「環境整備委員会 保存環境に関するワーキンググループ」会議を定期的に開催し、保存環境の改善に努めた。			
【年度実績概要】 (1)展示室・展示ケース内の各所に無線機能付き温湿度センサーを設置し、24時間リアルタイムに温湿度の変化を監視するとともに、LAN回線を通じて学芸部内で収集したデータを蓄積し、展覧会ごと報告書にまとめた。収蔵庫、文化財保存修理所内においては、ロガータイプの温湿度センサーを各所に設置して、保存修理指導室員が定期的に温湿度データの回収を行った。これらのモニタリングによって得られたデータを分析し、文化財の展示・収蔵環境の保持及び改善につなげた。 (2)正倉院展終了後、展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類及び単位面積当たりの量を計測して展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。その結果、粉塵量が多いと判断されたケースについては気密性確保の改修工事を実施した。 (3)展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150箇所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により二か月に一度回収・交換する。回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の種類と捕獲数のデータを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される個所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫の侵入対策や発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などIPMの実践に努めた。 (4)学芸部保存修理指導室員と総務課環境整備係員を中心に構成される「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」の会議を毎月開催し、上記の調査等で確認された保存環境にかかわる問題点について討議を重ね、施設の改修など保存環境の改善につなげた。			
 文化財害虫調査用トラップ設置の様子			
【実績値】 保存環境調査実施箇所数:296 箇所(展示室内温湿度調査:121 箇所、展示ケース内粉塵調査箇所:25 箇所、文化財害虫生息状況調査箇所:150 箇所) 保存環境調査報告書作成件数:7 件(温湿度モニタリング報告書 3 件、昆虫類調査用トラップ分類同定結果報告書 4 件) 研究者発表件数:「保存環境に関するワーキンググループ」開催回数 10 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4563-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：温湿度モニタリングの報告書は展覧会ごと、昆虫トラップの報告書は二か月毎に作成した。 独創性：一日二万人近い入館者が継続する正倉院展という特殊環境において、展示ケースの温湿度変化や気密性に関して調査した。 発展性：保存環境にかかわる基礎データを着実に蓄積し、施設の改修につなげた。 効率性：無線式温湿度センサーなどの最新機器を導入し、効率的な保存環境データの蓄積に努めた。 継続性：無線機能付温湿度センサーによる24時間モニタリング、当番制による二か月に一度の昆虫トラップ回収・設置を着実に実施した 正確性：最新機器を用いてデータを収集し、得られた成果を定期的に報告書の形でまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存環境調査実施箇所数	保存環境調査報告書作成件数	研究発表件数			
評価	B	B	B			
判定理由 保存環境調査実施箇所数：前年度と同じ(調査実施箇所数としては必要十分な)点検箇所について継続的にデータ収集を実施した。 保存環境調査報告書作成件数：温湿度モニタリングの報告書を展覧会ごと、昆虫トラップの報告書を二か月毎に作成した。 研究発表件数：10回開催し、調査データの検討を重ねた。						

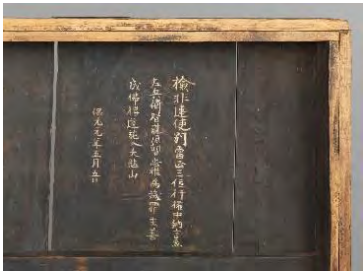
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度に引き続き、一年を通じて保存環境調査を着実に実施した。また、そこで得られたデータをもとに展示環境の維持・改善に努めることができた。次年度も本年度と同規模の調査を継続的に実施し、データの精度をさらに高めるとともに、保存環境の変化の兆候を把握できる体制を築いていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の保存環境向上に対する調査研究事業は、対応人員の増加により従来の上回る成果が得られたと考える。今年度の成果をふまえ、次年度もこの水準を維持しつつ保存環境の維持・改善に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 収蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する(5)～(6)
【事業概要】・館蔵品、寄託品について詳細に保存状態の調査を実施し、保存カルテとして記録を蓄積することで、将来の文化財修理への指針に役立てる。 ・館蔵品、寄託品の修理に際し、事前に当該文化財の保存状態について入念な調査を実施し、その結果を基に修理調書を作成する。 ・文化財保存修理所内での修理中に文化財から得られた材質や銘文などの基礎情報について調査分析を実施し、その成果を当館研究紀要に掲載する形でデータを蓄積する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 谷口耕生
【スタッフ】内藤栄(学芸部長)、岩田茂樹(上席研究員)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、田澤梓(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 (1)・館蔵品、寄託品について保存状態調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。 ・文化財保存修理所で修理された文化財について、樹種同定調査及び銘文調査を実施した。 (2)・保存カルテをもとに修理調書を作成し、修理方針を決定した。 ・樹種同定調査は京都大学生存圏研究所との共同研究として実施し、銘文調査は当館で文字の翻刻を行った。 (3)修理の概要、樹種同定調査及び銘文調査の結果について、当館紀要への掲載の準備を進めた。	
【年度実績概要】 (1)・館蔵品・寄託品の貸与時に、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門担当者が、光学機器等を用いて保存状態を中心に入念な文化財調査を実施し、そこで得られた成果を保存カルテに記入して基礎データを蓄積した。 ・当館文化財保存修理所彫刻室で25～26年度の2箇年を工期として修理中の奈良・普光院所蔵地藏菩薩立像から自然に脱落した木片について当館研究員が目視による入念な状態確認を行い、樹種同定調査が必要であることを判断した(26年9月30日)。 ・当館文化財保存修理所装潢室で26年度の1箇年を工期として修理中の京都・峰定寺所蔵黒漆塗箱型礼盤の天板裏面に表される刻銘について、当館研究員と修理技術者が共同で調査を行った(26年11月7日)。 (2)・館蔵品及び寄託品の修理にあたり、光学機器等を用いた入念な文化財調査を実施するとともに、保存カルテに記載された保存状態に関わる基礎情報を参照しながら修理調書作成し、館内監査を経て修理方針を決定した。 ・文化財保存修理所彫刻室内で修理中の文化財から採取された木片は、当館と京都大学生存圏研究所との間で締結した協定に基づき、共同研究の一環として生存圏研究所員により樹種同定の分析が進められた。 ・京都・峰定寺所蔵黒漆塗箱型礼盤の天板裏面に表される刻銘を目視により調査した結果、保元元年(1156)に検非違使別当の藤原忠雅が施入したものであることが判明し、同銘文は当館研究員が翻刻を行った。 (3)・保存カルテを踏まえて作成された修理調書をもとに、本年度実施されている館蔵・寄託品の修理については、修理完成の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理されて文化財」においてその成果を公表する。 ・本年度実施した修理の概要、樹種同定調査の結果、銘文調査に基づく文字の翻刻は、当館研究紀要『鹿園雑集』18号(28年3月刊行予定)に掲載し、広く一般に公表される。	
	
黒漆塗箱型礼盤(京都・峰定寺蔵)天板裏面の刻銘	
【実績値】 ・保存カルテ作成件数：総計96件 うち彫刻17件、絵画33件、書跡5件、工芸(金工・漆工・染織)13件、考古28件 ・修理調書作成件数：総計6件 うち彫刻2件、絵画1件、工芸2件、考古1件 ・調査件数：9件(木造文化財樹種同定調査実施件数：2件、修復文化財銘文調査実施件数：7件) ・調査概報：2件(「修復文化財(木造)材質調査報告」、「修復文化財関係銘文集成」)	
【備考】	

【書式B】
(様式2)施設名 奈良国立博物館
自己点検評価調査書処理番号 4563-2

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：当館では近年、文化財保存修理所における文化財修理を核として、修理作品の公開、修理への寄付金の募集、特集展示「新たに修理された文化財」での修理完成品の公開を博物館事業の重要な柱に据えており、修理に伴う調査を通じて得られる文化財の基礎情報を広く公開することもこれらの事業と密接不可分の研究活動に位置づけられる。 独創性：京都大学生存圏研究所による木造文化財の樹種同定調査は、京都国立博物館などでも実施しているが、協定を結んだ共同研究の形で実施するのは当館が最初であり、その成果を当館の研究紀要に掲載して広く公表していく活動も当館が初めて取り組んだ。 発展性：当館と同様に文化財保存修理所を設置する京都国立博物館が収集する樹種同定データ、銘文データを将来的に当館が公表するデータと統合することで、大きな文化財の基礎データベースに発展する可能性があり、多方面からデータの活用が期待できる。 効率性：樹種同定調査に当たっては、所蔵者の同意を得るなどの事務連絡、研究紀要への掲載に伴う編集業務を当館が担当し、実際の調査・分析を京都大学生存圏研究所が担うことで、高い精度と効率性をもって調査データの取得、公開が実現している。 継続性：木質文化財の樹種同定では世界的な研究機関である京都大学生存圏研究所と協定を結び、継続的に精度の高い樹種同定調査を実施できる体制を確立している。 正確性：京都大学生存圏研究所の樹種同定に関する調査・分析の精度の高さは他の追随を許さないものがある。これまで当館と共同研究の形で蓄積されてきたデータに加え、京都国立博物館でも生存圏研究所が実施している同様の調査データを加味することで、日本彫刻史の指標となる基礎データベースを確立することが可能となる。						

2. 定量的評価

観点	保存カルテ作成件数	修理調書作成件数	調査件数	調査概報		
評定	B	B	B	B		
判定理由 保存カルテ作成件数：順調に作成を進めることができた。 修理調書作成件数：長期計画に基づいて館蔵・寄託品の修理を順調に進めることができた。修理調書の件数も計画どおり達成することができた。 調査件数：木造文化財樹種同定調査2件、修復文化財銘文調査実施7件を実施し、年度当初の計画を達成することができた。 調査概報：調査成果を当館研究紀要に掲載、公表する準備を順調に進めることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と緊密な連絡を取りながら、修理に伴う文化財調査を順調に遂行することができた。調査で得られた所見は保存カルテ、修理調書に反映され、修理仕様を決定するための基礎的資料となった。特に木造文化財の樹種同定調査に当たっては、当該分野の世界的研究機関である京都大学生存圏研究所と協定を結んでいるため、継続的に精度の高い調査・分析が実施できている。来年度以降は、文化財修理所の年報的性格を持つ単体の修理報告書を刊行することを模索しており、刊行のあかつきには修理に伴う調査で得られるこうした樹種同定や銘文などの基礎データはそちらに掲載する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所を併設する当館において、文化財修理は当館の重要な柱となる事業に位置づけられている。そうした文化財修理の過程で行われる調査の成果は、文化財修理所特別公開や特集展示「新たに修理された文化財」等の機会に広く公表され、今後の修理計画において指針の裏付けとなる重要な意義をもつものである。本年度は従来どおり順調に調査を進めることができたが、今後はとりわけ樹種同定の精度を一層高めるために、兵庫県佐用町にある大型放射光施設Spring-8の利用も検討したい。

— 524 —

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4563-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：修理前、修理中に実施した材質・構造調査の成果を修理方針に反映させた 独創性：最新の機器を用いた材質・構造調査を実施し、その成果を修理方針に反映させた 発展性：修理文化財の材質・構造に関する基礎データ着実に蓄積し、そのデータを修理技術者に提供することで修理技術の発展に努めた。 効率性：文化財保存修理所内で修理される文化財について、館が所有する最新機器を積極的に活用し、高精度の材質・構造調査を館内で効率的に実施した 継続性：修理文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、得られた基礎データを着実に蓄積することができた 正確性：最新機器を用いて文化財修理に有益な材質・保存状態に関する基礎データを収集・精査し、そこで得られた所見を補修材料の選択等の修理方針決定に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：館贈品・寄託品の修理において確実に調査を実施することができた。 研究会回数：修理文化財の材質・構造調査で得られたデータについて、修理技術者と共同で検討を重ね、その成果を補修材料の選定等の修理方針に反映させた。						

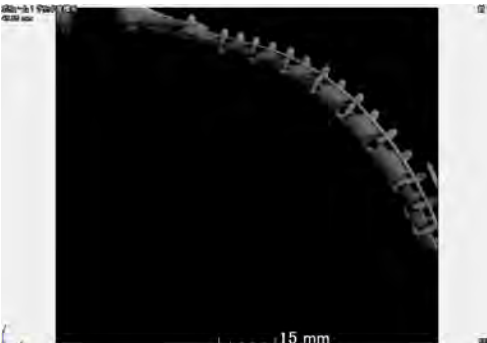
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品・寄託品の修理に伴って、保存状態の確認や材質解明を主目的とした調査を着実に実施し、当該文化財の修理方針決定や、将来における文化財の研究・修復に資する基礎データを蓄積することができた。次年度以降も継続的に館蔵品・寄託品を主対象とする保存科学的手法を用いた調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業は、その進捗度から従来の水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。次年度も修理に伴う調査を継続し、文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 (5)－(6)		
【事業概要】 文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。当館において、X線C Tや透過X線を用いて鉄錆地三十六間四方白兜やの内部構造を調査する。また3 Dデジタイザを用いて文化財の詳細な三次元形状を調査する。文化財の構造や制作技法を理解し、文化財の健康状態を知る。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 臺信祐爾（企画課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、楠井隆志（展示課長）			
【主な成果】 (1) 資料のX線C T撮影を行い、鉄錆地三十六間四方白兜の構造並びに金属の亀裂の有無を調査した。また繊維の断裂などを確認した。 (2) 図2に示すように鋳と鉄板との接合状態を明らかにすることができた。また金属や繊維に亀裂または断裂は確認できず、良好な状態であることがわかった。 (3) 展示前に状態調査を行ったことで、資料の状態を判断することができた。			
【年度実績概要】 (1) ・鉄錆地三十六間四方白兜に使用された鋳の状態や寸法、鉄板の止め方といった構造に関する知見を得た。金属の亀裂や繊維の断裂など資料の健康状態を確認するためX線C T撮影を行った。 ・調査の結果、金属の亀裂や繊維の断裂などは確認できず、資料の健康状態としては非常に良好であることが分かった。 (2) ・兜の金属部については、断面図から複数の鉄板を鋳によって留めていることがわかった。鉄板は厚さの異なる板を4枚確認することができた。鉄板の大きさは0.6mm、0.9mm、1.5mm、1.5mmと内側になるにつれて厚くなることが分かった。 ・四方白の部位の鉄板をみると、鋳は全て鉄板を留めているが、その他の鉄板に使用された鋳の半数は上面の鉄板に溶接されており、鉄板同士を留めていないことが分かった。 ・飾りとして使用された鋳と鉄板を留めるために使用された鋳は交互であることが分かった。 (3) 今回の調査結果から、鉄錆地三十六間四方白兜の基本的な構造や鋳の仕様の特徴などの知見を得ることができた。また展示前に健康診断を行い、状態について検証することで安全に展示することができた。			
			
		図1 鉄錆地三十六間四方白兜全体図	
			
		図2 兜断面図	
【実績値】 調査件数 120 件 調査回数 600 回 学会研究会等発表数 6 件 (①～④) 日本文化財科学会 3 件 文化財保存修復学会 3 件 論文掲載数 2 件 (⑤、⑥) 文化財調査におけるX線C Tの活用 2 件			
【備考】 ① 加藤和歳 小林啓 山崎悠郁子 今津節生 輪田慧 森下靖士 甲斐孝司 横田義章「X線C Tスキャナの活用による遺跡で発見される豊富な遺物情報を得る調査福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土遺物の取り上げ・構造解析から公開活用に向けて」日本文化財科学会 31 回大会 26 年 7 月 5 日～6 日 ② 小林啓 加藤和歳 山崎悠郁子 森下靖士 甲斐孝司 横田義章 今津節生 輪田慧「福岡県古賀市船原古墳遺物埋納坑出土資料のX線C Tスキャナによる調査」日本文化財科学会 31 回大会 26 年 7 月 5 日～6 日 他 2 件 ③ 小林幸雄 杉山智昭 今津節生 鳥越俊行 田中大之 相山英明「X線C Tによる「アイヌ文化伝世の漆椀」の内部構造調査 (2) —「熊図文入漆椀」と「津軽塗 (系) 漆椀」に注目して」文化財保存修復学会 36 回大会 (26 年 6 月 7～8 日) ④ 杉山智昭 小林幸雄 今津節生 鳥越俊行「アイヌ民族資料の保存修復に向けた現況調査」文化財保存修復学会 36 回大会 (26 年 6 月 7～8 日) ⑤ 今津節生「X線C Tを核とした三次元計測による博物館資料の活用と連携」文化財調査におけるX線C Tの活用 pp6-15 ⑥ 赤田昌倫「平取町所蔵耳飾り (ニンカリ) のC T調査」文化財調査におけるX線C Tの活用 pp66-67			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：C T 調査は形状や保存状態の把握に大きな効果がある。鉄錆地三十六間四方白兎について新たな知見を得るなど、形状把握に効果があった。 独創性：非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形の文化財への応用性を発展させた。 発展性：X線C T・3Dデジタイザ・3Dプリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線C T・3Dデジタイザ・3Dプリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線C Tでは文化財内部の構造を約0.2mm、3Dデジタイザでは0.02mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 調査件数：計画していた120件の調査を実施することができた。 調査回数：特別展などを中心とした調査を予定通り600回実施することができた。 学会研究会等発表数：目標を達成できた。 論文掲載数：目標を達成できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館内の収蔵品寄託品や、館外からの依頼など多くの資料を調査することができた。次年度も更に多くの文化財を調査研究し、3Dプリンタの活用によって文化財に親しむための機会を作りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。次年度は現在と同等の調査・研究を行うため、引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続するとともに、これまでの調査成果をまとめる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館における文化財保存修復に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装演技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 渡部史之（保存修復室アソシエイトフェロー）、下田詩織（保存修復室研究補佐員）、伊藤理恵（博物館科学課環境保全室研究補佐員）、竹上幸宏（国宝修理装演師連盟技師長）、元 喜載（国宝修理装演師連盟技師）、弓場健太郎（国宝修理装演師連盟技師）			
【主な成果】 (1) 吉備国際大学 2 名、九州産業大学 2 名、別府大学 1 名、広島市立大学 1 名の計 4 大学 6 名を対象に研修を実施した。 (2) 修復技術者の協力を得て、少人数で実践的な研修を実施することができた。 (3) 本研修により、修理技術者育成に寄与すると共に、学生の文化財保護への理解を深めることができた。			
【年度実績概要】 (1) 4 大学 6 名の学生を対象に、26 年 8 月 18 日（月）～22 日（金）の 5 日間にわたり、装演技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」を実施した。 (2) 研修では、当館文化財保存修復施設を使用している国宝修理装演師連盟（国の認定する選定保存技術保存団体）の協力を得られたため、少人数で実践的な研修を実施することができた。 (3) 研修では、屏風の下貼り作製に関する講義と実習を通じて、文化財保存修復に対する参加学生の理解と研鑽を深めることができた。			
			
文化財保存修復研修 実習風景			
【実績値】 研修開催数 1 回（17 年度より 10 回目） 参加者数 計 4 大学 6 名 （吉備国際大学 2 名、九州産業大学 2 名、別府大学 1 名、広島市立大学 1 名）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：修復技術者の育成は、公共の財産である文化財を、修理を通じて後世に伝えていくためにも不可欠である。 独創性：中四国九州地域で同様の研修を行っている公的機関は、当館が唯一である。 発展性：文化財の修復は、近年メディア等でも注目される分野であり、社会への影響が強い。 効率性：文化財保存修復施設で修理を行う団体の協力を得られたため、効率的に実習を行うことができた。 継続性：修復技術者の育成は継続的に行う必要があり、開館以来毎年継続している研修を今後も行う必要がある。 正確性：国宝修理装飾師連盟の協力により、正確な研修を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
評価	B	B				
判定理由 研修開催数：計画通り実施できた。 参加者数：研修としては適切な人数である。中国・九州の地域大学からの申し込みも多く、研修に対する関心の高さが窺え、26年度も研修に適切な人数の参加者を予定通り得ることができた						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大学で保存修復の基礎教育を受けた学生を対象に実践的な研修の場を提供できる機関は極めて少ない。次年度以降も地域大学の学生を対象に、本事業を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	17年度より、少人数を対象とした研修を継続的に行っており、参加者数も安定し、計画通りに実施されている。そのため、27年度も、引き続き同様の研修を実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 博物館危機管理としての市民協同型 I P Mシステム構築に向けての基礎研究((5)－⑥)
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館等における I P M（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、地元 N P O 法人や市民ボランティアとの共働による研修会の開催及び大学・専門研究機関・地域文化施設の連携による I P M 研修プログラム確立を通し、I P M の社会的理解度を深めつつ、博物館等における I P M を軸にした自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、西村栄造（副館長）、大西浩二（副館長）、井上洋一（部長）、阿部勝（総務課長）、今津節生（博物館科学課長）、篠崎孝司（交流課長）、大石淳子（総務課長補佐）、秋山純子（博物館科学課環境保全室研究員）、泊智子（博物館科学課研究補佐員）、光山文枝（博物館科学課研究補佐員）	
【主な成果】 (1) 継続的に行ってきたミュージアム I P M 研修（基礎編）の募集地域の範囲を広げ、これまで受講していない地域の博物館学芸員を積極的に受け入れることで、I P M の普及に努めた。 (2) 参加申込受付開始日に定員 20 名のところ、80 名以上の応募があるなど、参加人数が大幅に増え、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。そこで本年度のミュージアム I P M 研修（基礎編）の実施回数を 1 回から 2 回に増やした。 (3) I P M 研修会の成果を博物館の I P M 活動業務に生かすことができた。	
【年度実績概要】 (1) 日本国内における I P M の普及に努める ミュージアム I P M 研修（基礎編）の募集範囲を拡大 ・今年度新たに受け入れた地域 和歌山県、広島県、愛媛県 ・今年度新たに受け入れた博物館・美術館・資料館・図書館・文書館等 34 館 (2) 開催の回数を増やし、より多くの方に I P M 研修を受講できるようにした。 ・ミュージアム I P M 研修（基礎編）を 7 月と 10 月に行い、合計 63 名の受講生を受け入れた。それにより、地域や館種を超えた新たな受講生が加わり、ミュージアム I P M 研修（基礎編）の内容をより充実したものに検討する材料を得られた。 (3) ミュージアム I P M 研修は、専門機関や大学との連携による先進館や伝統的施設の調査結果及び協力者会議の指導助言により改善・実施したため、その内容を日常管理の I P M 活動に生かすことができた。	
【実績値】 ○ミュージアム I P M 研修開催回数・・・・・・4 回 ○ミュージアム I P M 研修参加者数・・・・・・84 名 ・ミュージアム I P M 研修（基礎編）：63 名（内、市民ボランティア 14 名） ・ミュージアム I P M 研修（技術編）：15 名 ・ミュージアム I P M 研修（実践編）：6 名	
【備考】 学会研究会等発表 ①「市民ボランティアと行う I P M ワークショップの取り組み」文化財保存修復学会（26 年 6 月 7 日） ②「博物館における飲食スペースの I P M 活動」文化財保存修復学会（26 年 6 月 7 日）	



ミュージアム I P M 研修（基礎編）の様子 ワークショップ I（トラップについての実習）

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：募集開始時に定員に達することから需要・必要性がある。 独創性：I P M活動に市民を組み込んで進めている。 発展性：募集の範囲を広げ、これまで応募のなかった地域に対し、具体的なI P M活動の普及に努めた。 効率性：地域のN P O法人と連携し、専門的立場より研修の運営を委託した。 継続性：ミュージアムI P M研修は本年度受講できなかった方も多く、毎年継続する必要がある。 正確性：募集の範囲を広げたことにより、より多くの館でI P Mの理解を深めるのに役立った。						

2. 定量的評価

観点	研修会開催回数	研修会参加者数				
評価	B	B				
判定理由 ミュージアムI P M研修会開催回数：目標回数以上に開催した。 ミュージアムI P M 研修会参加者数：予定を上回る人数の参加があった。						

3. 総合的評価

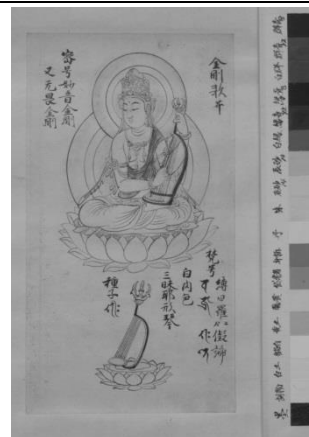
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ミュージアムI P M研修会（基礎編）を当初の予定では1回行うことにしていたが、予想を上回る受講希望数があり、より多くの受講生を受け入れるため急遽2回開催とし、I P Mの普及に寄与できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	地域に展開可能なミュージアムI P M研修を広く実施し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のIPM活動の拡大に寄与することができ、順調に遂行している。次年度はこれまでのI P M研修プログラム策定の集大成の年である。I P M研修の内容を精査し、地域市民や専門機関との連携を深めながら、より積極的に活動の普及に努める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究(学術研究助成基金助成金)((5)-(6))		
【事業概要】 彩色材料は当時の社会情勢や世界との交流の歴史を解明する上で重要な要素の一つである。近年の分析装置の発展により非破壊で多くの情報が得られるようになっている。その中で彩色材料について確実な情報を得るには、有効な分析手法を確立する事が求められる。本研究では、赤外線撮影法により彩色材料を非破壊で二次元的に判断することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員 秋山純子
【スタッフ】 畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷺頭桂（企画課特別展室研究員）			
【主な成果】 (1) 国内外の様々な絵画の赤外線画像を撮影し、画像データを蓄積するとともに、館蔵品に関しては分光反射スペクトルを測定した。 (2) 赤外線画像と分光反射スペクトルを比較し、彩色材料に関する情報が得られた。 (3) ・画像や彩色の調査結果を展示に反映させることができた。 ・研究成果を日本文化財科学会で発表した。			
【年度実績概要】 (1) 絵画の赤外線画像撮影・調査 ・イギリス：大英博物館で彩色分析の聞き取り調査を行った（26年9月14日、15日）。 ・アメリカ：ワシントンフリーアギャラリーにて彩色の多い仏画を中心に赤外線撮影を行った（26年10月14日、15日）。 ・アメリカ：ボストン美術館にて彩色分析の聞き取り調査を行った（26年10月16日、17日）。 ・紙本着色金胎仏画帖断簡（金剛歌菩薩）の赤外線撮影を行った（26年5月28日）。 ・岐阜県汾陽寺所蔵の仏涅槃図の赤外線撮影を行った（26年12月17日）。 (2) 調査の結果得られた知見・発見等 様々な種類の絵画の赤外線画像を検討した結果、赤外線画像は面的調査に非常に有効であるということが分かった。 (3) 調査・研究の成果への反映 ・「大涅槃展」の作品を解釈する際に、赤外線画像によって作品のより詳細な観察が可能となった。 ・日本文化財科学会で研究成果を報告し、専門家と意見交換できた。			
【実績値】 ・調査回数4回（国内2回、海外2回） ・学会研究会等発表数件(①)			
【備考】 学会研究会等 ① 秋山純子、森實久美子「赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究2」日本文化財科学会（26年7月5日、6日）			



紙本着色金胎仏画帖断簡（金剛歌菩薩）の赤外線画像

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：何件か問合せがあり、かつ学会での関心も高かったため。 独創性：彩色材料の非破壊調査に系統的に赤外線を活用する手法は新たな試みであるため。 発展性：さらに適応例を増やし、より確実なデータを収集することで、汎用性が増す。 効率性：デジタルで撮影も簡単であるので、時間的投資、人的投資が少なく済む。 継続性：基礎データを元に実際の絵画のデータを積み重ねることで面的調査に有効なデータとなるため。 正確性：赤外線撮影用のカメラを活用することで、高精細な画像データを得られる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会研究会等 発表数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：年間4回、計画通り国内外の絵画を調査した。 学会研究会等発表数：日本文化財科学会にて計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究に使用している撮影機材は、非破壊で簡便な撮影ができる。二次元スキャナによる分光反射スペクトルの結果と組み合わせ、より確実な彩色の面的調査が可能であることが分かった。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度に引き続き、国内外の実際の絵画の赤外線撮影を行うことができた。特に分光反射スペクトルを測定できたことで、赤外領域の反射吸収を確実に把握することができ、赤外線画像の解析を進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 —興福寺 国宝阿修羅像を中心に— (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)－⑥)
【事業概要】 本研究は特別展の際に各地から収集された文化財を科学的に調査することによって、文化財研究の基礎資料を蓄積すると共に、その研究成果を活かして新しい展示手法を開発することを目的とする。具体的には、文化財用の大型X線CTスキャン調査によって得られた、奈良興福寺の国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の像内の高精細三次元データを分析し、奈良時代の脱活乾漆像の構造及び技法、修復履歴を明らかにした上で彫刻史上の作風の位置づけを行う。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 楠井隆志（展示課長）、鳥越俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室主任研究員）	
【主な成果】 ・奈良興福寺の特別な許可を得て、X線CT調査で得られた国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4軀、八部衆像5軀の高精細三次元データを、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析した。 ・文化財科学・美術史・工芸・修復技術の専門家が集まって、X線CTによって得られた三次元画像を1000枚以上蓄積した。 ・本研究の成果を出版すべく編集作業を進めた。	
【年度実績概要】 ・本年度は諸像の内部構造解析を中心に研究を行った。三次元デジタルデータを基に各像の二次元断面像をそれぞれ100カ所以上作成した。また、使用された釘を中心に形状計測と三次元プリント化を行った。 ・天平時代に制作された諸像は概ね当初の状況を残しているが修理痕跡も発見された。修理に使用された釘や充填剤の特徴から鎌倉時代と江戸時代、明治時代に実施された修理の痕跡も明瞭に把握することができた。 ・本研究によって、言わば文化財の健康状態とも言える破損歴や修復歴を明らかにできた。文化財の今後の保管や運搬・展示に重要な基礎資料となった。また、本研究によって天平彫刻の基準作品を、科学調査を基盤として客観的に位置づけて日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することが期待される。 ・本年度は研究成果をまとめた研究報告書を作成した。	
  阿修羅像に使用された釘の画像と3Dプリンタで作成した釘の模型	
【実績値】 収集資料数 9点 論文掲載数 1件 (①) 学会発表 1件 (②)	
【備考】 論文 ① X線CTによる興福寺塑像の研究 今津節生、他 (27年3月31日) 学会発表 ② 「X線CTを核にした三次元計測による博物館資料の活用と連携」今津節生 (26年12月20日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-5

自己点検評価調査

8. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：天平彫刻の最高傑作を、科学調査することによって日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することができた。 独創性：所蔵者である興福寺様の特別な許可を得て実施できた研究であり、これまでにない新たな研究基盤である。 発展性：X線CTと3Dプリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：展示会の際にCT調査を実施しており、高精度の三次元デジタルデータを解析しながら研究データを得られる。 継続性：採取した三次元データを基に、内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：正確な三次元データを基に、文化財の状態を把握することは、多くの文化財調査に有効である。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	論文掲載数	学会発表数			
評価	B	B	B			
判定理由 収集資料数：9点（写真数 1000枚）の調査を計画通り実施できた。 論文掲載数：計画通りに研究報告書1件を作成した。 学会発表数：1件の発表を行い、所期の目標を達成した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、X線CTによる膨大な三次元データを美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析することにより、天平彫刻の最高傑作を日本彫刻研究の新しい研究基盤として位置づけることになる。本年度はこれまでの研究成果を集積した研究報告書を作成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。1000枚以上の画像データを収集し、膨大な画像データを集積した研究報告を作成した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) 三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)～(6)）
【事業概要】 京都・泉屋博古館所蔵の住友コレクションのうち、中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタイザ、3Dプリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施、その成果を中国で出版して広く成果の普及と学術交流を図る。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	学芸部付 谷豊信
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）	
【主な成果】 ・中国古代青銅器の三次元調査成果に基づいて、研究チーム内での論文作成を進めた。 ・中国語版の報告書作成を進め、日中両国で刊行した。 ・相互に密な連絡を重ねて、日中の共同研究基盤を固めることができた。	
【年度実績概要】 ・泉屋博古館の住友コレクションを対象として行ってきた、三次元画像解析や日中の研究者間での検討会議を踏まえて、鑄造実験や画像解析の認識の擦り合わせを重ね、本年度中に両国で刊行する、調査報告書に掲載する原稿執筆を進めた。また、27年1月1～6日には中国・科学出版社を訪れ、3月末には出版の運びとなった。 ・三次元画像解析の結果、日中の研究者で齟齬が生じる部分や鑄造実験を踏まえた検討により、修正を必要とする見解などが明らかとなった。また、日中の青銅技術の研究史が総括されたことで、大変意義深い青銅器研究の到達を示すことができた。 ・本年度は学芸的な検討の中で、認識の一致を見た後、翻訳やページの割付を進め、日中間の研究者で検討した後、両国で調査研究の成果を纏めた報告書を刊行した。また、本件の製作にあたり、表現上の擦り合わせを行う必要が生じたため、翻訳を推進している研究者1名を招聘し、研究の今後の展開の方向性や日中の研究機関での協力体制等をより具体化すべく、研究討議を行った。実際には、2年間にわたる準備作業を行ってきたため、スムーズに検討・刊行作業を進めることができた。	
 泉屋博古館での調査	
【実績値】 海外共同調査数 1回 海外研究者招聘・受入数 1人 論文数 2件（①、②）	
【備考】 論文 ① X線CTによる殷周青銅器の構造解析（三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究、27年3月31日） 今津節生・鳥越俊行・輪田慧 ② X線CTスキャナと3Dデータを応用した文化財の調査・研究・展示への活用（三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の制作技法の研究、27年3月31日） 今津節生・鳥越俊行・輪田慧	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：展覧会準備に直結した形で進めることができた。 独創性：他に類のない企画のため、独創性は充分にある。 発展性：展覧会をさらにより充実した形で進めることのできるものである。 効率性：効率的な準備作業を進めることができた。 継続性：継続的な取り組みを続けている。 正確性：実見したことで正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	海外共同調査数	海外研究者招聘・受入数	論文数			
評価	B	B	B			
判定理由 海外共同調査数：共同調査を行ったことで実際にメールや電話では、伝わりにくい表現方法など、実際に膨大な数の報告書画像に基づきながら検討を進めることが出来た。 海外研究者招聘・受入数：中国側研究者を招聘し、今後の研究の展望や協力体制の推進について、具体的に討議することができ、目標を達成した。 論文数：報告書編集に力を注いだため、やや少なかったが、報告書の編纂という当初設定した目標を達成することが出来た。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	泉屋博古館所蔵の青銅器について、日中の研究者がそれぞれのバックグラウンドに基づいて検討を行い、今までに実績の無い成果を上げることができた。また、その成果を日中それぞれの言語で報告書に纏め、両国で研究成果を共有するための基盤を構築できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日中両国が共同して行った、三次元計測技術という新しい博物館科学の手法を用いた例の無い成果であり、今後の研究・展示のための基盤として大きな前進をみた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-(6)）
【事業概要】 本研究では、弥生時代～古墳時代の墳墓の埋葬施設（室、槨、棺）への赤色顔料の塗布について、その種類や塗布範囲の調査を行い、時期差や地域差、階層差の有無を検討することを目的とする。これまで墳墓から出土する赤色顔料の使用方法については、塗布や散布、敷かれたなどと言われることがあるが、使用対象が木棺や遺骸といった有機物であることが多く、実際にはその使用方法は明確では無い。ここでは、石棺や甕棺などの腐朽しない棺を主な調査対象とし、これらの点について検討を行うものである。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 【主な成果】 これまで赤色顔料使用の様相が不明であった日本列島東半部の前期古墳について調査を実施し、少なくとも新潟北部～栃木北部ライン以南では、墳墓内での朱とベンガラを使い分けが畿内とほぼ同時期に始まっていることが実証された。また、朱については、古墳を飾る壺に装飾を目的として塗布されたものがあること、ベンガラについては漆工品の下地として使用されているものもあること、青銅鏡や銅鏝に装飾目的で塗布されているものがあることなど、西日本の当該期ではあまり知られていないような使用方法も散見され、赤色顔料使用に多様性があることも判明した。	
【年度実績概要】 ・本年度は、主に中四国地域を対象とする予定であったが、前年度に赤色顔料の塗布・付着が明瞭な木棺の痕跡が残る城の山古墳（新潟県胎内市）の現地調査に参加したことから、本年度はその報告書の準備も兼ねて赤色顔料使用の様相が不明であった日本列島東半部の古墳を中心に調査を行った。 ・調査を行った古墳は、福井 5、富山 6、新潟 3、静岡 5、長野 3、神奈川 1、千葉 4、群馬 4、栃木 5、福島 6 の合計 42 遺跡である。 ・調査の結果、少なくとも新潟北部～栃木北部ライン以南では、墳墓内での朱とベンガラを使い分けが畿内とほぼ同時期の古墳時代前期中頃には始まっていることが実証された。 ・福井県にある前期後半の古墳では、石棺内に朱が塗布され、石室壁面にはベンガラが塗布されていた。この赤色顔料の使い分けについては、北部九州や讃岐の初現期の石棺を持つ古墳にも共通しており、大変興味深い現象である。	
 群馬県埋蔵文化財調査事業団での調査風景	
【実績値】 ・調査件数 42 遺跡（福井 5、富山 6、新潟 3、静岡 5、長野 3、神奈川 1、千葉 4、群馬 4、栃木 5、福島 6） ・学会参加数 1 回	
【備考】 ・ポスター発表 「出土ベンガラ中に含まれているパイプ状ベンガラ粒子の認定方法について」日本文化財科学会第 31 回大会（26 年 7 月 5 日～6 日）	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：これまで遺物として認識されてこなかった赤色顔料について、基礎的な調査を行うことが求められている。 独創性：出土赤色顔料を考古学的に検討する研究は、ほとんど行われていないため独創的な研究であると言える。 発展性：出土赤色顔料は世界各国、色々な時期に認められることから、今後は世界的視野からの検討も必要である 効率性：出土状態の検討や顕微鏡観察は、長時間の観察が必要であるが、これまでの経験を生かし効率的に調査を実施することができた。 継続性：資料保管場所を訪問し、顕微鏡により調査を行うなど調査内容の質を保ちながら調査を継続している。 正確性：顕微鏡による付着状況の観察や赤色顔料粒子の観察も行っており、調査結果は極めて正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会参加数				
評価	B	B				
判定理由 調査件数：これだけ調査数があれば、十分に分布を検討できる。 学会参加数：数は少ないが、会員数の最も多い文化財科学関連の学会に参加しており、適切な参加数と考えられる。						

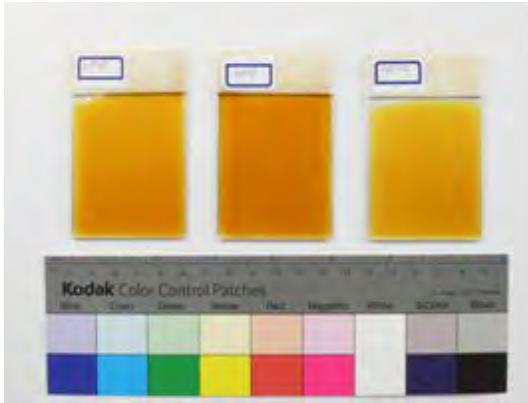
3. 総合的評価

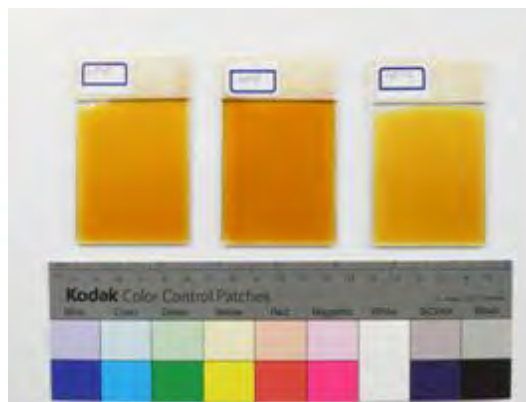
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費による4ヵ年継続事業の2年目であるが、様相が不明確であった列島東半において、状況が把握できたことは大きな成果である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画に若干の変更を行いつつ研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。 次年度は、今回調査を行えなかった中国・四国地方での調査を行い、次々年度に繋げたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8)酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成（学術研究助成基金助成金） （(5)～⑥）		
【事業概要】 近年の研究結果から、文化財建造物には漆や膠以外に油性塗料が用いられていたことがわかっている。一方で、塗料の性質に関する研究は他の二つの塗料と比べ十分であるとはいえない。本研究は、より実用性の高い油性塗料の開発を目的とした調査研究である。具体的には、建中寺の塗装材料調査と、油性塗料の重合乾燥と塗膜の形成実験を行う。本年は特に酸化促進剤の添加量による塗膜の重合乾燥の速度とそれに伴う諸変化を検証する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫
【スタッフ】			
【主な成果】 (1)油性塗料で施工された可能性が指摘されていた建中寺や薬師寺などの文化財建造物について塗装材料調査を行った。その結果、赤色などの同一色で施工された部材について複数の色料、展色剤が用いられていたことを明らかにした。 (2)塗膜の形成状況に関する知見を得るため、木材片を支持体として調査研究を行った。その結果、酸化促進剤を添加しなかった塗料は重合乾燥に非常に長い時間がかかり、表面に近い部位のみ膜が形成されることを明らかにした。			
【年度実績概要】 (1)・文化財建造物の塗装材料調査については、建中寺文化財建造物の塗装材料調査を行った。その結果、赤色塗料において異なる三種類の色料（2種類の酸化鉄系赤色顔料、水銀朱）が使用され、展色剤についても少なくとも2種類（漆、膠）の材料を使い分けて塗装していたことがわかった。また、この結果について、建中寺で講演会を行った。（26年10月23日） ・薬師寺東塔の部材には赤色塗料が残存しており、材料調査を行った。その結果、酸化鉄系赤色顔料が使用された部材と、酸化鉄系赤色顔料と鉛（鉛丹）を使用した部材があることを明らかにした。 (2)・油性塗料の塗装実験を行った。酸化促進剤（一酸化鉛）の添加量としては、乾性油に対する重量比で0%、0.1%、1%、5%、10%とした。その結果、添加量0%では支持体への塗布から6ヶ月経過後、表面の重合乾燥は見られたが、塗り層の内部から支持体直上にかけて塗料はゲル状のままであった。 ・添加量1%では塗布数日で塗膜表面の重合乾燥が顕著に見られ、支持体への塗布から6ヶ月経過後、内部から支持体直上についても重合乾燥が認められた。添加量5%、10%では塗布数時間で塗膜表面の重合乾燥が顕著に見られ、特に添加量10%では1ヶ月経過後、表面から支持体直上まで重合乾燥が認められた。添加量10%では急速な重合乾燥の影響によって塗膜の一部にクラックが発生した。 ・上記の結果から、酸化促進剤を添加しなかった塗料は重合乾燥に非常に長い時間がかかり、表面は塗膜が形成されても、内部の重合乾燥は不十分であることがわかった。また酸化促進剤の添加量によっては、重合乾燥が早すぎるため塗膜の収縮が発生し塗り層全体に細かなクラックが発生することがわかった。			
 油系塗料の試験片			
【実績値】 発表件数：2件（学会発表1回（①）、講演会1回（②）） 実験回数：36回			
【備考】 発表 ① 金旻貞 赤田昌倫 高妻洋成 鈴木智大 馬場宏道 「薬師寺東塔に使用された彩色材料の分析」日本文化財科学会第31回大会 25年7月5～6日） ② 赤田昌倫 「建中寺文化財建造物の塗装材料調査」26年10月23日			



油性塗料の試験片

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：油系塗料で施工された文化財建造物の修理時例はほとんどなく、塗膜の劣化に対する処置方法についても一様ではない。そこで、油系塗料が確認された寺社で現状の塗膜の状態調査を行った。 独創性：油性塗料の塗膜形成において最も影響があると考えられる乾燥促進剤に着目し、実験を行った。その結果、乾性油に対する乾燥促進剤の添加量に伴って塗膜形成が変化することを明らかにした。 発展性：本研究の成果は、油性塗料を用いられた可能性がある文化財建造物は日本国内でも多いと考えられていること、また密仏絵など油性塗料を用いた文化財全般にも発展することが期待される。 効率性：実験試料作製には塗料の攪拌機や定厚塗膜作製機を購入した結果、効率よく研究を進めることができた。 継続性：実験は来年度まで継続して行うが、現在までに得られた結果は塗膜形成に関する重要な知見を含んでいる。 正確性：一つの検証項目につき複数の実験サンプルで実験していること、重合乾燥環境に対する数値を定めていることから、本実験結果の正確性は高いと考えられる。						

2. 定量的評価

観点	学会発表	講演会				
評価	A	B				
判定理由 学会発表：学会発表と講演会を行い、目標（年1件以上）を達成できた。 講演会：計画にはなかったが、一般の方に文化財建造物の塗装の重要性について周知してもらうことに貢献した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実験サンプルを作製し、乾燥作業を行っており、本年は経過観察中である。ただし、色調変化の調査や成分変化に対する検証は随時行っている。次年度は塗膜形成状態が良好だったサンプルと最も悪かったサンプルについて、乾燥作業の温湿度など重合乾燥条件を変更することによる塗膜形成を検証するため追加実験を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	酸化促進剤を添加した各試料作製を完了させ、現在は試料の経過観察行っていることから、本年の研究計画を満たすことができたといえる。次年度も継続して暴露実験と各種分析調査を行う予定である。学会発表と講演会を行っており、中期計画に沿った結果の公開を行っている。次年度も経過観察を継続しつつ、各種分析結果について発表する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9) みんなでまもるミュージアム（文化庁文化芸術振興費補助金）（(5)-(6)）
【事業概要】 未曾有の大災害や地域の文化財の盗難が懸念されている昨今、館同士のみならず地域と一体となって対策を講じ危機を乗り越える強さを備えたミュージアム機能の強化が求められている。九州山口ミュージアム連携事業実行委員会（事務局：長崎県文化振興課）・各県立拠点館・地域市民と連携協力し、各地のミュージアムが地域の文化・文化財をまもる拠点となるように、関係職員と地域市民が共に防災危機管理能力を高めることのできる研修プログラムを策定する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、西村栄造（副館長）、大西浩二（副館長）、井上洋一（部長）、阿部勝（総務課長）、臺信祐爾（企画課長）、今津節生（博物館科学課長）、富坂賢（文化財課長）、田端幸朋（広報課長）、楠井隆志（展示課長）、篠崎孝司（交流課長）、大石淳子（総務課長補佐）、井上裕介（総務課財務係長）、河北絵里子（学芸部事務補佐員）、野上真理子（学芸部事務補佐員）	
【主な成果】 (1) 事業計画検討実施及び教訓と課題を共有するための事例発表を含む全体合同会議を開催し、被災地の施設・団体と防災対策の先進館において調査・情報収集を行い、研修プログラムの一部を試行した。 (2) 災害の内容や地域性を考慮した研修プログラム策定のための基礎情報を共有した。 (3) 事例発表と調査で得た情報を活かした博物館職員及び市民が共に学ぶ研修プログラムの一部を試行し、事業報告書を刊行した。	
【年度実績概要】 (1) 全体合同会議（協力者会議・ワーキング会議・実行委員会の合同会議）にて多数の事例発表から文化財防災危機管理にのっての教訓と課題を学んだ。 ・第1回 事例発表 3件：阪神淡路大震災と文化財の防災・危機管理について（6月19日：49名） ・第2回 事例発表 10件：文化財の防災・危機管理に関する取り組み（8月11～12日：68名） ・第3回 事例発表 12件：文化財の防災・危機管理に関する取り組み（1月21～22日：74名） (2) 被災地及び防災先進地の調査情報収集により、教訓と課題をより深く体験した。 ・第1回関西地方：阪神大震災の教訓とその後の施設整備や市民参加の保全活動を学ぶ（10月16～18日：22名） ・第2回東海地方：東海地震に備えた美術館の防災対策を学び実地訓練に参加（10月20～21日：22名） ・第3回東北地方：東日本大震災の被災施設と文化財の現況及び市民参加の保全活動を学ぶ（11月24～26日：23名） (3) 繰り返しの実施と工夫を要する市民向けワークショップ関係の研修プログラムについて、先行的に試行し、改善点を抽出することができた。（2月25-26日：34名） ○調査情報収集レポート及び事例発表の記録（市民ボランティアによる書き起こし）を報告書として刊行した。	
 市民参加の保全活動：関西地方	
【実績値】 ・「みんなでまもるミュージアム」事業全体合同会議 3回、出席者計191名 ・事例発表件数 25件 ・調査情報収集 3回 計67名 ・試行研修会 開催回数、参加者数・・・・・・1回 34名 ・「みんなでまもるミュージアム」事業報告書 1冊 600部	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：災害多発の時代、地域の文化・文化財を守り継ぐために博物館は文化財の防災危機管理能力を高める必要がある。 独創性：九州山口8県との連携協力及び市民の参加を得ることで、地域ネットワーク構築を強力にすすめることができた。 発展性：国立博物館を核として複数の自治体が参画する文化・文化財にかかる地域連携協力事業の可能性を開拓した。 効率性：事業実施期間中、人的にも設備的にも常にスムーズな運営を行うことができた。 継続性：3ヵ年計画の初年度事業として、適切な実施内容であり、順調に継続し、目的を達成する見通しを得た。 正確性：定数事業は計画通りに実施し、協力により成立する事例報告件数では予定をはるかに超え内容充実が達成された。						

2. 定量的評価

観点	会議報告会開催回数・出席者数	事例報告件数	情報収集実施回数・参加者数	試行研修会開催回数・参加者数	報告書刊行
評価	B	B	B	B	B
判定理由 会議報告会開催回数・出席者数：計画通り実施することができた。 事例発表件数：当初計画を大きく超える発表の協力を得ることができた。 調査情報収集・参加者数：参加者数が予定を超えたが、内容は計画通り実施することができた。 試行研修会開催回数・参加者数：参加者数が予定を超えたが、内容は計画通り実施できた。 報告書：計画通り刊行することができた。					

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度は、地域の文化・文化財を守り継ぐための防災・危機管理研修プログラム策定の基礎情報を順調に収集・活用することができた。国立博物館を核に広域にわたる地域連携によるネットワーク構築強化を進めた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、計画に沿って順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果が活用されるように進展させたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-1

(様式1)

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究((5)-(7))	
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。		
【担当部課】	学芸企画部	
【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青	
【スタッフ】 矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員）		
【主な成果】		
27年1月2日にリニューアルオープンした黒田記念館のため、東博から黒田記念館への＜案内・誘導サイン＞及び＜展示解説サイン＞について、多国語（4カ国語：日英中韓、2ヶ国語：日英）で整備を行った。 - 黒田記念館の開館準備として、展示室・資料室・映像室・ショップ・トイレ・ホール等について、建築空間の質的調和を考慮した、木製家具補修・新規家具什器・カーテン・ロッカー・カサ立て及び照明がデザインされた。 - 平成館改修工事に伴い、本館地下ラウンジへ移設された＜ポスター掲示板＞を新設し、東博及び他館での展覧会等とともに憩いのスペースとなるようした。 - 東洋館の入口に東洋館名称「内照式サイン」と「懸垂バナー」を設置し、東洋館の認知度アップをはかった。2015年3月には懸垂バナーと獅子、計4ヶ所にLED スポット照明が追加設置された。		
【年度実績概要】		
- 他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例調査に加え、さらに地方博物館・美術館における環境デザインを調査し、特に今年度においては寄贈者顕彰コーナーの参考とした。 - 調査先／韓国国立中央博物館、景福宮古宮博物館（ソウル）、シュテューデル美術館、シルン美術館（フランクフルト）、喜多方市立美術館（福島）、アムステルダム博物館、アムステルダム国立美術館、ゴッホ美術館（アムステルダム）、京都国立博物館 平成知新館（京都）、渋谷区立松涛美術館（東京）等		
		
黒田記念館・黒田記念室 ＜解説サイン、家具什器＞	本館地下ラウンジ・ポスター掲示板 ＜掲示板、ポスター掲出用アタリ＞	東洋館入口のサイン ＜内照式館名サイン・懸垂式バナー＞
【実績値】		
研究発表件数 4回		
《展示と照明》講演、ワークショップ 於・ソウル 古宮博物館、 《トーハクのデザイン》千葉県立美術館、 - 照明デザイン国際セミナー《ミュージアムライティングの今と未来》トークセッション 他		
論文等掲載数 1回		
日韓美術解剖学会シンポジウムレジュメ（「博物館の展示照明と“顔”」）		
【備考】		

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：当館の来館者数拡大が事業目標とされる中で、より解り易い案内サインの整備が課題である。2015年1月2日「黒田記念館」開館に伴うサイン整備にあたり、様々なサインに関わる検討がなされた。 発展性：平成16年度の本館リニューアルから、プロジェクトごとに館内サイン・展示解説の充実がなされてきた。一方デジタルサイネージやデジタルコンテンツ等の進歩に対応しつつデザインを整備しつつある。 効率性：黒田記念館では、プロジェクトによる黒田清輝スライドショーや、タッチパネルモニタによる黒田清輝のコンテンツ等、黒田清輝に関わる情報データベースの外部への公開・情報発信が可能となる予定である。 継続性：東博の顔となるべき正門プラザでの情報提供を核としつつ、継続的な最新の技術面・デザイン面での館内サインへの展開や、デジタルサイネージ導入、黒田記念館との連携等について更なる調査研究が望まれる。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文等掲載数				
判定	B	B				
判定理由 研究発表件数：全館的な方針に沿って研究を行い、その成果として館内において計画を推進（製作・設置）し、その成果について国内外の事例も見据えつつ、東博での現状分析・課題の発信を行っている。 論文等掲載数：特にLED照明やデジタルサイネージについて、最新の技術的・意匠的な面での調査研究が望まれ、韓国との学会発表・レジュメの中で照明技術・手法について情報交換を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示・公開事業の基本的なメンテナンスは欠かせない一方で、急速な技術的進歩を遂げているサインのデジタル化（デジタルサイネージ）及び画像・映像利用の増進に対応して、展示解説等への応用的デザイン研究を計画的に進めている。 26年度に得られた成果、特に黒田記念館で実施・検証された、サイン掲出におけるコンセプトと、視認性・判読性等の方法論的知見は、現在進行中の「平成館リニューアル」「考古展示室リニューアル」、及び次期「本館リニューアル」へと反映させる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度においては黒田記念館リニューアルオープンの事業を中心に計画通り実施している。 引き続き館内の環境デザインのファシリティ及び質的向上を計画的に行う必要がある。 中期計画との関係では、来る法隆寺宝物館等の設備改修、海外からのお客様増加への対応を念頭に、観覧環境整備を計画的に実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究((5)―⑦)		
【事業概要】			
・総合文化展及びコレクションに密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施。 ・スマートフォン向けアプリ「トーハクナビ」による、来館者への適切な情報並びに豊かな鑑賞体験の提供について調査・研究を実施。その成果をもとに新バージョンを一般公開し、さらにその成果についての調査も実施している。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小林 牧
【スタッフ】			
小山弓弦葉(教育普及室長)、鈴木みどり(ボランティア室長)、浅湊毅(教育講座室長)、藤田知織(教育普及室主任研究員)、神辺知加(教育講座室主任研究員)、川岸瀬里(教育普及室アソシエイトフェロー)、小島有紀子(ボランティア室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
(1)各種教育プログラムの開発と運営に関して、これまでの研究をもとに発表を行った。 ・9月18日 藤田千織 「学校のよりよい利用形態にむけて」(事例発表・ディスカッション) 文化庁第4回ミュージアムエデュケーター研修、シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」 ・27年1月10日 藤田千織 科学研究費による研究「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表 一條彰子) 成果発表・美術科教育学会共同開催			
(2)・特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日 神辺知加)では、来館者にとってのわかりやすさとはなにかについて考察を深めることができた。 ・親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」(6月10日～8月31日 川岸瀬里)では、普段なじみのない仏像作品へのアプローチのしかたを提示することができた。			
(3)トーハクナビは、ISID(電通国際情報サービス)、クウジット社との共同研究で開発し、24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度は、4月に全館をカバーするコースガイドの配信、10月に展示替えに即した作品解説を掲載した「トーハクナビ3.0」へのバージョンアップを実施。また、外国語による情報発信の方法についての調査・研究の結果、人工音声エンジンを導入したシステムを構築した。12月には、これらについてのアンケート調査を実施し、今後の展開についての研究を継続中。			
【年度実績概要】			
(1)各種教育プログラムの開発と運営に関して、これまでの研究をもとに発表を行った。 ・「学校のよりよい利用形態にむけて」(事例発表・ディスカッション) ・9月18日 藤田千織 文化庁第4回ミュージアムエデュケーター研修、シンポジウム「コレクションを活かした鑑賞教育とは」 ・27年1月10日 藤田千織 科学研究費による研究「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表 一條彰子) 成果発表・美術科教育学会共同開催			
(2)・特集「熊めぐり」(4月22日～6月1日 神辺知加)では、来館者にとってのわかりやすさとはなにかについて考察を深めることができた。 ・親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」(6月10日～8月31日 川岸瀬里)では、普段なじみのない仏像作品へのアプローチのしかたを提示することができた。			
(3)トーハクナビは、ISID(電通国際情報サービス)、クウジット社との共同研究で開発し、24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度は、4月に全館をカバーするコースガイドの配信、10月に展示替えに即した作品解説を掲載した「トーハクナビ3.0」へのバージョンアップを実施。また、外国語による情報発信の方法についての調査・研究の結果、人工音声エンジンを導入したシステムを構築した。12月には、これらについてのアンケート調査を実施し、今後の展開についての研究を継続中。			
【実績値】			
研究発表回数 計2回 (参考値) 調査 計3回(特集「熊めぐり」 アンケート調査(4月22日～6月1日)、親と子のギャラリー「仏像のみかた 鎌倉時代編」 アンケート調査(6月10日～8月31日)、「トーハクナビバージョン3.0」 アンケート調査(12月2日～14日 2週間))			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：革新を続ける情報化社会のニーズに対応した情報発信及びプログラムの開発を目指しているため。また、2020年の東京オリンピックに向けて増加することが予想される外国人来館者に対するプログラムの開発を行っているため。 独創性：これまでの伝統文化に関わる展示やプログラムの枠組を超えた柔軟な発想による企画を開発しているため。また、今までの博物館にないサービスの提供を行っているため。 発展性：若年層や外国人など、ターゲットの拡大を図り、それぞれのニーズに対応したサービスの多様化に向けても多くの可能性を示しているため。 効率性：スクールプログラムへのボランティアの活用など人材の有効活用や、情報機器の適切な導入による効率化を図っている。 継続性：コレクションと総合文化展に密接に関連したプログラムを重視することによって、より充実した博物館体験のための施策の継続性が保たれるため。上野地区の連携事業の継続に向けて、各施設との良好な関係を築いているため。						

2. 定量的評価

観点	研究発表回数					
評価	B					
判定理由 研究発表回数： 予定通り、東京国立博物館の教育普及活動の考え方と実践例を多角的に紹介することができたため。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	コレクションを核としたプログラムの調査研究、また、誰でも楽しめる親しみやすい博物館の実現を目指すプログラムの調査研究は、具体的なプログラムの実践を通して前進している。また、これらのプログラムの実施について、教育課研究員およびボランティアが積極的に関与し、来館者への充実した博物館体験の提供において確実な成果を上げている。また、スマートフォン向けアプリの充実により、情報化社会のニーズに応え、さらに外国人向けサービスの向上にも寄与している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館教育に関しては、計画に沿って進行している。 コレクションを核とした教育プログラムにおいて、日本と東洋の伝統文化に関する理解促進を引き続き行うと同時に、多様化する来館者のニーズに対応したよりよい博物館体験の提供を目指して、次年度も取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【スタッフ】 和久井遥（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議機能、貸与管理機能、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。また、様々な調査結果のデータを一括でアップロードする機能を複数実装した。さらに、今後の継続的なシステム改修・改善のため、システム全体のプログラムコードを大幅に整理した。			
【年度実績概要】 ・継続運用 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、随時改善を重ねて一層の機能向上を図った。 ・一括登録機能の実装 館内で行われる列品に関する様々な調査の結果をまとめてデータベース上に反映させるため、CSV ファイルから一括で登録する機能を複数実装した。またこの際、今後新たに同様の機能を実装する場合に迅速に開発を進められるよう、一括登録に関わる箇所をフレームワーク化した。 ・プログラムコードの整理 システムに利用しているサーバソフトウェアやソフトウェアライブラリ等の環境の変化にあわせると同時に、メンテナンス性を向上させるため、プログラムコード全体を見直し、大幅な整理を行った。この結果、コードが削減され全体的の見通しが改善された。特に鑑査会議機能と密接に連動する修理関連機能については、修理に関する手続の変化などを反映する必要からやや煩雑になっていた部分があったが、あらためて業務の内容を精査し、機能的でわかりやすいものとなるよう改善した。			
protoDB ログイン中 admin ログアウト ヘルプ 作品 人物 団体 地名 リスト 平常展 鑑査会議 修理 貸与 水滴データのアップロード 登録 ファイルが選択されていません。 アップロード 収蔵品管理システム（データ一括登録画面）			
【実績値】 収集データ件数 216,933 件 （内訳） 作品データ件数 209,410 件 平常展データ件数 3,740 件 鑑査会議データ件数 78 件 貸与データ件数 1,197 件 修理データ件数 2,508 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：業務に合わせて必要とされる改修・改善を随時行うとともに、新しいソフトウェア環境に適合させている。 独創性：既存のシステムにない総合的な博物館資料情報システムとなっている。 発展性：プログラムの整理により、機能追加・改善がさらに容易となった。 効率性：内製により効率的な開発を行った。 継続性：データ整備の基盤構築として継続的に実施した。 正確性：作品に関する調査結果を随時反映し、データの正確性をさらに向上させた。						

2. 定量的評価

観点	収集データ 件数					
評価	B					
判定理由 収集データ件数：効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れの中で効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品管理システムのさらなる発展・機能向上にむけて、既存システムのプログラムを全体として見直すことができ、将来の作業のための準備としてほぼシステム全体にわたってコードの整理ができた。また、こうした大幅な見直し作業の間も運用を継続し、データ整備の基盤としての役割を果たした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	システムの継続的開発を確実にするためには、既存コードを漸進的に改良することで充分可能であることが明らかとなった。中期計画期間最終年度となる次年度は、業務支援に必要な機能を最終的に確認し、機能面での整合性を整える。特に、ユーザインターフェースに関わる新しい技術の採用や、館内業務システムとのアカウント統合について検討を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 凸版印刷と共同で、ミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する((5)－⑦)		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。 19年度から「国宝 聖徳太子絵伝」「国宝 灌頂幡」「重要文化財 洛中洛外図 舟木本」「土偶」「十一面観音菩薩立像」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアムシアターにおけるコンテンツの公開を実施している。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 伊藤嘉章
【スタッフ】 田良島哲(学芸研究部調査研究課長) 田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長) 後藤健(特任研究員) 小野塚拓造(企画課特別展室アソシエイト・フェロー)			
【主な成果】 (1) 前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した文化財について、ミュージアムシアターのコンテンツ2件を公開した。 (2) 新たに列品1件について新設したX線CTスキャナーを使用して3次元データを取得した。 (3) 既に取得した作品のデータを元にしたコンテンツの内容の修正について監修し、公開した。			
【年度実績概要】 (1) 前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した重要文化財「日本沿海輿地図」について、ミュージアムシアターのコンテンツ「伊能忠敬の日本図」として特集展示に連動して公開した。また、25年度まで保存修復事業を実施した国宝「檜図屏風」について、調査時に取得した高精細画像データをもとに、当館研究員監修のもとでコンテンツ「国宝 檜図屏風」を作成、公開した。 (2) パシェリエンプタハのミイラ(TJ-1835)について、CTスキャナーを使用したデータを取得し、来年度のコンテンツ制作にそなえた。 (3) 作成済みのデータ「土偶」・「洛中洛外図屏風舟木本」をもとにしたコンテンツの内容の修正について監修を行い、特別展に関連した企画として公開された。			
 新コンテンツの素材「国宝檜図屏風」			
【実績値】 データ取得件数 1件 コンテンツ化件数 2件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館の情報化と、より広範な文化財の活用という現在の動向を反映している。 独創性：希少性の高い文化財を素材として、研究員の知見に基づいた他に類例のないコンテンツを制作している。 発展性：多目的に活用できるデータを蓄積している。 効率性：凸版印刷との協業により、効率のよいデータ蓄積を行っている。 継続性：共同研究以来6年を経過し、引き続き積極的な展開を図っている。 正確性：凸版印刷の持つ画像技術の応用により、高精細かつ正確なデータの取得とコンテンツの制作を行っている。						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ化 件数					
判定	B					
判定理由 データ取得件数・コンテンツ化件数：所期のコンテンツ化ができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおりにデータの取得と新コンテンツの公開が行われた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	凸版印刷との共同研究を継続しており、アーカイブの方法も含めた作品データの蓄積と活用を進めるとともに、新シアター向けのコンテンツを公開することができた。引き続き、研究対象の選定と方法について協議を進め、新たな素材に関する研究とデータ及びコンテンツ制作に取り組む。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築(学術研究助成基金助成金)((5)－⑦)		
【事業概要】 聴覚に障がいをもつ児童・生徒の博物館での学習や鑑賞の困難さの特徴を示し、その具体的解決方法としての鑑賞プログラムを構築することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー 川岸瀬里
【スタッフ】			
【主な成果】 聴覚障がいをもつ児童・生徒への特別支援教育についての調査と、国内外の美術館・博物館で行われているバリアフリー化、ユニバーサル化事業の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・聴覚特別支援学校、特殊教育学会、国立特別支援教育総合研究所、聾教育研究会などでの調査、情報収集のほか、特別支援教育研究者や教員、ろう者との意見交換を行った。 ・国内外の美術館・博物館で聴覚障がいに限らず、障がい者に対応しているプログラムや設備、ツールに関する調査、情報収集した。 ・東京国立博物館職員、ボランティアスタッフ、他館教育普及担当者等を対象に研修を計3回行った。 ・聴覚障がい者への対応の遅れと、その解決法について意見交換を行った。 都内調査：サントリー美術館、損保ジャパン東郷青児美術館、国立科学博物館、日本科学未来館			
			
東京国立博物館職員、ボランティアスタッフ等を対象に実施した研修			
【実績値】 美術館等調査回数 3回 特別支援教育施設等調査回数 2回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

自己点検評価調査書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館のユニバーサル化という時代の要請に込えているため。 独創性：これまで注目されてこなかった聴覚障がい者を対象とした、先進的な取組を行っているため。 発展性：今後の展開を視野に入れながら行っているため。 効率性：周知な計画の上に行っているため。 継続性：計画に基づき、情報収集及び検討を重ねているため。 正確性：美術館・博物館だけでなく、特別支援教育の現場と協力し検証しながら進めているため。						

2. 定量的評価

観点	美術館等 調査回数	特別支援教育 施設等調査回数				
判定	C	C				
判定理由 美術館等調査回数・特別支援教育施設等調査回数： 広く情報収集するとともに、意見交換等を通じ、聴覚障がい者の学びに関する新たな視点を提供してきたが、当初の計画よりも訪問調査回数が少なかったため。						

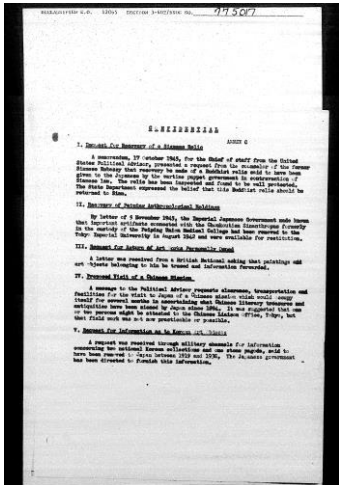
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術館・博物館ではほとんど行われていないという聴覚障がい者によるバリアフリーチェックなどを行い、その結果を職員にむけて公表し、改善点を発表した。外部機関の調査だけでなく、対内的調査を行ったことで東京国立博物館での実践に大きく近づいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、概ね研究計画に沿ったかたちで順調に進められていると考える。来年度も新たな教育手法の有効性を検証し、また有形文化財に関する調査研究の最新の成果を活用しながら、博物館という場をいかした実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。また、特別支援教育やユニバーサルデザインなど、他分野での研究及び実践の成果に積極的にふれ、活用していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 占領期の教育政策における国立博物館の役割に関する調査研究（科学研究費補助金）（5）-⑦)		
【事業概要】 CIE 文書内博物館関連文書から戦後の民主化で国立博物館がどのような役割を果たしたかについての研究。CIE 文書のデータベース構築及び分析を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	教育講座室 神辺 知加
【スタッフ】			
【主な成果】 (1) 国立国会図書館が保管する CIE(民間情報教育局) 文書の約 30,000 件から、『museum』、『exhibit』に関する 400 件の資料を調査し、そのうち 200 件を文字データ化し翻訳を行った。内容を分析し国立博物館関連の資料を発見した。 (2) 国立博物館関連の資料についてデータベースを構築し一般公開する（27 年 3 月公開）			
【年度実績概要】 (1) 約 200 件の翻訳された資料の分析を行った。国立博物館関連資料について東京国立博物館が所蔵する資料との裏づけを行った。現在、結果報告をまとめている。 (2) 約 200 件についてマイクロフィルムから文字おこしをしてデータ化し、翻訳からデータベースを構築するため、翻訳の用語統一を行った。			
			
国立国会図書館に保管されている CIE 文書のマイクロフィルム			
【実績値】 調査件数 CIE(民間情報教育局) 文書 400 件 文字データ化・翻訳 200 件 (参考値) データベース (27 年 3 月公開)			
【備考】			

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館がモノ中心から人中心へ変わろうとしている現在、改めて占領時の資料に分析し、現在の博物館の基盤となった政策について考察することは重要だと考える。 独創性：他機関では、まとめた文書の翻訳及び調査は行われていないため。 発展性：国立博物館のあり方についてその方針が明らかになりつつある。 効率性：より多くの文書内容を確認するため翻訳を専門業者に依頼した。 継続性：新しいキーワードで検索し、まだ目を通していない文書も確認する予定である。 正確性：専門用語は専門書に則った翻訳になっており、より精度の高いものになっている。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	文字データ化・翻訳				
判定	B	B				
判定理由 調査件数：文書総件数 3,000 件のうち、『museum』、『exhibit』に関する文書については全て確認できたため。 文字データ化・翻訳：確認した文書のうち、国立博物館に関係ありそうなもののみ文字データ化し翻訳したが、計画どおり全て行うことができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	膨大な量の CIE 文書の内、1%であるが、個々の文書に目を通し、何が記されているか明らかにしたことは CIE 文書研究初である。さらにマイクロフィルムでしか確認できない文書についてある程度まとめた量での文字データ化と翻訳は大きな進展である。

4. 中期計画の実施状況の確認

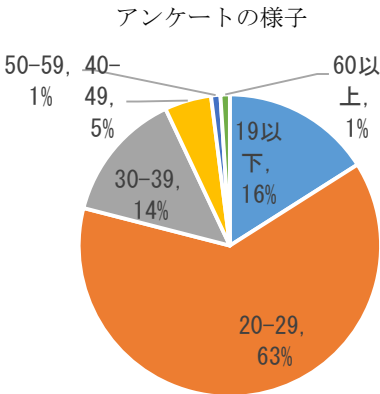
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回の調査で、博物館に直接関係がない文書も多数目にしたが、戦後の教育を分析する上で重要な資料と思われる文書が数多くあった。国立博物館に関する文書の分析研究をまとめた後、それらの文書の分析研究も行いたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究：新来館者の定着に向けた実証的調査分析(科学研究費補助金)((5)-(7))		
【事業概要】本研究は、ミュージアムにおける「鑑賞者開発 (Audience Development)」の実証的な研究である。鑑賞者開発は、芸術団体と人々の関係強化を目指した考え方で、英国を中心に研究・導入されているが、ミュージアムにおける実証研究はいまだ発展途上にある。そこで申請者は、インターネットやモニタリング調査、海外比較等をもとに我が国ミュージアムにおける鑑賞者開発のモデルを構築し、それを実際のミュージアム事業と連動させることにより、ミュージアムにおける鑑賞者開発の先駆的な実証研究になりうると考え、本研究を計画した。研究を通して我が国ミュージアムに最適な鑑賞者開発の在り方を明らかにし、将来的にはミュージアムへの多様化するニーズを満たし、ミュージアムの社会的価値を増進することにつなげていきたい。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	総務部総務課渉外開発担当係長 関谷 泰弘
【スタッフ】			
【主な成果】			
(1)鑑賞者開発を目指したイベント「博物館で野外シネマ」においてパイロット調査を実施した。			
(2)上記調査の分析により、過去の調査からの仮説「非来館者はきっかけがあれば来館する」を実証した。			
(3)全国の博物館・美術館に鑑賞者開発の現状を把握するためのアンケートを実施した。			
(4)今後のミュージアム・イベントと本格調査の方向性が定まった。			
【年度実績概要】			
(1)26年度はデスクリサーチのほか、パイロット調査として、東京国立博物館における鑑賞者開発の一環として実施したイベント「博物館で野外シネマ」(26年10月9日、10日)においてアンケート調査を行い、その分析をした。iPadを使用した出口アンケートでは、2日間で207件を収集することができた。この成果は学術論文として公表する予定である(提出年度内、発表27年度)。また、年度内に国内ミュージアムへ鑑賞者開発に関する調査を行い、その分析をもとに次年度の調査計画を精査する予定である。			
(2)本イベントでは、新たな来館者の開拓として、情報発信をウェブに絞って行ったが、アンケート結果からは、その期待通り、これまでの博物館への来館とは異なり、インターネットやSNSなどを認知経路とする20代以下の来館者が大部分であった。93%が30代以下で50%は学生という結果からは、新たな層の開拓が何らかのきっかけや情報の発信方法の工夫により実現可能であることがうかがえた。また、来館者満足度や再来館意向も軒並み高く、展示とイベントの結びつき次第で新規来館者の獲得とリピーターの醸成は可能であろうことがうかがえた。			
(3)国内のミュージアム338館へのアンケートを実施し、246通の回答を得た(回答率73%)。今後内容を精査し、国内の鑑賞者開発の状況を把握し、次年度の海外調査の前提としたい。			
(4)今回の調査からは、普段のミュージアム利用習慣とイベント参加者のイベント終了後の展示の観覧に有意の相関関係があった。今後のミュージアム・イベントの実施にあたっては、この点に留意するとともに、いかにイベント参加者に展示に関心を持ってもらえるかという視点を持ちながら企画していきたい。また、本格調査に当たっては、国内外へのミュージアムへの聞き取り項目としてセグメント設定におけるミュージアム利用習慣の可否を確認したい。			
【実績値】			
イベント参加者サンプル数 207件			
国内ミュージアムアンケートサンプル数 246件			
(参考値)「博物館で野外シネマ」来場者数8,600人			
(参考値)「博物館で野外シネマ」アンケート集計数207件			
(参考値)国内のミュージアムへの鑑賞者開発に関するアンケート回答数246件(送付先338件)			
【備考】			



アンケートの様子

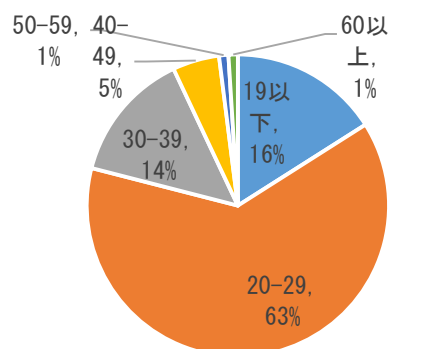


年代	割合
19以下	16%
20-29	63%
30-39	14%
40-49	5%
50-59	1%
60以上	1%

「博物館で野外シネマ」来場者の年代
(n=207)



アンケートの様子



「博物館で野外シネマ」来場者の年代
(n=207)

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：我が国において鑑賞者開発に関する調査研究は僅少であり、補助金の削減など、ミュージアムにおける社会的信認が揺らいでいる昨今においては、新たな層を開拓し、より幅広い層に門戸を開くための研究である本研究は重要である。 独創性：我が国における鑑賞者開発における研究はほとんどない。海外においても事例は非常に限られており、ミュージアムにおいてはまだまだ発展途上にある。我が国のミュージアムの事例を積み上げることは新たな研究といえ、新規性、卓越性があるといえる。 発展性：我が国ミュージアムにおける研究は我が国以外、ミュージアム以外のどのようなアート・マネジメントにおいても応用可能である。 効率性：「博物館で野外シネマ」の実施は科学研究費申請時には未確定であったので、26年度の予定には入れていなかったが、実施可能となったため、急遽研究スケジュールを見直してイベントの調査が実現できるように調整した。そのため、調査の一部に不備があるなど問題があったが、調整してなんとか順調に実施することができた。 継続性：次年度の研究に向けた論考がされており、継続性は担保されている。 正確性：統計ソフトを使用し、その数値の有意性を検証しながら調査を進めている。						

2. 定量的評価

観点	イベント参加者アンケートサンプル数	国内ミュージアムアンケートサンプル数				
評価	A	A				
判定理由 イベント参加者サンプル数：100件の目標サンプル数に対し、207件回収できた。 国内ミュージアムアンケートサンプル数：100件の目標サンプル数に対し、246件回収できた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は研究初年度ということもあり、研究構想段階では想定されていないことも発生した。そのため、研究計画を一部変更することとなったが、鑑賞者開発に関する意義のある事業が実施でき、その結果を調査することができたため、B判定とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度は3ヵ年計画の初年度であり、次年度以降につながる調査を実施することができた。次年度は、この成果を踏まえて、より踏み込んだ調査を実施することができるため、研究は順調に達成していると判断し、B判定とした。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財を活用した効果的な展示や教育活動等に関する調査・研究		
プロジェクト名称	8) 藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5) -⑦)		
【事業概要】 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する藤ノ木古墳出土品をはじめ11件(3000点以上)の国宝等国指定文化財を対象に、照度・大気・振動・温湿度等の展示・収蔵環境の調査と非接触高精度三次元形状計測及び透過X線撮影検査による微細物理的検査との相関性について研究し、適正保管・管理・公開を促進するための計画の指針(試案)を検討する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室 主任研究員 品川欣也
【スタッフ】 今尾文昭(奈良県立橿原考古学研究所調査課 課長)			
【主な成果】 (1) 藤ノ木古墳出土品(金銅製鞍金具・龍文飾金具)の輸送中における振動の記録と輸送前後の形状変化の比較検討。 (2) 輸送中における作品の振動に関する基礎データの集積を行うことができた。また輸送前後の形状比較のために三次元計測を行うことでその計測データを得ることができた。 (3) 今後の館内での作品移動や特別展などの貸出に伴う輸送について安全で適正な取扱や輸送方法を確立するための見通しと問題点が明らかになった。また三次元計測によって得られたデータによって、展示に伴う支持具の作成や輸送のための安定台の作成に反映させることができる。			
【年度実績概要】 (1) 橿原考古学研究所にて作品の輸送に先立つ事前調査を行った(26年9月10日)。また日本国宝展に伴って当該作品の借用時輸送(9月25日)、展示(10月10日)、撤収(12月8日)、返却時輸送(12月17日)を行い、輸送時の振動について記録を行った。 (2) 作品の保存状態ならびに輸送の際に梱包方法や輸送用箱、展示方法についての知見を得た。日本国宝展の出品に伴う輸送時の振動に関する基礎データの集めることができた。 (3) 輸送前後の形状変化の比較結果については検討部分が残るが、この検討で得られた三次元計測データを活用して奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にて特別陳列「三次元で“作る”！藤ノ木古墳の国宝・馬具」(27年2月7日～3月22日)が開催された。			
 梱包風景  輸送箱内の様子と振動計			
【実績値】 調査 2回 打ち合わせ 5回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：日本各地の博物館・美術館で数多くの展覧会が開催され、頻繁に作品が輸送されている現状がある。 独創性：輸送時の振動が記録されることは従来もあったが、輸送前後の形状の細かな比較検討によって、振動による物的影響の評価を行う点に独自性がある。 発展性：輸送前後の形状の細かな比較検討はまだ始まったばかりのため検討事例は少ないものの、輸送方法や距離の検討、作品に蓄積される振動疲労に対して一定の基準をもって評価できる可能が見えてきたといえる。 効率性：研究期間中の特別展の機会をうまく利用して、輸送前後の形状計測や輸送時の振動計測を行うことができた。 継続性：今後展覧会に出品されるごとに基礎データが蓄積され、比較検討の蓋然性が高くなっていくと考える。 正確性：形状計測は三次元計測データ、振動計を用いた振動記録のため客観性が高い。						

2. 定量的評価

観点	調査	打ち合わせ				
評価	B	B				
判定理由 調査：事前及び事後と適切な機会に調査を行うことができた。 打ち合わせ：事前・輸送前・展示・撤収・輸送後と適切な機会に調査を行うことができた。						

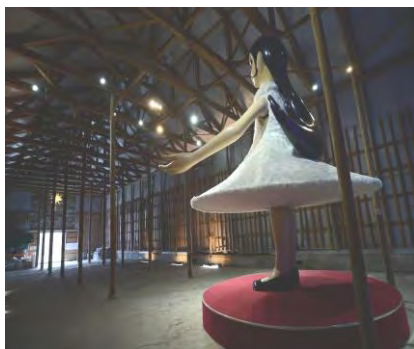
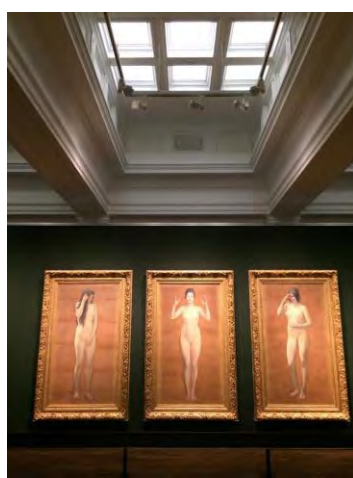
3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の遂行が十分にでき、計測方法や記録の蓄積に加えて、その結果に対する一定の議論ができた。合せて成果の一部展示という形で公表できた。次年度は計画に基づいて研究を実施し、より一層の成果の公開を進められるようにする。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	三ヵ年の研究計画の二年目にあたる本年度は、計画通りに研究を遂行できた。来年度はこれを受けて、計測や比較検討のより一層の効率化や成果の公表に比重を置いて研究を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開（科学研究補助金）（(5)～(7)）		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の美術解剖学関連資料について調査を行い、我が国における美術解剖学の導入及び教育方法を位置付ける過程を明らかにする。さらにこれら資料の公開を目的として特集陳列を実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 宮永美知代（東京藝術大学大学院美術教育 美術解剖学Ⅱ 助教・客員研究員）			
【主な成果】 東京国立博物館所蔵の美術解剖学関係資料、特に森鷗外・久米桂一郎・黒田清輝に関する資料調査を、24 年度より継続して行っている。			
【年度実績概要】			
・他館における資料調査 26 年 6 月 17 日『バレエ・リュス展』（国立新美術館）において、身体と衣服に関する資料の展示調査を行った。 26 年 8 月 18 日『黒田清輝展』（京都文化博物館）において、解剖学関連等資料の展示調査を行った。 26 年 10 月 13 日『サン・シスター』の展示（喜多方・石蔵）において人体彫刻の照明手法についてした。 26 年 10 月 16 日 特別展『国宝 醍醐寺展』（渋谷区立松濤美術館） 調査内容：「国宝 絵因果経」等の日本美術における人体の表現に関する資料及び作品等の展示方法について 26 年 10 月 16 日『菩薩半跏像』（韓国国立中央博物館）の身体表現に関する作品資料の展示方法について			
・館内での資料調査 26 年 12 月 黒田清輝筆『智・感・情』（黒田記念館）の展示・照明調整に際し、資料の展示調査研究を行った。 26 年 8 月～27 年 3 月 黒田の滞欧時代のものと思われる「美術解剖学ノート」の翻刻を行った。 久米美術館所蔵の美術解剖学関連ノート・スケッチ・メモ（コピー）について整理を行った。			
 『サン・シスター』の展示 （喜多方・石蔵）  『菩薩半跏像』の展示 （韓国国立中央博物館）  『智・感・情』の展示 （東博・黒田記念館）			
【実績値】 資料調査回数 7 回(内他館 5 回、館内 2 回) (参考値) 研究発表件数 1 件(①)			
【備考】 研究発表 ①26 年月 12 日 15 日(月) 「韓日 美術解剖学 シンポジウム」にて、『博物館の展示照明と“顔” ―日本の仏像とギリシャ彫刻にみる光の東西比較―』について発表を行った。			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：森鷗外・黒田清輝・久米桂一郎がドイツ・フランスから移入した「美術解剖学」に関わる基礎資料が、歴史資料として当館（東京国立博物館と黒田記念館）に保管されており、総合的に調査する事が求められている。 発展性：科研のテーマであるドイツにおける教育的関連を研究する必要があるが、特にドイツや東京美術学校と関係の深い森鷗外関係資料との関連性について発展することも視野に置いている。 効率性：黒田清輝と同時期にフランスに学んだ久米桂一郎に関わる資料を保管する久米美術館所蔵資料と並行して調査研究することにより、より効率的に今後も新たな知見が得られることが考えられる。 継続性：昨年度に引き続き、資料紹介論文・展示デザインの上で、より広い対象に公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	資料調査回数					
判定	B					
判定理由 資料調査回数：当初の計画通り資料調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術解剖学関連資料は現在「館史資料」の位置付けで、東京国立博物館所蔵の列品として保管されている。これらを横断的総合的に研究する必要があると、24年度に特集陳列企画としてまとめて公開する機会を得た事は意義深いことであった。25年度は「美術解剖学ノート」の翻刻・翻訳に着手し、引き続き26年度も作業を進めており、次年度以降その成果を『MUSEUM』等研究誌にて公開することを計画している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前年度までの成果をもとに未整理の資料を分類し、公開機会および新規研究費等獲得に向けて研究をすすめている。また次年度は東京藝大 宮永助教との共同研究まとめとして東博研究誌『MUSEUM』への成果発表を目標としている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	10) 文化財管理における美術品用語辞典の作成（科学研究費補助金）（(5)-(7)）					
【事業概要】 本研究は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成することを目的とするものである。						
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二			
【スタッフ】 河内晋平（東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手）、原田一敏（東京藝術大学大学美術館 教授）						
【主な成果】 文化財に関する情報を扱う施設から収集した用語データを整理、体系化した。特に分担者は、データの整理や公開方法について検討した。						
【年度実績概要】 文化庁が公開している国宝・重要文化財リストと指定文化財目録、東京国立博物館が館内で使用している収蔵品データベース、東京藝術大学大学美術館の収蔵品データベースそれぞれから、絵画、書跡、工芸の分野を中心に、名称や品質形状といったカテゴリの用語をデータとして収集し、それら収集した用語について整理し、体系化を行った。整理にあたってはWiki をベースとしたデータベースに用語データを登録した上で、Wiki のシステム上で作業を行った。						
	RDF/RDFS	DCterms	SKOS	その他	型	メモ
データタイプ	rdfs:type				リソース	
概念階層			skos:ConceptScheme skos:Concept		リソース	ConceptScheme > skos:prefLabel > "日本画"@ja
分野				gd:category	リソース	
識別子(ID)		dcterms:identifier			リテラル	
用語(日本語)	rdfs:label@ja	dcterms:title@ja	skos:prefLabel@ja		リテラル	
用語(ひらがな)	rdfs:label@ja-Hira	dcterms:title@ja-Hira	skos:prefLabel@ja-Hira		リテラル	
用語(ローマ字)	rdfs:label@ja-Latn	dcterms:title@ja-Latn	skos:prefLabel@ja-Latn		リテラル	
解説文(日本語)	rdfs:comment@ja	dcterms:description@ja	skos:definition@ja		リテラル	
上位概念			skos:broader		リソース	
下位概念			skos:narrower		リソース	
関連			skos:related		リソース	
対義語				gd:antonym	リソース	
権利保持者		dcterms:rightsHolder			リソース	
利用ライセンス				cc:license	リソース	
バージョン				gd:version	リテラル	
リファレンス(原本)		dcterms:reference			リソース	
画像				foaf:image	リソース	
用語のためのメタデータ案						
【実績値】 整理用語件数：47,479 件						
【備考】						

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：用語の典拠情報を提供する手法は、近年求められているデジタルアーカイブの横断的利用の基盤となる。 独創性：同様の典拠データは国内では前例がない。 発展性：単なる用語集ではなく、データとして提供することにより様々な応用が可能である。 効率性：作業分担及びWikiを活用した作業基盤により効率的に進めることができた。 継続性：Wikiを利用した作業基盤により、作業の履歴を把握できるようにすることで、継続性を確保した。 正確性：分担者が互いに情報交換することで正確を期した。						

2. 定量的評価

観点	整理用語件数					
評価	B					
判定理由 整理用語件数：収集した用語データについて網羅的に整理した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	典拠情報の整備に向けて着実にデータを整理している。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財情報の整備のための基盤として期待される典拠情報の分析と整理が着実に進められた。また整理作業のためにWikiをベースとしたデータベースを導入し、効率的な作業環境を整えた。次年度は整備したデータを公開する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 有形文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発（科学研究費補助金）（(5)-⑦）		
【事業概要】 現在国内外で行われている鑑賞教育の理論と方法を整理した上で、学習指導要領に関連づけた鑑賞プログラムを、国立美術館・博物館の所蔵作品から分野別に作成することを目的とした共同研究である。これらが各地の美術館や学校で参照されることによって、全国的な鑑賞教育の普及に貢献できると考える。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室 主任研究員 藤田千織
【スタッフ】 一條彰子（東京国立近代美術館主任研究員）、上野行一（帝京科学大学教授）、奥村高明（聖徳大学教授）、岡田京子（国立教育政策研究所調査官）、寺島洋子（国立西洋美術館主任研究員）、今井陽子（東京国立近代美術館工芸館研究員）、細谷美宇（東京国立近代美術館研究補佐員）			
【主な成果】 北米及びオーストラリアの美術館における鑑賞教育プログラムの調査を実施した。これにより、鑑賞教育プログラムと各美術館・博物館の所蔵作品、およびスタンダード（学習指導要領）との関係性について分析を行うことができた。 また、研究に参加している中の数館で実践（研究授業）を行い、相互行為分析と発達段階別の検証を行った。 国内外の鑑賞プログラムの事例調査と、国立美術館・博物館の所蔵作品を使って行った鑑賞プログラムの実践・分析結果をとりまとめ、研究報告会を開催した。さらにこれをウェブサイトにて報告した。			
【年度実績概要】 25年度に行った オーストラリアの美術館における鑑賞教育プログラムの調査結果について、鑑賞教育プログラムと各美術館・博物館の所蔵作品、及び学習指導要領との関係性という観点で学会発表（日本美術教育研究発表会：26年10月19日・美術科教育学会：27年3月27・28日）し、論文を提出（日本美術教育研究論集）した。共同研究メンバーの一條彰子、寺島洋子による発表。論文のコレクション部分は一條、寺島が、学習スタンダードについては 岡田京子が主にとりまとめた。高校2・3年生に向けて美術館が行う専門教育や、アボリジニなど先住民族の文化理解など、同国の特徴的な美術館教育についての具体的な実践例を知ることができた。 国内外の鑑賞プログラムの事例調査と、国立美術館・博物館の所蔵作品を使って行った鑑賞プログラムの実践・分析結果をとりまとめ、研究報告会を開催した。国内外の美術館において、学習スタンダード（学習指導要領）がどのように鑑賞プログラムに反映されているのかが明らかになった。また、グッゲンハイム美術館のギャラリートーク体験では、鑑賞プログラムを作成する際にコレクションから作品数点を選定する際のテーマ設定、ギャラリートークの手法などについて具体的に知ることができた。			
◆コレクションと鑑賞教育〈1〉「オーストラリアの美術館教育の現場から」（メルボルン・ヴィクトリア国立美術館 教育部長、ゲーナ・パネビエンコ氏を招いて）26年9月21日（日） 国立西洋美術館			
◆コレクションと鑑賞教育〈2〉「グッゲンハイム美術館のギャラリートーク体験」（グッゲンハイム美術館教育部ディレクター シャロン・バツスキー氏によるスライドトークとレクチャー）27年1月9日（金） 東京国立近代美術館			
◆コレクションと鑑賞教育〈3〉「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育の展開」（ウェブサイト「鑑賞教育コレクションmap」成果報告、グッゲンハイム美術館教育部ディレクター シャロン・バツスキー氏による講演、シンポジウム「コレクションを生かした鑑賞教育とは～国内外の美術館の実践から～」）27年1月10日（土） 国立西洋美術館（右写真→）			
ウェブサイト「鑑賞教育コレクションmap」を作成した。共同研究に参加した国立美術館・博物館の所蔵作品を鑑賞教育に活用する際のヒントとなる視点や情報を、学習指導要領や対象年齢、館の種別など様々な観点から検索し、プログラムを組み立てることができるよう作成された。			
【実績値】 調査 1件 学会発表 2件 研究報告会（含シンポジウム） 3件① ウェブサイト制作 1件			
【備考】 ①シンポジウム「コレクションを生かした鑑賞教育とは～国内外の美術館の実践から～」（26年1月10日）において、東京国立博物館での鑑賞プログラム事例報告、シンポジウム登壇。			



【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：美術館・博物館が学校と連携して行う鑑賞教育については、指導方法や作品選択について体系化された研究がまだ少なく、学校教育の観点からの検証も進んでいないため。 独創性：美術館・博物館が学校と連携して行う鑑賞教育については、指導要領や教科書に沿った作品選定の指針はあっても、それぞれの館のコレクションの種別や性質の側から鑑賞指導方法を考える提案は少なかったため。 発展性：国立美術館・博物館（東京国立近代美術館、同工芸館、国立西洋美術館、東京国立博物館）の所蔵作品を用いることで、さまざまな分野を網羅し、全国の美術館・博物館・学校にとって身近なコレクションに置き換えて鑑賞プログラムを考えることができるため。 効率性：内容の深度と人数規模にバリエーションをつけた研究報告会の複数回開催及びウェブサイトによって遠隔地の美術館・博物館・学校からも参照できる成果を発表したことで効率よく成果をあげている。 継続性：科学研究費としては最終年度となるが、成果をまとめる冊子作成（予定）及びウェブサイトを作成したことで、今後も研究内容を参照し、全国の美術館・博物館・学校での実践に役立ててもらうことができるため。 正確性：今年度の目標としていた研究発表機会件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされたため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会発表	研究報告会	ウェブサイト制作		
評価	B	B	B	B		
判定理由 調査件数：25, 26年度でカバーできなかったアジアの事例の調査を科学研究費の最終年度で計画的に終えることができた。 学会発表：学会発表を予定通り実施し、研究成果の共有ができた。 研究報告会：研究報告会（含シンポジウム）を計画的に実施できており、研究成果の共有ができた。 ウェブサイト制作：計画していたウェブサイトの制作を完了し、研究成果の共有ができた。						

3. 総合的評価

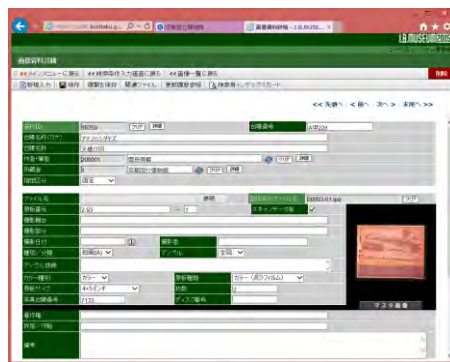
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	分担して進められた調査、実践、研究が研究報告会、シンポジウム、ウェブサイトによって共有された。これにより、研究メンバー及び研究報告会の参加者、またウェブサイトを通して全国の美術館・博物館教育に携わる関係者が所蔵作品の分野と学習指導要領を深く関連させた鑑賞プログラムを実践する一助となる。美術館・博物館における所蔵作品を活用した鑑賞プログラムの進展が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今年度は科学研究費の完成年度である。研究分担者として、当該年度計画は達成することができた。次年度以降は、スクールプログラムなどの学校対応の中で、この成果をさらに鑑賞プログラムの実践に展開させていきたい。とくに次年度は、当研究の成果を、スクールプログラムのコース編成・内容の検証に援用したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究(5)-⑦)		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討や機構内の共通システムの運用に対する対応、博物館システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 後藤 真（花園大学専任講師・客員研究員） 澁谷完滋（総務課事業推進係係員）			
【主な成果】 (1) 写真資料・作品情報のデジタル化を進め、ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースの更新を随時行った。 (2) デジタル化の推進やウェブサイトにおける公開機能の強化に対応するため、文化財情報システムの改良や運用改善を随時行うとともに、将来計画に向けた調査・検討を行った。 (3) 平成知新館開館を期に、展示系システムに関わる整備や館内ネットワークの更新による処理能力向上を行った。 (4) 科学調査機器の整備にあわせ、研究系サーバの能力強化や仮想化技術の導入を進めた。 (5) 文化財防災に関わる機能強化のため、文化財情報のバックアップ強化を検討し、各種試験を行った。			
【年度実績概要】 ・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における実態調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・情報システム技術担当と共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出。改良を随時行った。 ・ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースについて、新規にデジタル化した画像や研究の進展に伴う新たな知見を反映させ、更新を随時行った。 ・デジタル撮影及び写真原板デジタル化の進展に伴い、画像の保管・検索に使用する大容量ストレージの整備を、継続して実施した。 ・増大するデジタル画像の管理、一層の充実を求められるウェブサイト公開やレファレンス機能の強化などに対応するため、収蔵品管理システムの将来計画に向けた検討を進めた。これに伴って、必要要件の洗い出し、機構内での情報交換、各社製品の情報収集などを行った。 ・蔵書検索システムの更新・データベース統合を検討・実施し、レファレンス機能の強化を行った。 ・研究系サーバの増強と仮想化技術の利用により、耐用年数を迎えた研究系システムの更新と能力強化を行った。 ・平成知新館開館にあわせ、デジタル絵巻やデジタルサイネージ等、展示系システムの稼働環境整備や運用上のトラブル対応・各種改善などを実施した。 ・平成知新館を中心に館内ネットワークの幹線機器を更新・再編し、研究・展示・無線など各ネットワーク系統の強化や通信速度の増速など、処理能力の向上を行った。			
【実績値】 ・システム検討会 6回 ・システム更新・統合 3件 ・データベース情報交換 3回			
【備考】			



文化財情報システム（画像資料画面）

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館開館のタイミングに間に合うよう、調査研究の基盤となる情報ネットワーク整備を進め、開館業務を支えた。 独創性：ウェブサイトのリニューアルにおいて、貸出情報連携など文化財情報システムが持つ独自機能も改修し、見やすく改善を図った。 発展性：今後予想されるデジタル画像の増大・公開強化に対応するための発展性を盛り込み、計画検討を進めた。 効率性：データベース統合によって、サーバ台数の削減や管理業務の省力化などのコスト削減、レファレンス効率の向上を実現した。 継続性：収蔵品管理や蔵書管理などの各種研究支援業務においてシステムを継続的に更新・運用し、維持を行った。 正確性：データベース移行作業における重点的な正確性点検や、更新業務における対応などを通じて正確性の維持・向上に配慮した。						

2. 定量的評価

観点	システム 検討会	システム更 新・統合	データベース 情報交換			
評価	B	B	B			
判定理由 システム検討会：所期の目標に適う検討会を開催した。 システム更新・統合：予定通り、更新・統合を実施し、機能強化を実現した。 データベース情報交換：目標に沿って情報交換を実施し、順調に調査を進めた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館情報システム・ネットワークの整備推進により平成知新館開館を支えたほか、文化財情報や画像ストレージの整備・将来計画の検討などを通じ、文化財情報の調査研究を推進できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通じて対応を要する事項を整理し、喫緊の問題から順次検討を行って改良を継続している。 次年度には、平成知新館を含め、新たな体制における運用を軌道にのせていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 平成知新館における教育ツールの開発((5)-(7))
【事業概要】 平成知新館のオープンにあわせて、「ミュージアム・カート」の活動を開始する。ミュージアム・カートとは、カート上でハンズ・オン教材を展開し、来館者と京博ナビゲーター（ボランティア）が対話することによって展示作品や文化財への理解を深める手助けをする活動である。ツールは昨年度用意したものを使用する。今年度は実践とともに、実践をふまえたツール・手法の改善と、情報発信を行う。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】 水谷亜希（教育室研究員）	
【主な成果】 (1) 京博ナビゲーターのための実践マニュアル「虎の巻」を作成した（163 部） (2) 京博ナビゲーターのための基礎講座を開催した（1 日×8 回） (3) 平成知新館において「ミュージアム・カート」の活動実践を行った（161 日、1 日最大約 500 人） (4) 実践をふまえて、ナビゲーターからの意見も集めツール・手法の改善を行った (5) ミュージアム・カートについて館外への情報発信を行った	
【年度実績概要】 (1) 京博ナビゲーターのための実践マニュアル「虎の巻」を、ナビゲーター163 名に向けて作成した。「虎の巻」には、カートに設置した「考古」「彫刻」「絵画」の3分野の基礎知識、来館者への声掛けの例、参考文献などを掲載している。 (2) 京博ナビゲーターが活動するにあたり、事前に基礎講座を計8 回開催した。基礎講座の内容は、下記の通りである。 ・第1 回 京都国立博物館の歴史・活動紹介・主要収蔵作品紹介（2 回実施） ・第2 回 施設紹介・来館者対応マナー講座・博物館環境について（2 回実施） ・第3 回 カート紹介・コミュニケーションと学び・カート実践（2 回実施） ・第4 回 レファレンス・コーナー説明・館内見学・カート実践（2 回実施） ミュージアム・カートでの活動の様子 (3) 平成知新館において「ミュージアム・カート」の活動実践を行った。26 年度は、9 月13 日の平成知新館オープンから3 月末まで、計161 日活動した。最も混雑した時期の簡易統計によれば、ミュージアム・カートは一日500 人以上の来館者に利用されていた。 (4) 実践をふまえて改善のための情報を収集し、ツール・手法の改善を行った。情報収集の方法は下記の通り。 ・京博ナビゲーターの活動開始前に、彫刻分野のツールについては、「少年少女博物館くらぶ みほとけめぐり！」で活用し、参加者の子どもの反応を観察した ・京博ナビゲーターの活動開始後は毎日「終礼」を行い、各研究員が交代で出席し、来館者の反応や、改善要望などをナビゲーターから聞いて記録した。（161 日） 以上の情報をもとに、教材の追加や改訂、補修などをこまめに行い、実践がスムーズにできるよう対応した。 (5) ミュージアム・カートについて館外に情報発信を行った。主な情報掲載媒体は下記の通りである。 ・京都国立博物館公式ウェブサイト、京都国立博物館たより ・『月刊文化財』610 号(特集 京都国立博物館・平成知新館の全て)、第一法規、2014 年 ・橋本麻里『京都で日本美術をみる 京都国立博物館』集英社クリエイティブ、2014 年 ・「まねる・まねぶ・まなぶ—複製からみる〈教育〉と〈保存〉—」展、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2015 年1 月13 日～2 月28 日、パネル展示 その他、平成知新館オープンに合わせた雑誌の特集記事や、ナビゲーター自身のブログでの情報発信など、様々な場所で情報発信を行い、ミュージアム・カートについて周知することができた。	
【実績値】 (1) 「虎の巻」の作成（163 部） (2) 基礎講座の実施（1 日×8 回） (3) 活動実践（161 日、1 日最大約 500 人） (4) 改善のための情報収集・対応（161 日） (5) 情報発信（5 件）	
【備考】	



【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	A	B	B	B	B
判定理由 適時性：平成知新館オープンにあわせた新しい取り組みである。来館者の中には「カートを目的に来た」という声も聞かれるようになり、当初の予想よりも好評を博している。 独創性：カート上でハンズ・オン教材を展開し、解説ではなく「対話」によって理解を深める方法は古美術の分野では珍しく、あまり例のない取り組みである。 発展性：来館者とボランティアの対話によって、様々な会話を展開させることができ、多様な鑑賞のあり方を生み出す点で多様性がある。また、カート内のツールを増やすことで、今後も発展的に展開させることができる。 効率性：研究員がナビゲーターに鑑賞のヒントを伝え、ナビゲーターが来館者と対話することで、多くの来館者に文化財に親しむきっかけを提供できている。 継続性：ナビゲーター163名が、それぞれ月に1回館に来館することで、負担なく活動を継続することができている。一方で、今後もナビゲーターのモチベーションを維持するために、定期的な研修の開催、自主活動への支援、新しい取り組みなども必要であるが、現状の人員ではこれ以上の対応が難しいため、解決策の検討が必要である。 正確性：ツールや「虎の巻」の作成にあたっては、各研究員や外部の専門家に制作や助言を依頼し、展示作品や文化財への理解を深めるために十分な質を確保した。						

2. 定量的評価

観点	「虎の巻」の作成	基礎講座の実施	活動実践	改善のための情報収集・対応	情報発信	
評価	B	B	B	B	B	
判定理由 「虎の巻」の作成：ナビゲーターが活動するにあたり、基礎知識を伝えるのに十分な内容と量を作成し配布することができた 基礎講座の実施：ナビゲーターが活動するにあたり、基礎知識を伝えるのに十分な回数を実施することができた（1日×8回） 活動実践：1月2日～4日をのぞくすべての開館日に実施し、多くの来館者に文化財と親しむ機会を提供することができた（161日、1日最大約500人） 改善のための情報収集・対応：当館の研究員全員の協力を得て、毎日の「終礼」に交代で出席し、来館者の反応や、改善要望などをナビゲーターから聞いて記録することができた。それらをふまえ、教材の追加や改訂、補修などをこまめに行い、実践がスムーズにできるように教育室員が対応した。ただし、現状のスタッフでは対応できる件数に限度があるため未対応の事案もあり、解決策の検討が必要である。 情報発信：各種の媒体にて効果的に情報発信を行うことができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンにあわせて、無事にミュージアム・カートの実践を開始することができた。来館者からの反応も非常によく、京博ナビゲーターも意欲的に、楽しみながら活動している。この実践で重要な役割を果たしているのが、来館者との対話を行う「京博ナビゲーター」である。彼らのモチベーションを維持し続けることがこの取り組みの鍵であるが、現状のスタッフだけでは対応しきれなくなることが予想されるため、解決策を検討する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平成知新館のオープンにあわせて新たな教育ツールを開発し、新規ボランティアを立ち上げたうえで実践を行うことができた。ミュージアム・カートという移動可能なツールを開発し、ナビゲーターのための控室を小さいながらも確保することで環境を整える等、計画に沿って順調に活動を進めることができた。次年度には、より多くの分野について教育的なツールの開発を行い、ボランティア活動を軌道にのせることとしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究((5)-(7))
【事業概要】 京都市教育委員会の協力のもと、京都国立博物館とNPO法人京都文化協会が共同で行っている訪問授業、「文化財に親しむ授業」の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果を社会に還元することを目的とする。成果を還元する方法として、訪問授業のほかに交流会の開催、教員による事業実践の支援などを行う。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室長 山川 暁
【スタッフ】水谷亜希（教育室研究員）	
【主な成果】 (1)文化財ソムリエ（大学生ボランティア）に対するスクーリングを行った(21回) (2)文化財ソムリエによる京都市内の小中学校への訪問授業を行った（7回 488人） (3)文化財の複製を用いた授業に関する交流会を行った（1回 29人） (4)高精細複製を用いた授業実践への協力を行った（4回） (5)研究員による訪問授業を行った（2回 93人） (6)館蔵品の高精細複製を制作した（2件） (7)他館の活動調査や、学生ボランティア同士の交流の機会を設けた（5回） (8)『小さな瞳にワクワクを一平成26年度「文化財に親しむ授業」記録集一』を刊行した（1,000部） (9)『文化財に親しむ授業ガイドブック』を配布（910部）、増刷した（500部） ※(3)～(9)は、「平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受けて実施した	
【年度実績概要】 (1)「文化財に親しむ授業」で講師を務める文化財ソムリエ（日本文化を専門に学ぶ大学生ボランティア）に対するスクーリングを21回行い、ソムリエが授業内容や教材を作成する課程で、指導・助言を行った。 (2)京都市内の7校の小中学校で、高精細複製を用いた訪問授業を行った。授業では子どもとの対話を中心としながら、作者や制作された時代、画材などの紹介も行った。授業にあたっては、そのつど教員と事前に打ち合わせを行い、内容を検討した。 (3)京都市内の小中学校教員、文化財ソムリエ、京都国立博物館・京都文化協会職員、その他文化財の複製を用いた教育活動に関心のある人々を交えて、「文化財に親しむ授業」の活動紹介や、意見交換を行った。過去の授業例紹介は、文化財ソムリエや、美術館で教育普及活動に携わるソムリエ卒業生が行った。 (4)教員自身が複製を用いて授業を行う学校に対して、実践例の紹介や資料の提供、当日の設営・授業補助などを行った。 (5)「文化財に親しむ授業」が教育関係者の中で知られるようになり、高等学校やPTAからも授業の依頼があった。初めての試みであるため、文化財ソムリエではなく研究員が試験的に実施した。 (6)館蔵品の国宝「天橋立図」（雪舟筆）、重要文化財「四季花鳥図屏風」（雪舟筆）の高精細複製を新たに制作した。これらは次年度以降の訪問授業で活用する。 (7)同じく文化財複製を活用し、学校と連携した教育普及を行っている館（三井記念美術館・岡山県立美術館）の事業を文化財ソムリエと共に調査・見学した（2回）。こどもひかりプロジェクト主催のイベントに文化財ソムリエと共に参加し、東北地域の大学生ボランティアや、他館の教育普及担当と交流・意見交換を行った（2回）。美術科教育学会リサーチフォーラム（コレクションと鑑賞教育）に参加し、参加者と意見交換を行った（1回）。 (8)『文化財に親しむ授業2014報告書』（仮題）を刊行（1,000部）し、教育関係者に配布した。 (9)前年度作成した『文化財に親しむ授業ガイドブック』を教育関係者に配布（910部）、好評のため増刷した（500部）。	
【実績値】 スクーリング実施回数（21回） 訪問授業実施回数（7回 488人） 交流会の実施回数（1回 29人） 授業実践への協力回数（4回） 他館の活動調査・交流の回数（5回） 報告書等の配布・刊行部数（記録集1,000部、ガイドブック配布数910部、同増刷部数500部） （参考値）高精細複製の制作件数（2件）	
【備考】 『小さな瞳にワクワクを一平成26年度「文化財に親しむ授業」記録集一』京都国立博物館、2015年（企画・執筆 水谷亜希） 『文化財に親しむ授業ガイドブック』京都国立博物館、2014年（企画・執筆 水谷亜希）	



訪問授業の様子

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	B	B
判定理由 適時性：学習指導要領の改訂に伴い、学校教育では我が国の文化財への感心がいっそう高まっている。学外に児童・生徒を連れ出さなくてもよい訪問授業は、時間的・金銭的にも、安全面においても学校側の負担が少なく、最も要望の高い事業である。 独創性：博物館が大学生を育成し、大学生が小中学生に教え伝える二重の教育を担っている点が独創的である。本事業は、大学生、小中学生の双方にとって学習の場となっている。特に今年度は大学生の学びの場としての機能が強化された（交流会・他館の活動調査） 発展性：ガイドブックの配布、交流会の開催ののち、教員自身による複製を使った授業が実施された。教員による授業は当初3回を予定していたが、4回実施された。加えて高校やPTAからの要望もあり、研究員が試験的に授業を実施（2回）するなど、当初の予定よりも多くの授業が実践された。活動に対する関心が年々高まっており、今後の発展が大いに期待できる。 効率性：文化財ソムリエが講師と補助（子どもに話しかけたり、屏風を開いたりする）を務めることで、クラス単位での授業やグループ活動が可能になり、より親密なコミュニケーションを通して文化財の魅力を発信することが可能となっている。 継続性：先輩の文化財ソムリエを後輩が見習うことで、人が入れ変わっても蓄積したノウハウが受け継がれていく。 正確性：研究員が、教材となる文化財に関するレクチャーを毎年行っており、文化財ソムリエは最新の研究成果を学んだうえで授業を行っている。						

2. 定量的評価

観点	スクーリング実施回数	訪問授業実施回数	交流会の実施回数	授業実践への協力回数	他館の活動調査・交流の回数	報告書等の配布・刊行部数
評価	B	A	B	A	B	B
判定理由 スクーリング実施回数：当初の予定通り、月に約2回のペースで計21回実施し、文化財ソムリエの育成に十分な効果があった。また今年度は9月より教育普及の客員調査員を招き、活動に対する助言、スクーリングでの講義などを依頼しており、内容もより専門的で充実したものとなった。 訪問授業 実施回数：年間で計7回実施した。文化財ソムリエが授業内容や教材を作成するために必要な準備期間を考慮し、最大で実施できる回数を行った。さらに研究員による訪問授業を2回行い、当初の目標を大きく上回った。 交流会の実施回数：夏休み期間の8月に1回実施した。教員を中心として、複製を用いた教育活動に関心のある人々が交流を深め、その後の実践につながるために十分な効果があった。 授業実践への協力回数：教員による授業は当初3回を予定していたが、4回実施された。そのつど資料の提供や当日の設営・授業補助などを行った。 他館の活動調査・交流の回数：文化財ソムリエが同行したものも含めて5回の活動調査・交流を行い、当館の今後の活動の参考としつつ、文化財ソムリエの学習・成長を促すために十分な効果があった。 報告書等の配布・刊行部数：ガイドブックは昨年度作成した1,000部のうち大半の910部を配布し、事業の周知、教員による授業実践のために十分な効果があった。追加でガイドブック500部を増刷、あらたに活動報告書1,000部を刊行・配布し、次年度以降の活動の下地作りを行った。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本活動は21年度から継続しており、ノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、年々内容が深まっている。特に今年度は文化庁の助成を受けて活動の幅を広げることができた。昨年度までは、増え続ける訪問授業の要望に全て答えられないことが課題であったが、ガイドブックの配布や交流会の開催をふまえ、教員による授業を実現できたことで、より多くの子供たちに文化財の魅力を伝えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高精細複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容が深まり、外部との協力・交流も広がりを見せている。博物館外に持ち出すことができ、間近で鑑賞できるという高精細複製の特性を生かし、今後も、文化財に対する興味関心を育む教育普及活動に取り組んでいく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究を行い、その成果を児童・生徒を対象として行う「世界遺産学習」等に反映させる。(5)－⑦)		
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 岩井共二
【スタッフ】 斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（教育室員）			
【主な成果】 (1)奈良の歴史と伝統文化に関する情報を、本年度開催した展覧会（名品展・特別展・特別陳列）の中から抽出した。 (2)その情報を、児童・生徒が歴史への関心を高めるのに使える情報は何かを検討した。 (3)ボランティアへの指導と話し合いを通して、世界遺産学習実践の場での「語りかけ」の精度を高めることに努めた。			
【年度実績概要】 (1)当館で開催した名品展や特別展、特別陳列、さらに正倉院展の中には、奈良の歴史と伝統文化を反映した作品や情報が多く含まれており、展覧会によって得られた情報を子供向けに発信する方法の検討を行っている。 (2)世界遺産学習の現場では、講堂におけるボランティアによる世界遺産学習解説と、なら仏像館の見学解説を行ってきたが、26年9月以降、なら仏像館が工事により閉館したため、実作品を前にした解説が行えなくなった。そこで、講堂で行う新たな教育プログラム「こどものための仏像の見方」を、ボランティアスタッフと協議しながら開発し、その実践を行った。プログラム開発には、当館で行ってきた仏教彫刻の調査・研究の成果が反映されている。 (3)「子どものための仏像の見方」プログラムは、未だ試行段階であるが、世界遺産学習の実地現場において生徒たちへの語りかけの内容が充実しつつある。今後も方法論的な検討を行い、より精度の高い教材となるよう向上を図る。また、仏像館開館後も、このプログラムを応用し新たな教育ツールの開発に繋げていく。			
 世界遺産学習解説 「子どものための仏像の見方」 実践の様子			
【実績値】 ・「世界遺産学習」に来校した小学校 35 校			
【備考】 ・「世界遺産学習」以外の学校団体案内 16 校			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4573-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：博物館が起点となった「世界遺産学習」の意義を追求する好事業となった。 独創性：「世界遺産学習」を中心とした子供向けの「語りかけ」を検討・実践することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティを持たせることが出来た。 発展性：「世界遺産学習」を中心とした子供向けの教育・普及活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向け解説サービスの向上にも繋がっている。 効率性：職員・ボランティアで共有された情報を繰り返し利用することで効率性を向上させた。 継続性：「世界遺産学習」は、内容を随時検証し、より正確で分かりやすい内容を継続的に検討していくことによって、その継続性と質の確保に努めている。 正確性：学芸部職員による研修や勉強会を通じて、内容の修正を行い、正確性を確保した。						

2. 定量的評価

観点	「世界遺産学習」に来校した学校数					
評価	B					
判定理由 「世界遺産学習」に来校した小学校数：35校に達した。（目標 20～30校）						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	なら仏像館の閉館により「世界遺産学習」プログラムの変更を行ったが、職員とボランティアとの間で情報の検討を行い、「世界遺産学習」の精度が向上し、来校する学校数も所期の目標に達している。この数値を維持するためにも今後とも検討を重ねていく必要があり、それらの成果が来館者サービスの向上につながるものとする。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	歴史、伝統文化の教育事業として継続して行ってきた「世界遺産学習」は一定の成果を上げている。次年度は、「世界遺産学習」をユネスコが提唱するESD（持続的開発のための教育）の一環として位置づけ、教育機関などとの連携により方法論の検討を行い「世界遺産学習」の質的向上を目指す。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築（収蔵品・画像・図書）・各種情報資源の公開推進に反映させる。（学術研究助成基金助成金）（(5)－⑦）		
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開ならびに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	室長 宮崎幹子
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、清水健(企画室員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 デジタル撮影の安定的な稼働を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのデータ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。今年度は、新たに修理記録のデータベースの公開も実施した。また、地下回廊において仏像写真展「大和のほとけたちー奈良博写真技師の眼ー」と題する展示を実施するなど、当館における文化財写真アーカイブズ形成の成果を一般に広めることにも取り組んだ。			
【年度実績概要】 ・デジタル撮影 特別展「鎌倉の仏像ー迫真とエキゾチシズム」ならびに「国宝 醍醐寺のすべてー密教の仏と聖教」の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸の各分野の文化財の撮影を多数行った。展覧会出陳作品の社寺、鎌倉国宝館、醍醐寺の理解と協力を得て、鎌倉を中心とする地域、そして醍醐寺という、これまで蓄積の少なかった分野の文化財写真の撮影を実施し、当館における文化財写真アーカイブズの更なる拡充をはかることが出来た。 ・奈良女子大学への学術協力 奈良地域の文化財の画像公開を目的とする「奈良地域関連資料画像データベース公開事業」において、奈良女子大学附属図書館と学術協力の協定を締結している。今年度はこの事業の一環として、寄託品の當麻曼荼羅（青蓮寺）、當麻練供養図（誕生寺）の撮影を実施し、画像提供を行った。 ・「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータベース構築 かねてより学芸部内で共有していた「日本美術院彫刻等修理記録」のデータベースを公開用にあらたに作成し、全面的に外部に公開した。これまで未公開の資料であったため、文化財アーカイブズの一事例として専門家からも高い評価を得た。 当館では初めての試みとして、仏像写真展「大和のほとけたちー奈良博写真技師の眼ー」を開催し、地下回廊に一边約 2m の大型写真パネルの展示をおこなった。当館における文化財写真撮影の意義を幅広い層に向けてアピールすることが出来た。			
 仏像写真展 「大和の仏たちー奈良博写真技師の眼」展示風景			
【実績値】 画像撮影件数：5,471 件 データ登録件数（画像データベースへの個別データ登録）：5,447 件（そのうち公開 3,376 件）			
【備考】			



仏像写真展
「大和の仏たちー奈良博写真技師の眼」展示風景

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4573-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
判定理由 独創性：展覧会や調査研究事業と密接に関連させることにより貴重な文化財の撮影を行い、当館以外では取得の困難な画像を多数蓄積し、稀少かつ学術的価値の高い文化財アーカイブズの形成へと繋げることができた。 継続性：画像の作成枚数及びデータベースへの登録件数を順調に増加させ、公開に結び付けた。 発展性：画像が文化財指定調査や修理時の基礎資料となるなど、文化財の研究や保存の進展に大きく貢献した。また、データベースの構築や連携にも積極的に取り組み、文化財アーカイブズの発展性を示した。 適時性：鎌倉地方、醍醐寺というこれまで文化財写真の蓄積が充分でなかった分野について新撮をおこない、適切なたちで情報の共有化がはかられた。 効率性：限られた人員と予算の範囲内において、効率的に撮影ならびに登録件数を増加させた。 正確性：調査に伴って取得された一次的なデータに基づいてアーカイブズの形成を行っており、またデータベースの継続的かつ安定的な運用を行うことにより、信頼性の高い情報を公開している。						

2. 定量的評価

観点	画像撮影件数	データ登録件数				
判定	B	B				
備考 画像撮影件数：本年度も十分な調査と撮影を実施しており、画像撮影件数は豊富であった。 データ登録件数：撮影後の処理やデータベースへの登録件数については、当館の規模やスタッフ数を勘案しても他機関と比較して遜色のない数をこなしており、順調に増加している。						

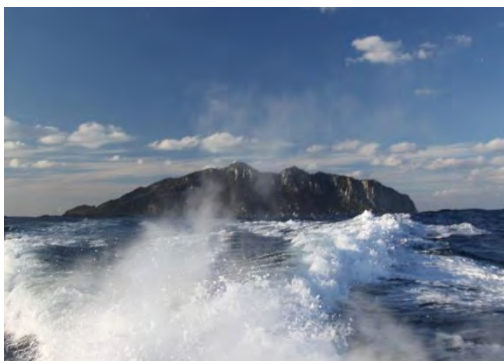
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、鎌倉地方や醍醐寺など、学術的に重要でありながら調査と撮影の機会を十分に得ることが難しかった分野について、調査を実施し、質の高い画像を取得して、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。今後も当館の事業と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、コレクションの質・量双方の維持に努める予定である。 情報資源の運用にあたっては、新たに修理記録のデータベースを公開するなど、文化財アーカイブズ形成の実践を鋭意進めている。今後も更なる発展を視野に入れた研究に力を注いでいく。 また、仏像写真展では、高品質の画像を、一般来館者にも親しみやすいたちで発信しており、調査研究の成果を幅広い層に向けて還元していくという意味でも大きな成果をあげている。人員と予算が限られる現在のような体制の中で、幅広い活動を展開している点でも評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	デジタル撮影については現在のところ安定的な稼働を実現できているが、館内での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過X線のデジタル撮影にとどまらず、CT撮影についてもデジタル化を実現すべく、機材・設備の整備が急務である。当館では仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重な画像コレクションを維持管理しているが、文化財調査の拡充にあわせて、アーカイブズの維持拡充が今後もはかれるよう体制を整備していくことが肝要である。 今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) NHKと協同で高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアター（シアター4000）での映像公開に向けた研究（(5)－⑦）		
【事業概要】 テレビの世界ではフルハイビジョンが主流だが、その 4 倍の画素数の 4 Kテレビという高画質のテレビが近年シェアを伸ばしている。当館では開館以来、この 4 Kのさらに 4 倍の密度を有する 8 Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を、世界で唯一の常設施設として公開してきた。このスーパーハイビジョンの質感と臨場感に優れた特性を、文化財の保存と活用のために、魅力的なコンテンツ制作と、コストも考慮した新しいシステムの調査研究を推進する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元壘
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、井上洋一（部長）、臺信祐爾（課長）、河野一隆（文化交流展室長）、赤司善彦（福岡県教育庁文化財保護課長）			
【主な成果】 (1) NHK放送技術研究所において 8 K映像技術の情報収集を行った。 (2) 九州国立博物館において映像の出力形式及び保守設備について打合せを実施し、新規コンテンツ制作のための基盤情報を整理した。 (3) 長野県の駒ヶ根美術館において、画像展示に関する調査を実施した。 (4) 宗像大社において沖ノ島の植生と生態に関する情報収集を実施した。 (5) 沖ノ島において祭祀遺跡の立地を調査した。 (6) 東京で関係者による打合せを実施し、本年度のまとめを行うとともに、番組構成案ならびに次年度のスケジュールを策定した。			
【年度実績概要】 (1) 5 月 28 日と 29 日にNHK放送技術研究所において、8 K映像技術の最新情報を収集した。撮影機器の軽量化や、海中撮影技術の現状を把握したことにより、当館における新規コンテンツ開発に際しての現時点における技術的限界を明らかにすることができた。 (2) 6 月 3 日に九州国立博物館においてスーパーハイビジョンシアターの出力形式及び保守設備について打合せを実施し、新規コンテンツ制作のための基盤情報を整理した。 (3) 8 月 24 日に長野県駒ヶ根高原美術館において、画像展示の手法とその可能性について調査した。展示室内における写真展示とスーパーハイビジョンシアターとの役割をいかに棲み分けかつ共生させていくかという課題において、多くの知見を得た。 (4) 12 月 12 日に宗像大社において、沖ノ島番組制作に関する打合せと出土資料の調査を実施し、沖ノ島を多視的にとらえるために不可欠である希少な植生や生態に関する知見を得た。 (5) 27 年 1 月 7 日に沖ノ島に渡り、祭祀遺跡の現地調査を実施した。 (6) 27 年 3 月に東京で関係者が集い、本年度の調査研究成果をまとめ、新規番組の構成案ならびに次年度スケジュールを策定した。			
			
		冬の玄界灘に浮かぶ沖ノ島 (27 年 1 月 7 日 報告者 撮影)	
【実績値】 ○調査回数 5 回 ・現地調査 1 回（27 年 1 月 7 日） ○打合せ回数 3 回 ・コンテンツ制作の打合せ 2 回 ・設備改善についての協議 1 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：本事業が主眼とする沖ノ島は、現在、世界遺産を目指しており、近年注目を集めている。 独創性：8 K映像を常設している博物館は我が国においては九州国立博物館のみである。 発展性：立ち入りが制限されている沖ノ島の8 K公開を目指す本事業は、同祭祀遺跡への理解を深めるうえで有効である。 効率性：福岡県教育委員会や宗像市教育委員会の協力を恵那型、効果的に事業を推進した。 継続性：8 K映像カメラはこの10年で大幅に軽量化しており、これまでにない新鮮な映像番組を制作することができる。 正確性：関係資料を収集しながら、調査を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	打合せ回数				
評価	B	B				
判定理由 調査回数：関係機関と調整のうえ、必要な調査を実施した。 打合せ回数：年間の計画に基づいた打合せを実施した。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現地調査、関係機関との交渉、資料収集、台本制作を計画的に実施し、27年度に予定している番組制作にむけての基盤を構築することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予算と関係者の日程調整の制限から、沖ノ島での現地調査回数が真冬の1回に留まった。沖ノ島は四季によって植生や生態系の活動に変化がみられるため、本来であれば春夏の調査もすべきであった。その不足部分は環境報告書等で補ったが、次年度は計画性をさらに向上させて、研究の濃度を一層高めたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究 ((5)ー⑦)
【事業概要】 特別展ごとに、観覧者に展示内容をよりよく理解してもらうため、教育普及プログラムを実施する。本年度は、「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」ならびに同時開催「日本発掘—発掘された日本列島 2014—」の5つの特別展において、教育普及プログラムを実施する。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 酒井芳司（前展示課主任研究員）、鷲頭桂（研究員）、岸本圭（展示課展示調整室主任研究員）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、西島亜木子（アソシエイトフェロー）、山下久美子（研究補佐員）、鮫島由佳（研究補佐員）	
【主な成果】 展示室内での解説パネルの掲出や体験コーナーの設置、室外のワークショップや講演会などを実施。アンケートには、分かりやすかった、体験できて楽しかった、展示に対してもっと興味を持てた、などの感想がみられた。	
【年度実績概要】 分かりやすい解説や、展示をより身近に感じさせる教育普及プログラムはあらゆる年齢層の来館者に好評であるため、来館者の要望を反映した様々なプログラムを展示室内外で実施した。 ・特別展「近衛家の国宝 京都・陽明文庫展」では、書跡の作品が多数出品されたことから、タブレットを使用した書に親しむ体験コーナー「かな文字を書いてみよう」を設置した。また、ワイヤーを曲げてつづけ字しおりを作るワークショップも行った。 ・特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美—」では、展示作品である渡辺華山筆の絵画「大空武左衛門」が写真鏡を使って描かれたことを理解してもらうため、写真鏡のレプリカを実際に手にとってもらい体験コーナーを設置した。また、展覧会期が夏休みと重なっていたことから、親子を対象にした「てづくりカメラワークショップ」を企画した。参加者自身が制作した写真鏡を使って絵を描く体験を通して、展示物の魅力を伝えることができた。 ・特別展「古代日本と百済の交流—大宰府・飛鳥そして公州・扶餘—」では、展示室内に掲示する章解説、作品解説、コラム等を、専門用語を省いた平易な言葉やイラストを用いて作成し、一般の来館者にも分かりやすい内容とした。また、展示物の理解を深めるためのイベントとして、展覧会関連史跡をめぐるウォーキングツアー「考古学者と行く！史跡探訪」を2回（2コース）実施した。子ども向けの企画としては、九州国立博物館を愛する会による影絵公演「水城のものがたり ひともっこ山と父子島」を上演した。事前告知の一環として、展覧会を分かりやすく伝える映像も作成した。また、地域の小学生に配布する招待券にクイズを掲載し、クイズを解きながら展示が楽しめる内容とした。 ・同時開催特別展「日本発掘—発掘された日本列島 2014—」では、考古学者が発掘現場で使用するメモ帳「野帳」に焦点を当て、展示作品が出土した遺跡で実際に使われた野帳6冊を、それぞれ関連する遺物とともに紹介した。併せて、当館考古担当者6名分の野帳も展示した。また、考古学者の仕事を体験するワークショップとして「なりきり考古学者体験」を2回実施。大宰府政庁跡で平板測量の体験を行った。	
【実績値】 解説パネル枚数（コラム、作品解説等） 82枚（「古代日本と百済の交流」82枚） 講演会回数 19回（「近衛家の国宝展」5回、「クリーブランド美術館展」5回、「台北國立故宮博物院」4回、「古代日本と百済の交流」4回、「日本発掘」1回） ワークショップ回数 7回（「近衛家の国宝」3回、「クリーブランド美術館展」2回、「日本発掘」2回） 体験コーナー回数 2回（「近衛家の国宝」1回、「クリーブランド美術館展」1回） イベント回数 18回（「近衛家の国宝展」4回、「クリーブランド美術館展」6回、「台北國立故宮博物院」3回、「古代日本と百済の交流」3回、「日本発掘」2回） 論文数 1件（①） （参考値） 教育普及プログラム満足度 （「近衛家の国宝」85%、「クリーブランド美術館展」81%、「古代日本と百済の交流」59%（展示解説に対する満足度、イベントについてのアンケート調査は実施していない）、「日本発掘」82%）	
【備考】 ①「展示理解を深める体験型プログラム」『東風西声 九州国立博物館紀要 第10号』（27年3月31日）	



「近衛家の国宝」展 体験コーナー
「かな文字を書いてみよう」

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	B	B	A	A		
判定理由 適時性：鑑賞者が求める作品や時代背景、展覧会テーマ等に関する情報をあらゆる年齢層に向けて適切に提供できた。 独創性：タブレットを使用した体験コーナーや、ワイヤーで筆の跡をたどって作るしおりワークショップ、写真鏡を作る体験など独自のプログラムを実施した。 発展性：新たな試みとして、展覧会に関係する当館周辺の史跡などを巡るツアーや遺跡の測量体験など、展示室内にとどまらず館外でもプログラムを実施した。また、特別展だけでなく、文化交流展示でも応用できる内容のプログラムを開発した。 継続性：アンケート結果を見ると、当館の特別展で実施する教育普及プログラムは来館者に定着しつつあり、参加を楽しみにしている来館者もみられる。また、本年度初めて計画した館外イベントに対して、募集定員以上の応募があるなど、今後も継続が期待されるプログラムも開発することができた。本年度の実施結果を踏まえ、次年度以降も改良しつつ継続していく予定である。						

2. 定量的評価

観点	解説パネル 枚数	講演会 回数	ワークショップ 回数	体験コーナー 回数	イベント 回数	論文数
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 解説パネル枚数：専門用語を避けた言葉遣いやイラストを用いて、積極的に分かりやすい解説やパネルを82枚掲示し、初期の目標を達成した。 講演会回数：入門的なものから専門的な内容までバラエティに富む講演会を多数企画した。また、1つの特別展につき1回以上という当初の計画通り実施することができた。 ワークショップ回数：当初ワークショップの予定はなかったが、7回と比較的多くのワークショップを実施することができた。また、制作体験を通して、展覧会や作品に対する理解がより深まったという意見が多数あり、目標通りの結果を得ることができた。 体験コーナー回数：当初、体験コーナーの計画はなかったが、展示物の魅力を最大限に伝えることができる体験コーナーを2回設置し、満足度が高い展示となった。 イベント回数回数：特別展開連イベントを18回実施し、当初の計画を順調に達成した。大宰府政庁跡における測量体験「なりきり考古学者体験」など、事前申込制の館外イベントは応募が定員以上の応募があるなど大変反響が大きかった。対応者の手配や安全性の観点から募集枠を増やすことはできなかったが、参加者アンケートからも分かるように非常に満足度の高いイベントを行うことができた。 論文数：教育普及活動の調査研究についての論文執筆を、目標通り1件行うことができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示理解促進を図るためのバラエティに富んだプログラムを計画・実施し、子どもから大人まで幅広い年齢層の参加者から高い評価を得た。次年度も来館者の要望を適切な形で反映していきたい。今後、特別展の内容に応じた館外イベント立案にあたっては、回数及び募集人員について十分検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り実施されており、来館者からの反応も好評である。本年度実施して好評であった教育普及プログラムについては、アンケート結果などを参考に、さらに磨きをかけ、次年度以降の特別展や文化交流展で実施したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 学校教育現場との連携を図って作り上げる学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・調査((5)－⑦)
【事業概要】 現在、13種類の「きゅうぱっく」を準備し(各2セット、計26セット)、学校や社会教育団体等への貸出を行っている。今後の新規ぱっく開発を見据えて、現在ある「きゅうぱっく」の有効な活用法に関する実践事例を収集するとともに、教員研修や出前授業を通して博物館の活用や「きゅうぱっく」に関する情報を発信し、利用の普及を図る。	
【担当部課】	交流課
【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員 釜瀬進一郎
【スタッフ】 池内一誠(教育普及室主任研究員)	
【主な成果】 「きゅうぱっく」を活用した実践事例や博物館を活用した授業づくりに関する指導案を収集するとともに、「きゅうぱっく」に関する情報発信・利用の普及を図った。また、新規キットの開発に向けた研究を行っている。	
【年度実績概要】 ・「きゅうぱっく」の利用報告書を基に、学校現場が「きゅうぱっく」を利用して改善が必要と感じている部分や追加してほしい内容等をキット別に集計することで、今後の新規キット開発に向けた調査・検討を行った。また、この調査とは別に、「きゅうぱっく」を活用した実践事例の指導案提供を求め、「社会科」や「総合的な学習の時間」に関する学習プリント等を含む多くの資料を収集することができた。 ・福岡県教育センターのキャリアアップ講座には、県下全域から40名の教諭が参加し、博物館を活用した実践事例を含む具体的な指導案を多数収集するとともに、「きゅうぱっく」の活用について周知を図ることができた。 ・太宰府市立太宰府中学校の「総合的な学習の時間(飛梅タイム)」の歴史探訪講座に九州歴史資料館(小郡市)と連携して職員を派遣し、出前授業を行った。また、春日市立須玖小学校・福岡県立小倉高校・福津市立福岡東中学校でも「きゅうぱっく」を利用した出前授業を行うことで、児童生徒の反応を検証した。 ・新規「きゅうぱっく」の開発のための研究を進めた。開発中の新シリーズ「アジアの海は日々是好日(仮称)」に搭載することが可能な資料がないかどうかについて、学術文化交流協定に基づく韓国研修の際に調査・検討を行った。その結果、高麗陶磁、数種の香辛料、紫檀木などが資料として搭載可能であるということが判明した。これらを含め、内容をどのように構成するか今後検討する必要がある。	
 「きゅうぱっく」を利用した授業	
【実績値】 ・「きゅうぱっく」貸出件数: 67件 ・博物館職員による授業実践支援回数: 7回(対象生徒数のべ350名) ・「きゅうぱっく」の活用に関する教員研修: 1回(参加教員数40名)	
【備考】	